
サイヤや魔術・魔法や仮面を持つ転生者とストライクウィッチーズ

Darkness

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイヤや魔術・魔法や仮面を持つ転生者とストライクウィッチーズ

【Nコード】

N78970

【作者名】

Darkness

【あらすじ】

彼の名前は、正義を信じる者を嫌うみたいな闇の正義者 孫悟龍
《そんごりゆう》だ。

彼は、ドラゴンボールの世界で経験して、死んだから、現実になっていたが、事故を遭わせたが、白い空間に居ながら、ドラゴンボールの世界みたいな究極龍神様《アルティメットシエンロン》と出会います。

龍神のミスのおかげで、彼がバグみたいな願いを叶わせた。

《ストライクウィッチーズ》という世界で、地球を征服していると

いう目的の奴らと世界の平和を乱している奴らを彼と仲間が死闘・奮闘している。ネウロイという機械と闘う少女と出会います。駄字あり。原作崩壊・ブレイク、ダークやアンチ気味あり、キャラ崩壊あり、チート・バグを持つオリ主最強がある。

作者は、初級者やど素人です。日本語の文化がド下手。地の文が難しい。

Wikiなどの所である。

プロローグ 彼の人生の終焉・・・そして彼の新たな二回目の人生

俺は、学校の帰り道の途中に、歩く。

悟龍

「はあ、勉強をやる事はめんどくさい。あ、あ、日常を脱ぎたい。それにドラゴンボールや仮面ライダーの力とFateの魔術を持ち、強い敵と闘いたい」
とため息をしながら、悪態で言う。

悟龍

「まあいい。帰る。」
と言いながら、帰る。
その時、最悪で来た。

ブウウウウー！！

悟龍

「ん？何の音を聴ける？つ！！！」
俺のところにはトラックが突き出せた。ドガンと来た。
俺は、死ぬ？ああ、死んだ。
俺は、白い空間に居た。

悟龍「ん？知らない白い空間です。」
俺が起きて見回る。

??

「すまねえ。」

悟龍

「ん？今誰かの声を聞こえる。（キヨロキヨロ）」
俺は、誰かの声を聴ける所を探しています。

??

「上を見て」

悟龍

「上？うわっ！！？何それ！？龍！！？」

俺は、頭を上げて、大きな龍を見て、驚けた。

??

「私は、究極龍神です。」

悟龍

「ふ〜ん、龍神・・・ってええ！？ドラゴンボール世界の龍神！！
！マジで！！龍神様と出会う事を憧れた事で、光栄出会いする！！」
と大きな声を出して、キラキラみたいな目で龍神様と会う事を嬉しい。
究極龍神様が苦笑いした。

悟龍

「って、龍神様は、どうして俺に謝ったんですか？」

俺は、龍神様が謝ったのを見て、疑問に思った。

悟龍

「実は、私のミスのせいで、悟龍が死んでしまった。ごめんなさい。」

「

と頭を下げた。

悟龍

「もついい。龍神様。頭が上げてください。誰でもミスをする事がたくさんあります。」

と苦笑をしながら、当たり前前の事を言います。

龍神

「ありがとうございます。悟龍。やっぱり私が選んだ人にぴったりする。」

悟龍

「ん？龍神様が、俺を選びました??」

龍神

「ええ。私の所為で、お詫びに転生へ行きたい所と願いをかなえてあげたいと思います。」

悟龍

「えつ。本当に俺の願いを叶える事が出来ますか?」

龍神

「ええ。出来る。」

悟龍

「本当に!?!有難う御座いました。と嬉しさで頭を下げました。」

悟龍

「ふふつ。悟龍は、嬉しい。」

と龍神様が俺をからかうように言います。

悟龍

「うっ。フン、うるさい。恥ずかしい。しかし、本当に強い力を持ち、強い敵と闘いたいと思います。」

龍神

「成る程。さあ、お前の願い事は何ですか？」

悟龍

「ええっと、一つ目は、純粹のサイヤ人になる事。二つ目は、「リリカルなのは」の夜天の書だ。三つ目は、Fateの王の門と無限の剣製や投影魔術とTYPE-MOONの能力を手にする事。四つ目は、スーパー戦隊と平成仮面ライダークウガ、オーズまでの全てに変身できるようにする事。五つは、「ネギま」のこのかの魔力と、「ドラゴンボールGT」の悟空の気力を超える力を得る事だ。」

龍神

「いいとも。願いは全て叶えた。」
「と言うと究極龍神様の目が赤く光り、俺の体が光ったかと思うと、すぐに消えた。」

悟龍

「もう叶ったのですか？」

龍神

「はい。」

悟龍

「有難う御座います。」
と笑顔で頭を下げて礼を言う。

龍神

「転生する所は、何処ですか？」

悟龍

「うん。ドラゴンボール世界へ行きたいと思ったのですが、すでに行ったようです。」
と珍しい別の世界を思い出すように言った。

龍神

「えっ。貴方は、ドラゴンボールの世界へ行きましたか？」

悟龍

「分からない。もしとすると、前世の俺は、ドラゴンボール世界へ行ったかもしれない。」
龍神様はびっくりした。

龍神

「珍しい。お前みたいな奴は初めて。凄い。」

究極龍神様は、俺を褒めて言う。俺は、納得できない顔で頭を抱える。

悟龍

「納得できない。で、俺は、行かない世界があります。」

龍神

「行かない世界があるだど？いいとも。言う。」

悟龍

「分かりました。行かない世界では、全ての女子の軍隊が謎の機械と闘う世界ですか？」

と究極龍神様の顔がしかめた。

龍神

「全ての女子の軍隊が謎の機械と闘う世界？聞いた事もない世界だ。」

悟龍

「うん。説明しづらい。龍神様。どこの世界かは分かります。」

龍神

「早く言ってくれ！」

悟龍

「む。分かりました。龍神様、ご冷静ください。」

と目を閉ざしながら、すくっと吸う。吐いてゆっくりと閉じた目を開きます。

悟龍

「《ストライクウィッチーズ》の世界です。」

とさっぱりと言う。

龍神

「《ストライクウィッチーズ》の世界？なぜ《ストライクウィッチーズ》の世界へ行きますか？」

悟龍

「ああ。もし、《ストライクウィッチーズ》の世界に俺がいなくてきに平成仮面ライダーやFateやドラゴンボールの敵キャラが出

て、世界を荒いるかもしれない。」

龍神

「なにい！？まさかありえないこと・・・」

悟龍

「俺もありえないと思ってる（汗）七つの邪悪龍神ダイクシエンロンたちもいるかもしれない。」

龍神

「何？・・・バカな。まさか悟空が邪悪龍神ダイクシエンロンを撃破していた。一星龍イチシンロンを元気玉で撃破した。もう二度と現れないはずだ。ありえない！」

悟龍

「これでいい。究極龍神様」

龍神

「っ！！？何言っている！！・・・（はっ）ってまさかお前が」

悟龍

「ああ。俺がみんなを守るために世界を征服する奴とその平和を乱している奴を破壊する！！？」
と前で手を握りました。

龍神

「そんな無茶な！！？・・・！！？・・・お前・・・」

悟龍

「・・・」

と究極龍神様は、俺の目が覚悟を決める目を見る

究極龍神様は折れた。

龍神

「はあく、分かった。あなたが好きにして、《ストライクウィッチーズ》の世界へ行く事を許可する。」

悟龍

「ありがとうございます。手強い敵に負けんために地獄の特訓する事が必要です。しかし、やはり重力は、軍隊の特訓より厳しい方がよい。ぐっ。」
と後悔しながら、言います。

龍神

「特別に不老不死と重力腕時計を与える。」
と言いながら、究極龍神の目が赤く光り、鷹宏の体が光ったかと思うと、すぐに消えた。鷹宏の前に何かが光ったかと思うと、すぐに消えて、重力腕時計が現れた。一星球も
悟龍は、目が開いた。

鷹宏

「これは!!?」
と頭をあげて、究極龍神様が笑う。

悟龍

「それは、世界を救う覚悟をした特別な物を与えた。重力腕時計では、どれぐらいのGでも出すことができる。一星球も大切にす。そのほかに《ストライクウィッチーズ》の世界がある。」

悟龍

「有難う御座います!!」
と礼を言いながら、腕を重力腕時計で装う。

龍神

「ここで別れだ。悟龍」

悟龍

「おう!そつだ!バーダックに伝えてくれ。」

龍神

「ん?どんな伝言ですか?」

と聞いて俺がふつと微笑しながら、

悟龍

「また会ってからいつか再び闘いたいかもしれない。」

龍神

「分かった。バーダックに伝える。」

悟龍

「でも、《ストライクウィッチーズ》の世界へはどうすれば行ける
??」

頭を傾げながら質問をする

龍神

「ああ、この穴に入れば行ける。」
と俺がこの穴を見ながら、不安がある。

悟龍

「龍神様、これ、大丈夫か?」

龍神

「ん？大丈夫大丈夫。お前が舞空術を使おうと大丈夫です。」

悟龍

「本当ですか？良かった。」

悟龍

「龍神様、いつかお前を呼びながら、会おう。」

龍神

「そう。《ストライクウィッチーズ》の世界を頑張って救う。俺が領き、穴に入って、落ちる。」

悟龍 side out

究極龍神 side

龍神

「ふっつ。まさか悟龍があの男と似ているとはな。世の中驚きでいっぱいだな」

と鷹宏とおなじくらいと彼を思い出せながら、慈悲でこの穴を見る。

龍神

「……………リユムーン……………」

プロローグ 終

プロローグ 彼の人生の終焉・・・そして彼の新たな二回目の人生（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。感想、誤字、指摘などお気軽にどうぞ

次回予告

悟龍

「オッス。俺、悟龍。」

悟龍

「ストライクウィッチーズの世界に降臨した。」

悟龍

「ひどい。謎の機械のせいで、ヨーロッパみたいな街を火の海する。」

「

悟龍

「俺の前に銀のカーテンから現れた灰色の怪物が出る。初めて仮面の戦闘するのが面白い。」

悟龍

「なっ！俺の前に落ちてる謎の機械の欠片は、小さな少女を襲う。」

俺は少女を助ける！！」

）第一話 ストライクウィッチーズの世界に降臨、初めての仮面の戦闘、救済

設定 リュムーンの能力

恋姫の性は、呂に名はに字は、龍牙

現代の性は、孫悟龍

真名は、リュムーン

その真名は、前世のサイヤ人の名前だ。前世の自分がいた世界では、バーダックと一番戦友だ。カナッサ人の攻撃にやられたバーダックは、未来予知を得たが、リュムーンは、バーダックの未来予知を信じなかったサイヤ人と違う信じていたから、フリーザを倒しに行くが、フリーザは、バーダックを殺せた。彼は、それを見て、怒りの限界を感じて、ブチ切れたからスーパー擬似サイヤ人になったから、数幾つかの敵を次々と殺せて、最終的にフリーザを殺せたじやなくて、倒せたからフリーザ軍は、サイヤ星を破壊できないから、早く撤退した事が出来た。そのせいで、疲れた変身を解除してしまったから、死んだ。現実の現代には、孫悟龍と呼ばれた蒼髪の少年が生まれたが、彼は、自分を生まれた親から周りの女達から周りの男達から嫌味された。最後に車に轢かれた。神と出会ったから、その物語が始まった。

性別は男

本当は、18歳

身長 182cm（7歳となると138cm 18歳189cm）

体重 52kg（7歳となると43kg 17歳69kg）

容姿

覇気を持つモデルのようなイケメンな姿だ。

髪は、肩の所まで長い。

周りから現実には嫌味されて、別の全ての世界には、モテられたが、恋愛の事を半分敏感な所と半分鈍感な所もある。

髪の色は蒼色 目の色は、黒色

服装は、ベジットのような服。作者は、ベジットの服がかっこいい
だと思う。

ドラゴンボールの孫悟空やベジータと同じ腕や足には隆起した筋肉
が遠目からでも窺える。しかしそこに、無闇に膨れ上がった部分な
ど微塵たりとて有りはしなかった。極限まで無駄な部分を削ぎ落と
し、ある一つの目的のためだけに研鑽され鍛えられた体に、茶色に
近い肌、綺麗に割れた筋肉、細くしなやかで、どこか逞しい肢体

スーパーサイヤ人は、スーパーサイヤ人の悟空達の髪と目の色と同
じ。

擬似サイヤ人は、劇場版DBZ第3弾の悟空と同じです。

性格は、ベジータや悟空とおなじな不屈と屈指の实力を持つ超戦士
のワイルドと冷静（裏では、冷酷や冷血など）を持つ好戦的な性格
ただし、弱い敵と出会えるなら、好戦でしない。自分から奴に興味
するから、様子するに好戦する。スーパー戦隊と仮面ライダーの
敵と闘う時は、スーパー戦隊と仮面ライダーに変身するのが使うだ
けだ。仮面ライダーを使わずに戦う時は、サイヤ人の特性の悪い癖
と同じだが、人を助けることがある。からかう事をする事になっ
たら、面白い。ふざけすぎられた事と修行の事をすると、厳しい。
だが、内心は、人・生物に優しい性格だ。それが、厳しい特訓と人
が喜ぶ褒美をすることが鞭と飴です。自分の意思を無視することで
も誰かが語る正義の事でも完全に怒ったのは、誰にも恐れる白い悪
魔のなのはを超える魔神が怒ったような怒りだ。

玩具の仮面ライダーやスーパー戦隊の変身グッズや巨大ロボ合体グ

ツズを使うが、孫悟龍の能力が発揮して、それらを本物になる。ただし、人を苦しめる事と正義を汚す事をする人は、それを使うが…変身することが出来なくて、只の玩具を遊ぶようにする

使い魔は、不死鳥。

その能力は???

スーパーサイヤ人暴走モードは、目の色は、黄金。目の前に味方や敵と無関係で人がいる時に襲い殺す。

スーパーサイヤ人悪モードは、目の色は、赤。冷酷な性格になる。

好きなこと

特訓する事 俺が認める誰かと戦闘・共闘する事 おいしすぎる料理を料理する事 科学者でもできない科学や高い技術で、魔法少女リリカルなのはのデバイスなどを作る事

嫌いなこと

正義 正義の本当の意味が知らない事と正義を語るだけ事の甘い人達 負ける事 俺が認めない誰かと戦闘・共闘する事 強引な事 脅迫などの行為 大切な勝負・を乱入する奴 極悪人 人を物と駒と扱う奴

ステータス(本気・マジ切れモード)「本当の本気フルパワー・リミッター全力モード」

筋力 S++(EX++)「X」 魔力 S+++ (EX+)「X」

気力 S S + + (E X + + +) 「 X 」 宝具 E X (E X + + +)
「 X 」 耐久 S S S + (E X + +) 「 X 」 幸運 S 敏捷 S
S (E X +)

リミッター 1

A A A + +

リミッター 2

S S + +

リミッター 3

S S S +

リミッター 4

S S S S + + +

リミッター 全て

E X X

能力

心眼 S S + +

直視の魔眼 E X 全ての動生植物と機械と不死の生物などを死の線と点で見える事が出来る。自在で解放・封印モードを使える事が出来る。

対魔力 E X

どんな超強力な魔法を無効化する事が出来る。魔法無効化と似てい

真名解放 EX X

神の武器と英雄の武器を扱える事が出来る。

千里眼 S

どんな遠い場所にも未来にも見える。

気配遮断 SS++「EX++」

気配が鋭すぎる奴と空間を掴み取る奴が出来ない気配。

直感 SSS++

未来での全ての攻撃が来るのを感じる事が出来る。

勇猛 SS+

幻視でも幻想でも消す。

不老不死 EX

毒や何万度の熱を喰らわれたなど所があるから、どの所も一生涯ない。

超再生 EX

ナメック星人の能力と同じくらいだ。

魔力・気のオーラの色は、青色

界王拳 10倍〜300倍まで使える。500倍以上は負担を超える。

サイヤ人 スーパーサイヤ人からスーパーサイヤ人3とスーパーサイヤ人4になる事も出来る。ただし、条件がある時になる。それを超えるスーパーサイヤ人5以上がある。

登場人物（7話）

孫悟龍の仲間、一番相棒銀狼の名前は、銀牙

容姿

どんな女に勝つモデルのような美人的な少年

髪は、腰の所までの銀髪、目は、銀

銀牙が孫悟龍の孤独と同じように感じるが、孫悟龍（朱空鷹宏）の事を兄さんと呼ぶ

好きなこと

孫悟龍 孫悟龍と特訓する事 孫悟龍が認める誰かの事 孫悟龍が

おいしすぎる料理をする事 孫悟龍が強引する事

嫌いなこと

正義 正義の本当の意味が知らない事と正義を語るだけ事の人達

孫悟龍が認めない誰かが僕に触れる事 大切な勝負を乱入する奴（

怒り） 極悪人 孫悟龍以外の人が強引する事 人を物と駒と扱う

奴 人を苦しめる事 女装を着る事

ステータス(本気・マジ切れモード)「本当の本気フルパワー・全
力モード」

筋力 S+++(SS++)「SSS+++」 魔力 S++(SS
+)「SSS」 気力 S S++(SSS+++)(「EX」 耐久
SS++(SSS++)(「SSS+++」 幸運 S 敏捷 SS
+(EX+)

能力

心眼 SS++

対魔力 SS+

気配遮断 SS+++「SSS+++」

直感 SSS+++

勇猛 SS++

第一話 ストライクウィッチーズの世界に降臨、初めての仮面の戦闘 救済

〈《ストライクウィッチーズ》の世界〉

〈1939年〉

夜空で人の影が落ちる

悟龍

「！！（ヒュー）……………」

と赤弓兵のような落ちながら、舞空術で止まりました。
すつとゆっくり下りた。

悟龍

「ふっつ、やれやれ。まず、自分の体を調べる。同調開始《トレースオン》。なになに。不老不死あり 魔術回路が500本以上。投影魔術使用。宝具真名投影・解放使用。固有結界使用。直視の魔眼使用。体の強化使用。全投影連続層写使用・・・など。って、身体年齢は、7歳になってた。（汗怒）」
と不機嫌で愚痴を言った。

そう。悟龍の本当の身体年齢は、18歳です。鷹宏の肩をがっくりと下げた。

悟龍

「ここはどこだか？本当に《ストライクウィッチーズ》の世界か？
（キョロキョロ）」

と言いながら、見回りする。

悟龍

「ん？そこにヨーロッパみたいな街がある。それへ行く。」

と言うと、俺は、ヨーロッパみたいな街へ走って行けます。

俺は、ヨーロッパみたいな街に入る前に門の前に止まる。

悟龍

「む？この標識は・・・」

と頭が上げて標識を見た。

この標識は、帝国カールスラントと書かれていた。

悟龍

「この標識は、帝国カールスラントじゃない。っと、新聞で年月を調べる。」

俺は、探していた新聞を拾い上げ見せた。

悟龍

「なになに、1939年？・・・って俺は2010年（現在の）の71年前にいる。タイムスリップみたい・・・むっ!？」

俺は新聞を読んで、タイムスリップする事を冷や汗して、歪む魔力を感じたように険しそうな顔になって、陸空を警戒して、見回りした。

悟龍

「この歪む魔力は・・・!?!? (黒いサーヴァントの魔力じゃないみたい) これは・・・!?!?!?」

と上を見て、鷹の目で謎の機械を見て、目を開いた。

悟龍

「謎の機械じゃない。やはり本当にここは《ストライクウィッチーズ》の世界かもしれない。」「きゃあああああああ」

と俺は、誰かの悲鳴を聴けた。

悟龍

「むっ! 誰かの悲鳴か! あっち! 早く助けてあげて!」

と言いながら、誰かの悲鳴の所へ早く走って、行きます。その時、謎の機械から赤いビームが放たれた。

悟龍

「何っ!ぐっ。」

俺は、危機を感じて、瞬地で避ける。眩しき光のせいで目を閉ざしてる。

俺は、目を開けると、この中にカールスラントの街が炎の海と化していた所を見て息を呑んだ。

悟龍

「くっ。もう遅かった。間に合わなかった。(ギリ)」

と後悔をしながら、言う。立ち上がる。
悟龍の前に銀のカーテンから出る

悟龍

「むっ？なっ！」

銀のオーロラから出た数体の灰色の怪物が現れた。

悟龍

「アルフェノク！？（ビュ！！）くっ！しょうがない！（バツ！）」

と言いながら、灰色の怪物　アルフェイクが俺を斬り、俺が苛立ちに避ければ、立ち上がり、手のひらサイズのバックル　デイケイドライバーを腰に当てることでベルトが伸長して装着された。バックル両側のサイドハンドルを外側に引くことでバックルが90度回転し、左腰にあった本の様な形をした物　ライドブッカーから取り出した一枚のカードを挿入した。

悟龍

「変身ッ！！」

『KAMEN RIDE DECADE』

悟龍は九つの影を纏めたマゼンタのような仮面ライダーデイケイドに変身した。《ストライクウィッチーズ》の世界を世界の破壊者（救世者）が降臨しました。

デイケイド

「オルフェイクにはファイズだよ！」

ライドブッカーからファイズの顔が描かれたカードを取り出し、デイクイドライバーの中に挿入する。

『KAMEN RIDE FAIZ』

フォトンブラッドに包まれ、仮面ライダーファイズへと変身した。

Dファイズ

「早く、とつとと終わる。」

ライドブッカーからファイズアクセルモードの顔が描かれたカードを取り出し、デイクイドライバーの中に挿入する。

『FORM RIDE FAIZ AXEL』

ファイズの胸が開いた。目が金から赤になった。ファイズアクセルモードになった。

手と手がパンパンと叩いた。

Dファイズ

「さあ、いくぞ。」

『Start Up』

そう言うと電子音が鳴ると同時にDファイズの姿が消える。俺から見た敵が時間でゆっくり動いている。

アルフェノク全員

「「「「わあああああ!?!?!」「」「」

オルフェノク全員は火花を散らしながら苦しむ。

Dファイズ

「これで止めだ。」

そうとうとファイズの黄金のカードを取り出し、デイケイドライブの中に挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE fa / fa / Faiz』

ジャンプしたDファイズアクセルモードは、足先から幾つか赤い光を放ち、オルフェノク全員の胸部辺りへと到達し、一瞬で幾つか円錐状へと形を変えて、オルフェノク全員は、円錐状の光の勢いに押しされ、幾つか円錐状の光に飛び込むかのように飛び蹴りを放ち、円錐と共にDファイズはオルフェノク全員の中に入っていくかのように消えた。

その直後、オルフェノク全員の背後にDファイズアクセルモードが出現し、オルフェノク全員は の文字が出て、灰になって、撃破していた。

Dファイズからデイケイドへ戻った鷹宏は、ふうっと吹き込んだ。その時、

小さな女子

「うわああああん」

と女子が泣き込んだ声を聴けた。

デイケイド

「！幼い女子の泣き声！くっ、遅く避難していた人がいる！」

幼い女子の泣き声の所へ走りました。

悟龍 side out

カールスラント隊 side

ネウロイの襲撃によりカールスラントの街は火の海と化していた。

その街の上空には1機の謎の機械

ネウロイが。

そしてそのネウロイの周りを3つの影が囲っていた。

軍服のような服装の女性バルクホルン、金髪のショートカットでポ
ーイッシュな雰囲気がある少女エーリカ、茶髪でおっとりした感じ
の女性ミーナの3人だ。

バルクホルン

「・・・・・・・・」

バルクホルンは火の海と化した街を上空から悲しそうに眺め

バルクホルン

「・・・・・・・・つく!!」

ネウロイを睨みつけた。

そして魔法シールドでネウロイの攻撃を防ぎながら撃ち続けた。

エーリカもミーナも彼女に続き撃ち続ける。

ダダダダダダダッ!!

銃弾がネウロイの表面を削る。そこにコアが出現。

バルクホルン

「うおおおおおおおおおおおお!!」

バルクホルンはそのコアを狙い撃つ。

パリーン!!

銃弾によりコアが破壊され、そのままネウロイは崩れる。

崩れたネウロイは大きな破片となり街に降り注ぐ。降り注いだ破片たちは大きな砂煙を出しながら落ちていった。

バルクホルン

「……………はっ!?!」

その街を眺めていたバルクホルンはあることに気付いた。逃げ遅れたのか1人の少女が泣きながら立っていたのだ。

その少女の頭上にはネウロイの破片が

バルクホルン

「クリス!?!」

彼女は少女の名前を叫んだ。泣いていた少女それは彼女の妹「クリスティアーネ・バルクホルン」だった。破片はもうクリスの真上まで来ていた。

バルクホルン

「クリス!?!」

名前を叫びながら彼女に近づく。

ミーナ

「トウルデー!?!」

それを2人は追いかける。
破片がクリスを直撃しそうになった時だった

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

???

「危ない!!」

ドゴオオオオーーーーー！！

すさまじい音と共に破片がクリスの上に落下。

バルクホルン

「クリスウーーーーー!!」

バルクホルンは絶望の叫びを上げた。

バルクホルン

「そ……そんな……クリス……」

クリスがいた場所の近くで膝を落としてしまう。

エーリカ

「トウルーデ……」

ミーナ

「・・・・・・・・」

2人は後ろでそれを黙って見届けるしかなかった。
その時、

???

「おい、カールスラント隊のお嬢さん達。」

3人

「「「!?!?!」」」

急に聞こえた声に驚き振り返る。

そこには赤いカブトムシのような物を着て、仮面を被った男が立っていた。

???

「探しているのは、この子か？」

男の腕には1人の少女が抱きかかえられていた。

バルクホルン

「ク・・・・クリス!?!」

バルクホルンは男のそばへと駆け寄った。男に抱きかかえられていた少女、それは妹のクリスだった。

???

「安心しろ、気を失っているだけだ。」

バルクホルン

「クリス!!!!・・・・すまない・・・・」

バルクホルンは男からクリスを受け取る。

????

「お嬢さん。自分の故郷がやられて怒り狂うのは分かる。だが周りぐらいは確認しとけ。タダ倒すだけじゃ無意味だ。」

バルクホルン

「ああ、すまない……」

バルクホルンはただただクリスを抱きしめながら謝ることしか出来なかった。

????

「家族を大切にする奴に悪い奴は居ない。妹なら大事にしろ。」

バルクホルン

「ああ……」

そう言うと男は後ろを向いた。

ミーナ

「待つて!! 貴方は一体……」

ミーナが呼び止め聞く。すると男は振り返りこう言った。

????

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ。」

エーリカ

「仮面・・・ライダー・・・」

クリス

「うう・・・ん・・・あれ?・・・おねえ・・・ちゃん?」

バルクホルン

「!!! クリス!?!」

クリス

「どうして・・・ここに?」

バルクホルン

「お前こそどうしてあんなところに・・・」

クリス

「ごめんなさい・・・」

バルクホルン

「もういい・・・よかった・・・」

バルクホルンはクリスを強く抱きしめた。

その様子をエーリカとミーナは微笑みながら見守っていた。

バルクホルン

「本当にすまなかった・・・礼を・・・あれ?」

ミーナ

「え?」

エーリカ

「いない!？」

バルクホルンがお礼を言おうと男のほうを向く。
しかし、そこには男の姿が無かった。

バルクホルン

「この男は・・・一体・・・」

カールスラント隊 side out

悟龍 side

カールスラント隊と出会いする事を遡る。
俺は、走りながら、撃つ音を聴けた。

デイケイド

「む?この音は・・・」

頭を上げて、軍服のような服装の女性の3人は、謎の機械を銃で撃つ。

デイケイド

「あれは・・・いや、彼女達はきっと大丈夫だ。それよりさっき泣き声をした少女を助ける。」

頭を横に振って、さっきの泣き声をした少女を助ける事を集中しながら走る。

デイケイド

と電子音で鳴けば、いつもの時間が戻った。

Dカブト

「ふーっ、間に合って良かった。」
と仮面の下に笑顔で言いながら、気を失った少女を見て、もう抱けた。

???

「クリスウーーーーー！！！」

とさっきの軍服のような女性が絶望の叫びを上げた。

Dカブト

「(むっ。)」

Dカブトは、軍服のような女性の絶望の叫びを聞き、その所に振り返ると、軍服のような女性を見る。その周りに金髪のショートカットでボーイッシュな雰囲気がある少女と茶髪でおっとりした感じの女性がさっきの軍服のような女性をもう追いました。

???

「そ……そんな………クリス………」

彼女がクリスがいた場所の近くで膝を落としてしまう。

???

「トウルデー……」

???

「………」

2人は後ろでそれを黙って見届けるしかなかった。

軍服のような服装の女性は俺からクリスを受け取る。

Dカブト

「お嬢さん。自分の故郷がやられて怒り狂うのは分かる。だが周りぐらいは確認しとけ。タダ倒すだけじゃ無意味だ。」

軍服のような服装の女性

「ああ、すまない・・・」

バルクホルンはただただクリスを抱きしめながら謝ることしか出来なかった。

Dカブト

「家族を大切にする奴に悪い奴は居ない。妹なら大事にしる。」

軍服のような服装の女性

「ああ・・・」

そう言っていると俺は後ろを向いた。

???

「待って！！貴方は一体・・・」

茶髪でおっとりした感じの女性が呼び止め聞く。すると俺は振り返り、こう言った。

Dカブト

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ。」

???

「仮面・・・ライダー・・・」

と金髪のショートカットでボーイッシュな雰囲気がある少女が呟いた。

クリス

「うう……ん……あれ?……おねえ……ちゃん?」

軍服のような服装の女性

「!!! クリス!?!」

クリス

「どうして……ここに?」

軍服のような服装の女性

「お前こそどうしてあんなところに……」

クリス

「ごめんなさい……」

軍服のような服装の女性

「もういい……よかった……」

軍服のような服装の女性はクリスを強く抱きしめた。

その様子を金髪のショートカットでボーイッシュな雰囲気がある少女と茶髪でおっとりした感じの女性は微笑みながら見守っていた。

俺は、黙って眺めて、ふんつと鼻を鳴らし、背を向いてすぐに暗闇に消えて去った。

もうデイケイドから変身解除した鷹宏は、カールスラントの町外れの廃墟に着いて、入った。

悟龍

「ふっつ。やれやれ。化け物を残さずに退治した。まずは、ネギま

の魔法のガラス玉で別荘を作る。」
と疲れと自信で言う。

五時間後、

悟龍

「ふっふふ。出来た！？別荘を作りました。ふあ〜っ。眠い。明日、別荘で特訓する！ZZZZZZ。」
と別荘を造った事が、嬉しくて、決闘する事が疲れたせいで欠伸をして、眠気を襲われている。俺は、眠りについた。

悟龍は、次の日に自分の新たな運命が始まる事を知らない。

第一話 終

第一話 ストライクウィッチーズの世界に降臨、初めての仮面の戦闘 救済（後

読んでいただきありがとうございます。

感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

次回予告

悟龍

「オッス。俺、悟龍」

悟龍

「精神と心の部屋みたいな別荘で重力の特訓する。」

悟龍

「自分で王の財宝にうまい食料を出て、料理する。」

悟龍

「馬鹿な。自分の体に何かあった！？俺の耳と尻尾は！！？」

（第二話 悟龍、別荘で特訓と料理をする。自分の体の異変が起こった）

第二話 く 悟龍、別荘で特訓と料理をする。自分の体の異変が起こった

次の日の朝、悟龍は、赤弓兵の無限の剣製の夢で見た。

悟龍

(あれは、アーチャーの夢。それは、俺にぴったりする。ああ、独りぼっちで、悲しげにする。)と詩を歌で歌う。

I am the bone of my sword .

(体は剣で出来ている)

Steel is my body , and fire is
my blood .

(血潮は鉄で 心は硝子)

I have created over a thousand
blades .

(幾たびの戦場を越えて不敗)

Unknown to Death .

(ただの一度も敗走はなく)

Not known to Life .

(ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create
many weapons .

(彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う)

Yet, those hands will never hold anything.

(故に、生涯に意味はなく。)

So as I pray, unlimited blade works.

(その体はきつと剣で出来ていた。)

夢を見て、悲しいように目を開いていると、懐かしくに元の世界と同じように一人で頑張って、友にならなったり、親に褒められてなくしたりすることを覚えた。体を起こる。

俺は、目を閉じながら、考えをして、目をカツと開けると誓いを決めて、すくと吸う

悟龍

「俺は、戦士にかけて自分で自分の道を決めて、どんな敵に負けなないように諦めない!？」

と大きな声で誓う。握る手が空を突き、空を見届ける。

悟龍

「ふん」

と鼻で笑った。

悟龍

「よし。別荘で特訓する。あつ、そうそう。忘れた。魔力探索封印結界を掛ける。」

と魔力探索封印結界を掛けた後に、別荘の所へ歩いて、別荘を触ると悟龍の足元に魔法陣が出ると俺の体が光ったかと思うと、すぐに俺が転移した。

「悟龍が作った別荘」

悟龍

「ほぐっ、広すぎる。息苦しい。暑い。重い。やっぱり俺が想像する事にピッタリする。」

と俺は、自分が作った事を感じする。別荘は、ドラゴンボール世界の精神と心の部屋と似ているだけじゃなくて《ネギま》のエヴァンジェリンの別荘も一緒に出来る。

悟龍

「よし！！さあ、特訓する。えくと、ふむふむ。」
とそう言う俺が考えた特訓メニューを考えて紙を書く。

悟龍

「よっしゃ！？まずは、別の場所で重力50Gダッシュ10本を走る。」
と無人島みたいな場所に転移して、重力腕時計を操作して、50Gになって、10本ダッシュする。

悟龍

「ふぐっ、やっぱり厳しい。」
と嬉しいように言う。体で体操する。

悟龍

「だが、まだまだ鍛える。次に30G腕立て200回をする！？」

1時間半後

「……197…198…199…200…」

「更に重力40Gで拳で500回特訓する。」

「はっ！ほっ！ふっ！」（…497…498…499…500…）
と重力40Gで、パンチとキックを繰り返す。

……
……
……

悟龍

「はあはあ。」

と疲れた表情で立って、汗をタオルで乾く。
ぐぐつと腹が減る音をする。

悟龍

「うう。腹が減った。そうだ、自分で料理する。」
とそう言つと、元の場所に転移して、戻る

悟龍は、ゲイト・オブ・バビロン王の財宝でいろいろな野菜と肉を出現する。

悟龍

「さあ！料理する。」

野菜と肉を切ったり焼けたりする。

悟龍

「完成ぜ！」

たくさんの豪華な肉料理を置いた。

悟龍

「いただきます。」

ガツガツガツガツと早く食べる。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

悟龍

「ごちそうさま。」

とそう言うと皿を片づけて洗う。

その後に、悟龍は、座るままに精神修業をする。

悟龍

トレスオン
「投影開始」

とそう呟いたと聖剣や魔剣などをイメージする。

エクスカリバー カリバーン ゲイ・ボルク ゲイ・ジャルク ゲ
イ・ボウ 干将・莫耶 ルール・ブレイカー レーヴァティン エ
ルキドゥ イージス カラドボルグ フルンディング ローアイア
ス フラガラック アイギス そしてエヌマ・エリシュなど

悟龍がゆっくりと目を開けると

悟龍

「ふ〜。ふむ。どれもいい剣だ。」

と言いながら、汗をかいた。

悟龍

「よっ。次に技の力のコントロールが良い修行をする。」
と立ち上がり、また別荘のさっきの所にワープで転移して、行く。

悟龍は、海の所にワープで転移して、到着すると、気を集中して、俺の体の周りは、青いなオーラが出てる。

体中を満たしていた気が悟龍の両の手のひらに集まり、青い光があたりを照らす。

悟龍

「かあ……、めえ……。」

悟龍

「はあ……、めえ……。」

悟龍

「波ああああ!?!」

とこの気弾を溜め終わったと、バツと手を出て、放たれた。その後、海の半分を斬り、すぐに元に戻る。

悟龍

「ふむ。いいコントロールです。しかし、まだまだ!かゝめゝはゝめゝ波ッ!?!」

と言いながら、さっきのを撃ち繰り返す。

ギヤリック砲と魔閃光とビックバン・アタックとファイナルクラッシュなどを撃ちます。

.....
.....
.....

悟龍

「はあはあ、ふつ。そのあとは、ベジットのビームソードやファイナルかめはめ波とゴジータのビックバンかめはめ波やスターダストブレイカーとブロリーのオメガブラスターなども使える。と使い方が間違えると、地球を壊すかもしれない。

やっぱり自分のオリジナルの技と新たな技をする事が必要する。うん。」

とそう言いながら、考える。

悟龍

「そうだ！ベジータのビックバン・アタックより速く攻撃しやすい！よし！」

と閃く。

俺は、目を閉じて、集中しながら片手は、止まった。ピタッ

悟龍

「はあっ!？」

とカツと目を開いて、気弾で光速のように海を速く撃ちこんだ。ドツカーーーーン

悟龍

「やった。俺のオリジナル技は、ソニック・B・B・^{ビック}バン・アタックの完成だ!!」

大爆発をしたせいで大津波は、こちらを襲つ。

悟龍

「あちやく。気を強く過ぎる。(汗)ちっ、しょうがない。リック・ラク・レク！来れ雷精風の精闇の精！！」
ウエニアント・スピアリカスレグスラキルダレレンソオサスクーランチース
と気にまずそうに頭をかいて、舌打ちしながら、詠唱を速く唱え始めた。

悟龍

「闇を従え雷を纏いて吹きずさべ南洋の嵐 闇雷の暴風！！」
と速く唱え終わった後、『ネギま』の雷の暴風と違って、闇を混ぜて、大津波に放たしたら、収まった。

悟龍

「くつ。(汗)やっぱり、どの魔法を闇の魔法と混ぜるのが負担にある。」
と負担で体の悲鳴で弱気に言う。

悟龍は、大の字に倒れる。

悟龍

「疲れる。くそつ、眠気で襲われる。まあ、しょうがない。ZZZZ
ZZ
と悪態に言いながら、すぐに眠れる。」

…
…
…

悟龍が目覚めた。

起き上がると、海を俺の姿を移ると、俺の耳と尻尾を銀狼の姿で見た。

悟龍

「なんだこりゃ。」

と錬鉄の魔術師の口調みたいで言う。

悟龍

「はあく、まさか、夢で銀狼と一体化した。」
と頭を搔いて、言う。

悟龍

「まあ。しょうがない。ここまで特訓をし終わる。明日から、毎回外を出る時、100Gを歩いている事と空を飛ぶ事をする。」
と言ながら、元に転移して、戻る。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

――5年後（精神と心の部屋のおかげで10年後）
朝、悟龍は、別荘を出て、ボロボロの服を着ながら、精神と心の部

屋のおかげで17歳（身体精神27歳）になった。

黒目蒼髪、蒼髪は後ろ側に少し逆立ち、目は鋭く吊り上げて青年とは思えぬ威圧感を放ち、ベジットの戦闘服みたいな服を着替えて、ふっつと目を閉じなければ、サイヤ特性の尻尾を振る。

悟龍

「さあ、今日から厳しい戦いを始まる。」
とゆつくりと目を開けて、険しい顔で言う。

たった最強の一人の仮面ライダー&魔術のサイヤ戦士が立ち上がる。
俺と同じなサイヤ人の三つの小さな宇宙船が宇宙に地球に入っている。

この誰らかがいて、にやりと笑っている。

第2話 終

第二話 悟龍、別荘で特訓と料理をする。自分の体の異変が起こった。(後書

読んでいただきありがとうございました。

感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

次回予告

悟龍

「オッス。俺、鷹宏」

鷹宏

「まさか・俺と同じサイヤ人らがアフリカに降りてしまった。」

マルセイユ

「何者らかが我々アフリカのウィッチーズのを攻撃してしまった!」

マルセイユ

「しかし、ネウロイでもない気を持つ何者かを我々の攻撃に平気に歯が立たない!!!」

マルセイユ

「我々を助ける青いの気を使う何者かが助けてもらう。味方か? 敵か?」

ベジータ

「おい。お前、何者だ?」

鷹宏

「俺は、通りすがりの……サイヤ戦士だ。アフリカのウィッチーズが苦戦している奴らを絶対に許せない!!!」

〜第3話 アフリカのウィッチーズ、苦戦!!!鷹宏、戦士参る!!!〜

第三話 アフリカのウィッチーズ、苦戦！！悟龍、戦士参る！！（前書き）

今回は、ストームウィッチーズとサイヤ人との邂逅だ。

芳佳と坂本美緒が出会いする前にアフリカに向かって行く悟龍だ。

第三話 アフリカのウィッチーズ、苦戦！！悟龍、戦士参る！！

（1943年 カールスラント）

悟龍 side

カールスラントの町外れの廃墟に一人の男性は、鋭い目、黒目蒼髪、小さな青色の焰の男性。

悟龍

「さあ、行くぞ。」

と自信で満ちた声で言う。

悟龍は、カールスラントの町外れの廃墟の外までに走って、跳びよると、舞空術で使えるおかげで、飛び続ける事が出来ます。

悟龍

（……この事は、ブリタニアでランニングをする途中にこの頃の軍服のような服装の女性の妹は、クリスという娘を見て、この娘は、子供達と遊んだり笑ったり、嬉しい表情をした。俺は、この所を見て、安堵した。俺の視線に気付けたこの娘は、俺を見て、挨拶した。俺も挨拶した。この娘と子供達は、俺の物語を聴きました。トランポルなどこの話を終わった俺は、帰るとするが、この娘は、俺を呼び、仮面ライダーの事を話す。この娘は、「本当に仮面ライダーがいるか？」と聞きながら、俺は、目を開け、笑顔になり、この娘を撫でていた。俺は、「きつと本当に何処で仮面ライダーがいる。いつか貴女達と会う。」と言って、この娘は、パツと笑顔が出た。この娘達と別れた。）

悟龍は、別のことを思い出しながら、微笑するから険しい顔になる。
（……謎の機械 ネウロイがまた現れるかもしれない。）

それだけじゃなくて、征服する事や人類を絶滅する事を目的とする
邪悪な戦士も人を殺す化け物もきつと出る。絶対に俺は、負けない
！！)

と絶対に思う。体の周りに気を出て、少し速く上げ、海を越えて飛
び続ける。俺が行けるべき所は、アフリカ方面だ。

悟龍 side out

アフリカのウィッチーズ side

アフリカのウィッチーズのアジトは、1941年にアフリカ方面に
派遣された扶桑とカールスラントのウィッチを中心成り行きで編
成された編成された混成部隊である。これをストームウィッチーズ
と呼ぶ。

このアジトの中心を日本（扶桑）みたいな少女がいる。ヨーロッパ
みたいな軍服の女性が歩いてくる。

????

「ケイ。ウィッチの能力は、どうしますか？」

と言う。日本みたいな少女は、ウィッチとしての能力を失いながら
も的確な判断力で隊をまとめる指揮官 加東圭子少佐。その周りの
人からケイと呼ばれる。

圭子

「うん。異常はなし。マルセイユ。」

と言う。プライドが高く、居丈高な振る舞いはあるが、戦線のエー
ス、戦力の要である事に加え、そのカリスマ性からアフリカ方面部
隊の精神的支柱であり、その人気は絶大であるこの使い魔の鷹を持
つ女性をハンナ・ユステイナ・マルセイユ大尉。その周りの人か
らティナと呼ばれる。

マルセイユ

「そうか・・・」

圭子は、ふつとため息をしながら、この空を見上げれば、

圭子

「ん？マルセイユ。これは？」

と空を指して、言う。

マルセイユ

「何？」

とマルセイユがその人の指している所を追い、火達磨な隕石のよう
に見る小さな宇宙船を見る。

マルセイユ

「はあ？」

と間抜けな面をしながら、私たちが火達磨のような三つの小さな宇
宙船を通る事を観た。

ドッガカーーーーーー

三つの小さな宇宙船が砂漠と激突した。地震のようにする。アフリ
カのウィッチーズは、この音を感じて、それぞれの人々は、吃驚し
てテントから飛び出した。

「何これ！？！？」

「なにかあった！？」

「ネウロイの

襲撃！？」

とそれぞれの人々が騒いでしまった。

マルセイユ

「静かとしてろ！！」

と一喝している。

それぞれの人々がしんと静まりだった。

マルセイユ

「何奴がいるかも分からない。私と稲垣真美とライーサは、出撃と遊撃する。もし、やばい時、総員で出撃する！！」

全員

「はいっ（了解）！！」

とそう言うとマルセイユらの三人は、戦闘脚を履いて、機関銃を持つことから離れると3つの小さな宇宙船と激突する所為で大きな穴の所に行く。

そこに到着すると、マルセイユらの三人は、アジトから離れて、大きな穴の中に3つの小さな宇宙船を見つけた。

小さな宇宙船から誰かから出ています。

腰に巻きつけてある尻尾に戦闘服みたいな三人は、やや大柄の体格に腰下、あるいは太腿までありそうな黒の長髪と目を携え、シッポを戦闘服の腰に巻いていると鋭い目で黒髪男性とスキンヘッドな男性が出て、穴の外に出てた。着陸する。

黒髪男性は、口が開いた。

?????

「ラディッツよ。ナツパよ。ようやく俺達の出番が来た。」
ナツパ

「そのようだ。ベジータ様。」

ラディッツ

「ベジータ様。ここは、何処だか？」
とキョロとか見回りする。

ベジータ

「知るか。この近くには出てきたんだろうぜ。そんなことより、早くデカイ戦闘力のヤツを探し出して聞き出すぞ。ドラゴンボールのことをな。」

やや大柄の体格に腰下、あるいは太腿までありそうな黒の長髪と目を携え、シツポを戦闘服の腰に巻いている男性の名前は、ラディッツ。スキンヘッドな男性は、ナツパ。黒髪男性は、ベジータ。マルセイユらは、その男性らの威圧感を受けたように冷や汗をかけて、喉でゴクリと唾を飲む。

マルセイユ

「おい。お前達は、何しに来た？」
その声に三人組が振り返る。

ベジータ

「む？ほう。なるほど。おい。手始めにコイツラから聞き出してみるか。ラディッツ、ナツパ、お前らはコイツラの戦闘力を測ってる。」

ナツパ・ラディッツ

「了解しやした（了解しました）、ベジータ様。」
そう言っつて、ナツパとラディッツは、スカウターのボタンを押す。

ベジータ

「さて貴様ら、ドラゴンボールというものを知っているか？」

マルセイユら

「「「??」「」」」

ベジータ

「おい。お前達、聞こえなかった？もう一度ドラゴンボールを知っているか？」

マルセイユ

「おい。お前、さっきから分からない事を言う？ドラゴンボールを知らない。」

ベジータ

「そうか。なら、死にたいらしい。おい、ラディッツ。てめえらを殺す。」

とベジータがそういうマルセイユらは、殺すという言葉を聞けて、緊急戦闘でそれぞれの武器を構える。

ラディッツ

「了解。ベジータ様」

とそう言うのなら、ラディッツは、前に出て、立ちながら、マルセイユらを見回る。

ラディッツ

「ふむ、この人数を消すのは些か面倒だな。どれ、サイヤ人の恐ろしさを見せるには今日だ」

とにやりと自信の満ちたと脅威の声で言う。マルセイユは、冷や汗

で、稲垣真美とライーサの所に見れば、彼女らも恐怖に震えている。ラディッツは、マルセイユらへの突撃を敢行する。

マルセイユ

「くっ！！いくぞ！！気をつける、みんな！！？」

真美・ライーサ

「はい！！！」

とそう言うと、マルセイユらが、上空に逃げて、ラディッツと言う太腿までありそうな黒の長髪の男性はストライカーで使わなくて飛びないと思いますが、予想が大きく外れた。

マルセイユ

「何っ！！？」

マルセイユらが常識では考えられない光景が映る

マルセイユ

「・・・バカな・・・、ストライカーを使わずに空を飛ぶ人なんてありえない！！？」

ラディッツは、飛び、にやりと不笑し、マルセイユらへの突撃を再び敢行する。

マルセイユ

「くっ！だだだだ」ガガガガガガガ

ライーサ

「はぁー！ー！っ！？」バババババババ

真美

「はあっ！？」ドオッソッ！

マルセイユらは、軍隊の機関銃でラディッツを撃てきた。

ラディッツ

「くっ。……」

と無防備に苦痛で受けた。

マルセイユ

「ただだだだだだだだだだだー！っ。」ババババババババ
と最高の力で撃てきた。煙を出てた。

マルセイユ

「……はあ……はあ。」

ライーサ

「……はあぜえ……はあぜえ。」

真美

「はあはあ、やった？」

三人は、疲れる。その時に。

ラディッツ

「今の攻撃は、痒くも痛くもない。それなのに地球人の黒髪の少女
の攻撃は少し痛え。」

煙が晴れるとラディッツは、無傷で空中に立つ。

マルセイユ

「……なっ!!」

ライーサ

「バカな……!!」

真美

「そんな……!!」

とそれぞれの驚愕と絶望と恐怖に染めた。無論、普通の人を撃ち死んだかもしれない、いやほぼ死んだに間違いない。そう思っていたのに、ラディッツは平気で立っている。

マルセイユ

「バカな……こんなことが……。」

ライーサ

「……ネウロイより堅いな人がいるなんてあり得ない……化け物め。」

真美

「そんな。私たちの攻撃が効かない……。」

三人の体を冷や汗で額にかいてガクガクと恐怖で揺れた

ラディッツ

「ふふふ、どうしたか？もう終わりか？今度は、こちらからの番が出た。」

とそう言うとラディッツは、消えた。

マルセイユ

「何ッ！？消えた!!」

と言いながら、私たちは、キョロキョロとラディッツを探す。

ラディッツは、高速でライーサと真美の後ろにとられた。

ラディッツ

「ここだぜ。」

真美・ライーサ

「（ゾクッ）っ!?!」

恐怖で急に聞こえた声に驚き振り返る。ラディッツは、真美の腹を殴った。

真美

「ぐっ!?!」

と真美は、メキメキと彼女の体の悲鳴をして、砂漠までに吹っ飛ばれて、気絶した。

マルセイユ

「真美!?!」

ライーサ

「きゃあああああああ!?!」

それにしても、ライーサの体のあちこちも殴り続けて、最後に蹴られて真美の所までに吹っ飛ばれて、気絶した。

マルセイユ

「ライーサ!?!お前・・・!?!」

仲間を心配するように真美らの所へ行き、息を吞んで、後悔と怒りでラディッツを睨んだ。

ラディッツは、マルセイユの顔をチラッとにやりと笑った。

ラディッツ

「ふん。やはり人類は、もろい民族だ。」

とにやりと不敵で言う。

マルセイユは、ラディッツの言葉を聞いて、マルセイユの何かが切れた。

「くつくつく。ナツパとベジータ様は、俺より強い。」
と冷徹で言っています。

マルセイユ

「えっ!!」

と恐怖に染めた顔に体が固く止まる。

ラディッツ

「いよいよおまえらが消える。」

とそう言つと右手が上げて、大きな気弾を作つて、マルセイユらの所を放れた。

マルセイユ

「はあ。くつ。はあはあ。(ここまで……)」

とマルセイユらの前に大きな気弾に迫り、死の覚悟できつい目で閉じる。その時、

???

「諦めるだど?これは、困つた。しょうがない。助けてあげる。ストームウィッチーズのお嬢さん達。」

誰かの呆れでやさしいな声を聞くと大きな気弾を青い気弾が押して
る。

マルセイユらの前に覇気に満ち溢れた優しいな威圧感に尻尾に蒼髪の
の青年がマルセイユらを守るように降りています。

ストームウィッチーズsideout

サイヤ人陣side

ナツパ

「おいおい。ラディッツの奴、地球人の女らに本気せずに出す。地球人は弱い。」

ベジータ

「……………」

ナツパとベジータは、余裕そうで腕を組み、空を眺めて言う。

ナツパ

「おつ。ラディッツは、技を使える。」

ベジータ

「ああ。地球人の女らは死ぬ。」

ベジータらがラディッツの勝ちを自信がいた。その時、スカウターがピーツと鳴いた。

ベジータ

「ん？なつ！10000以上の戦闘力！！？」

ナツパ

「何っ！？むっ！？何これ！！」

と何かを感じさせて、空中を見て、ラディッツの気弾を青い気弾が押してる。

ナツパ

「何っ！？誰かがラディッツの気弾を押される。」

ベジータ

「くっ！？」

ベジータらは、誰かが気弾を放れた所を睨む。

ベジータら

「……なっ!!」「」

とベジータらが、誰かを見ながら、予測をつかないことを驚愕する。蒼髪の青年の尻尾は、俺達の尻尾と同じする。

空中でいる蒼髪の青年が尻尾を振りながら、地球人の女を守るように前を出て、着地した。

ラディッツは、目の前の人を敵意と殺気で睨んだ。彼だけじゃなく俺達も。

マルセイユ

「ううっ。(お前が、私達を助けた?)」

とマルセイユは目が開いて、目の前に蒼髪の青年を見上げる

????

「……………(クルッ)」

と尻尾を振るながら、マルセイユらの所に歩いて行くと、

マルセイユ

「!!(お前も私達を殺すかもしれない。)」

とそう思うと、目を閉ざす。

????

「大丈夫。俺は、殺す気じゃなくてお前達のケガを治す。治癒^{ケアルガ}」

と魔法でそう言うと、マルセイユらの体が光ったかと思うと、すぐに消えた。

マルセイユ

「えっ?」

と呆然と????を見上げると????は、笑顔で安心するような言葉

をする。

????

「大丈夫。俺は、もうお前達をケガを治した。ほら。」
とそう言つと真美とライーサの所を指している。

マルセイユ

「えっ!!」

と振り返つて????が指している所を走つて真美らの状態の様子で見
見る

真美

「すーっ。すーっ。」

ライーサ

「くーっ。」

と二人が寝息をする。

マルセイユ

「良かった。」

と肩を落として、嬉し涙で言う。

????

「良かったが、感動する事は、後だ。」

マルセイユ

「あつ、うん。おまえは、d「話はそれまで。闘いはまだ終わらな
い。」えっ?」

????は、目の前に振り返つて、睨んでいます。

ラディッツ

「おい。お前は、何者だ？サイヤ人か？」

マルセイユ

「？（サイヤ人？）」

????

「俺か？（フツ）いい事を教えてあげる。ふふつ、俺は、ただのサイヤ人じゃない。」

全員

「「「「！！！！？」」「」「」」

????

「俺は、異世界のサイヤ戦士だ！！？」

ラディッツ

「異世界？何言っている？あなた。巫山戯るな！！テメエのようなサイヤ人はいない！！」

????

「へつ。貴方達は、俺を知らないなんて当たり前だが、俺は、貴方達を知っている！」

と鼻で笑って、言う。

ナツパ

「何っ！！バカな！！テメエみたいな奴が俺を知って「待って！ナツパ！！ラディッツ！！冷静にせ！！」・・・ベジータ様。」

ベジータ

「おい。てめえは、本当に俺達を知っているか？」

????

「へえ。さすがサイヤ王ベジータ王の息子、王子、ベジータ。俺の言う事を分かっている。ああ、そのとおりだ。転生の事が半分正解、半分間違った。」

ベジータ

「ほーっ。おもしれえ。くくっ、まさか本当に俺達を知っている。

お前は、ドラゴンボールを知っているか？」

ナツパ・ラディッツ

「?????」

ナツパとラディッツは、ベジータと転生のサイヤ戦士での話がよくついてない。分からないが、マルセイユは、転生のサイヤ戦士とベジータの話を使い魔の鷹の耳でよく聞けて、考え纏める。

マルセイユ

「（お前達は、さつきからドラゴンボール？サイヤ人？おかしい事を話している。転生？異世界？のサイヤ戦士って言う奴は、お前達を知っている？それにどうして彼は、私達を守るように前を出す。）
「ブツブツ

????

「ドラゴンボール？ああ。知っている。」

ベジータ

「ほお。ドラゴンボールを知る人が居る。おい、ドラゴンボールを渡してく」断る。「……どうして渡してくれない。」

ベジータは、ドラゴンボールを渡す事を転生のサイヤ戦士が断るよ
うに遮るとベジータは、顎めた

????

「お前の願いを分かっている。わりい。お前達に渡せない。」

ベジータ

「そうか。残念だ。おい、ラディッツ。てめえの戦闘力を測ってる。
てめえは苦しいだけで強制に吐かされた。」

ラディッツ

「了解。」

とそう言うラディッツは、ニヤリと目の前に最新型スカウターの
ボタンを押す。

ラディッツ

「戦闘力1か？ふん。俺の敵は不可能だ。」

と謎のサイヤ人戦士を馬鹿に言う。

謎のサイヤ戦士は、それを聞いて、呆れたようにため息をする

????

「はあ。やれやれ。俺は、分かる。そっちこそ、今のお前達は、
きつと俺に勝てない。」

ラディッツ

「何？」

と額で怒りが来て、言う

????

第三話 アフリカのウィッチーズ、苦戦！！悟龍、戦士参る！！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

次回予告

悟龍

「オツス。俺、悟龍」

悟龍

「俺とラディッツの戦いが始まった。
マルセイユ

「そんな。彼は、私達は歯が立たない奴を余裕で紙のように避ける。

」

ラディッツ

「馬鹿な！！俺達の気弾やラッシュは、お前を攻撃する筈に、なぜ
お前は、平気で痛くない！！？」

悟龍

「今のお前らでは、俺に絶対勝てない！！」

〈第4話 異世界のサイヤ戦士と二人のサイヤ人の闘い〉

第四話 転生のサイヤ戦士と二人のサイヤ人の闘い

悟龍 side

俺は、ラディッツ達と闘う時に2時間前に遡って、アフリカ方面へ行く途中に、何かの気を感じて、止まった。

悟龍

「！俺と同じなサイヤ人の邪悪な気が3ついる。3つの小さな宇宙船がアフリカへ行く方向にいる。くっ！！」
と気を感じて言いながら、3つの小さな宇宙船がいる所へ最も気を大きく出せて、早く飛んで走る。ビューン

小さな宇宙船がいる所にまもなく到着する前におかしい事が気付いて、また止まった。

悟龍

「？さつきから魔力の気を感じる？むっ？空中は、誰らと誰が闘う？」

とそう言って、三人の影と一人の影が闘う場所を鷹の目で見た。

悟龍

「あちらは、俺より一番小さい気はラディッツだ。・・・」

悟龍

「そちらは、誰らの使い魔の耳と尻尾を出した・・・って有名の噂

に聞いたアフリカのストームウィッチーズか。！？まずいな！？危険だぜ！！？三人が死ぬかもしれない！！早く助ける！！」
とそう言って、ストームウィッチーズの三人の所に助けに行く。

悟龍

「（！！さっきの三人の中の二人の魔力が減っている。一人は、怒りで、ラディッツを攻撃する。馬鹿者！！怒りで冷静を捨てて、最悪の事態になってしまった！まずいな！！ラディッツは、ストームウィッチーズの三人を殺す気で気弾を放れた。一人で二人を守る事を出来ながら、諦めるだと思ふ。巫山戯ない！！くっ！！」
と悪態で止まりながら、ウィッチ達を速く助けに行く。

悟龍

「諦めるだど？これは、困った。しょうがない。助けてあげる。ストームウィッチーズのお嬢さん。」
とそう言つと、手を上げて、ラディッツの気弾の所まで気弾を放れた。

サイヤ人陣は、驚愕してから、こちらを振り返って睨んでいます。

俺は、それを無視して、ストームウィッチーズの前に守るように前に出て、着地した。

悟龍

「（クルツ）（金髪で黒いような軍服でこの使い魔の鷹を持つ彼女がハンナ・ユステイーナ・マルセイユ）」
と振り返って、尻尾を振りながら、マルセイユらの所に歩いて行く。

マルセイユ

「！！（お前が私達を殺すかもしれない）」

とそう思つと、目を閉ざす。

悟龍

「大丈夫。俺は、さっきの奴らと同じじゃなくてお前達のケガを治す。治癒ケアルガ」

と魔法でそう言つと、マルセイユらの体が光つたかと思つと、すぐに消えた。

マルセイユ

「えっ？」

と彼女は、目を開いて呆然と俺を見上げると俺は、笑顔で安心するように言つ。

悟龍

「大丈夫。俺は、もうお前達のケガを治した。ほら。」
とそう言つとマルセイユの仲間の所を指している

マルセイユ

「えっ!!」

と振り返つて俺が指している所を走つて真美らの状態の様子を見て、

真美

「すーっ。すーっ。」

ライーサ

「くーっ。」

と二人が寝息をする。

マルセイユ

「良かった。」

と安堵で肩を落として、嬉し涙で言う。

悟龍

「良かったが、感動する事は後だ。」

マルセイユ

「あつ、うん。おまえは、d「話は後だ。決闘は、まだまだ終わらない。「えっ?」

俺は、金髪の娘の言葉を遮ぎながら、目の前に睨んでいます。

ラディッツ

「おい。お前は、何者だ?サイヤ人か?」

マルセイユ

「?(サイヤ人?)」

悟龍

「俺か?(フツ)いい事を教えてあげる。ふふつ、俺は、ただのサイヤ人じゃない。」

全員

「「「「!!!?」「」「」

と息が呑んだ。

悟龍

「そつだ!俺は、通りすがりの異世界のサイヤ戦士だ!?!?」

ラディッツ

「異世界?何言っている?あなた。巫山戯るな!?!テメエのようなサイヤ人はいない!?!」

悟龍

「へっ。貴方達は、俺を知らないが、俺は、貴方達を知っている！」

ナツパ

「何っ！！バカな！！テメエみたいな奴が俺達を知って「静まれ！
ナツパ！！ラディッツ！！冷静にせ！！」・ベジータ様。」
とベジータの喝でナツパとラディッツが収まる。

ベジータ

「おい。てめえは、本当に俺達を知っているか？」

悟龍

「へえ。さすがサイヤ王ベジータ王の息子、王子。俺の言う事を分かっている。ああ、そのとおりだ。転生の事が半分正解、半分間違った。」

ベジータ

「ほーっ。おもしれえ。くくっ、まさか本当に俺達を知っている。

お前は、ドラゴンボールを知っているか？」

ナツパ・ラディッツ

「「?????」」

ナツパとラディッツは、ベジータと転生のサイヤ戦士での話がよくついてない。分からない。

ん？マルセイユがブツブツ言っている。まあいいだ。目の前に敵を倒すために睨んだ。

悟龍

「ドラゴンボール？ああ。知っている。」

ベジータ

「ほお。ドラゴンボールを渡してく」「断る。」・・・どうして渡してくれない。」

ベジータは、ドラゴンボールを渡す事を俺が遮るとベジータは、顰めて、怒りが籠めた声で言う。

悟龍

「お前の願いが分かってる。わりい。お前達に渡せない。」

ベジータ

「そうか。残念だ。おい、ラディッツ。てめえの戦闘力を測ってる。てめえは苦しいだけで強制に吐かされた。」

ラディッツ

「了解。」

とそう言つとラディッツは、ニヤリと目の前に最新型スカウターのボタンを押す。

ラディッツ

「戦闘力1か？ふん。俺の敵は不可能だ。」

と俺を馬鹿にするように言う。

俺は、呆れたようにため息をする。

悟龍

「はあく。やれやれ。そつちこそ、今のお前達は、俺に勝てない。スカウターだけが頼みすぎるは、駄目だ。」

マルセイユ

「危ない!!」

と俺を心配するよつに言っ。

悟龍

「……………(ヒョイ)」

と、ラディッツの攻撃を残像のように紙一重で捻る。

マルセイユ

「えっ。」

ラディッツ

「なっ!?!」

と二人が驚けて、俺の所を見た。

ナツパ

「だりゃああああああ!!!!!!」

悟龍

「……………(ヒュヒュヒュヒュヒュ)」

ナツパは、俺への突撃を敢行しながら、俺の体のあちこちをラッシュし続けるが、俺は、ナツパの攻撃を紙一重で避けたり反したり捻ったり続ける。

悟龍

「……………」

俺はしつこく拳を打ち出してくる男に掌を向けて放っ。

悟龍

「ぐわあ！」
とカウンターで腹部にめり込む。

ラディッツ

「なっ！！ナツパ！！」

ナツパ

「ぐうつ。」

ナツパは、腹を抱けて、耐えた。

悟龍

「……………てめえら、弱い」
と冷酷と呆れ気味で呟いた。

ナツパとラディッツがカチンとキレた。

ナツパ

「ふふふふ。ラディッツ。俺様はキレていた。」

ラディッツ

「くくく。奇遇だ。俺もキレていた。テメエを殺せたい。」
と殺気が増えた。

悟龍

「ん？」

ナツパとラディッツの行動を戸惑っている。

ナツパ

「俺達は、宇宙一戦闘民族サイヤ人だ……………」

ラディッツ

「オメエみたいなサイヤ人は、俺達と種類が違う。」

ナツパとラディッツ

「オメエは、消えなきゃならない!!!」

とそう言うラディッツとナツパは、気を込めて、再び俺への敢行を突撃していた。

マルセイユ

「すごいなあ。謎のサイヤ戦士という奴が、私達に歯が立たない奴らの攻撃を余裕で避けたり反撃したりした。」
と驚愕して、感心と唾然と呟いた

ベジータ

「フン。ナツパとラディッツの攻撃を余裕で避けやすかったり軽く反撃する。だが、奴め、本気を出せてない。」
ベジータも感嘆しながら、怒りのように言う。

その後、ラディッツ・ナツパは満身創痍で肩が疲れるように上下する。それに対して、俺は、汗を一つもかけずに疲れない。

ラディッツ

「はあはあ。ぜえぜえ。くそっ!!!（なぜ！ふざけた奴は、なぜ息が上がっていない!!!）」
と息切れで思っ、目の前の敵を睨んでいます。

悟龍

「どうした。攻撃するチャンスがありますか？」
と腕を組んで、ニヤリと挑発気味で言う。

ラディッツとナツパは、カチンと来た。

ラディッツ

「だまれええ！！！！俺達は、一流の戦士だ！！！！」

ナツパ

「そうだ！！俺たちは、ふざけた奴に負けないや！！！！」

ラディッツとナツパは、上昇しながら、鬼気みtainな顔で手に気で
気弾を作っている。

ラディッツ

「でりやああああああ！！！！」

と大きな気弾を投げていた。

ナツパ

「おりやああああああ！！！！」

と大きな気弾を撃っていた。

俺は、余裕で逃げないように立つ

ラディッツとナツパの大きな気弾が鷹宏の体を触れていた。

ドッカーーーーーン

マルセイユ

「！！！！サイヤ戦士ーーーーー！！！！」

と恐怖と悲鳴みたいな声した。

ラディッツとナツパの顔は、勝ち自信であるにやりとした顔になっている。その時、

ラディッツとナツパ

「うん？」

と顰めた顔に変わった。煙が晴れると、

悟龍

「……………」

と空中に無言と無傷で立っている

ラディッツとナツパ

「なっ！！！」

ラディッツとナツパは、自分達の強い気弾を鷹宏が効かない事を驚愕した。

悟龍

「……………はあく、本当に分かってない奴だ。俺は、初めからちよつと本気する方が良い。」

と呆れでそう言つとちよつと気と殺気と覇気と闘気を膨れて上げる。

全員

「なっ！！！！？？？」

スカウター『3000…3600…10000…300

00…Error』

三人のスカウターがボンツと壊しやがった。

ベジータ

「バカな！奴は、俺様の気を超える50000以上だ！！」

とベジータは、鷹宏の戦闘力を自分より超える事を驚愕する

俺は、すぐに構えるとラディッツとナツパが警告して、危険だと感じて戦闘の態勢を早く構える。

俺は、消えた。

ラディッツ

「何っ！！くっ。」

ナツパ

「何処だ！！？」

とラディッツとナツパは、驚愕して、警告しながらキョロキョロと俺を探す。

俺は、気配を出せずに、ラディッツの後ろに居ながら、すでに額に二つの指先が気を集中した。

ベジータ

「なっ！ラディッツ！！後ろ！！」

とラディッツに注意した。

ラディッツ

「なにつ！！」

ラディッツは、俺に振り返すが、もう遅い。

悟龍

「もう遅かった……」

ラディッツの腹部を俺の指が気を溜まり終わって、ピタッと止める。

悟龍

「ピッコロよ!!! 貴方の技を借りる!!! 魔貫光殺砲ツツ!!!」
とそう言つと、螺旋状の気をまとった光線状の気を、指先から放れた。超近距離のおかげでラディッツの腹部を強く貫いた。

ラディッツ

「ぐわあっ!!!」

と悲鳴で、血を吐いて、空中から落ち下りる。

悟龍

「.....はあ!!!」

とそう叫ぶと手をラディッツの所に止まって気弾でラディッツの所を爆発して、煙を晴れると消滅した。

全員

「「「なっ!!!」」」

と驚愕した。

悟龍

「.....」

とラディッツを撃破した所を眺める。

ナツパ

「バカな.....ラディッツを一撃で撃破した.....」

と鷹宏がラディッツを殺した所を見て、体が驚愕したように恐怖に震えた

ベジータ

「.....」

と啞然とチラッと鷹宏の所を見る

マルセイユ

「・・・」

と啞然と鷹宏を見る。

悟龍

「まず、一人墮落だぜ。次は、ナツパの番だぜ。」
と冷徹で言う。

悟龍は、ナツパの所に振り返り、睨んだ。

ナツパ

「くっ！！（チラッ）」

とマルセイユらの所をチラッと見た。

マルセイユらは疲れと気絶のおかげに動けずに座りました。
ナツパは、チャンスを閃いて、ニヤリと微笑した。

悟龍

「む？」

悟龍は、ナツパの行動に気付いていた。

ナツパ

「フッフッフ。お前に勝ってないだが、まずからは、雑魚を殺す！
！！」

そう言うとなツパは、マルセイユらへの突撃を敢行する。

悟龍

「・・・しまった！！」

俺は、ナツパの行動をすぐに理解して、ナツパを追います。

マルセイユ

「む？ハゲデカ男がこっち・・・まさか！！こっちに来る気をする！！くそう！！お前達を救い出たい！！」
マルセイユは、動けない自分を後悔します。

ナツパ

「ふはははは！！雑魚らを殺す！！」

その時、悟龍は、ニヤリと笑う。

悟龍

「なんてや、残念だ、ナツパ。お前の行動を見通して分かっている。」

ナツパ

「何！！？」

悟龍

「界王よ！！貴方の技を借りる！界王拳！！！！」
そう言くと俺の体が赤い炎のようなオーラに包まれ、パワーとスピードの倍率を上げた。

ベジータ

「なっ！！」

とベジータは、まとも驚愕した。

俺は、スピードを上げて、ナツパをもっ追いかけて突進して、襲う。

ナツパ

「ぐわあっっ！！！！！！」

ナツパの戦闘服を一撃で壊す。ナツパの体の悲鳴が大きくボキツと鳴った。

俺は、ナツパより追い越えるとすぐに砂漠に着陸すると、手を上げるとナツパの大きな体を止める。

ナツパ

「ぐがあ!!!?」

悟龍

「二人目墮落だぜ。」

俺は、ナツパをベジータの所にすこし軽く投げる。

ベジータの所に振り返って、睨んだ。

悟龍

「ベジータ。俺の言う意味が分かるか？分かったら、とっと、てめえを連れて帰るッ!!」

マルセイユ

「・・・すごいなあ・・・謎のサイヤ戦士が簡単に二人に撃破しやがった。」

と言うと、マルセイユは、彼女たちが齒に立たない奴を撃破した謎のサイヤ人の背中を呆然と見惚れる。

ナツパ

「ベ・・・ベジータさ・・・ま・・・た・・・すけ・・・て・・・」

とベジータを救いの手に、ベジータは、ナツパの手を握りますが、

ベジータ

「ニヤリッ」

とそう冷酷に笑い、ナツパを捨てたように上空へ投げます。

マルセイユ

「なっ！！！！」

悟龍

「……………（やっぱり）」

とマルセイユが、驚愕して、俺は、予測通りにため息しながら思います。

ナツパ

「わああー！！！！ベジータ！！何やってる！！！！」

ベジータ

「動けないサイヤ人はいらない！！！」

ベジータの体から大きな気弾を放れた。

ナツパ

「ベ……ベジータ……さ……ま……」

とナツパが爆発して消滅された。

マルセイユ

「バカな。どうしてMハゲの男性が、仲間を殺しやがった？」

ベジータ

「おい。その異世界のサイヤ人。お前は、まさか俺様が逃げるといふ。俺様がお前に勝たない。くくくつ。」

笑いが止まったら、怒りの表情を変えた。

ベジータ

「ふざけないでっ!!!俺様は、誇りのサイヤの王子だ!!!てめえから逃げない!!!てめーに絶対に勝つ!!!」

凄まじい気迫や威圧感を出て、鬼気と激怒で言う。

マルセイユ

「くッ!!!?」

と険しい顔で恐怖に染めて体を震える。

悟龍

「.....」

俺は平然で凄まじい気迫を受けてニヤリと微笑し、黙っている。

ベジータ

「異世界のサイヤ人!!!ここで殺してあげる!!!」

悟龍

「いいだろう。」キリッ

ときっぱりと答えた。

マルセイユ

「えっ!!!」

と驚愕し俺を見上げる。

悟龍

「ベジータ。この前に彼女を元の場所に転移を使って、避難し帰ってもいいか?」

ベジータ

「いいだろう。彼女に用がないが、お前だけを殺してあげる!!!」

とそう言つと俺は、マルセイユらの所に振り返つた。

悟龍

「転移開始」

とそう言つと俺の手を挙げて、マルセイユらの足下に魔法陣が現れる。

マルセイユ

「なっ！おい！！なにやっている！！」

悟龍

「俺とベジータとの本気の闘いで危険にお前達を巻き込みたくないと思うが、お前達は、安心に元の場所に避難して帰っている。」

マルセイユ

「どうかしたか？」

悟龍

「ここからはサイヤ人の正体と本領が始まるかもしれない。」

マルセイユ

「はあ、さつきからまた分からない事を言っています。」
と腰を手でかけて呆れ口調で言う。

悟龍

「わりい。決闘が終わつたら、お前達に説明するしかない。」
と苦笑しながら言っています。

マルセイユ

「お前が無事に私達のアジトに来て絶対お前の説明を聞いています

「!!」

鷹宏はそう聞くと、ポカンと呆然してきたが、元の表情になります。

悟龍

「ああ。絶対に。それに一回だけの約束である。」

マルセイユ

「えっ?何?」

悟龍

「お前の仲間が、俺を援護する事は駄目だ。真剣な顔で言っています。」

マルセイユ

「えっ?はっ。成る程だ。分かった。約束だぜ。」

悟龍

「そうか。良かった。」
と皮肉な笑顔で言っています。

マルセイユ

「(ドキリ)」

と俺の笑顔をマルセイユの顔が赤くとなって見惚れる

悟龍

「そつだ。これ。」
と水晶みたいな大きなボールをマルセイユに渡してる。

マルセイユ

「これは？」
と頭が傾げながら、質問をしてる。

悟龍

「これは、お前とお前の仲間らは、俺とベジータがどこかの場所で闘つのを観戦する事が出来る。」

マルセイユ

「本当に私達は、水晶みたいな大きなボールをお前達が闘えそうな場所で映る事が出来ますか？」

悟龍

「出来ます。」

キラッと笑つ。

マルセイユ

「はあ。分かった。」

頭を掻きながら言つ。

悟龍

「そうか。いよいよ轉移する。」

マルセイユ

「そうか。私達は強すぎる奴らに勝てなくて、悔しいが、お前は、きっと勝ってくれ!!」

悟龍

「フン。言わなくて分かつてる。」

俺とマルセイユがニヤリと笑い合っています。

マルセイユらは、消えて、ストームウィッチーズのアジトに転移しています。

悟龍は、険しい顔でベジータに振り返っています。

ベジータ

「くく。別れ話は、済んだか？」

悟龍

「ああ。闘う前にここは、闘いにくい。場所を変える。」

ベジータ

「構わない。俺は、どこでも貴方の墓を立てあげる。」
俺とベジータは、場所を変えて、岩場がたくさんある砂漠に到着する。

悟龍は、岩場に着地している。

ベジータも隣の岩場に着地している

ベジータ

「くくく。喜べ。まさか、誇り高いエリートの俺様は、異世界のサイヤ人と闘える事を嬉しい。」

悟龍

「奇遇だ。俺もサイヤの王子と闘うのを嬉しい。」
と俺とベジータとともに不敵に笑い合ひして、火花をまきあう。

鷹宏

「さあ、遊戯する…！」

ベジータ

「くくく、そう。そろそろ始まる。」

とそう宣戦で言うと、ベジータは、原作と同じように態勢を構える。俺も悟空と違って、態勢のポーズにする。

ベジータ

「……………」

悟龍

「……………」

風が砂漠の上で砂埃を立てた。

悟龍

「…………ツ!!!!」

俺は、ベジータの突進へ敢行する。

異世界のサイヤ人鷹宏とエリートと誇りが高いサイヤの王子ベジータとの対決が始まる。

勝つのは、悟龍か？ベジータか？

（第4話終）

第四話 転生のサイヤ戦士と二人のサイヤ人の闘い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

次回予告

鷹宏

「オッス。俺、鷹宏」

鷹宏

「さすがベジータ。まさか俺と互角に闘える。俺は、嬉しいが、まだまだ本気を出ない。」

ベジータ

「エリート高い俺様は、誰にも負けない!!」

ベジータ

「くそっ!!あれに变身するしかない。」

鷹宏

「おい!?ベジータは、あれに变身する気がする!?本気で!?!」

鷹宏

「くっ!?!しょうがない!あれを出す!?!」

「第5話 ベジータと鷹宏との超決戦!?! サイヤ人の本領の始まり!?!鷹宏の最高の技!?!」

第五話 ベジータと悟龍との超決戦！？ かもはめ波超激突！！（前書き）

二週間ぶり更新した！！

第五話 ベジータと悟龍との超決戦!? かめはめ波超激突!!

シッポをベジットののような服の腰に巻いている蒼髪の青年とシッポを戦闘服の腰に巻いている黒髪男性は、砂漠の岩場に居る。

岩場に居る蒼いオーラの蒼髪の青年は、悟龍だ。その隣の岩場に居る紫色のオーラの黒髪男性は、ベジータだ。

悟龍とベジータは、岩場に戦闘の態勢をまだ構える

風が砂漠の上で砂埃を立てた。

悟龍

「……ッ!!!」

悟龍は、ベジータの突進へ飛んで敢行する。

悟龍は、ベジータの顔を右パンチで殴っているが、ベジータは後ろを飛び交わし、カウンターの左パンチで殴り、悟龍の左手は、ベジータの左パンチを受け止める。

悟龍は、ラッシュをし続けるが、ベジータが悟龍のラッシュを防ぎ続ける。

ベジータは、すぐに悟龍の顔を殴るが、悟龍がすぐに上半身で避ける。

悟龍は、ベジータの腹を蹴る前に、ベジータは、後ろを飛び、岩場を跳び後退している。

悟龍は、それを見た後、すぐにベジータの所に岩場を跳び追撃している。

ベジータは、岩場を蹴り跳び、追撃している悟龍の顔をベジータの肘で殴っているが、悟龍は、直感を感じて、すぐに反らす。

悟龍とベジータは、距離を離しながら、突撃し合いする。

悟龍とベジータは、パンチを出し合い、防御し合いする。

悟龍とベジータは、パンチを出し合い、衝撃して、すぐに離れる。

悟龍

「くっ！」

ベジータ

「ちっ！」

二人は、顔が歪んで、空中に舞空術のまま後退して、止まって、まだ睨み合いする。

悟龍とベジータは、不敵に笑っています。

悟龍

「さすがエリート誇り高きサイヤ王子だ。お前は、まさか俺と互角しているが、俺は、まだ本気で出してない。」

悟龍は、不敵にベジータを褒めていて、余裕で言っています。

ベジータ

「フツ。俺様に褒められる奴は、父さん以来ぶりだ。俺様も奇遇だ。おまえこそ、俺様もまだ本気で出してない。」
ベジータは、不敵に父さんを思い出さながら、悟龍を余裕で褒めていて、言っている。

悟龍

「ウォーキングはここまでだ。」

ベジータ

「ああ。そうだ。だが・・・」

悟龍

「ん？」

ベジータ

「ナツパを撃破していた技を出て見せてみるー！ーお！！」

悟龍

「ナツパを撃破していた技・・・？ああ、あれは、界王拳と呼ぶ技だ。分かった。ただし、全力で行くぞ。」

とそう言って、ベジータは、にやりと笑っていた。

ベジータ

「クククツ。そうだ。俺様も本気を出したい。」

とそう言くと不敵に笑って、ベジータの迫力と気力が膨れ上がっています。

悟龍

「へっ、俺も本気でやりたい。」

と不敵に笑って、俺のも膨れ上がっています。

悟龍

「界王よッ!! 貴方の技を借りるッ!! 界王拳2倍ッッ!!!!」
とそう大きい声で言っていると俺の体が赤い炎のようなオーラに包まれ、パワーとスピードの2倍率を上げた。

悟龍は、界王拳モードのままにベジータの突進へ飛んで敢行する。

ベジータは、後ろへ跳んだが、悟龍は、ベジータをもう早く追いつける。

ベジータを殴っている。

そのあと、ラッシュし続けて腹を強烈に蹴って吹っ飛んでいて、追撃をする。

ベジータ

「ぐっ。」

ベジータは、顔が歪んで、すぐに空中で一回転に体を回り、悟龍への敢行を突進する。

ベジータは、左廻りして、悟龍に近づいて、悟龍をキックで下から上に強烈に蹴るが、悟龍は、腕で交差して防がれる。

悟龍

「・・・ッ。」

と歪んだ顔で後退されている。悟龍の体の色は、赤が消えた。

ベジータ

「クククッ。今のが限界だ。」

悟龍

「・・・お前は、なんて奴だぜ。」

と交差した腕を解きながら額で冷や汗を流れている。

悟龍

「フフッ、初めて俺をお前のような敵に凄い迫力で迫られる。俺は、強い奴と戦える事を嬉しい。」

悟龍とベジータ side out

ストームウィッチーズ side

今のアジトのウィッチーズらは、戦闘の準備を完了している。

「こちらは戦闘準備完了だ！ケイ！」「こちらもだ。ケイ！」

加東圭子

「よし！マルセイユ中尉らを援護する！！！」

加東の宣言を言う

全員

「「「「「了解だ！！！！」」」」」

加東と全員のウィッチーズは、発進しているが、その時、圭子達の前に魔法陣が現れる。

加東達

「「「「「！！！！」」」」」

とピタツと止まった。

魔法陣から現れるマルセイユらが出ています。

マルセイユ

「ここは？」

と自分の周りを見回りしている。

マルセイユ

「ここは、ストームウィッチーズのアジトだ。よかつて、マルセイユ大尉！」「」「」むっ？」

加東

「大丈夫だ！？マルセイユ達！！」

とマルセイユ達を駆け寄った。

マルセイユ

「ああ。だが、さっきの宇宙人らは、本気で私達を苦しんだ。私達は、本気で宇宙人を倒すとして、宇宙人は、私達の攻撃が、歯を立たなかった。宇宙人の一人のラディツツという名前の彼は、真美とライーサが殴られ、重傷をしていた。最後に私が、誰よりも一番重傷をしていた。」

加東とアフリカのウィッチーズ

「」「」「」なっ。「」「」「」

と驚愕して、恐怖みたいな顔に染めた。

マルセイユ

「その後、彼は、私達を殺す気でボールみたいな気弾で放れたが、異世界のサイヤ人と呼ぶ蒼髪みたいな青年は、私達を助けたために

彼の気弾を蒼い気弾が押し立てた。蒼髪の彼は、私達を治癒するための魔法を使用していた。」

加東

「な！本当だ！！」
と驚愕している。

マルセイユ

「ああ。蒼髪の彼は、私達を苦しんだ奴らを倒すとして、挑戦していた。」

加東

「なっ！危険だ！！彼は、奴らにやられる！！早く援護する！！」
とウィッチーズに彼を助けるために援護する。その前に、

マルセイユ

「彼を援護しては駄目だ！！」
と一喝して、ウィッチーズをピタツと止まる。

加東

「どうして止まっている！！彼は危ない！！」
とマルセイユに言っている。

マルセイユ

「お前達は、彼を助きたい気持ちは、分かりますが、私は、彼と約束していた。彼は、私達の仲間が彼を援護するのは、駄目と言う約束だ。加東・・・彼らに勝つ人がいるか？」

加東

「えっ。」

と加東は戸惑い顔でマルセイユが分からない事を言うのが聞いている。

マルセイユ

「お前達は、彼を助けようとする行為は、自殺行為だ。さっきを言うように貴方達は、きっと私達のように彼らに苦しんだ!」
と悔しい顔で言っている。

加東達は、驚愕して、ウルトラエースのマルセイユのそんな顔を初めて見た。

マルセイユ

「だが、彼は、サイヤ人という宇宙人の二人をウルトラエースの私よりも簡単に撃破していた。」

加東ら

「……………なっ!」「……………」

と彼がウルトラエースであるマルセイユよりも強い事を驚愕していた。

マルセイユ

「それに彼は、宇宙人の名前とドラゴンボールの事を知っていた。その戦いが終わったら彼の説明を聞く事を約束したが、それを見て分かる。」

とそう言うと、水晶みたいな大きなボールを指した。

加東

「これは?」

と水晶みたいな大きなボールを指しながら質問をしています。その時、水晶みたいな大きなボールが一瞬淡い光が輝いたと思いきや、

すぐにその光が止んだ。

水晶みたいな大きなボールは、蒼髪の青年と黒髪の男性が岩場で戦闘の体勢を構える。

加東達は、この事で目を開けて驚けた。

マルセイユ

「これは……。まさか私達は彼らが闘う所をそれで見る説明おかげで分かっている。」

と呆れ気味と苦笑で言う。

マルセイユ

「彼に任せけ。彼は、誰でもきつと勝つ！！私は、彼が勝つのを信じる！！」

と蒼髪の青年を信じながら、水晶みたいな大きなボールを眺めている。

加東

「マルセイユ……。分かった。みんな！！待機する！！宇宙人は、彼に任せて！！これは命令だ！！」

と加東が命令を言うとみんなが頷く。

加東らもマルセイユが眺める所を見る。

マルセイユ

「！・・・始まる！！」

蒼髪の青年は、黒髪の男性への敢行を突撃する。

蒼髪の青年は、黒髪の男性の顔を右パンチで殴っているが、黒髪の男性は後ろを飛び交わし、カウンターの左パンチで殴り、蒼髪の青

年の左手は、ベジータの左パンチを受け止める。

蒼髪の青年は、ラッシュをし続けるが、黒髪の男性は、ラッシュを防ぎ続ける

黒髪の男性は、速やかに悟龍の顔を殴るが、蒼髪の青年は、速やかに上半身で避ける。

蒼髪の青年は、ベジータの腹を蹴る前に、黒髪の男性は、後ろを飛び、岩場を跳び後退している。

蒼髪の青年は、それを見た後、すぐに黒髪の男性の所に岩場を跳び追撃している。

黒髪の男性は、岩場を蹴り跳び、追撃している悟龍の顔を黒髪の男性の肘で殴っているが、悟龍は、直感を感じて、すぐに反らす。

蒼髪の青年と黒髪の男性は、距離を離しながら、突撃し合いする。

蒼髪の青年と黒髪の男性は、上空で上げて、パンチを出し合い、防衛し合いする。

蒼髪の青年と黒髪の男性は、パンチを出し合い、衝撃して、すぐに離れる。

蒼髪の青年

「くっ！」

黒髪の男性

「ちっ！」

二人は、顔が歪んで、空中に舞空術のまま後退して、止まって、まだ睨み合いする。

マルセイユと加東達は、今の闘いを啞然と見上げる。

加東

「……なんだこれ！？蒼髪の青年と黒髪の男性は、何者だ！？この戦いは、とんでもない！！それに彼らは、ストライカーユニットを使わずに飛んだー！！」
とありえないみたいな事を言っています。

マルセイユ

「私もこんな闘いを初めて見た。」

マルセイユ

「む？止まった？」

空中で、黒髪の男性と蒼髪の青年がまだ飛んだままで睨んで合った。

悟龍

『ウォーキングはここまでだ。』

ベジータ

『ああ。そつだ。』

加東ら

「……………なっ」「……………」

ととんでもない事を聞いて驚愕したが、マルセイユだけがやっぱりなあ……と呟いた。

黒髪の男性と蒼髪の青年は、殺気と覇気の威圧的なオーラが放出していた。

連国軍の兵らがこれを見た中、その人たちのオーラを受けて、人数半分に気絶しているが、マルセイユらも受けて耐えていた。

蒼髪の青年

『界王よッ！！貴方の技を借りるッ！！界王拳2倍ッッ！！！！』
とそう大きい声で言っていると蒼髪の青年の体が赤い炎のようなオーラに包まれ、パワーとスピードの2倍率を上げた。

蒼髪の青年は、界王拳というモードのままに黒髪の男性の突進へ飛んで敢行する。

黒髪の男性は、後ろへ跳んだが、蒼髪の青年は、ベジータをもう早く追いつける。

黒髪の男性を殴っている。

そのあと、ラッシュし続けて腹を強烈に蹴って吹っ飛んでいて、追撃をする。

黒髪の男性は、顔が歪んで、すぐに空中で一回転に体を回り、蒼髪の青年への敢行を突進する。

黒髪の男性は、左廻りして、蒼髪の青年に近づいて、蒼髪の青年をキックで下から上に強烈に蹴るが、蒼髪の青年は、腕で交差して防がれる。

蒼髪の青年が歪んだ顔で後退されている。蒼髪の青年の体の色は、赤が消えた。

黒髪の男性は不敵に笑っていた。

蒼髪の青年の額で冷や汗を流れて笑ってた。

加東達は、蒼髪の青年が負けた事を恐怖に染めた。仲間を援護する事を呼ぶ時、マルセイユが・・

マルセイユ

「大丈夫だ。彼は。」

加東

「なっ！あなたは、平気で彼を見殺す事をする！？」

マルセイユ

「まだ勝ち目があります。青年の方を見る。青年は、余裕な笑みがある。まだ私達は、観戦し続ける。もし、私達の下手な行動があるのは、自殺行為だけです！！」

加東達は、マルセイユの言葉で渋々に納得している。

マルセイユ

（頼む。青年。地球の命運がかかっている。生きて勝ってくれ！）

マルセイユは、また水晶みたいな大きなボールを眺めて青年に思う。

ストームウィッチーズside out

悟龍とベジータ side

悟龍

「フフツ、俺は、お前以上みたいの奴と闘うのが嬉しい事を感じている。」

と額で冷や汗を流して、嬉しい事を言っている。

ベジータは、戦闘の構えを解いて、腕を組んで、口の端先がつり上がり、ククツと笑っている。

ベジータ

「クククツ、お褒め光荣していただきます。「リュムーン」ん？」と褒められる事を言いながら、悟龍が遮っている。

悟龍

「俺の真名は、孫悟龍だ。リュムーンと呼んでくれ。よろしく。」
ペコツ

と自己紹介をして、紳士のように頭を下げている。

ベジータ

「何を真似している。って、真名ってなに？」
険しい顔をしながら分からない事を聞きながら、質問している。

悟龍

「真名は、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることは許されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺している。」

ベジータ

「フン。大切な名前か…なぜ俺様に大切な名前を託しているか？」

悟龍

「お前は、俺と互角に殺す気に闘っている奴は、初めてだ。俺は、嬉しい。」

と言いながら、不敵に笑っている

ベジータ

「リュムーンか・ふん。覚えよう。褒めてやろう。良い名前だぜ。(でも、リュムーンってどこか聞いた名前だ?)」

と悟龍の名前を褒める事をそっぽに向きながら、言っつて、戸惑いに疑問する。

悟龍

「有難う御座いました。ベジータ王子。」

と褒められた事を不敵な笑顔に礼で言っています。

ベジータ

「(おっと、それより目の前に殺す。) そうだ。今度は、全力だ。」

悟龍

「むっ? 今まで本気で出てない? 珍しいだ。俺を侮辱する気をするか?」

と挑発気味で言っています。

ベジータ

「くくく。違う。俺様だけじゃなくて、お前も本気じゃない。」
と返しに挑発しています。

悟龍

「あれ? バレた?」

と苦笑で頭を掻いて言っている。

悟龍

「話は、ここまで。」
とそう言つと、悟龍とベジータは真剣な顔になって、戦闘の態勢を再び構えます。

次に先に動いたのは、ベジータ。

ベジータは、構える。

ベジータ

「はあああああー！ー！ー！ー！」
と気を凄く溜めたなら、ベジータは、上空に雲をざわざわと集まつて、地球を揺れている。

悟龍

(凄いな。地球が揺らしている。これがベジータの本気！！)と感嘆と歓喜で思っている。

ベジータ

「はああああー！ー！ー！ー！ー！」
と溜め終わった後、そのせいで衝撃波が雲を凄く吹き飛ばす。

悟龍は、顔を隠れながら、吹っ飛ばれるのを耐えた。

悟龍は、顔を隠れたのを解けて、不敵に笑った。

悟龍

「ほお、それが、ベジータ王子の本気のかだ。本気モードのお前

は、今の俺よりちょっと強いかもしれない。」
と感嘆や余裕で言っている。

ベジータは、にやりとした。

ベジータはフルパワーのままに速く悟龍への敢行を突撃するが、悟龍は、既に再び界王拳2倍モードで赤い炎のようなオーラに包まれた。

ベジータは、右の手刀で悟龍の顔を殴っていますが、悟龍の顔は、紙一瞬で下へ向き前に避けている。

悟龍もベジータの腹部を蹴っているが、ベジータは、悟龍が蹴る所を腕がxを組んで防げています。

ベジータは、なんとかに態勢を立ち直し、すぐに消えて、悟龍の後ろに回り込んだ

悟龍

(速いなあ！)

とベジータが攻撃する気配を気付いて、防御をしようとするが、もう遅い。悟龍は、背中を殴られ、吹き飛ばされる。

悟龍

「うわぁー！」

更にベジータは、悟龍を追撃して、悟龍の腹部を連続のようにラッシュして、悟龍の腹にキックを放つ。

悟龍

「ぐっ！ー！」

悟龍は、それを受けて、腹を抱けてた。

更々にベジータは、悟龍の頭上をハンマーのような両手で叩き込んでいる。

悟龍

「うわぁ!?!」

岩を通り貫けて、地面まで吹き飛ばされて、凄まじい音と共に地面を削っていく。

悟龍

「ぐわぁ!」

と、体が悲鳴して、口から血を吐きました。界王拳が解けていた。

ベジータは、岩場に着地して、腕を組んでた。

悟龍

「くっ。」

と立ち上がって、頭を抱けながら眩暈を払う為に横で振り、ベジータを見上げて、睨んだ。

ベジータ

「おい、俺様の本気が喰らった気分は、どうか?」
とニヤリと笑って、言った

悟龍

「ああ。痛いなあ。」

と痛い感じが残るような頭を抱けて笑みで言う。

ベジータ

「ほ〜っ。驚いた。まさか、俺様が本気で喰らった事を平気で立ちあがる奴は、初めてだ。く〜く〜。」

とベジータは、驚けと感嘆で言っつて、笑った。

悟龍

（さすがエリート持ちのサイヤ人。俺を本気で喰らった奴は、初めてだ。俺の本当の本気は、ここから！！）
俺は、スツと目を閉じて構える。

ベジータ

「む？」

と悟龍の行動を戸惑う。

悟龍

「はああーっ！」

と気を溜めて筋肉が膨れた。

悟龍

「ふ〜っ。」

と落ち着いて筋肉が元に戻ったら・

悟龍

「界王拳モード！！！！3倍！！！！」

カツと目を開いて、俺の体が赤い炎のようなオーラに包まれ、パワーとスピードの3倍率を上げた。すぐにベジータへの敢行を速く突撃した。

ベジータ

「なにい!?!」

と悟龍が速くなる事を驚けていた。

悟龍は、強烈のパンチでベジータを吹き飛ばすが、更にすぐにベジータの背中を追いついてベジータの背中を両足でキック上空に蹴って吹き飛んで、更々にベジータの前に進んだが、通り過ぎると、ベジータは、俺を打ち込みながら、俺が避けて、キックで蹴られて吹き飛ばされた。

ベジータ

「ぐわあっ!?!」

吹き飛ばされたベジータは、岩場と次々と激突してきた。ベジータと激突していた岩場が崩れていた。

ベジータは、崩れていた岩場の中に出て、目の敵を睨んでいます。

ベジータ

「悟龍め。お前の本当の本気に出た。俺様と互角しているかもしれない。」

と不敵に笑って、歓喜で心が踊るみたいな事を言っている

悟龍もベジータに褒められる事を嬉しいような表情をして、元の表情に戻って、すぐに消える。

悟龍は、いつの間にベジータの前に現れて、左パンチを出している。

ベジータ

「(いつの間に俺様の前に現れる!?!?)くっ!」

と思いつながら悟龍のパンチを右腕で防ぎ、左キックを出してる。

悟龍は、避ければ、ベジータの足を掴めばジャイアントスイングをした。ベジータは悟龍のジャイアントスイングをされて飛ばされて、気のおかげで止まった

ベジータ

「チィ。」

と舌打ちながら、歪まれたから嬉しいようで不敵に笑っている。空中で少し後退している。

ベジータは思っていた。

悟龍が本気でオレと闘いやすい事を嬉しい。

悟龍もベジータと同様に思っていた。

悟龍は、更に早く追撃しながら、ベジータの顔を強くに殴っているが、ベジータもカウンターで悟龍の腹部を殴っている。

悟龍 ベジータ

「ぐぐがあああ！」 「ぐわあああっ！」

悟龍とベジータは、腹と顔を強烈に殴られた後、吹っ飛ばされ、次々と近くの岩場と激突していった。舞い上げて煙を上がる中に。

悟龍 ベジータ

「ぐっ。」 「くっ。」

悟龍とベジータは、気と力で岩場を剥がして、向かいの方に睨んだ。

悟龍の額から血が出て、自分の服は汚れがついて、かなり破れる。ベジータも頬から血が出て、戦闘服が少し壊れる。

悟龍は、右手が、汚れ破れが付いた服をすべて破れて、左手が平然で血を払っていたが、ベジータが頬から手を付いて見て、目を開いた。

ベジータ

「血……！こ……このオレがは……初めてあんな奴を相手にけ……気高い血を……！！」
と自分の体をわなわなと震えて咳く。

悟龍

「む？」

とベジータの行動が変になったのを戸惑うような顔になった。

ベジータ

「ゆ……許さん……絶対に許さんぞおお……！！もうこんな星などいるもんか……！地球もろとも粉々に打ち砕いてくれるぞ……！！」
とあり得ない程の怒声を上げて叫んだ。

その後、ベジータは、上空に速く上げて、すぐに腰溜めの構えになっている。

悟龍

「この構えは……！！まさか……！！」
悟龍は、驚愕でベジータの構えをすぐに分かった。

ベジータ

「悟龍よ！！避けてみる！！オレのギャリック砲は、絶対に食い止められんぞっ！！地球もろとも宇宙の塵になれーっ！！」
とありえない怒気で悟龍に叫んで言っている。

悟龍

「ベジータめ……！くっ！しょうがないだよ！！3倍界王拳かめはめ波だよーっ！！」

とそんなベジータに悪態しながら、赤いオーラに包まれ、腰を深く落とし、両手を左脇下に持っていていき、掌を重ね合わせる様な、その構えに悟龍の両手のひらに集まり、青い光があたりを照らす。

悟龍

「かあ……、めえ……。」

悟龍

「はあ……、めえ……。」

ベジータ

「くらえええええ！ギャリック砲うっうーっ！！」

とベジータは、この気弾を溜め終わつたと、バツと前に手を出て、悟龍に放たれた。

悟龍

「波あああああ！？」

と悟龍もこの気弾を溜め終わつたと、バツと手を出て、ベジータに放たれた。

悟龍の3倍界王拳かめはめ波とベジータのギャリック砲がぶつかり合いました。そのせいで凄まじい衝撃波がいていた。

ベジータは、驚愕に目を開いた。

ベジータ

「なっ何っ!? オ、オレのギャリック砲とそっくりだ…!!」

ベジータのギャリック砲は、悟龍のかめはめ波を押し始める。

悟龍

「くっ!ぎぎぎぎぎいいいい!!」
と頑張つて強く押し、歯をくいしばる。

ベジータ

「はははは!! 悟龍!! 俺様の勝ちだ!!」
と笑つて勝ち自信がありそう。

悟龍

「くっ!! しょうがないだ。よ…4倍…4倍界王拳だあああー
————!!」

片目を閉じ、カッと開いて凄い反射した。かめはめ波は、もっとも強い広くなりそう。

悟龍の強いかめはめ波は、ベジータのギャリック砲を押し返した。

ベジータ

「馬鹿な!! 俺様のギャリック砲を押し返された!!」

ベジータ

「くそおおおおお…!!」

ベジータは、悟龍の青いかめはめ波に迫られた。極光は奔流となり、

ベジータを飲み込んでいった。

煙が晴れると、ベジータは、消えた。

悟龍

「はあはあ……や……やった……」

と気を使いすぎるせいで疲れて歓喜で勝つことが感じる。

悟龍 side out

ストームウィッチーズ side

ストームウィッチーズ達のアジトは、蒼髪の青年と黒髪の化け物の謎の大きな気弾の撃ち合いが激突するせいで衝撃波が受けてしまった。

これまでの闘いを見た

わあああああー……

静まり返っていたギャラリィたちから大歓声が起こる。

半分の人数は、驚愕と唾然している人達と恐怖に抱けてる人達が居ている。

マルセイユ

「まさか……青年めが本当に黒髪な化け物に勝ちやがった。」
と驚愕と歓喜で言っている。

加東

「嘘だ……。青年が黒髪化け物を本当に倒していた……」

と唾然で言っている。

ライーサ・真美

「「ううう…」」

兵士

「あーライーサと真美が目覚めた!!」

アフリカのウィッチーズの仲間達と兵士達が兵士の掛け声に気付いてもっとも歓喜している。

マルセイユ

「真美、ライーサ。大丈夫だ?」

と心配と優しい声で質問して言う。

ライーサ

「ああ。ここはどこか?」

真美

「うん。」

ライーサは、私達にやられた化け物の男性らを思い出した。

ライーサ

「（ハッ）化け物の男性らは!!?」

マルセイユ

「大丈夫。蒼髪の青年が、化け物の男性らをやっつけた。」
と安全のようで言っている。

ライーサと真美は、アフリカのアジトの人たちと同じように驚いた。

ライーサ

「本当だか？」

加東

「ああ。水晶を見る。」

とそう言うとなら、ライーサと真美は、水晶を見ると蒼髪の青年が写される。

ライーサ・真美

「あつ…本当だ…」

ライーサ

「でも、蒼髪の青年がまだ立ち、空を睨んでいる。」

マルセイユ

「何？本当だ。おかしい。黒髪の化け物を倒したはずになら…ハッ！！」
とライーサの言葉に気付いて悟龍の行動に気付いている。

ストームウィッチーズは、マルセイユの大きな声に吃驚している。

加東

「（びくっ）マルセイユ。何大声している？」

マルセイユに質問している

マルセイユ

「まさか…」

と冷や汗をかいて咳いている。

ストームウィッチーズside out

ベジータside

悟龍のかめはめ波で消えたはずに強化する気のおかげで少なくて押された上空までの途中にかわしている。

ボロボロの戦闘服のベジータは、空で立っている。

ベジータ

「はあはあ。くそつたね。」

と悪態をしながら、悟龍を思い浮かぶ。

ベジータは、ニヤツとした。

ベジータ

「最後の切り札だ。ここからサイヤ人の本領だ。満月があつたはずにどこだか？」

大猿を思い浮かびながら、満月を探して行く。

ベジータ

「くそ！！満月がない！！そうか！！悟龍は、サイヤ人の本領の事を分かって満月を破壊していた！！」

ベジータ

「くくく。それを使っている。」

悟龍の所へ戻って行く。

ベジータside out

悟龍 side

悟龍

（おかしいな？ベジータの気があるはずに……）
と尻尾を腰に構えないで振りながら、可笑しなことを思えます。

その時、ベジータが戻って来て、ゆっくりと空から降り、地面へと着地する。

ベジータ

「くくく。あなたは、満月を破壊していた。」

悟龍

「は？何を言っている？」

ベジータ

「くくくつ。痛恨のミスがある。これを使っている」

ベジータの掲げた掌から一つのエネルギーの塊が現れる。

悟龍

「これは!?!」

と塊を見て驚愕している。

ベジータ

「ふふふ。残念だぜ。フンッ!!」

笑って、白く輝く光の玉を、空に向けて放ち。

悟龍

「おいおい。俺達は、満月と似ている塊で大猿になる気でする!!」
と冷や汗で叫んだ。

ベジータ

「弾けて、混ざれっ！」

ベジータの手を握り締めた瞬間、光は爆散し、周囲を白に染め上げた。

悟龍

「くっ！しょうがない！！サイヤ大猿モード封印開始！！」
と目を閉じた。

ベジータの体に変化が現れた。

体は巨大化し、全身は茶色い体毛に覆われ。

顔は変形し、人の形ではなくなり。

その目は紅く、血の色に染まり。

ベジータは、大猿ベジータになってしまった。

悟龍の結末、どうなる！！

第五話 ベジータと悟龍との超決戦!? かめはめ波超激突!!! (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

次回予告

鷹宏

「オッス。俺、鷹宏」

大猿ベジータ

「ふはは、お前は、俺様に勝ち様はない!!!」

鷹宏

「俺は、かめはめ波でも界王拳でも駄目!!!」

鷹宏

「だが、まだ隠された力がまだ残された!!!」

大猿ベジータ

「なんだ!!!この技は!!!」

第六話 ここからはサイヤ人の本領の始まり!!! 鷹宏の謎の新たな技!!!

第六話 ここからはサイヤ人の本領の始まり！！ 悟龍の謎の新たな技！！

ベジータは、謎の光を空に向けて投げた。

ベジータ

「弾けて、混ざれっ！」

ベジータの手を握り締めた瞬間、光は爆散し、周囲を白に染め上げた。

悟龍

「くっ！しょうがない！！サイヤ大猿モード封印開始！！」
と目を閉じて、体を何かに包まれる。

ストームウィッチーズside

加東達は、ベジータが生きた事を恐怖と驚愕にしていた。

マルセイユ

「やっぱり！青年は、化け物の生存を感じて彼を待っていた！！」

加東

「でも！もう方法がない！！」

マルセイユ

「馬鹿野郎！！青年は、化け物を倒すために諦めない！！」

加東

「だから、この男を見ろ！！」

マルセイユ

「むっ？なっ！！！！？」

加東が指された黒髪の男性の体に変化が現れた。

体は巨大化し、全身は茶色い体毛に覆われ。

顔は変形し、人の形ではなくなり。

その目は紅く、血の色に染まり。

マルセイユ達は、化け物が大猿になった事を愕然の表情で絶句して恐怖になった

ライーサ

「・・・大きな猿みたい・・・」

真美

「・・・」

と恐怖で震えながら啞然で黙っている。

加東

「何これ…」

加東は、恐怖の表情に小さな声で言っている。マルセイユだけは、蒼髪の青年を見ていた

マルセイユ

「蒼髪の青年……勝ってくれ……」
と祈って呟きしている

ストームウィッチーズ side out

悟龍 side

悟龍

「サイヤ大猿モード封印完了!!」
とカツと目を開いて、大猿封印のおかげで変身する事が出来なかった。ブルーツ波を受ける事も。

悟龍

「くそっ!!」
悪態しながら、ベジータの方を見て、ベジータの体に変化がもう現れた。

体は巨大化し、全身は茶色い体毛に覆われ。

顔は変形し、人の形ではなくなり。

その目は紅く、血の色に染まり。

大猿ベジータ

「ふはははは!!どうだ!!悟龍!!これで終わりだ!!てめえは勝

「ち目はない!!」

悟龍

「ちっ！ベジータめ！でも、俺の尻尾があるが、大猿モード封印のお陰で大猿に変身させることが出来なかった!!」
と舌打ちしながら、演劇みたいな余裕のようであった。

大猿ベジータ

「そうか……でも残念だ……いい事を教えてやるのか？
大猿になったサイヤ人は戦闘力が人間の時の10倍にもなるのだ！
！」

悟龍

「……………」
と大猿ベジータを黙って見て、聞き流れている。

大猿ベジータ

「終わりだあッ!!」
と俺の所へ跳んで踏んでいます。

悟龍

「くそっ!!」
既に3倍界王拳に包まれながら避けている。

大猿ベジータは、俺が着地した所を潰れる。ズウウウ……………
ン!!

悟龍

「だりゃああああ!!」
大猿ベジータを強烈に殴っているが、大猿ベジータの方をチラッと

見ている。

悟龍

「なっ!!」

と見れば、大猿ベジータは、平気で立っている。

大猿ベジータ

「蚊みたいな攻撃は効かん!!」

と大声で言いながら、悟龍を叩き込んでいる。

悟龍

「くっ!!」

と直感で早く後ずさりするように避けて、腰構えにしている。

悟龍

「かあゝめえゝはあゝめえゝ」

大猿ベジータ

「・・・」

とニヒルな笑みで悟龍を眺めて、立ち止まる。

悟龍

「波ツツ!!」

と蒼い波に放れて、大猿ベジータを呑み込んでいる。周りの岩場を吹っ飛んで、煙を舞い上がりいた。

悟龍

「くっ!!・・・はあ・・・はあ・・・」

と界王拳を使いきる所為で体の悲鳴や疲労感が感じて、大猿ベジータを眺めている。

悟龍

「・・・なっ!!」

と息を呑んでいる。

煙が晴れると、大猿ベジータが平気で立ち続ける。

大猿ベジータ

「もうお前の攻撃はない？こちらから行くぞ。」

悟龍

「くそ!!」

と冷や汗でかいて界王拳で逃げていた。

大猿ベジータ

「ふん。」

大猿ベジータは、一足に悟龍の所へ跳んで追いついて、強烈な力で悟龍を殴っている。

悟龍

「ぐわあ!!」

地面に激突して凹んで、頭から血が出た。

大猿ベジータ

「どうした？さっきの勢いは。」

と挑発みたいに言っています。

悟龍

「くっ!!」

とまた界王拳に包まれながら逃げる。

大猿ベジータ

「攻撃されたり逃げたりは無駄だ!!」
また一足に悟龍の所へ跳んで追いついて、横のハンマーみたいな強烈な力で殴っている。

悟龍

「ぐがあ!!」

横で吹っ飛ばれて、岩場と強烈に激突して、倒せていた。

悟龍

「く……くそ……」ガクツ
と界王拳モードを解けて気絶していた。

大猿ベジータ

「はーっはっは!!どうした!!俺様に勝つ事も出来んか!!」

悟龍 side out

ストームウィッチーズ side

大猿の化け物

『はーっはっは!!どうした!!俺様に勝つ事も出来んか!!』
とそう聞くとこのアジトの兵達とウィッチ達は、蒼髪の青年の大きな水晶で今までの闘いの事と大猿の化け物が悟龍を苦しんだ事を見て、恐怖で顔を青に染めていた。

マルセイユ

「ば……化け物……!!」

圭子

「な、何だ……こんな化け物は……」
と恐怖で小さく言っています。

ライーサ

「蒼髪の兄さんが……危ない……」

真美

「……そんな……希望が……消え失せてしまった……」

マルセイユ

「くそっ！私達がもっとも力になりたい……蒼髪の青年……」

とそれぞれの人々は絶望感や無力感を感じて悲しく後悔して言い、
蒼髪の青年を寂しく眺めている。

隊士

「おい！蒼髪の兄さんが、ボロボロのままに立ち上がった!!」

マルセイユ達

「……え!!」「……」

マルセイユ

「蒼髪の青年!!」
と歓喜と寂しげに蒼髪の青年を叫んでいる。その時、

蒼髪の青年

『フフフフフ、フハハハハハハハ！！』
と狂笑いしている。

マルセイユと加東達は、蒼髪の青年が豹変する事を戸惑いしていた。

蒼髪の青年

『この言葉を待っていた。』
とニタリと口端がつり上がっていて言っている。

大猿の化け物

『何を言っている？おまえは、もう俺様に勝てない！！くははははは！！』

蒼髪の青年

『それがどうした？』

大猿の化け物が笑う事を止めて、顰めた。

蒼髪の青年

『今までは、俺の本当の力を使ったが、まだ隠された力がたくさんある。』

ストームウィッチーズのみんなは、蒼髪の青年がとんでもない言動を聞いて、驚けていた。

蒼髪の青年

『（ニヤリ）フフフ：右手に闇の魔法：左手に界王拳の気…』
とそう言うと、右手に黒い霧のようなオーラに包まれ、左手に赤い気のようなオーラに包まれた。

蒼髪の青年

『闇赤感卦法だ!!』

闇と界王拳が混ざると煙が凄く舞い上がって、煙が晴れると悟龍は、蒼髪の青年の目はワイルドのように鋭くなった。瞳の色は赤くなって、瞳の周りの色が、黒色になって身体から黒い霧のようなものが湧き出ている黒いオーラと赤い気のような物が湧き出ている赤いオーラが混ざるみたいなオーラに包まれた。

加東

「みんな、今のを聴けた!!蒼髪の青年が魔法と言っていた!!」
ウィッチ達も縦のように頷いている。

加東

「それに・・・なぜ蒼髪の青年が魔法を使う事が出来ているが、さっきの魔法は、私たちの魔法と違う・・・彼は、何者です?」

マルセイユ

「・・・綺麗だ・・・」

体から赤黒い霧のようなオーラに包まれたワイルドな蒼髪の青年を見惚れた。

また驚愕する事がある。

蒼髪の青年が魔法を使わないで、勝手に大猿の化け物にやられた傷を治せていた。

ライーサ

「な・・・嘘!!蒼髪の兄さんが、魔法を使わないが、勝手に大猿の化け物にやられた傷を治せていた!!我々らが勝手に治せる事が

出来るわけ無い!!」

真美

「……………本当に何者ですか?……………」

マルセイユ

「私も珍しい。初めて魔法を使う青年が。それで、彼に質問したい事は、その鬪いの後だ。」
水晶を向かい直す。

マルセイユ

「勝ってくれ……………頑張れ……………蒼髪の青年……………」
と手を握る

ストームウィッチーズ side out

悟龍 side

大猿ベジータ

「はーっはっは!!どうした!!俺様に勝つ事も出来んか!!」

その時、気絶にする悟龍は、ピクリとわずかに体を動いて、不敵な笑みを見せた。

悟龍

「フフフフフ、フハハハハハハ!!」
と狂笑いしている。

大猿ベジータ

「何が可笑的い!!」

と俺が豹変するように笑う事を戸惑いと怒気で叫んだ。

悟龍

「この言葉を待っていた。」

ニタリと口端がつり上がっていて言っている。

大猿ベジータ

「何を言っている？おまえは、もう俺様に勝てない！！くはははははは！！」

悟龍

「それがどうした？」

と狂おしくにニタリとまだ笑ってフラフラと立ち上がって舞空術で空を上がって、言っている。

大猿ベジータが笑う事を止めて、顰めた。

悟龍

「今までは、俺の本当の力を使ったが、まだ隠された力がたくさんある。」

大猿ベジータ

「なんだと？」

と戸惑いで、驚愕していた。

悟龍

「（ニヤリ）フッフ：右手に闇の魔法：左手に界王拳の気：」
とそう言つと、右手に闇に包まれ、左手に界王拳に包まれた。

悟龍

「闇赤感卦法だ!!」
闇と界王拳が混ざると煙が凄く舞い上がって、煙が晴れると悟龍は、悟龍の目はワイルドのように鋭くなった。瞳の色は、赤くなって、身体から黒い霧のようなものが湧き出ている闇と赤い気のような物が湧き出ている界王拳が混ざるみたいなおーラに包まれた。

大猿ベジータ

「ぬ!あれは...!!」
と驚愕した。

悟龍

「.....」

と黙って、勝手に怪我する頭と体を治せている。

大猿ベジータ

「なっ!!勝手に俺様にやられた怪我が治せている!!」
とまとも驚愕している。

自分の体を治せる所を見て、目の前の敵を向かい直せてニヤリと笑ったら、闇赤感卦法というパワーアップのおかげですぐに消える。

大猿ベジータ

「なっ!!」

と驚けながら警告せけば、キョロキョロと俺を探す。気も探す。

大猿ベジータ

「そこだ!!」
気で赤黒い霧のようなものに包まれた俺を見つけて振り返すが、もう遅い。

悟龍

「遅い……」

と冷酷で呟く。

悟龍は、大猿ベジータの前に現れて、この腹部を強烈に殴っている。
ドガア！！

大猿ベジータ

「ぐわあ！！（速いなあ……！！）」
と血を吐いていた。

また消えていた。

大猿ベジータ

「くそ！！また消えた！！」
と悪態しながらキョロキョロと探す。気も探す。

悟龍

「……」

大猿ベジータの前に速く現れて、大猿ベジータの顔を強烈に蹴っている。ドガアツ！！！！

大猿ベジータ

「ぐわあ！！」

悟龍

「まだまだ！」

とまた大猿ベジータの腹部を下から殴っていた。

悟龍

「オララララララララララ!!」
とまだ強烈にラッシュし続ける。ドガガガガガッ!!

大猿ベジータ

「ぐがあ!!ぐわあ!!」

悟龍

「これで最後だあーあ!!」

大猿ベジータを超強烈なパンチで殴っている。ドガアンツ

大猿ベジータ

「ぐわあああーあ!!」

と俺に超強烈なパンチで殴られて、岩場を吹っ飛ばれて最後まで次々と激突していた。

赤黒い霧のようなものに包まれたままに大猿ベジータの近くの岩場に着地している。

悟龍

「……………」

大猿ベジータは、顔が歪んだままに立ち上がった。

大猿ベジータ

「こ、こんな…俺様が…!?!」

大猿ベジータが愚痴を言う瞬間に、俺は、すぐに消えて、また大猿ベジータの前に現れて、強烈に蹴っている。

大猿ベジータ

「ぐわああ!!」

大猿ベジータは、また吹っ飛ばれて、岩場と激突されていた。

大猿ベジータ

「こ、こんな馬鹿なこと…ありえん…絶対に!!」

大猿ベジータがありえない事を言う瞬間に俺は、赤黒い霧のようなものに包まれたままに大猿ベジータの近くの岩場に着地して腕を組んでいる。

大猿ベジータ

「あ、ありえん…そうか！絶対にありえん!!」

悟龍

「……ありえない事はありません。今の俺は、闇赤感卦法モードになった時、界王拳3倍より更に何倍も速くなったり強くなったりいる。」

大猿ベジータ

「くそおおおおおお!!」

後ろで飛躍して、近くの岩場に着地して腰構えを構えている。

大猿ベジータ

「避けてみる!!俺様の最高の技を!!」

大猿ベジータ

「はーっはっは!!お前は、ひびくて、腰ぬけな少年!!」
悟龍を挑発みに言う。

悟龍

「……………」
冷静のような無言で大猿ベジータを眺めて、スツと組んでる腕を解いて、スツと体の前に手刀を出させている。

大猿ベジータ

「くらええええ!! スーパーギャリック砲うう!!」

悟龍

「俺にこんな技は効かない!!」
と叫ぶと、手刀でスーパーギャリック砲を空の方へ向けて弾けている。

岩場に着弾すると、爆発して、煙が舞い上がり、風で吹っ飛ばれている。

大猿ベジータ

「バ……馬鹿な……」

と俺の力に恐怖しながら、後ずさりしている瞬間に、俺は、大猿ベジータの後ろにとらえて、現れる。

悟龍

「尻尾を斬り付ける!!」
とそう叫ぶと刃のような気を速く放れた。

大猿ベジータ

「何い!?!」

尻尾が避けるが、もう遅い。

大猿ベジータ

「ぐわあああ!!」

大猿ベジータの尻尾をもう斬り付ける。

大猿ベジータ

「うおおおおおー！！！！お!!」

大猿ベジータから変身を解かれる。

ベジータは、人になつてる。

ベジータ

「はあああ、己ー！！！！」
とそう叫ぶと俺を睨んでいる。

悟龍 side out

ストームウィッチーズ side

大猿が解けている黒髪の男性にもどっている。

ウィッチーズ達は、驚愕と歓喜を感じている。

加東

「嘘だ：お前は、化け物にやられたが、敵を倒すために何度も立ち上がって諦めない。」

マルセイユ

「蒼髪の青年め……彼は、誰でも強い奴に敗れる事は、不可能だ。」

ライーサ

「凄いー！！蒼髪の兄さん！！」
と目を輝いて言う。

真美

「うんうん！！」

ライーサの言葉に同情して頷く。

加東

「はあく、誰よりも無茶滅茶な闘いが凄い。」
痛いように感じた頭を抱けて、呆れと凄さで言っている。

加東はチラツと真剣なマルセイユを見て、苦笑して、水晶みtainな大きなボールに向き直し眺めている。

黒髪の男性

『何！！馬鹿な……お前がああ噂のあれに变身できるの！？』

ライーサ

「???あの、あの噂って何だか？」

真美

「えっ、ううん。私も知らない。」

加東

「あなた達は、あの噂を知っているかもしれない。」

マルセイユ

「っ！！最後の決着が出た！！」

映像で重い雰囲気で蒼髪な青年と黒髪な男性が睨み合う

し～～～ん

ウィッチーズ達が、誰かがゴクリと喉が鳴いた

マルセイユ

「ツツ！！始まった！！」

蒼髪の青年と黒髪の男性が、行動で動いていた。

蒼髪の青年

『大契約により我に従え雷神！！』
と詠唱している。

マルセイユ

「……………！！魔法の詠唱じゃない！！」
と私を含めたウィッチーズが驚いていた

黒髪の男性

『くらええーーーーえ！！ファイナル……………！！バーストキャノン
！！！！』

両手から紫色の強烈な光線を速く放れた

蒼髪の青年

『剛獄の豪雷!!』

詠唱完了しながら、手から強烈な赤い豪雷を速く放れた。

強烈な赤い豪雷と紫色の強烈な光線が激突して、このお陰に強く光ると、映像が砂になってしまった。

マルセイユ

「くっ!!映像が見えない!!」
悪態した。

ストームウィッチーズside out

悟龍side

悟龍

「ふん。俺は、まだ隠された力が残る。それに今の俺は、今のベジータより強い。」
と鼻が笑って、冷酷で言っている。

ベジータ

「なぜ!!なぜお前は、まだ隠された力がある!!??」

悟龍

「ふん、俺の目的は、強い敵らと闘いたいことです。もし、お前より強い奴が沢山居る時、俺よりも強い奴と闘って勝てなくて、殺されるかもしれないが、俺は、強い敵を倒すために地獄な特訓をしてお前がよく知る噂のあれに変身できるかもしれない。」
と鼻が笑って、冷酷で言っている。

ベジータ

「何！！馬鹿な・・・お前があの噂のあれに変身できるの!?!」

悟龍

「ああ。俺は、敵に苦しめる人を助けるだけだが、正義の味方や良き英雄にならなくてもいいだ。」
と自嘲的で言っている。

悟龍

「それに正義の本当な意味が分からない奴や甘い理想をもっている奴や邪悪な奴が誰もよりずっと嫌い。」
と冷酷で口端をつり上げていた。

ベジータ

「なんだと。ふははははは!!」
ベジータは、悟龍の言葉にぼかん、とした表情をして、面白そうに笑っています。

孫悟龍

「む？なにが可笑的い？」

ベジータ

「くくく。お前は、面白いだ。お前みたいな奴は、初めてだ。」
とベジータは口の端をつり上げていた。

ベジータ

「まさか・・・お前は、俺様と同じ悪のような笑みをして、本当に我々サイヤ人の特性が残っていた。」

悟龍

「そつだ。それに闇が持っていたお陰で悪言と悪笑になってしまいかもしれない。はあゝ。」
と苦笑で自分の状態に溜め息混じりに呆れて言っている。

悟龍

「でも、決着する前に質問しているか？ベジータ達は、なぜここに来る？まさかおまえの親と親の星に誰がやられた仇を討っているか？」
とそう言う瞬間に闇赤感卦法モードを自分の意志で解けている。普通に戻っている。

ベジータ

「・・・ッ!!」

と凶星のように動揺している。

悟龍

「お前が憎んでいる事は、分かっている。本当に誰がお前の親を殺せているか？親の星に絶滅している。」

ベジータ

「くっ・・・分かった。俺様の親父は、宇宙の帝王様にやられた・・・それに、俺様達は、宇宙の帝王様の部下になっていたが、他の星達を侵略して、異星人達を撲滅していた。それにドラゴンボールの噂を聞いて、俺様達のスカウターが地球の中にドラゴンボールがある事を感じて、俺様は、不老不死になる為に地球へ行っている。」

悟龍

「なるほど。よく理解しています。ベジータは、ドラゴンボールで不老不死になる事を叶う後、どうなるか？」
と腕を組みながら聞き流せている。

ベジータ

「ああ！！不老不死のおかげで、帝王ヤローやお前をぶち込んでいる！！！」

悟龍

「ふ〜ん。で、不老不死のお前は、誰でも強い奴にやられ続けるか？」

ベジータ

「ウツ！！！」

悟龍

「当たり前。不老不死になっても敵にやられ続けて瀕死状態を治せて強くなつて、殺すが、まだお前を超える奴がまだいるかもしれない。」

ベジータ

「グググッ。」

悟龍

「まあ、俺も他人を助ける事ができない自分が憎い。強くなる事を欲しい。…だが、憎悪で強くなつたら、敵に挑戦するなら、冷静が欠いて周りを見なくて自殺行為するのが間違いない。」

ベジータ

「……くっ。」

悟龍

「話はこちらまでだ。さあ、最後の決着をしている。ベジータ王子」
話を逸れて、決着でやる。

ベジータ

「……！！へっ！俺様も最後の最高の技を見ている！！」
とベジータは、俺が呼ぶ声を驚けて、ニヒルな笑みで叫ぶ。

悟龍

「ふっ、俺も最高の魔法を披露する！！」
とニヒルな笑み返す。

悟龍とベジータは、飛行して、立って待つ。

し~~~~~し~~~~~し~~~~~ん

岩場の塊が地面に落ちる音がする時、二人が行動で始める。

ベジータ

「はあああああー~~~~~あ！！」
気を凄く溜まながらバツと構えている。

悟龍

「大契約により我に従え雷神！！」
速く詠唱していた。

ベジータは、両手を広げていた。

ベジータ

「うおおおおおー！ー！ー！ー！お！！！」

悟龍

「来れ邪悪な巨神を滅ぼす極する立つ雷電！！」

ベジータは、悟龍の所に両手が狙いやがる。

悟龍

「千重億重と重なりて走れよ雷の稲妻！！」
と詠唱完了に近くなっている

ベジータ

「くらええー！ー！え！ー！ファイナル・・・！！バーストキャノン
！！！！」

両手から紫色の強烈な光線を速く放れた

悟龍

「『剛極の豪雷』！！！！」

詠唱完了しながら、右手から強烈な赤い豪雷を速く放れた。

強烈な赤い豪雷と紫色の強烈な光線が激突して、このお陰に衝撃波
で岩場を強く吹っ飛んだ。

ベジータ

「ぐっ！ぎぎぎぎぎぎぎ（さすが！！これが本当に異世界のサイヤ
人の力・・・！！）」

悟龍

「くっ！ぐぐぐぐぐぐぐ（さすがお前が俺の想像以上の人・・・それがエリートなサイヤ王子戦士の力・・・！！）」

悟龍の強烈な赤い豪雷がベジータの紫色の強烈な光線を押し始まる。

ベジータ

「ぐっ！！はあああああああ！！」

気力で押し返せる事が頑張るみたいである。

悟龍

「……………ベジータよ……………お前は、やはりすごい奴だ。最後まで俺と互角以上に闘う事は、嬉しいです。やっぱり不屈で誇り高きエリートなサイヤ王子が、間違いなくサイヤ人ナンバー1だ！お前が…オリジナルのお前が、またいつか会っているかもしれない。俺も厳しく修行でもっとも強くなっている。またな……………はあッ！！」
とそう言つと、俺の強烈な赤い豪雷が、広くなって、ベジータの紫色の強烈な光線を呑みます。

ベジータ

「ぐっ！！ぐわあああああああ！！」

ベジータを剛獄の豪雷に喰らわせて、飲み込んでいって、爆発していた。ドッカーーーーン！！

ベジータが血みそれな体でポロポロになって地面に落としていた。

悟龍

「はあはあ……………ベジータ…俺の勝ちだ……………とうとうやったな……………」

と闘いすぎるせいで疲労感を感じて、まだ立ってベジータの所へゆつくり歩こう。

ベジータ

「くっ・・・ああ・・・俺様の敗北だ・・・」

ベジータは、痛い所を感じてゆつくり目を開いて言っている。

悟龍

「・・・あなた達サイヤ人は、宇宙の帝王フリーザにもう苦しめた事を分かっている……………お、お前達サイヤ人の仇でお前の代わりに俺の手でフリーザを殺してあげる……………」
と拳を作ってニタリな笑いで言っている。

ベジータ

「・・・！！おめえは、宇宙の帝王を知っているのか？」

ベジータは、悟龍がフリーザの事を知っているのを驚いた。

悟龍

「お前だけは、特別に俺の事を教えてあげる。俺は、異世界から本当にドラゴンボールという世界でお前たちサイヤ人と彼らの敵を見て知っている。」

ベジータは、悟龍が事実を言う事を驚けた。

ベジータ

「……………！！クッ・・・頼む・・・お、俺様……………そ、そして、俺達サイヤ人の代わりに・・・ふ、フリーザを殺せてやれ……………」
目から一つの涙を流せながら願いを言っている。

悟龍が最後に見た光景は、ベジータの最後の笑みが浮かびて、死み

たいに目を閉じる。ベジータは、光の粉みたくで消滅していた。

悟龍

「ふん。スカウターベジータめ。俺を認めるみたいだに笑顔が浮かんだ。俺も今のベジータに認められた事を嬉しかったが、またオリジナルのベジータといつか闘いたい。」

と鼻で笑って、上空に向いて眺めて、オリジナルのベジータを思い浮かんだ。

悟龍

「だが、まだまだ俺たちの闘いは終わらない！！悪の根拠がまだいっぱい残っていた！！」

とまだ強敵と闘う事が残って楽しんで、天へ宣言を叫んでいる。

その後に、悟龍は、マルセイユ達の所へ行くために手を額に当てていると、すぐに消えていた。

悟龍は、最初の激闘が終わった。悟龍の初勝利です。それにまだ悟龍の宣言どおり、悪の根拠がまだ始まっている。

次の敵は誰だか？

第六話 ここからはサイヤ人の本領の始まり！！

悟龍の謎の新たな技！！

読んでいただきありがとうございました。

感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

もし、酷い所がある時、教えてみてください。

次回予告

鷹宏

「オッス。俺、鷹宏」

鷹宏

「ベジータに初勝利した！」

鷹宏

「だが、アフリカウィッチーズと邂逅する。」

マルセイユ

「蒼髪の青年、私達を助けてくれてありがとう。」

その時、銀のカーテンが現れた化け物が出た。

ライーサ

「このバケモンはなんだ！！」

鷹宏

「まさか、久し振りに使い魔と共にやつつける！！」

マルセイユ

「なっ！鷹宏の体から銀みたいな狼が出現している！！」

「??？」

「久し振り、兄さん！！久し振りに僕と共に仮面ライダーでやっつける！！」

鷹宏・??？」

「「変身ッ！！」」

第7話　～鷹宏から使い魔が出た！？　仮面ライダーの戦いが始まる！！～

第7話

悟龍から使い魔が出た!?

仮面ライダーの戦いが始まる!! (前)

2ヶ月ぶり投稿します。

第7話 悟龍から使い魔が出た！？ 仮面ライダーの戦いが始まる！！

アフリカウィッチーズsize

夕方にアフリカウィッチーズとそのアジトの人達が、水晶の映像が壊せてしまった。謎の蒼髪の青年が来るのを待ってる。

マルセイユ

「ライーサ、蒼髪の青年がくれた水晶の映像が直せているか？」

ライーサ

「いいえ、わがアフリカの技術者が、あれを直せてる事が出来ない。」

と頭を振りながら、残念なことを言っています。

マルセイユ

「そうか・・・」

ライーサの話を書くマルセイユは、空を顔で見上げている。

マルセイユ

「蒼髪の青年の名前を聞いて、礼を言いたいつもりです。」
と

その時、誰かが声を掛けてくる。

???

「そう？俺に礼は無用だ。」

アフリカウィッチーズら

「コッコッコッコッコッ！」「」「」「」「」「」

声をかける所を振りながら、フードを被る青年を見る。

マルセイユ

「こいつは、何者だ。」

目の前の人を警戒して睨んで言う。

???

「む？あつ、なるほど。フードを被るだけで顔を見知らぬ。まあ、しょうがない。フードを取るか。」
とそう言いながら、フードを取る。

マルセイユ

「こいつは・・・！」
と目で見開いた

アフリカウィッチーズの女子達は、フードを取る謎の青髪青年を見惚れる。

サラサラと肩の所まで長い蒼髪で、凜とした鋭い黒目で、イケメンな青年だ。

蒼髪の青年

「こいつらは、噂のアフリカの星ストームウィッチーズですか？」
と問います。

加東

「はっ、はい。」

蒼髪の青年

「やはり、噂のストームウィッチーズと会う事が光栄だ。」

マルセイユ

「あんたは、蒼髪の青年!!!」

蒼髪の青年

「む？蒼髪の青年って変な名前だ。恩人に対してこんな事を言う。」
目で細かそうにマルセイユを睨んで言う。

マルセイユ

「あ。ごめん。」

と申し訳無さに言う。

蒼髪の青年

「やれやれ。まあ、改めて、俺の名前をてめえらに教えてやる。俺
は…孫悟龍だ。悟龍と呼ばれる方が良い。」

と肩をすくめて、名乗りをする。

マルセイユ

「孫悟龍？っておまえは、扶桑の人間か？」
と孫悟龍はマルセイユの問いに少し考え込む。

蒼髪の青年 孫悟龍

「うん。半分は、正解で、半分は、間違いです。」

マルセイユ

「えっ？どこが間違いか？」

孫悟龍

「ええ。俺は、曰：いや扶桑の人間とまったく同じだが、おまえはさっきの闘いで俺の言葉を聞く事を覚える？」

加東

「はっ！」

とさっきのように孫悟龍の言葉を想像していた。

孫悟龍

『（ニヤリ）フッフ…右手に闇の魔法…左手に界王拳の気…』
と魔法という言葉を言う。

孫悟龍

「あの嬢さんの想像通り、お前たちみたいなウィッチーズは、魔法を持つ事があると、俺は魔法が使う事を可笑的か？」

加東を指しながら、魔法の事を問います。

加東

「はっ。いいえ、お前みたいな青年が魔法を使う事は、初めてだ。どうしてあなたは、魔法を持つか？」

と笑顔で言っています。

孫悟龍

「悪い、それは禁則事項だ。」

と目を閉じながら言う。

マルセイユ

「そうだ。おまえは、異世界と言っていたか？」

孫悟龍

「む。ああ。その通り。さっきの彼らは、俺だけが知っていたが、お前達の名前もわかっている。」
と冷静で受け流しながら言う。

マルセイユ

「なっ。本当か？」

と驚けと戸惑いで言っています。

マルセイユが言う瞬間に孫悟龍は、いたずらを思い浮かべて、内心でニヤリとした。

孫悟龍

「さっきの鷹娘が、ハンナ・ユステイーナ・マルセイユだ。」

マルセイユ

「鷹娘……!!」

とこめかみを押さえながら言う。

孫悟龍は、それをスルーして、からかいを止めなくて、言う。

孫悟龍

「力持ちの娘が稲垣真美。鳥娘が、ライーサ・ペットゲン。」

真美

「力持ち…（涙）」
とシヨックで悲しげに落ち込んで言う。

ライーサ

「鳥娘…（汗）」
と笑顔で引き攣る。

孫悟龍は、次々とウィッチーズの名前と変な呼び名を言う。

ウィッチーズが孫悟龍の変な呼び名を受けて怒りを溜める事を我慢する。

孫悟龍が、彼女達の怒りをスルーして止めない。

孫悟龍

「そして、変態指揮者は、加東圭子。」

加東

「変態…！！」
とさすがの加東も怒りを買う。

孫悟龍

「ふん！じ・じ・つだ。」

ウィッチーズは、プチンと切った。彼女達の下は魔法陣が凄く広い。

孫悟龍

「おお。お前達は良い魔力だが、俺に勝てない。」
と凄みらしいな魔力と殺気を湧き出すみたいに余裕の笑顔で言う。

ウィッチーズらは、孫悟龍の凄みらしいな魔力と殺気を受けて、
気に青顔になった。

孫悟龍

「まあ、さっきのは冗談だ。」
と魔力と殺気を収めながら、言う。

マルセイユ

「むっ？おまえは、本気かも冗談かも解らない。」

孫悟龍

「まあ、お前達の有名な噂&……………むっ？」
と頭を上げながら、ウィッチーズらの後ろで、空間が歪む事を気に
かけて顔が顰めた。

マルセイユ

「うん？何黙っている？」

と心配みたいな声で孫悟龍をかける

孫悟龍

「わりい！どけてくれ！」
と言いながら、ウィッチーズらの間をどけて後ろへ速く駆ける。

マルセイユ達が孫悟龍のそんな行動を啞然と見ている。

加東

「おい！」

孫悟龍は、加東の掛け声を見無視しながら、ウィッチーズの後ろの所
へ到着した。

孫悟龍

「目よ。鷹モード……!」

短い詠唱をしながら眼が鷹の目と同じようになった。

銀のカーテンが現れた。

孫悟龍

「なっ!! ウィッチーズ達とここの隊士達、早く逃げる!! 化け物が来る!!」

と慌ただしくに警告を言っている。

ウィッチーズと兵隊は、孫悟龍の言葉を聞けて、戸惑う。

孫悟龍

「くっ!!」

それを見て、焦りに目の前で睨んで一気に駆けていく

加東

「えっ? えっ?」

加東が、孫悟龍のそんな言葉を理解できない。

マルセイユ

「まずい……」

と呟く。

マルセイユが使い魔の特徴を持って、孫悟龍が見た所で見ている

現れた銀のオーロラが、メモリのような化け物と獣のような化け物

が出た。

マルセイユ

「加東！ライーサ！孫の言う通りに仲間と隊士を連れて逃げ込む！！」

加東

「は？はい！分かった！」

と孫悟龍とマルセイユの行動が一致しているのを理解している。

ライーサ

「はい！」

加東とライーサは、仲間（真美を含む）と隊士を連れて逃げる。

マルセイユだけが残って、孫悟龍が向かう所を振り返って、見た。

マルセイユ

「孫悟龍：私の使い魔と同じ能力を使うなんて珍しい…」

本当に何者か……」

スチームウィッチーズsideout

孫悟龍side

孫悟龍

「(ザッ)……」

目の前の近くに止まる。

孫悟龍は、怪物の数を計ります。

孫悟龍

「ちっ、俺一人は、大丈夫が、俺が倒れる時間がかかるかもしれない。久し振りに二人にはできる。さあ、久し振りに出番だ！」

孫悟龍は、舌打ちながら、不安で言っ、久し振りに仲間……

銀牙!!」

銀狼を呼ぶ。

銀牙

「はい!!兄さん!」

孫悟龍が呼ぶ声を聞いて、孫悟龍の体の中から出ていた気の塊が銀狼（擬人化モード）に変えていた。

銀牙は、10歳の少年と同じぐらいで俺と近いぐらいの力を持つ狼人です。

孫悟龍

「目の前を見なさい。」

目の前の敵を指す。

銀牙

「ん?ああ...くすくす。化け物どもを食べ殺す。」

口の端をつり上がって冷笑と冷酷で言う。

孫悟龍は、そんな銀牙を見て、苦笑をもらしていた。

孫悟龍

「よし、これを使う。」

孫悟龍から銀牙にファイズドライバーとファイズフォンを渡す。

銀牙

「有難う。」

と笑顔で言う。

孫悟龍と銀牙が、アクセルドライバーとファイズドライバーを腰に構えている。

孫悟龍は、アクセルメモリを取り出した時、

孫悟龍

「よし！いくぞ！！銀牙」

スイッチを入れる。

『ACCEL!』

銀牙

「はい！やる！！」
無邪気に応じている。

『5,5,5,ENTER』

『Standing by』

ファイズフォンが開いて5を3回にENTERで押すと、すぐに閉じるが、天に向かう。

孫悟龍

「変……身！」

孫悟龍はアクセルドライバーにアクセルメモリを挿入してパワースロットルを捻る。

銀牙

「変身!!」

ファイズドライバーのバックル部にフォンを突き立て左側に倒す。

『ACCEL!!』

『Complete!!』

二つの音楽が鳴り響いた。

孫悟龍は、『仮面ライダーアクセル』、

銀牙は、『仮面ライダーファイズ』に変身した。

孫悟龍 アクセル

「……………振り切る!!」

銀牙 ファイズ

「……………」

と右手首を軽くスナップさせる。

アクセルとファイズは、目の前に銀の怪物

オルフェイク

達とメモリのような怪物 ドーパント達に挑みに駆けていく。

マルセイユside

マルセイユ

「……………嘘……………」

私は、驚愕していた。

悟龍と銀牙って言う悟龍さんの体から出た気の塊を持つ狼耳少年が、赤い仮面と銀仮面に変身した事を。

赤い仮面と銀仮面が、優勢で怪物を次々と倒れる事を。

マルセイユは、闘う彼らを見惚れるって感じが来た。

マルセイユ

「……凄いなあ。」

マルセイユ

「はっ！私は何している！！加東達の所へ行く！」

マルセイユは、我に返ると、加東達の所へ駆けていく

マルセイユSide out

アクセルとファイズSide

アクセル

「ぶっ！はっ！」

アクセルがエンジンブレードを縦と横に振り回ると、ドーパント共を斬り込んでいる。

ファイズ

「はっ！はっ！やあ！」

ファイズがパンチやキックを繰り返すが、オルフェイク共を殴ったり蹴ったりする。

アクセルは、エンジンブレードにエンジンメモリを挿入してグリッブを引いた。

『ENGINE!JET!』

アクセル

「はあっ！！！」

切っ先からエネルギー弾を猛スピードで発射し、ドーパント30体を命中した。

ドーパント

「くくくわあああああああ！！」「」「」「」
受けられて、爆発された。

アクセル

「まだまだ！！」

またもエンジンブレードのグリッブを引く。

『ELECTRIC!』

アクセル

「喰らえ!!」

電気エネルギーを刀身に纏ったエンジンブレードを地面に突き刺し、周囲にその電気エネルギーを放出する。

ドーパント

「くくくくぐがあっあああああ!!」「」「」「」

また爆発された。

近くにいたドーパントに直撃した。

ファイズもすでにミッションメモリをそれに挿入して引き抜く物
ファイズエッジを持って、フォトンブラッドの刀身が生成される。

ファイズは、「ENTER」を押した

『Exceed Charge』

その音声と共に、フォトンストリームを経由してフォトンブラッドが注入された。

ファイズ

「はあ!!」

ファイズエッジから放ったエネルギー波でオルフェイク共を拘束し

た。

ファイズ

「はあああああああああ！！！」

と勢いで拘束したオルフェイク共の所まで駆けていく。

ファイズが、拘束したオルフェイクどもを斬り込む。

オルフェイクを斬って倒されるとその場に赤い の文字が浮き出せながら、爆発して、砂のように溶けた。

オルフェイクがファイズの間を殴っている。

ファイズ

「うわあ！！！」

アクセル

「くっ！！！」

ファイズがオルフェイクの攻撃を受けて、アクセルがドーパントの攻撃を防ぎ、合流した。

ファイズがすぐに立ち上がる時、既に彼らの周りにオルフェイクとドーパントの群れが囲まれた。

アクセルとファイズは、囲まれた敵を睨んでいます。

アクセル

「ちい。雑魚の群れは、虫みたいにもっとも溜まる！！！」

舌打ちながら、悪態で言う。

ファイズ

「攻撃は、速さだけです！」

アクセル

「ああ！それしかない！！」

アクセルは信号機とストップウォッチを模した装飾のガイアメモリを取り出す。

アクセル

「全てを……振り切るぜ！！」

スイッチを入れて起動させる。

『TRIAL!』

メモリモードにし、アクセルドライバーからアクセルメモリを抜き、そのガイアメモリを挿入してパワースロットルを捻る。

『TRIAL!!!』

信号機の装飾のランプが赤色から黄色になった瞬間、アクセルの装甲の色が赤色から黄色になる。

そして、ランプが青色になると全身の装甲が弾け飛んで青色の装甲になった。

青色からオレンジ色の複眼となり、スマートな装甲となった。

アクセセルは、アクセセルトリアルモードにフォームチェンジする。

ファイズは、アクセセルメモリーをファイズのプラットフォームに挿入する。

『Complete』

アクセセルフォームにフォームチェンジする。

フルメタルラングが展開して肩の定位置に収まり、複眼は赤、フォトンストリームはシルバーストリームに変化する。

アクセセルが使用したガイアメモリは「挑戦の記憶」が内包された「トリアルメモリ」である。

装甲の必要最低限以外の部分の重量物を徹底排除し、大きく軽量化にしたことで運動性能の飛躍的向上と音速をも超える、超高速移動を実現している。

しかし、パンチやキックなどの一撃の攻撃力と装甲の防御力が低下するというデメリットがあり、アクセセルの切り札と同時に諸刃の剣でもあるメモリである。

Tアクセセル

「見せてやる……トリアルの……真の力を！」
と冷徹で言っています。

アクセセルトリアルはトリアルメモリをアクセセルドライバーから引き抜き、マキシマムモードに変形させる。

スイッチを入れるとストップウォッチがスタートした。

トリアルメモリを上投げるとアクセルトリアルはアクセルブレードを持ち、音速の速さで再びドーパント共の間合いに入り、音速の連続斬りを喰らわせる。

トリアルメモリの戦法の真骨頂は一度に連続攻撃をしてダメージを蓄積させる。

そして、アクセルトリアルのマキシマムドライブ、「マシンガンスパイク」は十秒間の最大加速を行い、超高速の連続斬りを「T」の字を描くように対象に叩き込むこと。

ドーパント共に斬りを打ち込むことに大きな「T」が描かれていく。上に投げたトリアルメモリが落ちてくるとアクセルトリアルは蹴りを停止し、振り向くと同時に右手でトリアルメモリをキャッチしてストップウォッチのスイッチを止める。

ストップウォッチには「9・7」と表示されていた。

『TRIAL! MAXIMUM DRIVE!!』

Tアクセル

「9・7秒、それがお前達の絶望までのタイムだ!」

打ち込んだ「T」の字が大きな光を放って複数の爆発が起きた。

ファイズのフォームチェンジ直後の状態は、待機形態であり、ファイズアクセルのスタータースイッチを押す

Aファイズ

「いくぞ・・・！」

『Start Up』

Aアクセルは、音声とともに消えた。

Aファイズは、消えたじゃなくて彼の周りは、遅かった。

オルフェイク共を高速で殴ったり蹴ったりする。

オルフェイク

「くわあああああ！！」「」「」「」

オルフェイク共が火花を散らしながら、苦情に叫ぶ

ファイズポインターを装備したら、ミッションメモリを挿入し、ファイズフォンの「ENTER」を再び押す

『Exceed Charge』

その音声と共に、フォトンストリームを経由してフォトンブラッドが注入された。

走ったからジャンプをしながら、ファイズポインターから円錐状の赤い光を放って一度に複数の敵をロックオンし、跳び蹴りを放つ。

オルフェイクを跳び蹴られるとその場に赤い の文字が浮き出て、爆発が起きた。

『…3…2…1…Time Out』

二つの音声が揃えると、アクセルとファイズが、変身解除した。

アクセル 孫悟龍

「ふうっ。やっぱりこここの世界もいた。カールスラントだけじゃない。あちこちの国もここもある。」
と肩をすくめて呟く

ファイズ 銀牙

「ええ。もし、さっきのように置くとこの世界が危ないかもしれない。」
その呟きに答えた。

孫悟龍は、銀河の答えに頷く。

孫悟龍

「ああ。その事だけじゃない。」

銀牙

「はい。ベジータだけじゃなくて、ドラゴンボールと地球征服が欲しい極悪人がいるかもしれない。」

孫悟龍

「そう。もし、黒聖杯までが現れて、黒いサーヴァントが出るかもしれないが、俺達二人かがりでは勝てないかもしれない。」

銀牙

「やっぱり僕達と同じ力の奴らの戦力が必要だ。」

孫悟龍

「その通りだが、ここのウィッチーズは、俺たちみたいなのと一緒に闘うのは必要ない。」

銀牙は、孫悟龍の言葉に頷いた。

孫悟龍

「まあ、この話は、終わりだ。ストームウィッチーズの所へ戻って行く。銀牙よ。御苦労だ。俺の中へ入って休み。」
と優しさで言って、銀牙の頭を撫でている。

銀牙

「はい！」

と笑顔でそう言う瞬間に銀河の体が光ると、魂の玉になったら、孫悟龍の体の中に入る。

孫悟龍は、舞空術を使って、ストームウィッチーズの所へ速くに戻っていく。

孫悟龍 Side Out

ストームウィッチーズ Side

私達は、マルセイユと孫悟龍さんが戻っているのを待っていた。

ライーサ

「あっ！マルセイユが来た！！」

加東

「は？あっ！本当！」

マルセイユが戻って、私達の所に降りる。

ライーサ

「孫悟龍って野郎は、どこに居る？」

マルセイユ

「む？まだ化け物共と闘って……」

孫悟龍

「もう化け物共を撃破していた。
マルセイユの後ろでスツと現れた。」

ストームウィッチーズ&隊士

「「「「「「「「「「「うわああーっっっ！……！！」「」「」

「とまた孫悟龍の掛け声と居る事に気付いて、吃驚してズザッと後ずさりした。」

加東

「早っ!!！」

孫悟龍

「いや〜、褒めるなあ〜。」

と照れた振りで頭を掻いている。

ライーサ

「褒めてない!!！」

と突っ込みで言っています。

孫悟龍

「冗談なことは、置く。俺に質問するのがいる?」

と真剣な顔に変えて、言った

マルセイユ

「っっ!!！」

と動揺のようだった

孫悟龍は、マルセイユの方を向いて睨む。

孫悟龍

「む?マルセイユは、まさか俺達が闘う化け物の事を知っている?」

加東

「なっ!!！」

私達は、孫悟龍の言葉を聞けて、マルセイユの方へ振り返って見る。

マルセイユは、苦虫を噛み潰したような顔をする。

マルセイユ

「ええ。悟龍さんの言うとおりだ。悟龍さん、あなたは、さっきと同じ化け物を知っているか？」

孫悟龍

「ふむ。あなたは、さっきの時に、俺は自分の事を呼ぶ？」

マルセイユ

「えっ……はっ！」

孫悟龍が名乗る事を想像していた

????

『そうだ！俺は、通りすがりの魔法なサイヤ戦士だ！！？』

マルセイユ

「魔法やサイヤってまさか……！！」

孫悟龍

「その通りだ。今だけは、特別に教えてあげる。俺は、ここの世界人じゃなくて、異世界から来た人です。」

ストームウィッチーズ

「「「「「なっ！！」「」「」

ストームウィッチーズは、孫悟龍の真実を驚愕していた。

孫悟龍は本当の異世界人か？

第7話

悟龍から使い魔が出た!?

仮面ライダーの戦いが始まる!!! (後

読んでいただきありがとうございます。
感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。
もし、酷い所がある時、教えてみてください。

次回予告

鷹宏 孫悟龍

「オッス、俺、孫悟龍」

マルセイユ

「珍しい…初めて異世界人と会うなんて…」

孫悟龍

「当たり前だ。俺は、こいつらより奴らと厳しいな闘いをする。」

孫悟龍

「サイヤ人と舞空術の説明をする。」

孫悟龍

「俺の別荘に闘の書があり、誰を召喚する。」

????

「我々ヴォルケンリッター、参上する。」

第8話

孫悟龍の真実と料理と召喚

第8話 孫悟龍の真実と料理と召喚

ストームウィッチーズは、孫悟龍の真実を聞いて驚愕していた。

マルセイユ

「……………異世界人がいる事があり得ない。」

孫悟龍

「……………その証拠は……………」

そう言う瞬間に、孫悟龍がフワツと浮いた。

加東

「！悟龍さんがストライカーを使わずに浮く!?!」

ライーサ

「これは……………」

と目が開いて真美の方を向いた。

真美

「ええ！長い髪の毛の化け物と同じだ!?!」

とライーサと同じように、頷く

加東

「え!?!悟龍さんだけじゃなくて、他人も飛行した!?!」

マルセイユ

「ええ。サイヤ人って言う化け物も何を使って飛行したか？悟龍さん」

孫悟龍

「これは、舞空術です。」

ここでストームウィッチーズが声を合わせて疑問を口にする。

ストームウィッチーズ

「くくくくくくぶくうじゅつ??」「」「」「」

孫悟龍

「舞空術って、全身の気をコントロールしながら放出することによって、空中を飛行する技です。ただし、修行をして、これを習得するのを長くかかるかもしれない。これは負担が少ない方が良い。」

孫悟龍

「それにお前達みたいな人は、三ヶ月〜一年かかる。俺みたいな人は、短そうにかかる事が出来る。」

マルセイユ

「凄い。ストライカーを使わずに飛行する事が…」

と少し感心できる感じで言う。

孫悟龍

「次にさっきのサイヤ人の事を言う。」
と言う

またも疑問を口にする。

ストームウィッチーズ

「「「「さいやじん・・・?」「」「」

孫悟龍

「この前に変なことを言う俺がきつと怒る。」
どす黒い笑顔で殺気を籠めて注意を言う。

マルセイユ

「分かった、分かった!!お前の殺気が怖い!!殺気を収まる!!
お願い!!」

孫悟龍の殺気を受けて、怖くて涙目をお願いをする。

ストームウィッチーズも涙目で頷く。

孫悟龍は、肩をすくめながら、殺気を収まる。

ストームウィッチーズは、それを安堵するようだ。

孫悟龍

「サイヤ人では、宇宙一強い戦闘民族です。その性格は、皆、凶暴で好戦的かつ残忍冷酷な性格である。生まれた時から凶暴な性格である。」

マルセイユと真美とライーサは、この戦いに覚えながら、青に染めて恐怖する。

マルセイユ

「しかし、あなたは、自分の事をサイヤ人と言った。あなたは、サイヤ人の性格と違っていますか？」

孫悟龍

「ええ。俺は、残酷な性格が少し残ったが、彼らと違って優しい性格にあると、ほぼ大丈夫だ。」

ストームウィッチーズ達を安心するようで、不敵な笑みで言った。

加東

「でも、サイヤ人は、大猿にどうやって変身したか？」

孫悟龍

「それは、サイヤ人の尻尾と満月のブルーツ波が条件であったから変身できた。」

ライーサ

「サイヤ人の尻尾？」

頭が傾げながら、疑問を口にする。

孫悟龍

「うん？俺の尻尾を見なさい。」

孫悟龍は、自分の尻尾を指せながら、言う。

ストームウィッチーズ

「……ん？」

ストームウィッチーズは、孫悟龍の尻尾を見る瞬間に孫悟龍の尻尾が動く。

ストームウィッチーズ

「……え？ええええ……！……！！……？……？」

「……」

と大きな声を叫びながら、ザーっその後ずざりする。

孫悟龍

「クスクス。残念だ。俺の使い魔の尻尾じゃなくて、本当に俺の尻尾が生かすが、封印魔法を使うお蔭で、大猿に変身する事が出来なかった。」

とストームウィッチーズのその行動を悪戯成功のようであいながら、真剣に安心ようで言っています。

ライーサ

「おい！！？あなたは、さ「ゴウ！！」……」

ライーサの猿という言葉を遮ぎながら、孫悟龍の見えない速いパンチで頬をかすめた。

ライーサの頬が血をつける。

孫悟龍

「あははは。ごめん。手が滑った。」

と黒笑顔で頭を掻けながら、謝る。

マルセイユは、ひきつっている

真美らがそんな孫悟龍を見て、ガクガクと恐怖して、涙目で体を抱けて震えた。

加東

「待つ。悟龍さん、別の名前をベジータってM字男性に教えたか？」
加東は、怪訝しながら、さっきの名の事を覚えながら質問する。

孫悟龍

「ん。ああ。それは、真名ですか？」

加東

「真名？」

孫悟龍

「ふむ。それは、俺だけの掟です。真名は、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることとは許されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺せている。」

孫悟龍は、自分が死ぬ前に恋姫のゲーム（PSP）をやることを思い浮かぶ。

加東

「それって大切な名前ですか？」
顎を手に当てている。

孫悟龍

「ええ。頭が速いあなたは、すぐに理解するから助ける。」
不敵な笑顔でこくりと頷きながら、言っている。

孫悟龍、本当に異世界人だった……

ストームウィッチーズSide out

孫悟龍 side

加東

「はいはい。もう夕方暮れ近い。」
手を優しに叩いている。

孫悟龍

「む？本当だ。」

加東の言葉に気付いて、空を向いて見て、もうすぐ夜になる。

加東

「悟龍さん、行く宛があるか？」

孫悟龍

「む、大丈夫だ。俺は、別荘をすでに作った。それで寝る事が出来る。」

そういつた瞬間に、赤い空間　　王の財王で別荘に入っている
水晶を取り出している。

む？加東とマルセイユとストームウィッチーズが驚愕している？

孫悟龍

「どうして吃驚している？」
意地悪な笑みを浮いて言っている。

マルセイユ

「どうして吃驚している？じゃない！！？悟龍の後ろに赤い空間が出る！！??？」

俺の後ろに指しながら、大きな声で言う。

孫悟龍

「？それは、英雄王ギルガメッシュの王の財王だ。」

マルセイユ

「ギルガメッシュ…！！！」

マルセイユが、ギルガメツシュの名を聞いて眼が開いた。

加東

「お前は、ギルガメツシュを知っているか？」

マルセイユ

「ええ。ギルガメツシュは、神の暴君であったため、フワワという怪物を殺した事とイシュタルへの侮辱に神の怒りに歪めている。エンキドすら死んだ事から自分も死すべき存在であることを悟り、死の恐怖に怯えるようになる。永遠の命を求める旅に出て、さまざまな冒険を繰り広げる。」

マルセイユの説明に俺が付け加える。

孫悟龍

「マルセイユの説明通りだが、その最後に神が起こした大洪水から箱舟を作って逃げる事で永遠の命を手に入れたウトナピシュティムに会った。ウトナピシュティムから不死の薬草のありかを聞きだし、手に入れるが、蛇に食べられてしまう。彼は、蛇が食べるのがシヨツクで失意のままウルクに戻った。」

俺とマルセイユの説明し終わった時に、ストームウィッチーズが啞然していた。

孫悟龍

「さあ、料理の時間だ。」

俺の料理宣言をする瞬間にスチームウィッチーズが我に返った。

加東

「まで。あなたは、料理することが出来るか？」

孫悟龍

「もちろん。俺は、肉料理と魚料理などが出る。」

加東

「でも、肉と魚がここにいない。と困ったこと言っています。」

孫悟龍

「なぐに。大丈夫だ。」

スチームウィッチーズ

「「「「えっ???」「」「」

スチームウィッチーズが俺の余裕でニヒルな笑みを見るようで、戸惑う。

孫悟龍

「そこで待ってて。」

俺は、優しいな声でスチームウィッチーズを待つ

俺は、別荘の中に入った。

調理場の中に肉と魚の食材を探しているから、袋にそれらを入れて、持っている。

孫悟龍

「よし。」

俺が、別荘の外へのワープに入って、出る。

ストームウィッチーズが、俺が出る事を驚愕してきた。

ストームウィッチーズ

「「「早っ！！？？」」」」

うん？ああ。別荘の説明を忘れた。それより先に料理をする方がいい。

孫悟龍

「ごめんごめん。別荘の説明を言い忘れた。それより料理する方が
良いと思います。」

加東

「悟龍さん、何が入れた袋をもっているか？」

孫悟龍

「？それは、肉と魚などがたくさん入った。」

スチームウィッチーズ

『はいiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!?????』

孫悟龍

「さあ、料理の時間だ。おい、真美。調理所を俺に案内してくれ？」

真美

「は、はい!……あの、私も一緒に料理するか？」

孫悟龍

「ん〜。構わないが、俺が料理するのを邪魔がしてくれぬか？」
笑顔で優しい声をする。

真美

「はい!」

と笑顔で喜んでいる。

俺は、そんな真美を苦笑する。

孫悟龍

「待つて。真美。あなたは、女であるが、あなた達の女子寮にあるが、我々男が、女子寮に立入禁止が立っていた。」
と不安な表情で言っています。

ストームウィッチーズ（女子共）が、ハッと我に返る。

そうか。俺は、男でストームウィッチーズの女子寮に入ることができない事です。

真美

「えっ。あつ、そうか。悟龍さんは、確かに男だ。大丈夫だ。私が付いている。」
と安心ようで言っています。

俺は、真美が言った言葉を聞いて、ホッとした。

孫悟龍

「そう。有難う。真美」
と笑顔で真美を撫でている。

真美

「あ…あわわわわ（／／／／／）」

と俺が撫でている真美の頬が赤く染めていた。

孫悟龍

「(うん？真美が赤くなった？はぁーん。なるほど。)」
と真美が赤くなった事を理解した。

孫悟龍

「さあ、真美。俺を調理所にご案内してくれる。」

真美

「はい」
と上機嫌で喜んだ。

真美が、クスクスと微笑する俺を調理所へ連れて行った。

残ったストームウィッチーズが、そんな俺と真美を啞然して、ざわつく。

加東

「珍しい…真美が凄い上機嫌するのは、初めてだ」

マルセイユ

「ええ。悟龍さんがほかの男と違う特別な力が持つ人かもしれない。」

〈20分後〉

真美

「出来た!!」

孫悟龍

「うむ。俺も!!」

ストームウィッチーズは、俺と真美が作った料理を見て、息を止めて、驚愕した。

孫悟龍

「む？俺達が料理した食事が気に食わないか？」
と目じりに皺をひそながら、言う

マルセイユ

「いや！違う！！初めてたくさんそんな料理を見た事もない！！」

そう。孫悟龍は、元の世界の料理の全ての修行を覚えたから、アーチャー（エミヤ）の料理スキルと同じで持つ。

孫悟龍と真美が作った料理は、白ご飯とローストチキンと中華風・春雨サラダとコーンスープと大きな骨付き焼き肉などをたくさん作った。

なぜか真美は、孫悟龍のと同じ料理するか？

彼女は、孫悟龍の料理の説明を教えられたから。

真美

「あの……私たちが苦勞に作った食事を食べないか？」
と涙目でマルセイユらが食事を食べないかのことを心配している。

マルセイユらは、真美の言葉に頭を横で振ります。

加東

「いいえ！眩しい料理は初めて！！」

加東の言葉に聞いたストームウィッチーズがうんうんと頷く。

孫悟龍

「さあ、食べよう。」

孫悟龍・ストームウィッチーズ

『いただきます。』

マルセイユは、箸をもって、孫悟龍と真美が作った料理を食べる。

マルセイユ

「……………美味しい。」

真美と俺がマルセイユの言葉を聞いて、ハイタッチした。

孫悟龍

「俺らも食べよう。真美。」

真美

「はい」

ストームウィッチーズが俺らの食事を食った所を俺らも食べ始めたが…

ガツガツツ、ムシヤムシヤツ、バリツベリツ、ボリツバリツ、カチヤチヤツ、バリツムシヤツ

ストームウィッチーズは、孫悟龍の食欲を唾然していた。

211

加東

「あの悟龍さん、ちょっとよろしいか？」

ゴクンッ

孫悟龍

「む？なんだ。」

加東

「あなたは、どれほど食べる……（汗）」

孫悟龍

「む。我々サイヤ人は、本気でやりすぎたと、凄い腹で減っていたが、凄い食欲を持つ。」

マルセイユ

「えっ！本当か！？」

孫悟龍

「ああ。もし、お前達の食材があるままに俺が凄い食欲で食べ過ぎて食材が減少すぎるかもしれない。」

ストームウィッチーズは、俺の言葉と行動を理解するのを想像しながら、ゾツと来た。

ストームウィッチーズは、悟龍さんが自分でたくさんの食材を持ってくれた方が良い……！！と思う気持ちと感謝する気持ちである。

孫悟龍とストームウィッチーズが談笑をして、食事を終えた。

別れの時が来た

加東

「そうか・・・」

孫悟龍

「ああ。俺は、行かなきゃいけない所がある。」

ライーサ

「もっと兄貴と話したい・・・」

真美

「あの・・・悟龍さん、いつか一緒に料理するか？」

孫悟龍

「む？ああ。いつか料理する。」

真美

「はい！」

マルセイユ

「悟龍。」

孫悟龍

「む。マルセイユ、何。」

マルセイユ

「私は、もし、あなたたちは、私たちみたいなウィッチーズらが勝てない化け物みたいな奴とまた戦っている事をわかってる。」

加東

「マルセイユ……」

マルセイユ

「だが、私は、お前たちが私たちみたいなウィッチーズやこの人々たちを助けるために化け物みたいなやつらと戦って勝つ事を信じる！！！」

孫悟龍

「……！！ふん。分かった。」
不敵に笑った。

マルセイユ

「では・・・!!」

孫悟龍

「ああ！俺は、マルセイユらの願いを受け入れた！」

孫悟龍とマルセイユが、ニヤリと不敵に笑い合いながら、トンと拳をたたき合います。

マルセイユ

「おゝい、悟龍！！いつか私と競争する！！」

孫悟龍

「ああ！いつか！！」

ストームウィッチーズが手を振った。

俺は、手を振りながら、ストームウィッチーズと別れて行った。

一時間後、冒険の途中に俺、別荘に入っていた。

俺の目の前にテーブルの上に闇の書がある。

孫悟龍

「いよいよ開始する。」

そう呟く瞬間に時計が午前0時になったら闇の書が覚醒した。

俺の魔力を闇の書に込める。

孫悟龍

「む！もうすぐ起動する。」

孫悟龍は、闇の書の魔力を感じて、振り返るように言う。

闇の書

「Ich entferne eine Versiegelung.
g. (封印を解除します)」

闇の書

「Anfang. (起動)」

シグナム

「闇の書の起動を確認しました。」

腰の所までポニーテールにくくっている髪にピンク色の抜群のスタイルで愛剣のアームドデバイス『レヴァンティン』を持ち、凜々らしいで美人の女性　シグナムが出る。

シャマル

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます。」

次に肩の所まで金髪のヘアの美人女性　シャマルが出る

ザフィーラ

「夜天の主のもとに集いし雲」

次に筋骨隆々とした容貌の青年　ザフィーラが出る。

ヴィータ

「ヴォルケンリッター、なんなりと命令を」

最後に鉄くろがねの伯爵「グラーフアイゼン」を持ち、外見や精神も幼く（外見は8歳くらい）、常に勝気で自由奔放に振舞うが、芯は強く根は優しい少女　ヴィータが出る。

ヴォルケンリッターが、閉じた目を開いて、俺を見て、驚けた。

孫悟龍

「む？なんで驚いたか？」
と皺を寄せば、質問をする。

シグナム

「いや、あなたみたいな青年が主になるのは初めてだ。」

孫悟龍

「む……失礼する。」

俺は、こめかみの所を指で収まながら、ジト目で睨んでいる。

孫悟龍

「まあ、そんな事より紹介する。改めて俺の名前は、君達主の孫悟龍だよ。悟龍と呼ぶ事は構わない。それで、君達の名前は？」

シグナム

「…申し遅れました。烈火の将 剣の騎士 シグナムです。」

シャマル

「す、すいません。風の癒し手 湖の騎士 シャマルです。」

ザフィーラ

「……………盾の守護獣 ザファイラです。」

ヴィータ

「紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴィータです……………」

シャマル

「そ、それにしても主、主の魔力が低いっですね。歴代の所有者のなかでも最低です。なぜ魔力の低いゴリュウが、私達の主になったか？あと主ゴリュウ、ここは何処ですか？？」

孫悟龍

「うむ。俺の魔力は、本気になったら……
そう言う瞬間に凄まじく魔力を抽出する。」

ヴォルケンリッター

「……………!!??」「……………」

シャマル

「なっ!!嘘だ!!??最高ランクは、E X X になった!!??？」

シグナムとヴィータとザファイラは、シャマルが俺の魔力の事を聞けて、驚愕して、俺の方へ向かい、振り返る

孫悟龍が、ニヒルな笑みをした。

孫悟龍

「ええ。もう一つの質問を答えよう。ここは、俺の別荘です。それは、俺が魔法で作った。」

ヴォルケンリッター

「「「「なっ！」「」「」

孫悟龍

「この前に、シャマル。夜天の所を貸してもらえるか？バグ修理するから。」

シャマル

「あ、はい。どうぞ。」

闇の書

『Sammlung・蒐集』

シャマル

「……………う、嘘……………た、たった一人で闇の書666ページ、埋めようというの」

ヴィータ

「……あ、ありえねえー！ー！ー！！！」
と叫ぶ。

シグナム・ザフィーラ

「……………」
とその事を啞然した。

孫悟龍

「当たり前だ。俺に不可能はない！！」
胸を張って言う。

闇の書

『Freilassung(解放)』
と詠唱した瞬間に赤眼で腰の所までロングヘアの銀髪の女性が出現した。

???

「また、全てが終わってしまう……。いったい幾度、こんな悲しみを繰り返すのだろう。運命は変わらなかった……………」

孫悟龍

「闇の書よ。黄昏ているところが悪いが直させてもらおう。」

???

「えっ？」

俺の所へ振り返って呆然した。

孫悟龍

「待つて。神龍^{シエンロン}を出す。」

シヤマル

「え？神龍……？」

孫悟龍は、シヤマルの戸惑いな呟きを無視ながら、袋からのボ
ルが7つ出る。

シグナム

「主、これは何だ。」

孫悟龍

「これは、神位と同じような俺が作った神龍を呼ぶドラゴンボールだ。」

「??？」

「え！？あなたは、神と近いぐらいの力を持つ!?」

揃えた7つのドラゴンボールがわずかに光る。

孫悟龍

「うん。さあ神龍を呼びだす!」

ヴォルケンリッター

「「「「「えっ?」「」「」

孫悟龍

「いでよーっシエンローンッ!」

空に雷雲が集まった。

ヴィータ

「おい!空がおかしい!」

呆然としながら、ヴォルケンリッターが、俺と神龍が知り合った事を目が開いた。

シグナム

「これが…神龍…」

神龍を見惚れる。

神龍

「どんな願いもうつ叶えてやる。願いを言え」

孫悟龍

「銀髪の女性の中のバグを修正ことはできないか？」

神龍

「たやすい願いだ！」

赤い目が光って、銀髪の女性の周りが光に包まれた。

???

「……………嘘。私の中でバグが消えた。」

ヴォルケンリッター

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

孫悟龍

「だろう。他の願いは、ある。待ってください。」

神龍

「分かった。」

銀髪の女性

「……………ね、烈火の将……………せ、説明してくれ……………」

シグナム

「え……………いや……………主に聞いてくれ」

銀髪の女性

「す、すみません。主、出来ればご説明を」

孫悟龍

「む。分かった。」

銀髪の女性が混乱している。

孫悟龍、説明中

銀髪の女性

「で、では……もう……破壊を……しなくても……いいので
すか……」

と嬉し泣きをしながら、言っています。

孫悟龍

「……………ああ。」

銀髪の女性

「う……ぐす……う……う……ありがとうございます……と……
ざいます……ありがとうございます主……」

孫悟龍

「フン、気にしなくて良い。（笑顔）」

ヴォルケンリッター（女性陣）だけが、俺の凛々らしい笑顔を見惚

れて、頬が赤になった。

???

「（主、なんて優しい覇気持ちの紳士だ。やはり私は、あなたをずつと仕える）」

シグナム

「（主……あなたは、歴代の主の中で一番カッコいい／＼／＼／＼／＼）」

ヴィータ

「（悟「……いや兄貴……／＼／＼／＼／＼）」

シヤマル

「（あらあら、シグナム達は、悟龍さんに惚れた。あなたたちは、乙女だ）」

孫悟龍

「そつだ。銀髪の女性の名前は、……強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール……リインフォース。」

リインフォース

「ありが・・・とございます。では・・・新名称・リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能です。」
涙拭きて、宣言する。

神龍

「おい、孫悟龍。その他の願いは？」

孫悟龍

「む？リインフォース？とアギトをください。」

神龍

「たやすい願いだ！」
また赤い目が光る。

人形の身長（8cmぐらい）と同じぐらいの小娘らが出る。

リインフォース？

「蒼天に行く祝福の風 リインフォース？です。」

アギト

「烈火の劍精、アギトだ。」

孫悟龍

「ああ。アギト、リインフォース？、よろしくたのむ。
俺は、凜々らしい笑顔を浮かす。」

リインフォース？とアギトも見惚れて、赤に染めた。

リインフォース？

「（悟龍さん、かつこいいだね／＼／＼）」

アギト

「（む／＼／＼・・・）」

孫悟龍

「もういいだ。神龍：叶ったら俺の袋を入れてくれ。もし、他人が
これを使って、悪い願いを叶うかもしれない。」

神龍

「分かった。」

神龍がそう言う瞬間に体が光って、七つのボールになって、俺の袋に入れた。

孫悟龍

「よし。そうだ。まだヴォルケンリッターの騎士甲冑も作っていかんだ。」

ヴォルケンリッター

「「「「本当だ。「「「」

孫悟龍

「今、作る、えい!!」

孫悟龍

「ふむ。お前たちは、やっぱり戦闘する時は、騎士らしい服に似合う。」

シグナム

「ありがとうございます。主「リユウノ」」

シャマル

「ありがとうございます。ゴリュウ（笑顔）」

ザフィーラ

「ありがとうございます。主」

ヴィータ

「まあ、いいんじゃないか／＼」

孫悟龍

「ははは。ヴィータが照れたなんて可愛い。」

ヴィータ

「うっせ／＼／＼／＼」

結局みんなアニメと一緒にあった

俺は、ヴォルケンリッターらと仲間になったことで顔を綻ばせて笑

う。

孫悟龍

「夜中遅くになってしまった。俺は、あなた達を自分達の事に説明したいと思いますが、俺は、寝たい。というわけでこの事は、明日だ。」

ヴォルケンリッターが、納得していた。

孫悟龍

「お前達は、空いてる部屋がある。」

目を開いて反論するヴォルケンリッター（女性陣）が俺の説得に渋々納得している。

孫悟龍

「ふっつ、納得したが、今回だけは、一緒に寝る。」

ヴォルケンリッター（女性陣）
「「「「「「「「「「「「「「「」

孫悟龍

「ただし！明日から、自分が自分の部屋で寝る！」

ヴォルケンリッター（女性陣）

「「「「「「「「「「「「「「「」

孫悟龍

「はあ。まさかあなた達（女性陣）は、俺を惚れる………
？」

と溜め息をしながら、頭を搔いて、言う。

ヴォルケンリッター（女性陣だけ）は、ドキリとして頬で赤を染めて、顔だけが避けている。

俺は、そんなヴォルケンリッターを見て、頭を抱けた。

孫悟龍

「俺は、いつになつたらなんと女たらしになつた。はあ〜」
と肩を落としていた。

孫悟龍

「その事は置いて。さあ、俺に連れて行こう。」

ヴォルケンリッター

「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

俺の部屋に着いていた。

孫悟龍

「俺の部屋は、ここ。シグナムとザフィーラとリインフォース？のは、俺の部屋の右隣に、ヴィータとシャマルとリインフォース？とアギトのは、左隣にある。」

ヴォルケンリッター

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

孫悟龍

「さあ、みんな。俺の部屋に入っている。」

俺とヴォルケンリッターは、俺の部屋に入っていた。

ヴォルケンリッターは、俺の部屋に入って、驚愕してきた。

トレーニングの道具と難しいな魔法の本がたくさんあり、壁の二つの扉の中に鍛冶屋の倉庫と同じぐらい部屋や謎の部屋にいて、上豪華ホテルと同じぐらいベットがいた。
それが豪華ホテルを超える俺の部屋だ。

孫悟龍

「俺が、別荘を作って、どれぐらいに御苦労する。俺の部屋だけじゃなくて、お前達のも。」

孫悟龍

「それに温泉や模擬・修行する所があったり、倉庫に似ている冷蔵

庫にアイスがいっぱいあったりする。ここは最高の極楽です!!」

ヴォルケンリッター（女性陣）

「（びくっ）」

ザフィーラ

「（びくっ）」

ヴォルケンリッター

『ご恐れながらお申し上げます。孫悟龍様』

ヴォルケンリッターは、声を揃えて言う。

孫悟龍

「・・・なに（汗）・・・まあ、寝る時間だ。お休み。」

俺は、ヴォルケンリッターを見て、引き攣った笑みで冷汗をかいた。

ヴォルケンリッター

『お休みなさい。主孫悟龍様』

孫悟龍

「（今日のヴォルケンリッターは、変だった？まあ、明日は、治るかもしれない。）」

俺のベットの中に真ん中は、俺、右から右手を握るシャマル、右腕を抱けるリインフォース？、俺の右腰を抱けるヴィータに左から狼形態になったザフィーラ、左腕を抱けるシグナムに、俺の胸の上にリインフォース？（ツヴァイ）とアギトが寝る。

孫悟龍たちの平和は、和らしい。

孫悟龍が説明することは……？ストームウィッチーズと同じくらい説明する？ストームウィッチーズより長い説明をする？

第8話 孫悟龍の真実と料理と召喚（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。
もし、酷い所がある時、教えてみてください。

次回予告

孫悟龍

「オッス、俺 孫悟龍」

孫悟龍

「新たな仲間が出来た！だが！お前達に俺達の事を説明する」

シグナム

「主、私達に何のことを説明するか？」

孫悟龍

「なんと！ヴォルケンリッターは、俺のサイヤ人の特徴を受け継いだ！！？」

ザフィーラ

「俺の…いや俺達ヴォルケンリッターの力が湧き出る！」

孫悟龍

「カッっ！！わくわくする！！あなた達と闘いたい！！」

第9話「ヴォルケンリッター
孫悟龍たちの説明　そしてサイヤ人
の特徴の受け継ぎ!？」

第9話「ヴォルケンリッター

孫悟龍たちの説明

そしてサイヤ人の特徴の受け

孫悟龍 side

朝になったら、一日たったが、外の時間が、一時間だった。

孫悟龍が午前5時に早く起きた。

孫悟龍

「うん。いい朝と言ったら、ここの外の世界は、まだ夜中を経過した。」

孫悟龍は、ヴォルケンリッターをチラッと見た。

ヴォルケンリッターらが、スーッと寝息する。

孫悟龍は、そんなヴォルケンリッターらを見て、クスッと笑っていた。

孫悟龍

「よし。まずは、いつもので修行する。」

俺は、いつもの魔法や気の特訓でやる。コントロールや威力をアップする。

神話の武器を創造しながら、本物のようになるために厳しい魔術の修行をする。

そして……

孫悟龍

「うーん。固有結界は、エミヤと同じようだったが、エミヤと衛宮士郎と違う俺の特別な固有結界は、夜空の月で、銃と剣などの武器が、墓のように挿すが、俺は、長い詠唱を唱える事が少し出来る。やはり固有結界の無詠唱だけをするために想像するだけに必要がある。トレスネオン創造開始」

俺は、そう言う瞬間に集中に目を閉じながら、夜空の月で無限の武器の世界という固有結界を創造する。

15分後

俺の顔、体が汗を流す。

孫悟龍

「ぐっ……」

脳を负担しながら、苦痛をする。

45分後

孫悟龍

「はぁっ！！」

孫悟龍が目を開いた。

孫悟龍は、疲れたように息を吐く。

孫悟龍

「……はぁっ……はぁっ……ふーっ、やれやれ。また無茶苦茶して
しまった。」

と呼吸をすれば、落ち着けば、肩をすくめた。

孫悟龍

「なあ。いつまでに俺を見て続ける。ヴォルケンリッターら。」

背に壁で居るヴォルケンリッターらを既に気付けて、言う。

ヴォルケンリッターは、びくっとして、渋々に出る。

ここで重い空気になった。

俺が、静かな空間を壊したら、口を開ける。

孫悟龍

「はあく。あなた達ヴォルケンリッターは、俺が無茶すぎる所を心配する事を分かってる。」

ヴォルケンリッターは、うっとしたら、反論をする口が開く前に俺が、

孫悟龍

「もし、俺が無茶すぎる時にあなた達が俺を支える事が出来るなら、俺も貴方達を支える事が出来る。」

俺は、覇気を湧き出しながら凜々とする笑顔を浮き上げる。

ヴォルケンリッターは、孫悟龍の言葉とその笑顔を受けて、頬に赤を染めて、驚喜する。

ヴォルケンリッター

「「「「「「了解！」「おう！」「わかったぜ」「わかりました」主悟龍！」「悟龍」「悟龍さん」「「「「「「「

俺は、そんなヴォルケンリッターを見て、苦笑する。

孫悟龍

「さあ、朝食の時間だ。」

ヴォルケンリッター

『えっ』

と啞然と口を揃えた

孫悟龍

「何よ。また目で見るような顔です。」「
と不機嫌で言っている。」

ヴォルケンリッター

「いや、私達は、料理することが出来ない。」

孫悟龍

「ふふふっ、私を甘く見ないでくれ。執事の名に賭けて！！あなた達は、食堂のテーブルで待ってて！！」

俺は、食堂を駆けて走っていた。

ヴォルケンリッターは、ポカーンと呆然して、残っている。

15分後 食堂

俺は、いろいろに料理と格闘する。

ヴォルケンリッターは、食堂のテーブルで座って待つ。

シグナム

「遅い。主悟龍……」

リインフォース？

「主ゴリュウ、何を料理するか？」

孫悟龍

「出来た!!!？」

本日の俺が用意して作った料理は、白ご飯とみそ汁と焼き魚と煎茶です。

俺は、それを運び、みんなの分を配りテーブルに置く。

リインフォースE

「なんて眩しい料理は、初めてだ。」

孫悟龍

「さあ、食べて。」

ヴォルケンリッターは、箸で口に運ぶ

シグナム

「・・・お！美味しい料理は初めて・・・！」

孫悟龍

「ふふ。当たり前だ。俺がどんな料理を作る事が出来る。」

ヴィータ

「悟龍の食事はギガうまーいーいー！」

ヴォルケンリッターや俺は、食事を進める。

ヴォルケンリッター

『「うちそうさまでした。」』

孫悟龍

「お粗末さまでした。」

孫悟龍

「そつだ。俺の相棒を紹介する。出るよ。銀牙」

銀牙は、俺の体から自分の魂が出た。ザフィーラと近い狼人モード

銀牙

「はい。兄さん。」

ヴォルケンリッターが、驚愕していた。

銀牙

「ん？兄さん。姉さん達、誰？」

銀牙は、ヴォルケンリッターらに気付いて、彼女達を指して、俺に質問する。

孫悟龍

「ええ。彼女達は、俺達の仲間になった。」

銀牙

「ホント！？僕達は、姉さん達と仲間になった！？！？やった〜
っ！！！？？」

孫悟龍が、そんな銀牙を見て苦笑する。

ラインフォースⅠ

「この少年は、誰ですか？」

ヴィータ

「このチビは、ザフィーラと同じ狼タイプです。」

孫悟龍

「む？そうだ。彼は、こいつらに紹介しなきゃない。……お
ーい！早く戻ってこい！！銀牙」

銀牙

「（ぴくっ）はい！ここより戻っていた！！」

孫悟龍

「銀牙、彼女達をこいつに紹介する。」

銀牙

「うん 姉さん達。僕の名前は、銀牙です。よろしく。」

シグナム

「烈火の将 剣の騎士 シグナムです。」

シャマル

「風の癒し手 湖の騎士 シャマルです。」

ザフィーラ

「……盾の守護獣 ザフィーラです。」

ヴィータ

「紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータです。」

リインフォース？

「祝福のエアル リインフォースだ。」

リインフォース？

「蒼天に行く祝福の風 リインフォース？です。」

アギト

「烈火の剣精、アギトだ。」

銀牙

「うん。よろしい。姉方達。」

とニパツと無邪気に笑う。

ヴォルケンリッター（女性陣）は、銀河の無邪気な笑顔を見惚れた。

俺は、そんなヴォルケンリッターを見て、クスクスと生温かい目で笑っています。

孫悟龍

「この少年は、俺と兄弟近いで、ザフィーラと同じ狼だが、このパワーは、俺と同じぐらいの力を持っている。」

ヴォルケンリッター
「……………なっ!!」

銀牙

「はい 兄さんの言うとおりだ。僕の力は、仮面ライダーなどの力…そして、狼獣の血を持っているが、兄さんは、強すぎる力に追い付けない。でも、僕の力は、兄さんと一緒に戦うだけで、十分でした。」

孫悟龍

「ああ。俺も銀牙と闘う事が喜ぶ。」

ヴォルケンリッターは、銀河の言葉を聞いて、疑問で持ち、俺に口を開ける。

シグナム

「主悟龍。」

孫悟龍

「ん？シグナム、どうした？」

シグナム

「仮面ライダーって何だか？」

孫悟龍

「うむ。仮面ライダーって……」

孫悟龍、説明中

シグナム

「なるほど。仮面ライダーでは、人を守るために怪物を倒す正義の戦士です。」

孫悟龍

「ああ。もし、お前たちみたいなプログラムでも俺達みたいな怪物でもに変身できる。」

ヴォルケンリッター

『ホント?』

俺はコクリと頷いた。

孫悟龍

「それだけじゃなくて、昨日約束するとおりに俺の事をいっぱい説

明する。」

リインフォース？

「何…」

孫悟龍

「ああ。サイヤ人と魔法と魔術などを持つなんては、チートすぎるかもしれない。」

孫悟龍

「魔術では……………」

孫悟龍、魔術の説明

リインフォース？

「なるほど。魔術では、誰かの意思で、作られた……………それに固有結界では、何ですか？」

孫悟龍

「固有結界では……………」

孫悟龍、固有結界の説明

シヤマル

「なんて……心象風景によって世界そのものを塗り潰す大魔術・
・・恐ろしい魔術……」

孫悟龍

「ああ。俺の固有結界を希望する事は、俺達がピンチする時に覚悟
するように使っただけです。」

ヴォルケンリッターが、考え込めて、納得していた

ザフィーラ

「最後にサイヤ人って何ですか？」

孫悟龍

「やっぱりお前達が言ったのが来た。その前に俺は、初めから、初
めての出会いのヴォルケンリッターの気より多い事が可笑しい?？」

シグナム

「主悟龍も……?」

孫悟龍

「もしとすると、闇の書は俺のサイヤの特徴までを蒐集した。」

シグナム

「やっぱり流石主だ。主が思うとおりさっき主を蒐集したお蔭でサイヤ人の特徴を受け継いだ。」

孫悟龍

「やっぱり……」

ヴィータ

「ねえねえ、悟龍。さっきからサイヤ人って何ですか？」

孫悟龍

「サイヤ人では……」

孫悟龍、サイヤ人の説明

ヴォルケンリッターらは、サイヤ人の出鱈目な説明を聞いて、引いて、啞然していた。

シグナム

「凄い。私達は、あの力のお蔭で主に追い付くかもしれない。」

シグナムの言葉は、ヴォルケンリッターがうんうんと頷く。

孫悟龍

「ああ、良かったが、あなた達は、スーパーサイヤ人になる事が出来ない。」

ウィータ

「えっ！？どうした！？あたし達は、スーパーサイヤ人と言う事に变身することが出来ない！？」

孫悟龍

「それを変身に必要とされる条件は、一定以上の戦闘能力と穏やかで純粋な心を兼ね備え、極端な危機感、強い怒り、悲しみに苛まれていることです。ただし、もし、変身した後、戦闘時間が長い時には、落ち着かないお蔭で目の前に殺すかもしれない。」

ヴォルケンリッターは、孫悟龍の説明を聞いて、驚愕して、ゾッと自分の力に恐怖していた

孫悟龍

「そうだ。最後に仲間になった印に俺の真名が預ける。」

ヴォルケンリッターは、疑問を持ち、口揃えて言う。

ヴォルケンリッター

「「「「「真名??」「「「「「「

孫悟龍

「それは、俺だけの掟です。真名は、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることは許されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺せている。」

リインフォース?

「大切な名前で貰ってもいいですか?」

孫悟龍

「うむ。仲間だけは、俺の真名を呼べたい。」

リインフォース?

「分かった。私達は、大切な名前を貰う。」

孫悟龍

「良い答えだ。俺の真名は、朱蒼鷹宏ですが、リユムーンと呼ぶ事が構わない。」

孫悟龍

「そつだ。俺達の誓いを立てる。」

シグナム

「私達の誓い？」

孫悟龍

「ああ、俺達の誓いを固く結ぶ。俺達やお前達は、きっとそんな甘い正義の人々や極悪人ときっと結んでない。」

銀牙

「僕は、兄さんと仲間達以外の正義が語るだけの人が、馬鹿だ。彼らを信じない。」

孫悟龍

「ああ。銀河が言うとおりに正義を語るだけの人々が、人を駒や物と扱う事がある事と極悪人が、悪い願いを叶うために人を殺す事をする。俺達は、そんな正義な人達や極悪人を許せない！」

ヴォルケンリッターは、孫悟龍たちの言葉を聞けて、昔の私達と同じで思い出そうに笑っていた。

ヴォルケンリッターが顔に合わせて、頷く。

俺の前にヴォルケンリッターが、膝まずいた。

シグナム

「剣の騎士シグナム、夜天の王。を我がすべてをかけ、あなたお守りいたします」

シヤマル

「私もですよ。リュムーンさん」

ラインフォース？

「ラインもですう」

ザフィーラ

「………わたしも、主」

アギト

「まあ、あたしも一応な」

ヴィータ

「兄貴、あたしもだ。」

ラインフォース？

「も、もちろんわたしもそうですよ。主リュムーン」

銀牙

「僕は、兄さんと姉さん達を守る。」

孫悟龍

「……………ふん、俺達も強い敵と闘う時にお前たちみたいな仲間や家族を守るために諦めない！！みんな、今からよろしく！！」
感心するような感じで不敵に笑って言う。

ヴォルケンリッター & 銀牙

『……………！！了解！！（はい！！）』

俺達とヴォルケンリッターは、誓い合った。

孫悟龍

「そつだ。出かけることは、俺と銀牙ぐらいです。」

ヴォルケンリッター

『え？』

孫悟龍

「今のお前達は、俺たちに追いつけない。が、ここで修行する。俺の将来は、あなたたちが俺たちに追いつく事と、俺と銀牙を超える事です。」

シグナム

「確かにそれはそうだが・・・」

孫悟龍

「ジャングルと海などで修行することが出来る。好きにして暴いても構わない。」

孫悟龍

「その前にこの腕時計をつける。」
この腕時計をヴォルケンリッターに投げ渡す。

ヴォルケンリッター

「?」

俺が投げ渡すこの腕時計を受け取って腕につけた。

孫悟龍

「その腕時計の上のボタンをポチッと押してみる。」

ヴォルケンリッターは、俺が指示したとおりにこのボタンをポチッと押した瞬間に・・・

ヴォルケンリッター

「ぐわあ!!! / きゃあ!!!」

重力に負けて体がプルプルと震えながら倒れてる。

シグナム

「…………ぬ、主悟龍…………こ、これは？」

孫悟龍

「それは、重力腕時計。」

リインフォース

「…………じゅ、重力…………ど、腕時計？」

孫悟龍

「はい。俺達は、既に重力100G以上に慣れてた。」

ザフィーラ

「…………ま、まさか…………お、お前達も…………じゅ、重力腕時計をつけて…………ず、ずっと使い続けた。」

孫悟龍

「ええ。お前達は、俺達と一緒に出かけるまでに重力を慣れる。」
笑顔で言っています

孫悟龍

「俺を信じなさい。俺はまだ隠し事があるが、悪い人ではないから。」

「
と真剣に言う。

孫悟龍

「まあ、頑張れよ。俺は、ここの異変を調べ続ける。いくぞ、銀牙。リイン？。アギト」
とフツと不敵に笑いながら背を向かいに行く。

銀牙

「はい。兄さん。ヴォルケンリッター、頑張れ」
と無邪気な笑顔で手を振りながら、俺を追いかける。

リインフォース？とアギトは、ヴォルケンリッターに合掌しながら、俺達を追いかける。

ヴォルケンリッターは、俺と銀牙の言葉を聞けて、額で青筋をする。

ヴォルケンリッター

「ぬ、主の鬼
と疾風のごとくに叫んだ

！！（前言撤回！）

頑張れ、ヴォルケンリッター（汗）

孫悟龍と銀牙は、悪魔と鬼より恐ろしい……(汗)

第9話「ヴォルケンリッター」

孫悟龍たちの説明

そしてサイヤ人の特徴の受け

読んでいただきありがとうございます。

感想、誤字、指摘などありましたら、お願いします。

もし、酷い所がある時、教えてくれてください。

次回予告

孫悟龍

「オッス、俺、鷹宏」

孫悟龍

「いよいよストライクウィッチーズの原作を開始する。」

孫悟龍

「まさか俺は、黒猫のお嬢さんと同じくらいの所で魔術を使う時が来た。」

???

「おい！その兄さん！！何者！？」

孫悟龍

「俺か？俺は……通りすがりの魔術師！！覚えとけ！？」

第10話「ストライクウィッチーズの人と再び邂逅!？」

外伝 黒い猫のウィッチーズと異世界の戦士の出会い（前書き）

それは、リーニャ（リーネ）・エイラがストライクウィッチーズに入隊する事とエイラとサーニャと出会う事の話です。

そんな話の中にFateのセイバーとライダーの決着の事と同じだ

外伝 黒い猫のウィッチーズと異世界の戦士の出会い

サーニャ side

夜間に、M i g 6 0というストライカーを履き、フリーガーハマーという連初ロケット砲を持つ人物 サーニャが飛び続ける。

彼女の側頭部には、ライトグリーンに輝く光の索敵アンテナ、リヒテンシュタイン型魔導針。

こんばんは、私、サーニャ・V・リトヴァク中尉です。

今、私が歌をしながら、私達ストライクウィッチーズのアジトを守るためにネウロイを探る。

サーニャ

「~~~~~」

と歌をしながら、飛行し続ける。

その時、索敵能力を持つ魔導針の反応を伝える。

サーニヤ

「なんか来る……」

キヨロキヨロと頭をまわして、顰めながら、警戒する。

雲の中から赤いビームを放れた。

サーニヤ

「……!!」

サーニヤは、赤いビームをわずかに避けた。

前髪をちよつとぎくつとなった。

サーニヤの本能が、危険だと感じている。

サーニヤ

「こちら、サーニヤ！応答よ！？援軍をくれる……！」

サーニヤは、救援をする。

その中、また雲の中から赤いビームを放れた。

サーニヤ

「くっ！」

ビームをかわしながら、フリーガーハマーを持ち直し、引き金を引いて、小型ミサイルを撃つ。

雲の中に爆発していた。

また赤いビームを放れた。

それを反らす。

また小型ミサイルを2発撃つ。

サーニヤ

「くっ！」

5分後

サーニヤ

「くっ……はぁ……はぁ……まだ？」

サーニヤは、頭を血が流れて、満身創痍をする

ネウロイが赤いビームを放れてた。

サーニヤ

「……………くっ!!」

と死の覚悟をすれば、目を閉じる。

サーニヤ

「(助けて!!お父さん!!)」

その時、誰かの声が聞く

???

「黒猫のお嬢さん。死ぬことが怖い?やれやれ。やはりお嬢さんは未熟でした。しょうがない。私が、助けてあげる。I am the e b o n e o f m y s w o r d . (我が骨子は捻じれ狂う。

「
青年らしい声を聞けると目が開く瞬間に私の横で何か通り過ぎる。

ネウロイを凄く早い矢で刺した。

そんな時に、

?????

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

ネウロイを刺した矢……いや螺旋らしいな剣が爆発した。

私は、それを驚愕していた。

サーニヤ

「（私の後ろで誰かが矢……いや螺旋らしいな剣を放れた……
？）」

私は、矢を放れる所に振り返って、影の青年を見つけた。

サーニヤは、青年を見ると、言葉を失った。

青年の蒼色の髪は、サラサラとした肩の所まで伸び、鋭いで凜々らしい黒眼、ストライカーを使わずに飛行する青服（内服は、オレンジ服）でイケメンな青年でした。

サーニヤは、目の前の青年を見惚れる。そのあまりの美しさに。

青年は、私に近付けながら、飛行する。

青年

「……大丈夫、お嬢さん？」
真面目そうに言った。

青年の声で私は、我に返った。

サーニヤ

「はい。」
とコクリと頷いた。

青年

「……そうか……良かった。」
と青年がわたしを安堵するような声で言える。

青年

「まずは、貴方の体を治せている。ケアルガ 治癒」
そう言いながら、詠唱を唱える瞬間に私の体が光る。

サーニヤ

「(名もない青年が私の体を治せてあげる……？それに名もない
青年の魔法が温かい。)」

青年

「……ごめん。」

サーニヤ

「え？」

青年が謝る事を聞けて、目を開いた。

サーニヤ

「（なぜ私を謝っているか・・・？）」

青年

「貴女を助けに行つて、遅くなった。俺は、貴女の満身創痍のような姿になる前に早く助ける肩が良い。」
と悔しそうな顔で自嘲的に言っている。

サーニヤは、反論する前に、青年が何かを感じて、私をお嬢様ごっこで抱けて、赤いビームを放れた所を避けていた。

私は、驚愕していた。

サーニヤ

「（なぜ私の魔導針がネウロイの存在に気づけるはずなのに・・・
気付かない！？）」

私は、混乱しながら、ビームを放れた所を振り返って見る。

青年は、私が見る所と同じに空から現れたネウロイを睨んでた。

青年は、空中にお嬢様ごっつこで抱けた私を下りる

青年

「わりの。貴女は、ここにいて。」

サーニヤ

「はっ、はい。」

青年は、ふーっと落ちつくよう呼吸しているが、怖い殺気と覇気が凄く湧き出しながら、赤いビームを放れた所を睨みつけた。

青年

「………壊す」

青年がそう怖そうに呟く瞬間に消える。

サーニヤ

「消えた!？」

と驚愕していた。

金属がぶつけた音を聴けて、振り返ってみて、驚愕した。

私は、青年がビームを放れた所で闘う所を見てた。

青年が、いつの間に風に包まれた透明な何かを持つ。

ネウロイの機体から複数の赤いビームを放れた。

ネウロイに近づけるために赤いビームを青年が反らしたり交わしたり避けたりした。

ネウロイは、青年が交わした隙に赤いビームを放れる。

青年は、それを直感がいた。

青年

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r

d . (我 が 骨 子 は 捻 じ れ 狂 う 。) 「

と死の覚悟のような目を閉ざして、詠唱する。

ネウロイが、赤いビームを放れた。

サーニヤ

「危ない！」

俺にビームを迫られた

青年

「ロ熾天覆う」

青年

「アイアス七つの円環！！」

花卉の如き守りは七つあり、その一つ一つが、何処の壁に匹敵する無敵とされる結界宝具が出現した。

サーニヤは、その楯を見惚れる。

サーニヤ

「花卉みたいな楯……花は、綺麗だ。」

ネウロイの赤いビームを楯一枚壊せずに防ぐ。

ネウロイ

「！？」

青年は、動揺とするネウロイに瞬間で近づけながら、左上から右下

に振りれば、ネウロイの機体の右翼を斬る。

サーニヤ

「……………凄いなあ……………」

ネウロイが、機体の右翼を治せていたが、治せる事が出来ない。

ネウロイ

「……………!!」

と自分の体を治せない事を感じて、驚愕した。

青年

「……………ふむ。やっぱり直死の魔眼を使って、あなたのような機体を斬ったから、自分で治せる事が出来なかった。残念だ。てめえみたいな機体共は、俺にとっての天敵だった。今は、俺はてめえを斬ったから、死ぬ（壊す）かもしれない……………」

ニヤリとした不敵に笑った。

私は、青年の言葉を疑問に持つ。

サーニヤ

「え!?!（今、青年が魔眼と言う……………って坂本少佐と同じ魔眼があるが、違う魔眼だ。その後、何と言う……………?）」

青年

『死ぬかしのれない……』
と私が青年の言葉を想像しながら、ゾツと恐怖する。

ネウロイが、危険と感じて、後退したいとする。その時、

青年

「ふん。さっきの勢いはどうした？来い。屑機体。悔しかったら、大きな赤いビームを放れてみる！！」
と口端がつり上がって、くいくいと指が挑発するように動く。

ネウロイは、怒りに染めて、真ん中に赤いビームを集めている。

青年

「（やっぱり来た……！）創作開始《トレース・オン》……………
・風よ！！」

青年が不敵に笑いながら、言う。

彼を中心に巻き起こる風は疾く嵐へと化けていく。

封が解かれる。

幾重もの風を払い。

彼の剣は、その姿を現れた。

吹き荒れる風が彼らの上に吹き荒れていた。

いや、青年からではなく、彼が持つ剣からだ。

サーニヤ

「え？」

私の目を疑う。

見えない筈のその姿が確かに見える。

少しずつ、包帯を解いていくかのように、彼の剣が現れ始める。

サーニヤ

「……黄金の……剣？……綺麗だ。」
宝が輝けるかのような剣を見惚れる。

吹き荒ぶ風。箱を開けるかのように展開していく幾重もの封印が解

け、風の帯は大気に溶け。

露わになった剣を構え、彼は、赤いビームを集めるネウロイへと向き直る。

ネウロイが集めた赤いビームを放れた。

光の奔流となったネウロイが放れた大きな赤いビームが迫る。

青年

「
時間が止まる。
」

逃れられない破滅を前にして、思考が停止する。

だがそれは

決して、その赤いビームによる物ではなかった。

収束する光

その純度は、巨大なだけのネウロイのその赤いビームとは比べるべくもない。

彼の手にあるモノは。

星の光を集めた、最強の聖剣である。

青年

「エクス 約束された」

光の剣を振り上げる。

青年

「カリバー 勝利の剣!!!」

振り上げた剣をそのまま下ろしたように光の刃を放れた。

放れた光の刃は大きな赤いビームを呑み込んだ。

ネウロイのコアまでを一刀両断し、夜空を翔け、下雲を断ち切って消滅して行く。

おそらく。

私は、それに驚愕していた。

サーニヤ

「(.....おそらく。もし、アレが地上で使われたのなら、町は永遠に消えない大断層が残ったかもしれない。)」

彼の剣“視えない”のではない。

あれは単に“視せない”だけだったのだ。

見る者の心さえ奪う黄金の剣、あまりにも有名すぎる。

エクスカリバー
約束された勝利の剣

イングランドにかつて存在したとされ、騎士の代名詞として知られる王の剣。

幾重もの結界に封印された最強の剣。

空は静まり返っている。

風は既になく、物音をたてる者もない。

サーニヤ

「（エクスカリバー？・・・もしかすると青年

は、）」

と混乱するように思う。

青年に近づく事もできず、体は飛行しながら、立ち尽くしたままだった。

混乱しているのか、それともまだあの剣に心を奪われているのか。

思考はとりとめもなく、おかしなコトばかり脳裏に浮かぶ。

何故彼がああ剣を持っているのか。

あの黄金の剣は、誰もが知る騎士王が持つ物だ。

それを彼が持つに至った経緯を考えようとして、自分が必死に、簡単な結論を否定したがっていると気が付いた。

余分な推測をする必要はない。

あれは、初めから彼の持ち物にすぎない。

そこにどんな手違いがあるのかは知らないが、あの聖剣を持つ以上、彼の名は一つしかない。

サーニヤ

「（彼は、ブリタリアの英雄　　アーサー王……………!?!?…

……………ありえない!!）」

と結論をとりまとめたが、驚愕しながら、混乱している。

青年

「……………」

青年は剣を振るった姿勢を解きながら、ネウロイが消滅した所を眺め続けた。

……………駆け寄るべきなのに、体がどうしても前に進まない。

……………自分は今まで、青年がただの民間人と思わなかった事をしか理解していなかった。

青年

「……………むっ!」

青年が何かを感じて、体が後ろを半円に振り返しながら頭も振り返す。

サーニヤ

「……………え?」

青年のそんな行動を惑わう時……。

???

「お〜い！！サーニヤ、ご無事！！」

私を知る誰かがかける声の所を振り返る。

坂本少佐、ミーナ中佐、バルクホルン大尉、ハルトマン中尉、ペリー又中尉が居る。

サーニヤは、はつとして、青年が居た所を急いで振り返ったが……

青年は、既に消えた。

サーニヤ

「……………消えた。」

坂本少佐

「大丈夫、サーニヤ？」

私は、坂本少佐の声を聞く瞬間に我に返った。

サーニヤ

「は、はい。大丈夫。」

ハルトマン中尉

「ところで、ネウロイはどこだ？あなたがやつつけたか？」
とキヨロキヨロしながら、言う。

サーニヤ

「いいえ。私がやつつけない。が、名無き者は、撃破していた。」

坂本少佐らは、サーニヤの言葉を聴いて、驚愕した。

バルクホルン大尉

「何だと……。あなたの他に誰がネウロイを倒せたか？……」

誰かが質問する時にミーナ中佐が、制している。

ミーナ中佐

「質問したい事がある時、基地に戻ってもよろしい。」

ウィッチーズは、ミーナの言葉に頷く。

私達は、基地中の部屋に居た。あ、シャーリーさんとルツキーニさんも居た。

みんなが私の報告を聴いて、目を開いた。

ミーナ中佐

「……そうか、名乗せず青年がサーニヤを助けた……」

私は、ミーナ中佐の言葉を聴いて、こくりと頷いた。

坂本少佐

「……待つて。凄い大きな光を見た。誰がやった？」

サーニヤ

「はい。その光は、青年の剣が大きな光の刃を放れた。」

坂本少佐は、驚愕な顔をした。

坂本少佐

「何！？青年が……！ありえない！？おい！この剣は何か！？」

サーニヤ

「坂本少佐……怖い……。」

ミーナ中佐

「美緒！落ち着いて……！」

坂本少佐

「……む。私が興奮しすぎてしまった。すまない、サーニヤ。」

サーニヤ

「いいえ、気にならず。しかし、青年が光の刃が放れた瞬間に名を叫んだ。」

ミーナ中佐

「え？剣の名は何と叫んだか？」

たか？」

ペリーヌ中尉

「男性がストライカーを使ってるなんてばかばかしい。」
と言う。

バルクホルン大尉

「ペリーヌの言うとおり。私達女性だけがウィッチを使う事が出来
ています。」

サーニヤ

「あの……みんな。」

私がそう言うともみんなは、私に振り返す。

サーニヤ

「青年は、ストライカーを使わずに飛行した。」
とんでもない言葉を言います

ストライクウィッチーズ

『なっ！！？』

ルツキーニ

「うじゅ〜い！？兄さんが、ストライカーを使わずに飛行するな

んて凄い!!!」
と驚いたり目が輝いたりするようで言っ。

シャーリー

「しかし、青年は、どうやってストライカーを使わずに飛行したか？」

サーニヤ

「ごめんなさい。私も分からない。」
と落ち込みのようで言っ。

坂本少佐

「待って、サーニヤが報告する事と二つの中の一つの噂が同じコトする。」

ミーナ中佐

「え?その噂……………まさか!??」

坂本少佐

「そのとおり。一つの噂は、私達みたいなウィッチーズが齒に立たない化け物を謎の蒼髪青年とその仲間が倒れた事。」

バルクホルン大尉

「……………一つの噂は本当だ。私達はアレをバカバカらしくに

思う。それに……」

ミーナ中佐

「ええ。もう一つの噂は私達カールスラント人だけが知っていた。」

ルッキーニ少尉

「うじゅい？もう一つの噂って何だ？」

ミーナ中佐

「はいはい。あの事はこれまで。それにさっきの事はこっちで調べておく。」

話を逸らすためにはばんばんと手を叩きながら言う。

ストライクウィッチーズ

『了解！！／ハイ！！』

ミーナ中佐

「今日はこれで解散ね。」
と宣言した。

私は、坂本少佐の所へ行く。

サーニヤ

「あの・・・坂本少佐。」

坂本少佐

「む。サーニヤ、何？」

サーニヤ

「さっきの青年は、目の事を言う。」

坂本少佐

「む？青年の目は何だ？」

サーニヤ

「青年の目は、あなたの魔眼と同じだった。」

坂本少佐

「なにい！？青年は私と同じ魔眼！？」

サーニヤ

「はい。が、青年の魔眼は、あなたの魔眼より危険だ。」

坂本少佐

「なに？」

サーニヤ

「青年が、魔眼を使って、誰もが死ぬと言う。ネウロイは、斬られて、再生するが、再生することができない。」

坂本少佐

「なっ、バカな。あり得ない……」

サーニヤ

「私も見たら、あり得なかったが、その魔眼が恐怖したのが感じている。」

坂本少佐

「そうか……青年と会って、聞き込みをする。」

サーニヤ

「……はい。」

坂本少佐

「あなたは、疲れるなら、早く寝る。」

サーニヤ

「……はい。お休み」

坂本少佐

「ん。お休み。」

サーニヤは坂本少佐と別れ、自室に戻って、窓を見ながらさっきの青年を想像する。

サーニヤ

「（青年は、イケメンし、凄く強くて、人を心配する所もあり、私達ウィッチより凄い魔力が持つ者ですが、・・・・・・・・何者ですか？いつか青年とまた会う・・・・・・・・）
と頬が赤に染めながら考える。」

サーニヤは、眠い目を擦りました。

サーニヤ

「・・・・・・・・眠い・・・・・・・・」

サーニヤは、目を閉じて眠かった。

1年後、青年が、宮藤芳佳と坂本少佐と邂逅に会う後、サーニヤと再び会うかもしれない。

第10話「ストライクウィッチーズの人と再び邂逅!？」

一年後、蒼髪の青年は、精霊みたいな人の二人と一緒に海を通しながら、飛行する。

孫悟龍 side

孫悟龍

「(やれやれ。今、芳佳は、既に坂本と一緒に軍艦大和に乗っていた・・・それって原作が開始する。)」
俺がこの原作を覚えるように思うと、赤い小悪魔みたいな精霊が声をかけている。

赤い小悪魔みたいな精霊

「兄貴。その後はどうする。」

俺に声をかけるあの子は、赤い小悪魔みたいな精霊の名前はアギトだ。この子は、融合機デバイスです。

リムーンってそれは、真名で、俺の本当の大切な名前を呼ぶ。

真名では、彼だけの掟です。真名は、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることは許

されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺せている。

孫悟龍

「ん。ああ。謎の機体　ネウロイや化け物がうろろして出現するかもしれない。それに美しい星（地球）を征服する奴も。俺達の役目を覚える？そう、この役目は、化け物を倒すためにその事を阻止する。」

アギト

「しかし、私達はどうなる？私達と一緒にやるのは嬉しいだが、鷹宏達の足手纏いするかもしれない。」
「とそう困ったようで言うと雪のような銀の精霊がうんうんと頷く。」

雪のような銀の精霊の名前は、リインフォース？だ。あの子も融合機デバイスです。

孫悟龍は、アギトの言葉を聞いて、ニヒルな笑みをした。

孫悟龍

「なに。アギト、リイン？。大丈夫だ。俺が持つてる属性は、火、水、雷、風、土、氷、光・・・そして、闇など全ての属性です。あなた達と融合するのは出来るかもしれない。」

アギトとリイン？が驚愕した。

孫悟龍

「俺の属性は、全ての仮面ライダー&神話の武器の能力と同じぐらいにしたが、俺のオリジナルの技が全て持っている。」

アギト

「なんと……」

と驚愕したようである。

リイン？

「凄い！？リユムーン！？」

目が輝きながら、言う。

孫悟龍

「アギトは、俺と融合した後、炎を取り込む時に、炎を強化するかもしれない。リイン？も俺と融合した後、氷を取り込む時に氷を強化するかもしれない。」

アギトとリイン？は、俺の言葉を聞いて、体をピクツとした

アギト・リイン？

「「本当！！？？」」

とズイツと俺に迫りながら、言う。

俺は、そんな精霊らの二人を見て、苦笑する。

孫悟龍

「ああ。本当。」

リイン？とアギト

「「やった〜！／よっしや〜！」」

嬉しきな声をする

孫悟龍は、そんな二人をみて、くすくすと笑っていた。その時に、邪悪な魔力を感じているのを顔が険しくなった。

孫悟龍

「（む？邪悪な魔力を感じる・・・）」
と邪悪な魔力が感じる所を見ている。

孫悟龍

「なっ！その所は、軍艦赤城の所！！？」
と驚愕な顔をしながら、大きな声で言う。

アギト・リイン？

「「ん？」」

孫悟龍

「ちつ！リイン？！アギト！俺の服を掴んで！」

アギト

「おい。貴方が焦っている。」
と俺を惑いながら言う。

孫悟龍

「いいからつ・か・ん・で・く・れ！！！」

アギト・リイン？

「ハイ！！！」

と俺のそんな顔を見て、ビシッと立って、速く俺の服を掴んだ。

孫悟龍

「よし。その前に3つの注意を言う。一つは、しっかり掴む事。二つは、俺に話をかけない事。三つは、舌を噛まない事。」
とまじめな顔で言う。

アギト・リイン？

「え？何やっている（よ）（？）」「
と頭を傾げる。

孫悟龍

「そう言う事！」

俺の体の周りが気を纏めながら、さっきの所を見た所へ敢行した。
ゴウツッ！！

アギトとツヴァイは、嫌な予感を感じたように額から冷汗をする。

俺は、見たところを速く飛行しに行く。バツッ！！ビュッ！！
ンッ！！

アギト・ツヴァイ

「「やっつっつぱー！！！！！！！！！！り！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！」

悲鳴するよつに叫ぶ

孫悟龍 side out

ストライクウィッチーズのアジト side

深く蒼い、ブリタニアの空。

白く真珠のようで輝く夏の太陽。

風がかすかに草葉を揺らす、翠の草原。

そんなターナーの名画を思わせる絵の中に、煉獄軍第501統合戦
闘航空団、ストライクウィッチーズの基地はあった。

かすかに陽炎が立つ滑走路の隅に置かれた、デッキチエア。

それを三人の少女が居る。

水着姿でそこに寝そべり、なめらかな肌を焼いているのは、リベリオン出身のシャーロット・E・イエーガー大尉と、ロマーニャ出身、ウィッチの中では一番年少のフランチェスカ・ルツキー二少尉である。

ツインテールの黒髪のルツキー二は、言いたい事を口にせずにはいられない、みんなのかわいい妹分と言ったところ

ブラウンの髪を風になびかせるシャーリーは、「グラマラス・シャーリー」の二つ名が示す通りのナイスバディを誇る、大らかで笑顔を絶やさない美少女だ。

シャーリー

「お〜、お帰り〜」

空を舞っていた二機のウィッチが下りてくるのを見て、シャーリーは気の抜けた声をかける。

着陸したのは、蒼髪青年に助けられたオラーシャ陸軍から来たサーニャ・V・リトヴァク中尉と、スオムス空軍出身のエイラ・イルマタル・ユージェイライオン少尉。

北国の出身である二人は、透き通るような白い肌をしている。

そう。ネウロイの侵攻に対するブリタリアのイージスの楯、ストライクウィッチーズは、各国の精鋭を集めた連合部隊なのだ。

???

「相変わらず、緊張感のない方々ですこと。戦闘待機中ですよ」と、シャーリー達の傍らにやって来て声をかけてきたのは、優雅に日傘をさしたペリーヌ・クロステルマン中尉。

その少女は、眼鏡の奥の瞳に知性この金髪で、ガリアの貴族の出。射撃においても。フェンシングにおいても他者に引けをとることが無い自信家だ。

ペリーヌ

「データ解析だと、あと二十時間は来ないはず。中佐から許可も貰ってるし、それに暑いし、見られて減るもんでもないし。」
嫌味を言われても、シャーリーはいたってのん気だ。

ルッキーニ

「ペリーヌは、減ったら困るから、抜いてじゃ駄目だよ。」
ルッキーニは、シャーリーのいたって豪快な胸と、ペリーヌのかなり控えめなそれを比べて、ニツと笑う。

ペリーヌ

「お、大きなお世話です！まったく！」
とツンと澄ました表情を見せる。

どうやら、人並みはずれて小さいという自覚はあるらしい。

ペリーヌ

「間もなく坂本少佐がお戻りになります。そうしたら、真っ先に、あなた方の弛みきつた行動について進言させていただきますわ！」

シャーリー

「告げ口する気？感じ悪〜」

と胸を揺らす。

シャーリーとペリーヌは、前々から反りが合わない。

シャーリーの能天気さがペリーヌの神経を逆撫でし、ペリーヌの上品ぶった物言いがシャーリーにはとてもなく嫌味に聞こえるようだ。

ルツキーニ

「ぺたんこのくせじ〜」

シャーリーの尻馬に乗る。

ペリーヌ

「お黙りなさい！つて、あなたにだけは言われたくありませんわ！」
と、ルツキーニを睨みつけたその時。

ウウウー—————ッ！！

基地全体に響き渡るように、サイレンが鳴った。

ストライクウィッチーズ

『！！？』

ペリーヌ

「敵！？」

シャーリー

「まさか！？早すぎる！」

厳しい表情を浮かべたペリー又は、ハンガーに向かって走り出す。ルッキーニとシャーリーも、先ほどまでとは一変した真剣な顔つきで軍服を驚掴みにすると、袖に手を通しながらペリー又の後を追った。

ストライクウィッチーズのアジト side out

??? side

???

「（どうして……こんなことになっちゃったんだろ？）」

診察台の上で震えながら、その少女の性格は明るい、どこかそっつかしい、ごく普通の女学生、宮藤芳佳は、ぼんやりと考えていた。

芳佳

「（私、お父さんに会いたかっただけなのに）」

激しい振動と轟音。

芳佳が避難しているのは、扶桑皇国遣欧艦隊の航空母艦、“赤城”内の医務室である。

ブリタニアに到着寸前の艦隊は、巨大ネウロイの急襲を受け、現在交戦中。

白い雲の上から突然現われた、エイのようなシルエットを持つネウ

ロイは、強力なビームを放ち、次々と護衛の駆逐艦を撃沈していった。
ドゥッ!

またしても激しい揺れ。

芳佳

(お父さん、助けて!)
ギョッと目を閉じた。
と、その時。

???

「宮藤、居るか?」
扉の方から声をする。

芳佳

「坂本さん!」

私はすぐるような目で、医務室に入ってきた人影を見上げた。

???

「なんだその顔は。情けないぞ、それでも扶桑の撫子か?」
安心させるように声をかけたのは、右目に眼帯を付けた少女。
一見して、扶桑皇国海軍士官と分かる制服を身につけている。

彼女こそ、坂本美緒少佐

私がこの赤城に乗艦して、ブリタニアの地へと向かう段取りを整えてくれたウィッチである。

(前略) 申し訳ありません。アニメと小説の坂本少佐の戦闘シーンや内容と同じで長文があつて、もつたいたいと思ひますが、この内容と違ふ所がある。

私は、ストライカーを使つて、飛行する事が出来た後、坂本少佐と作戦する事を失敗して、疲労したが、宿る、強い決意をして、もう一度に坂本少佐にチャンスを尽くす事を与えられた。

芳佳

「さつきと同じことをしても、やられちゃう……どうすれば……」
ネウロイの真上に出た私は、考えを巡らせていた。

自分も坂本も、たぶんもう限界。

あとはない。

坂本に視線を落とすと、ネウロイの体表ギリギリのところまで攻撃を仕掛けている。

芳佳

「……そうか！」
と急降下し、ネウロイに激突する寸前で進行方向を90度変えた。

芳佳

「(坂本みたいに!)」
巨大ネウロイの体表に触れるか触れないかの所を、低空飛行する形になる芳佳。

芳佳

「スレスレまで近づけば、きっと当てられない！」
ネウロイのビームは私を狙おうとするが、距離が近過ぎ、ビームは全て、芳佳の斜め上をかすめる。

芳佳

「（やっぱり！）」

前方に、体表組織に覆われたコア。
風を切って飛ぶ私は、機関銃を構えた。

芳佳

「（いけるっ！）」

自信を持って、その指がトリガーにかけられる。
しかし。

（……………あ、あれ？）

照準が合わせ辛い。

初めての飛行で疲労が激しく、視界がぼやける。
二重にも、三重にも見える目標。

坂本

「しっかりしろ、宮藤芳佳！私がやるんだ！」

私は頭を振った。

芳佳

「……………みんなを、守る！」

何とか照準を合わせて、慎重にトリガーを絞る。ダダダッ
命中。

体表組織がはがれ、コアが露出した。

芳佳

「あれが、コア！」
体を反転させ、もう一度狙いをつける芳佳。

芳佳

「（次！次で、ネウロイを倒せる！）」
だが、目が霞み、照準がなかなか合わせられない。
トリガーにかかる指から、感覚がなくなる。
身体がふらつき、だんだんコアから遠ざかってゆく

芳佳

「（……あ、あれ？体に力が入らない。駄目だ……。私は、気絶したら、また誰かを守っていない！！）ツ……ダメ……もう……」
と思いつつ、照星から視線を外した。

その時に誰かが言う。

????

「へーっ。やるねえ、このお嬢さん。安心する。私が屑機械にトドメをあげる。」

え？坂本じゃなくて誰かが青年ぐらいの安心する声を聞く。

私の隣を何かが通り過ぎて、ネウロイを命中して貫いて、燃えてる。

芳佳

「(なつ・・・凄い・・・)」ガクッ。

飾らず隠さず、今自分の見ている光景について、素直に感想で思っているので、気絶する。

芳佳 side out

坂本 side

宮藤は、ネウロイのビームを私と同じで全てかわして、私が言っておりにその機体を削って、コアが露出した。

私は、驚愕して、すぐに微笑んだが、宮藤が気絶して、コアを命中してない事を直感で感じる

まずいなあ！宮藤が気絶したから危ない！！

宮藤を助けるために私が飛行しながら剣を構える瞬間に・・・

???

「へーっ。やるねえ、このお嬢さん。安心する。私が肩機械にトドメをあげる。」

坂本

「!?!」

声をかけた所を振り返る瞬間に、何かが私の横を通り過ぎた。

炎に包まれながら速く螺旋のような矢……いや、剣をネウロイのコアに命中して貫いたら燃やした。

私は、飛行しながら止まった。

粉々に黒くのように散らした。

ネウロイが撃墜されていた。

私は、それを見惚れる

はっ！私は、何を呆然としている！！今は宮藤を助ける！！

ご無事に気絶した宮藤を抱けていた。

私は、そんな宮藤を抱けながら、矢を放れた所を振り返ったら、息を呑めて、弓を持ってたように美しい炎のような翼に朱髪に鋭い目の青年を見惚れた。

青年が、弓が消えた後、ネウロイがされた所を眺めた後、すぐに私達を見て、鋭い眼光でジッと見つめる。

宮藤

「ん……あれ……？」
と目覚めた

目覚めた芳佳が、青年の所を見た私を見て、すぐに青年の所を見て、息を呑めてる。

私が青年の所に声をかける。

坂本少佐

「青年、話をする事があるのは、軍艦（赤城）に帰る。」

青年

「……」

青年は私の言葉に同意で無言するよつに頷く。

芳佳を抱けてた私は、青年と一緒に空を降下しながら、赤城に着陸したが、青年の焰の翼が消えた。
ストライカーをまだ履ける私は、ハンガーで、それを脱げていた。

私が、抱けてた芳佳を下りる。

青年

「……………」

坂本

「……………」

宮藤

「……………」

静寂する。

あの青年が口を開いた。

青年

「問おうか？あなた達が私に聴けた噂のストライクウィッチーズか

？」

私は、とんでもない奴に出会ってしまった。

坂本 side out

孫悟龍 side

芳佳を助けることの30分前を遡る。

速く飛行した俺は、軍艦大和にたどり着く前に1?で止まっている。

孫悟龍

「おい、アギトとリン?。大丈夫だ?」

リン?

「はい、大丈夫だな(回る目)」

アギト

「リン?、大丈夫じゃない……で、悟龍、無茶に速くすぎた。さすがの私は、ゲッソリして来る。」
ゲッソリする様な顔をしながら、リン?や俺を呆れる目で言う。

孫悟龍

「む……そうか。わりい、リイン？、アギト。」

リイン？

「気にならず」

と笑顔を作って言う。

アギト

「気にならない……／＼／＼／＼」

そつぱをしながら頬に染めて言う。

孫悟龍は、まじめな事になった。アギトとリインフォース？が、俺の行動に気付いて、まじめな顔になった。

孫悟龍

「……………化け物の気配を感じる。」

アギト

「化け物は仮面ライダーの敵？侵略ヤロー？」

孫悟龍

「今は弱い邪悪な魔力の気配を感じるなら、仮面ライダーの敵やネウロイかもしれない。」

リインフォース？

「相変わらず、気配敏感が良いよ。」

孫悟龍

「さあ！まず、リイン？が、結界を張る。」

リイン？

「はい。」

孫悟龍

「アギトは・・・俺と融合しろ。」

リイン？とアギト

「え・・・？」

俺の言葉を聞けたアギトとリイン？が固まった。

リインフォース？が早く我に返った。

リインフォース？

「はっ！鷹宏！なぜ！！私じゃなくてアギトと融合する!？」

孫悟龍

「アギトと融合して、焔を強化するが、それだけじゃなくて、太陽
が要る時、俺の能力で最も強化になるかもしれない。それに、熱の

性質に近いビームは、お前の氷の魔法が効かない。」

リインフォース？

「それはそうだ・・・」

落ち込みでしゅんとする。

俺は、優しいようで、あのリインフォースツヴァイの頭をポンと叩く。

孫悟龍

「大丈夫。リイン？は、次の闘いに俺と融合する。」

リインフォース？は、俺の言葉を聞いて笑顔を浮き上がった。

リインフォース？

「ホント！？きつと約束だ！？」

孫悟龍

「ははは。約束だぜ。だが・・・」

アギトとリインフォース？が頭を傾げる。

アギト

「どうした、兄貴？」

孫悟龍

「ああ。ネウロイの相手であなた達融合騎と一緒にする時、融合する事が出来る。俺の剣の魔術とお前の得意の魔法が融合してネウロイを撃破させる。」

アギト

「なるほど。で、それがどうした？」

孫悟龍

「それは、仮面ライダーなどの敵、バケモンに魔法・魔術が使わずに良い。」

リイン？

「えっ？なぜ、仮面ライダーなどの敵、バケモンに私達の魔法とリムーンの魔術が効かない？」

孫悟龍

「ええ。魔法・魔術を超えるそのバケモン・魔物などがいるかもしれない。」

アギト

「なっ!？」

リイン？
「そんな！？」

孫悟龍

「そのバケモン共を倒すために、アレらを使おう事が出来る。（もし、銀色のオーロラが現れなれば、バケモン共が出現する時には、スーパー戦隊・仮面ライダーの力を使うかもしれない。）
真面目な顔をしながら、言う。

アギト・リイン？

「アレって何だ（よ）・・・？」

アギトらの頭の上にハテナが浮き上がる。

孫悟龍

「まあ。それより先にネウロイを撃破する。いよいよ来る。さあ、とつと準備する。」

話を逸らすようにパンパンと手を叩きながら言い、不敵にニヤリと笑ってチラツとウィッチや飛行機とネウロイが戦っていた方を見る。

アギトとリイン？は、ぼかんとして、俺を呆れて、すぐに顔合わせながら苦笑する。

アギト・リイン？

「了解、master。」

アギトとリイン？が行動を開始するなら、俺も集中するために目を閉じる。

孫悟龍

トレスオン

「投影開始」

弓を投影した。

そして、螺旋らしいな剣も出現した。

俺は、閉じてた目を開いて、螺旋らしいな剣をチラッと見た。

孫悟龍

「まさか・・・螺旋剣を二度も使う。」（サーニヤを助けたためにネウロイを重傷していた所）

不敵に笑いながら、言い、さっきの事を思い出した。

俺のところのアギトが戻っていた。

リイン？が念話を俺にかける

リイン？

「（鷹宏、結界展開完了）」

孫悟流

「（よし！俺も準備完了した。アギト！来い！！）」

アギトは、俺の念話に頷きながら、俺のところへ敢行する。

孫悟龍・アギト

「「(ユニゾンインツ！)」「」

アギトは、俺の中へ入っていた。

炎へ俺の周りに舞い上がる。

俺が持ってた剣が炎を斬り払うと俺の目は黒色から、髪は蒼色から赤色になっている。そして俺の背中に炎の翼が広がる。

孫悟龍

「よし。リイン？。俺の後ろへ200mで下げる。」

リイン？

「はい。分かったぜ」

そう能天気で言うと200mで後退した。

孫悟龍は、そんなリイン？を見て、苦笑して、ネウロイの所に振り返っていた。

おっ、芳佳が、ネウロイの体を削って、コアが出た。

孫悟龍

「へーっ。やるねえ、このお嬢さん。私が屑機械にトドメを。」

螺旋剣を光の矢に変えて、それを番えて弓を引く前に体の正面にて取懸けて構える。

それを強く引く。その剣に魔力が走り、赤い魔力が放電のようにバチバチと鳴る。

光の矢の周りに炎が包まれた。

孫悟龍

「ガラトホルグ獄炎・螺旋剣ッ！！」

とその真名を叫びながら、放れた。

放れた剣は、速く螺旋しながら、風を斬って、完全にネウロイの機体を治せる前にネウロイのコアを速く貫いたら、機体を燃やして、撃破していた。

孫悟龍

「撃破完了」

と小声のように呟く。

リン？

「(さすがリユムーンだぜ。)(」
と念話でかける

投影した弓が消えた。

孫悟龍

「(リイン？、俺が作った別荘を転移する。)(」

リイン？

「(え？どうして？)(」

孫悟龍

「(この人がお前のような妖精を見るなんて初めてかもしれないが、俺達を最も目立ちしやすいかもしれない。)(」

リイン？

「(なるほどだよ。わかったぜ。)(」
とそう言つとリイン？の足下が魔法陣を出現し、俺の別荘へ転移する。

俺は、リイン？と念話し終わったら、ネウロイを撃破してた所を眺めた。すぐに俺は、鋭いようで眼帯の侍娘(坂本)が抱けた豆犬娘(芳佳)の所を見る。

宮藤

「ん…………あれ…………？」
と目覚めた

目覚めた豆犬娘が、俺の所を見た眼帯の侍娘を見て、すぐに俺の所を見て、息を呑めてる。

眼帯の侍娘が俺の所に声をかける。

坂本少佐

「話をする事があるのは、軍艦（赤城）に帰る。」

孫悟龍

「……………」

坂本の言葉に同意で無言するように頷く。

俺は、豆犬娘を抱けてた眼帯の侍娘と一緒に空を降下しながら、赤城に着陸したが、焰の翼が消えた。
ストライカーをまだ履ける隻眼の侍娘は、ハンガーで、それを脱げていた。

眼帯の侍娘が、抱けてた豆犬娘を下りる。

孫悟龍

「……………」

坂本

「……………」

宮藤

「……………」

静寂する

孫悟龍 side out

ストライクウィッチーズ side

???

「ネウロイがも、燃えちゃって、コアをは、破壊か、確認……………」

と、驚いた調子で報告したのは、艦隊救援に急行した、ストライクウィッチーズ、ロマーニャ公国出身のフランチェスカ・ルツキーニ少尉だった。

???

「……………、こちらも確認した。ネウロイ撃隊。」

と冷静か動揺かのような声で応えた。

この声は、カールスラント出身のゲルトルート・バルクホルン大尉。
ストライカー
使用飛行脚はFW190D-6プロトタイプ。

瞳に憂いを湛えた黒髪のバルクホルンは、二百五十機撃墜を誇る、
ウィッチーズのエースの一人である。

バルクホルン大尉

「なぜ、何が起こった……」

何か起こったのを戸惑う。

???

「坂本様……！ご無事ですか！？」

坂本の姿を求め、落ちてゆく巨大ネウロイに向かって、加速するのは、ペリーヌ中尉。

ルッキーニ少尉

「ペリーヌの奴、どさくさに紛れて少佐に抱きつく気だよ。……ん？」

笑っていたルッキーニは、ネウロイの上方に坂本の姿……そして、もう一人、男性の姿を発見した。

ルッキーニ少尉

「（あれって……）」

ルッキーニの瞳に映る坂本の腕の中には、抱きかかえられた芳佳の姿が。

ルッキー二少尉

「（……東から来た、新しい魔女ってこと？……ふうん、ちょっと面白くなりそうじゃない？それにその兄さんは……）」
少佐の前に焰の翼を広げる青年が居る

ペリーヌ中尉

「あら？」

ペリーヌも気がつく。

ペリーヌ

「な！ななな、なんですのアレは！？」

自分以外の少女が坂本の腕に抱かれているのを見たのは、顔を真っ赤にして憤慨する。

ペリーヌにとって坂本は、恋愛感情に近い崇拜の対象なのだ。

ストライクウィッチーズside out

孫悟龍side

静寂する

お前達と出会うのが、俺だけはお前達を知ってるなら、お前達が知ってる噂である俺を変化する事が知らないから、猫被りで言う方が
良い。

孫悟龍

「問おうか？あなた達が私に聴けた噂のストライクウィッチーズか？」

坂本少佐

「はっ。はい。私達w「勘違いするな。私は、あなた達を助けるじゃない、私達は、ネウロイを実験する扱いをするだけだ。」…ッ！」

と俺が掛けた声で隻眼の侍娘は我に返って、俺に感謝する途中に厳しい声で遮断するから、息を殺す。

孫悟龍

「フン。私は、気に食わない化け物らを殺すだけの事をする。」

孫悟龍

「私と仲間らは、地球を守る気が無いが、気に食わないバケモンを殺すために来た。」

鋭い目で言う。

坂本少佐

「~~~~~ッ!!!」

言い放題をする俺を睨んだ。

孫悟龍

「はん。私達は、甘い正義な人が大嫌い。私達は、自分達のやり方

をするだけのやる。正義は、悪にとつての敵がいる。正義の人は、罪が無い人を助けるのが良いが…！正義への憎悪な人がいるかもしれない。」
と自嘲的に笑って、アンチ正義の事を言う。

芳佳

「そうじゃない!!?? ウィッチは、人を助ける為にネウロイと戦ってきたんです！」

孫悟龍は、舌打ちしながら、芳佳の甘い言葉を聞いてイラついている。

孫悟龍

「甘えるな!!??」

激怒のような大きな声で言う。

芳佳

「ひっ！」

孫悟龍

「それは、お前が言う正義の理想郷ですか？やっぱり甘い！砂糖より甘い！俺は、甘いやり方が嫌い!!?? お前は、邪悪な人を見逃してもいい？もし、あの人を見逃すなら、また人を楽しいようにたくさん殺すかもしれない。もう二度は、見逃せなくて、生きてはいけない!! 人間は、裏切るだけの事をする人が、沢山居る。お前は、軍人になる後、上司の酷い命令をして、人を駒や道具のように操るかもしれない!??」

坂本

「……ッ！お前ッ!？」

と憤慨のように、隻眼の侍娘が日本剣：いや、扶桑剣を構える。

孫悟龍

「おっと、無駄よ。俺を斬る瞬間に能力であなたを先に斬るかもしれない。」

坂本

「くっ!」

悔しくて歯軋りをして、俺を睨んだ。

孫悟龍

「いい事を教えてあげる。くくく。私が、既にウィッチーズを超えた宮藤みたいな魔力を超えたのが持っていた。」

サイヤ人の残酷な笑いで言う。

坂本

「なッ!何…!」

孫悟龍

「もし、弱いテメエみたいなやつは俺を襲う瞬間に敵と決めた時、本気を出せて、あなたが死ぬ。」
「凄い殺気を纏めながら抽出する。」

坂本

「な……」

その殺気を受けながら驚愕と恐怖で顔が青ざめる。坂本は俺が危険だと感じている。

宮藤

「あわわ……！」

宮藤が、恐怖のようでもうへたりと腰ぬけした。

孫悟龍

「大丈夫だ。俺は、弱い奴を殺すなんて無意味だぜ。」
と安心するように言う。

孫悟龍

「だが、俺は、殺す気で強い奴と闘うのが楽しい。」
ニヤリと不敵な悪笑みで言っている。

孫悟龍

「それにさっきの少ない邪悪気配がまだある。」
とキョロキョロで見回る。その時。

????

『ジエメジャメー！』

海軍兵

『うわああああ!!バケモン!』

バケモンを見て、叫びながら逃げ回る。

孫悟龍

「む!これは!?!」

海軍兵共が叫んだ声を聞いて、振り返って、アメーバを人間の身長と同じに急成長させて造りだした下級兵士、ゾルルとゲルルらがその人達を襲える。

坂本

「な!?!コレ何!?!」

芳佳

「変な兵……?!」

下級兵士の中でライオンとタンポポが合成するような怪物が出現する。

バクダンデライオン

「我は、トリノイド4号バクダンデライオン!!戦艦赤城を頂く!?!?!」

芳佳

「バケモン……！」

孫悟龍

「…出た…アバレ怪人」

と険しい顔で誰にも聞こえないようにで呟く。

坂本

「分からないけど、戦艦赤城は渡さない！」

と剣を構えて、バクダンデライオンに向かい駆けて行く。

孫悟龍

「止せ！？お前が敵わない！！」

坂本少佐を止めるように言うが、坂本少佐は、俺の言葉を無視してバクダンデライオンを襲う。

坂本少佐

「はああああー！！！！裂風剣！！」

とストライカーを使わずに使い魔状態で剣を振って、バクダンデライオンを斬る。その時、バクダンデライオンは、振ってた剣を受け止めた。

坂本少佐

「なにー！！」

と驚愕するように目を開いた。

バクダンデライオン

「あん？弱い人間が俺様に用があるか？」

バクダンデライオンは、不機嫌で言った後、受け止めてた剣を払う。

坂本少佐

「くっ！」

剣を構え直す。その瞬間に殴られる事を直感する坂本少佐が魔法障壁を展開するが、バクダンデライオンが坂本少佐のバリアを手加減なしで強烈に砕き、殴る。

坂本

「何い！わああああー！！！」

バリアを砕かれた事を驚愕した瞬間に遠くに吹っ飛ばれて、空を舞って、滑走路に三度叩かれて倒れて、頭から口から血が流れた。

334

宮藤

「坂本さん！！！」

宮藤は、倒れた坂本の所に駆けて行く。

そんな坂本を見て、息を吞まれる。

宮藤

「これは、酷い傷！！今から治療する。」

とそう言つと、落ち着けながら魔法を使う。

坂本少佐

「くつ。な、な…んて力だ。（バケモンの力は。バルクホルンの使
い魔の力と同じ…いや以上だ!?）」
頭だけが上げながら、思う。

バクダンデライオン

「愚かな人間。ゲルルとゾルル共、やれ。」

ゲルルとゾルル共

『ジエメジエメ!!』

海軍兵を襲いに行く。襲われる海軍兵が断末魔のように叫んだ。

坂本少佐は悔しくて滑走路を叩く

坂本少佐

「くそ!?バケモンに私…いや私達ウィッチーズが勝てない!!く
そ!?!」

と悔しいように言っつて滑走路をまた叩いた時に誰にも聞こえないよ
うな舌打ちをする俺が、坂本少佐や宮藤の前を出た。

坂本少佐は、驚愕して、俺を見上げた。

坂本少佐

「!?!まさか、あなたがバケモンを挑みにする。やめろ!?!お前は、
死ぬ!?!」

俺に警告の言葉を言っているが、俺は、聞いてない。

孫悟龍

「……気に入らない。」
とそう呟くと歩き始めた。

バクダンデライオンは、歩いた俺に気付いた。

バクダンデライオン

「あん。また愚かな人間が自殺行為するように行動する。まあ、俺様に何か用だぜ？」
呆れた声で言う。

孫悟龍は、歩き止まって、不敵な笑みをした。

孫悟龍

「はん。用があるが、お前達が罪がない人を襲う事を気に入らないと感じて、テメエを潰せている。」
冷たい声で言っている。

バクダンデライオン

「ほお、臆病な人間が、良い目をするが！！俺様を潰せる！？ふざけない！！」
怒りと殺気を出している。

坂本が、バケモンの殺気は今までの奴の殺気と違う事を感じて、額に冷や汗が流せている。

宮藤も、それを受けて、恐怖で震えて、体が動けない。

坂本少佐が、チラッと俺を見て、驚愕をする。

俺は、誰かの殺気を受け流れて、余裕のような笑みをする。

孫悟龍

「フン、てめえは、俺に勝てない。」

左手を上げて、いつの間に手首には白い翼竜の頭のブレスレットをつけている。

バクダンデライオン

「うっ!!?!?これは!?!まさかお前もアバレンジャーの一員!?!」
ブレスレットを見て、一歩後退しながら、目を開いて驚けた。

孫悟龍

「そうか?違う。(わりい、アギト。もう少し付き合って。)」
俺はアギトに念話をかけながら、言う。

孫悟龍

「爆竜チエンジ。」

爆竜の鳴き声が響く。

同時にブレスの中に収納されている、白いアタック・バンディレット・レジスタンススーツ……通称「アバレスーツ」が俺の体を覆い、エヴォリアンと闘う戦士……「爆竜戦隊アバレンジャー」へと変えた。

アバレキラーへと変身した。

アバレキラー

「ときめきの白眉。アバレキラー!!!」
基本色は白。とげのような模様の色が、黒だからだろうか。それとも仮面の目にあたる部分が、血のような赤だからだろうか。

坂本や宮藤は、変身した俺を見て、驚けた。

坂本

「悪い青年が、変身しちゃった……」

孫悟龍 アバレキラー

「さあ、掃除の時間だぜ。」

バクダンデライオン

「ほざけ!!!青二才!ゾルル・ゲルル共、やれ!!!」

ゾルル・ゲルル共

『ジエメジエメ!!!』

ゾルル・ゲルル共は、俺だけを襲いに行く。

アバレキラー

「……ふっ、雑魚共に用はない!!!」
言った。

アバレキラーは、走る瞬間に最早残像が見えるか見えないかのスピードで、ゾルル・ゲルル共を叩き伏せて行つて、次々と倒せて行く。

宮藤

「凄い……」

坂本

「なっ…バカな、シャーリーの音速と同じ…いや以上の速さだ。…
…凄いなあ。それにおまえは、何者だ。」

バクダンデライオン

「くっ！なぜスーパー戦隊が、この世界に居るなんて話は聞いてない…！」

アバレキラー

「……」

バクダンデライオンの前に腕を組みながら無言をする。

バクダンデライオンは、それを見てギョツと驚愕していた。

バクダンデライオン

「なっ…！早いなあ！」

アバレキラー

「……俺は、弱い雑魚共に襲われる事が嫌い。強い奴だけと闘うだ

けで楽しい。」

バクダンデライオン

「くそ！何をぶつぶつ言うのがウルセエ！！」

バクダンデライオンは、腕を組みながら動けない俺の所へ駆けるので、牙で俺を斬る。

自分の手は、バクダンデライオンの腕を受け止める。

バクダンデライオン

「なっ！」

アバレキラー

「遅い。もういいだけ。てめえは、気が短いで、ときめくないので、殺す。」

呆れ気味や殺気のように言う

バクダンデライオンの腕を左手で払って、身体を三度もミドルキックした。

怯まれたバクダンデライオンの顔を強く握った後、後ろ投げをした。投げられたバクダンデライオンが倒れた。

アバレキラーが、ザッと歩く。

バクダンデライオン

「くっ。」

すぐにフラフラと立ち上がる。

アバレキラーは、いつの間にウイングペンタクトを持っていた

坂本や宮藤は、俺が持っていた物を見た。

宮藤

「羽のペンタクト・・・？」
と呟いた。

無数の矢を描いて、現れた。

坂本

「なっ！描いてた矢をいっぱいのように現れた。」

アバレキラー

「これでくえ。」

無数の矢を自在に操って、バクダンデライオンを襲う。

バクダンデライオン

「ぐわああああ！」

無数の矢を受けて、倒れた。

アバレキラー

「……とどめ。」

アバレキラーは、ウイングペンタクトを持ちながら、フラフラと立ちあがるバクダンドライオンの所へ音速のようなスピードで駆けて行った。

バクダンドライオン

「くっ……!?!」

フラフラ立ち上がって、俺が襲いて来る事を気付いていた。

バクダンドライオンの体にxを描いて、爆発を起こした。

バクダンドライオン

「ぐがああああ!」

体をあちこちのプラズマが走った。

アバレキラーは、バクダンドライオンの近くに通り過ぎて、止まる。

アバレキラー

「……あいつは、地獄に堕ちる。」

背に向かって歩く。

バクダンデライオン

「あ……ああ……ああ」

体に火花があちこちに起こって、前のように倒れた。

バクダンデライオンがまた大爆発を起こって、爆散した。

アバレキラーは、変身解除した。

孫悟龍

「……（やれやれ、まさかスオムスだけじゃなくて、ここまで出現する事が思わなかった。）」

冷静の中にスオムスの件の事を思い出しながら、ザッと歩く。

坂本少佐が、俺の所に走っていた。

坂本

「今のはなんだ？」

孫悟龍

「……今のお前達に説明する必要はない。俺達はお前達と関係ない。」

と不機嫌で言う。

坂本

「なんだと……」

孫悟龍

「……でも、今の俺は、お前達ストライクウィッチーズと大切な用事がある。」

坂本

「私たちに大切な用事？」
と戸惑いのようで言う。

孫悟龍

「さあ？ストライクウィッチーズという基地に到着するから話をする。そうそう。この前に豆犬娘が大切な用事があるなら俺は、少女の用事が終わるのが待つ。」
片目を閉じながら、傲慢に言う。

坂本は、俺の傲慢を腹立つ。

俺は、言い終わった後、坂本に背を向けて歩く。

坂本少佐

「くっ。」

俺の背中を見て、悔しい感じや腹立つように睨んだ。

誰でもない場所で俺が居る。

孫悟龍・アギト

「(ユニゾンアウト)」

アギトと融合した俺が隔離して、俺の姿が元に戻った。

孫悟龍

「有難う。そして、御苦労様だ。アギト。」

アギト

「そんな／＼／＼／＼、気にしない。あたしは、鷹宏と融合をして出来た事が嬉しい。／＼／＼／＼」
頬で赤を染めながら、ポリポリと搔いて言う。

孫悟龍は、そんなアギトを見て、クスクスと笑いながら穏やかな顔をする

孫悟龍

「別荘に転移してくれ。」

俺の言葉にアギトがその意味に気付いた。

アギト

「リユムーン以外が私とツヴァイのような精霊を見て捕まえるかもしれない。」

孫悟龍

「そのとおりだ。とっとと転移して。」
輝くような笑顔で言う。

アギト

「（ドキン）／＼／＼／＼／＼まあ、分かった。」
とそう言つと、俺の笑顔を見惚れて、アギトの足元に魔法陣が現れて、すぐに消えた。

孫悟龍

「（そうだ。ヴォルケンリッターの修行はどう。」

孫悟龍

《ヴォルケンリッターの諸君、修行はどうなる？》
念話でヴォルケンリッターにかける。

シグナム

《む。主リユムーン……ああ、主鷹宏のお陰で私達は、一段と強くなった。》

リインフォース？

《主リユムーン、私も難しいな魔法を覚えていた。》

孫悟龍

《ほつ、それは、良かったが、精神を強くなる方が良いと思います。》

リインフォース？

《なるほど。精神力を強くなって、魔法力もバランスよく支えられて、強くなっている。》

孫悟龍

《その通りだ。話を分かる奴なら早い。》

リインフォース？

《有難うございます。主リユムーン。》

孫悟龍

《そう。ザフィーラは、どうする？》

ザフィーラ

《俺も、強くなったが、まだまだお前に追い付けない。もっとも強くなる。》

孫悟龍

《そう……そいつは、楽しみだ。絶対に強くなってくれて、俺を驚

かせて見る。》

ザフィーラ

《当たり前だ。》

俺の言葉で念話に、ザフィーラはニヒルな笑みを浮かべ答えた。

孫悟龍

《今の俺達の戦力に、ここの強い奴が敵わないだぜ。》

ヴィータ

《当たり前だ！強くなったあたし達も誰にも負けない！！》

孫悟龍

《そうか、修行御苦労様。お前達に褒美を上げたいと思う。》
と不敵な笑みで念話をする。

ヴィータ

《なにい！！アイスを食べてもいいですか！？》

孫悟龍

《いい。ごめん。俺は、忙しい用事がある。》

ヴィータ

《そうか。》

としゅんと落ち込む。

孫悟龍

《でも、お前達が俺の部屋に入っても構わない。ただし、俺の部屋の物に勝手に手を出せたり使ったりするのが禁止！！あなたの色に合ったりボンが包まれたような色箱を自分の部屋に持っていくのが構わない。》

シグナム

《もし、するならどうなる？》

孫悟龍

《それは…今までの修行より地獄のように特訓する。》
ドス黒い声で念話をする。

俺の怒りや恐怖で感じるような鳥肌が立つ。

ヴォルケンリッター

《騎士の名に懸けて主鷹宏の大切な物に手を出せない事と使う事を禁止する！！》
約束を交わしてる。

孫悟龍

《ん。よろしい。》

孫悟龍

《あつ、いよいよ到着する。念話を切る。じゃあ。》
念話を切った。

孫悟龍

「（宮藤の奴、宮藤の父さんの真実を分かっていたが、覚悟でストライクウィッチーズに入る事が決意していた。）」

いつの間に、髪を赤に魔法で変装して、いつもの戦士な顔に戻った。

夜でブリタニアを上陸した。

孫悟龍

「そうだ。夜遅くなったら、ストライクウィッチーズに出会う前に、ログハウスを作るが、その前にうるさいように聞こえる音を防ぐ结界をはる方がよい。」
防音结界を張る。

孫悟龍は、いつの間に家を造るための道具を出た。

孫悟龍

「よし！始める！！」
手を握るのを作って、ログハウスを作り始めた。

ログハウスを造り始めた2時間後

孫悟龍

「ふっつ、出来た。」

額で汗を腕が払う。

ネギまのエヴァンジェリンのと同じぐらいで造った。

孫悟龍

「次に、ログハウスの周りで2キロを俺たち以外の人払いと幻影の魔法にはる。」

とそういうと、一言、二言、呪文のようで呟く。

ログハウスは、森と似ている幻影になっている。俺たち以外は、ログハウスを森と扱われて、見た。

孫悟龍

「よし。準備完了。さあ、ログハウスに入る。」

ログハウスに入った。

既に家庭品がある。

孫悟龍

「はあ、やれやれ。俺は、家庭品を自分で買っていた。なぜなら、前の世界で今までのバイトをしていた俺が死んだあと、金をいっぱいある。まさか、三百億円ぐらい貯まっていた。(汗)」
頭を抱いて言う。

孫悟龍

「まあ、家の中であちこち（和室、洋室、自分の部屋など）の場所を家庭品に置く。」

孫悟龍は、家庭品にあちこちの場所を置いた。最後に、地下室に武器と仮面ライダーの変身セットとスーパードクター戦隊の変身セットは、本物と近くぐらいにいっぱい置いて、別荘が入っていた水晶に置いていた。

孫悟龍

「ふうっ。終わった。みんなを呼ぶ。」

孫悟龍

《おい、ヴォルケンリッターら。別荘から出る。》

シグナム

《ん？主リユムーン？》

孫悟龍

《ふふ。いいから出る。》

ヴォルケンリッターが、俺の言つとおりに出て、俺のログハウスを見て、驚いた。

シグナム

「すごいなあ。」

ヴィータ

「すごい！ー！兄貴！ー！」

と目を輝いて言う。アギトとリイン？がうんうんと頷いた

ザフィーラ

「……………」

俺を見て、凄いなあと思う。

リインフォース

「主リユムーン。でも、私たちの部屋は、どうする？」

孫悟龍

「ん？あ、ああ。大丈夫。部屋は、いっぱいある。」

ヴォルケンリッターがその事を安堵する。

孫悟龍

「さあ。」

黒い笑顔で、ヴォルケンリッターに振り返って、見てる。

孫悟龍

「次は、俺と一緒に寝るのは駄目。」

ヴォルケンリッター（ザフィーラを除く）

『ええ……………っ！そんな！！』

孫悟龍

「俺たちは、自分の部屋で寝る。い・い・か・ら・寝・る」と黒いオーラを纏めながら、笑顔で言う。

ザフィーラを除くヴォルケンリッターは、今の彼を見て、危険と感じた。

ヴォルケンリッター（ザファイラを除く）

『はーい！おやすみなさい！主リユムーン』
涙目で、急いで自分の部屋に入った。

ザファイラ

「おやすみなさい。リユムーン」

孫悟龍

「む。おやすみなさい。ザファイラ、みんな」

俺は、ヴォルケンリッターの気配が消えるまで調べてる。

孫悟龍

「みんな寝た…ふあゝ。俺も寝る。ZZZZ」

欠伸をして、横になって、寝る。

……まさか青年は、もうスーパー戦隊の敵と邂逅して、闘う事が始める。そして、対ネウロイ用に編成された精鋭部隊、連合軍第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズに再び出会う。俺たちは、ストライクウィッチーズとの日々の始まりです。

青年は、黒猫の銀髪少女と再び会う。何か不思議な事が起きるか？
起きないか？

第10話「ストライクウィッチーズの人と再び邂逅!？」（後書き）

次回予告

孫悟龍

「オッス、俺、鷹宏」

孫悟龍

「ストライクウィッチーズの少女達と出会うが…」

黒猫の銀髪少女

「お前は……」

孫悟龍

「お前達は、俺達と同じバケモンと闘えるのはいけない。強く過ぎたバケモン共は、俺達だけが闘える。」

カタブツの少女

「なんだよ、青年!!偉そうに言う!!」

孫悟龍

「……いい。ただし、条件がある。」

第11話「孫悟龍、ストライクウィッチーズに三つの条件をする」

フリーザ編予告 孫悟龍、スーパーサイヤ人変身シーン（前書き）

孫悟空が、スーパーサイヤ人に変身するシーンと同じ

フリーザ編予告 孫悟龍、スーパーサイヤ人変身シーン

フリーザを元気玉で倒したら小さな島にストライクウィッチーズとヴォルケンリッターと銀牙と孫悟龍が居た。

銀牙は、何かの音を聞いて、その所を見るなら、恐怖で染めた。

銀牙

「ああ……バカな!!」

と恐怖で何かを見て言う。

ストライクウィッチーズとヴォルケンリッターと孫悟龍は、銀牙が見る所を追いかけて見る。

サーニヤ

「……え!!」

芳佳

「そんな……!!」

シグナム

「バカな!! 元気玉を喰らったはずなのに……!!」

フリーザは、ボロボロになったようで、立つ。

みんな

『フリーザ!!』

フリーザ

「このフリーザ様が死にかけたんだぞ……」

怒気のような声で言いながら、デスビームを放つ。

ザフィーラ

「主!!」

孫悟龍をかばうように押して、デスビームを受けてしまった。

ヴィータ

「ザフィーラ!!」

フリーザ

「貴様らを許すと思うか？一匹残らず、生かしては帰さんぞ……」
念力のような技を放つ。

銀牙

「あっ……あああ」

それを受けて、浮き上がる。

フリーザ

「フフフフフフ」

銀牙を念力でまだ浮き上げる。

孫悟龍

「銀牙！…ヤッ、やめろ、フリーザー！…！！」

フリーザ

「クククク……」

手を握った。

銀牙

「兄さん！…！！」

体が爆発した。

孫悟龍

「！！」

残さず銀牙が消滅して死んだように見て、ショックした。

フリーザ

「クククク……ハハハハッハハ！！」

バルクホルン

「なんと……！！」

エーリカ

「酷い悪魔……！！」

芳佳

「そんな……死ぬ」

凄いような恐怖で気絶直前にするようにサーーっと顔を青に染まった

地球が震えた。

ミーナ

「！？凄く地球が震える！？」

石と石みたいな地面が浮き上がる。

孫悟龍の中心に雲が集まって、黒雲になった。

孫悟龍の周りに雷が起こった。

エイラ

「……ヒッ！！」

雷の音を聞けて、恐怖のように震える。

サーニヤ

「大丈夫、エイラ？」

エイラを心配するような声をかける

エイラ

「大丈夫ダ！！」

我慢するように言い返す。

坂本

「孫悟龍……？……ッ！凄く気が膨れる！？」

固有能力の魔眼を使えて、孫悟龍を見たが、気がだんだんと膨れる。

ストライクウィッチーズ達は、孫悟龍の髪が黄金色に変えたような

SS（スーパーサイヤ人）孫悟龍

「フリーザーーーーーッ！！！！オレは、怒ったーーーーー
ーーーーッ！！！！」

ストライクウィッチーズの世界は、伝説のサイヤ人に降臨した。

フリーザ編予告 孫悟龍、スーパーサイヤ人変身シーン（後書き）

はい、終わり。

この続きは、本編を読む。

でも、時間を掛かるのがあるかもしれない。

それは、もったいないことをして、申し訳ありません。

????の騎士・戦士隊side

蒼髪青年、孫悟龍は、朝5時に起きていた。

孫悟龍

「ん〜。良い朝だ。」

別荘に入って、半日の時間（外の時間の30分間）でいつものトレーニング（中華空手と武器のイメージ、精神力の強化、剣を振る、強い敵と戦うイメージなど）をする。

孫悟龍は、何度か刀を振り、自身を研ぎ澄ましていく

もつとまっすぐに美しく一閃を描けるように……

そんな中、シグナムとザフィーラが、俺の所に来る。

シグナム

「おはよう。主リユムーン」

ザフィーラ

「おはよう。リユムーン」

孫悟龍

「ん。おはよう。シグナム、ザフィーラ。俺いつものトレーニング

グに付き合わせて見る。」

シグナム・ザフィーラ

「はい。ノ（コクリ）」

俺は、シグナムとザフィーラとトレーニングをする、3時間後、シグナムとザフィーラと別れて、冷たいシャワーで身体を洗う。それを終わったら、別荘に出て、今、5時30分になったら、朝食を作る為にリビングへ歩いて行く。

リビングに居たリインフォースとシャマルは、読書を読む。銀牙は、椅子の隣に小狼形態のまま、座る。

銀牙は、俺の足の音を聞いて、耳と尻尾をぴんと立て、俺の所に走って、飛んで行く。俺は、銀牙を受けとる。

銀牙は、嬉しいように尻尾を振る。俺は、優しいように銀牙を降りて、頭を撫でている。撫でられる銀牙は、気持ち良そうで、目を閉じながら、嬉しいように尻尾を振る。

アイン

「あ、おはようございます。主リムーン」

シャマル

「あら、おはよう。リムーン」

孫悟龍

「おはよう。リインフォースアイン、シャマル、銀牙。」

孫悟龍

「まっつて、今から朝食を作る。」

アイン

「待つて。私も一緒に料理する。」

本を閉じて、椅子に降りて、立ちあがる。

孫悟龍

「ん。いいよ。ミスは許さない。」

アイン

「了解、主リユムーン」

とにつこりで答えた。

シャマル

「私も…」

孫悟龍・アイン

「お前は、駄目。」

と笑顔で断る。

シャマル

「えーっ！どうして、アインがいいなのに私が駄目！！」

孫悟龍・アイン

「お前は、料理が下手だ。」

シャマルは、俺達二人の言葉を受けて、シヨックをして、悲しい。
まあ、俺たちは、そんなシャマルをスルーした

鼻歌で歌って、料理する途中に、アギトが、はっきりに起きて、リ
インフォース？とヴィータが、アウトフレームで150cmくらい
になって、目を擦りこむ。

アギト

「おはよう。兄貴、アイン、シャマル。」

ツヴァイ

「……おはよう。リュムーン、姉さん、シャマルさん。」

ヴィータ

「……おはようさん。兄貴、アインさん、シャマルさん。」

孫悟龍

「アギト、ツヴァイ、ヴィータ、おはよう。」

アイン

「おはよう。ヴィータ、ツヴァイ、アギト。」

シャマル

「おはよう。ヴィータ、ツヴァイ、アギト」
と気を直って、立つ

アギト

「あの…兄貴、あたしも一緒に手伝う？」

孫悟龍は、アギトの言葉を聞けて、微笑した。

孫悟龍

「構わない。もうすぐ完成する。準備するのを手伝ってくれ。」

アギト

「はい！」

と笑顔で答えた。

俺たちは、席のあちこちに俺たちが作った朝食（白米ご飯、味噌汁、焼き魚、サラダ、牛乳）を置く。

シグナムとザフィーラは、修行や特訓をし終わった。シャワーの後、リビングをした。

ヴォルケンリッターの私服と寝服は、アニメの内容と同じだ。

孫悟龍

「あつ、ザフィーラとシグナム。特訓御苦労。」
タオルにザフィーラとシグナムに渡した。

シグナム

「ありがとう、主リュムーン。でも、孫悟龍は、毎朝、厳しいな特訓をする？」

渡させるタオルで汗を拭く。

孫悟龍

「当たり前。俺は、宇宙の中で俺より強い奴が居るかもしれない。手強い敵を倒すためにどんどん強くなる。それに、俺たちは、まだスーパーサイヤ人になれない。」

ザフィーラ

「俺達でも勝てない奴が居る？」

孫悟龍

「ええ。サイヤ人は、無敵じゃない。サイヤ人を超えた奴が居るのは、間違いない。」

シグナム

「なるほど。私たちも、勝てない奴を倒すために精神にも身体にも鍛える?」

孫悟龍

「それも正解だが、まだ足りない。」

シグナム

「む?何が足りない。」

孫悟龍

「それは……」

ヴィータ

「難しいな事はもういいだ!!早く朝食を食べる!!」

孫悟龍

「む。それもそうだ。その事は、食べる後だ。」

シグナム

「そうだ。」

ザフィーラも頷く。

孫悟龍・ヴォルケンリッター

『いただきます。』

みんなは、自分の箸で、おかずを口に運ぶ。

ヴィータ

「兄貴の飯、ギガうまいー！ーっ！ー！」

シグナム

「ふむ。相変わらず、おいしいご飯をよく作った。」

孫悟龍

「いいえ、アインもアギトもいい料理を作るなんて認める。」
否定しながら、アギトとアインを褒める。

アイン

「主リユムーン、有難う／＼／＼／」

頬で赤を染めながら、笑顔で言う。

アギト

「兄貴、有難う／＼／＼／」

頬で赤を染めながら、頬をポリポリと掻いた。

朝食を食べる中、談笑をする。

ヴォルケンリッター

『御馳走様。』

孫悟龍

「ん。お粗末さま。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

その朝食が終わったら、シグナムとザフィーラとリインアインは、俺にさっきの質問の答えを待っていた。

シグナム

「さっきのは、それがどうした？」

孫悟龍

「それは、敵を倒す為に諦めない自信と自分より強い敵に負けない為に立ち向かう覚悟をする。」

リインフォースアイン

「敵を倒す為に諦めない自信……」

ザフィーラ

「自分より強い敵に負けない為に立ち向かう覚悟……」

孫悟龍

「ええ、実戦をして、負けたのは、悔しい感じを覚えるのが必要で、敵に負けない努力をする。」

シグナム

「なるほど、私たちの戦場と同じだが、……」

孫悟龍

「その通り、お前たちの戦場より厳しいかもしれない。でも、俺たちは、負けるのは、許せない。」

シグナム・リインフォースアイン・ザフィーラ

「っはいい！／＼（コクリ！）」

孫悟龍

「ん。良い答えだ。」

孫悟龍

「そうだ。俺は、ストライクウィッチーズに用事があるが、お前たちヴォルケンリッターは、俺の護衛です。」

シグナム

「はい。でも、ストライクウィッチーズって何だ。」

孫悟龍

「そういえば、まだこの世界を説明しない。まあ、今から早めに説明する。」

孫悟龍

「ストライクウィッチーズって……」

孫悟龍、ストライクウィッチーズの説明

ヴォルケンリッター（ザフィーラを除く）

『マジか……？（汗）』

ひきつっていて、言う。

孫悟龍は、やっぱりと思う溜息をしながらコクリと頷く。

孫悟龍

「さあ、ストライクウィッチーズと言う基地に行く。」

ヴォルケンリッター

『はい?』

孫悟龍

「いいから俺に連れて来い。行くぞ、銀牙。」
俺の言葉に聞けた銀牙が頷く

リンフォースアイン

「はあ、主の行動が本当に分からない。」
と諦めにも似た響きが含まれるアインの呟きに、同情するかのよう
にヴォルケンリッターが小刻みに頭を上下させて頷いた。

ヴォルケンリッターは、俺や銀牙の後に、追いかけて、連れていく。

ミーナside

ストライクウィッチーズの基地、執務室

美緒は、言っていた新人を連れて、ここに泊めていた。

この朝、美緒が、朝練をやり終えたら、戦艦赤城の件を私に報告し

た為に来た。

私は、美緒がその件を聞いて、驚愕するように眼を開いた。

ミーナ

「謎の赤い翼の青年……？」

坂本

「ああ、今までの青年の髪を見たこともない青年は、謎の攻撃で軽々とネウロイを撃破するが、ネウロイの事を実験扱いとする。」

ミーナ

「なんと、その青年は、ネウロイの事を、実験と扱われる……？」
と戸惑う。

坂本

「ええ、その青年は、我々軍と違うようで、ネウロイの事を侮辱するかもしれない。流石の私は、その青年が傲慢と言う事を思い出して、ム力つく所と腹立つ所を感じる。」ギリギリとその青年を思い出して、腹立つようにギリギリ歯軋りしながら、俯いて言う。

ミーナは、戸惑いながら、頬を手に当てながら考える。

ミーナ

「でも、あの青年の噂が、存在してない。」

美緒は、驚けながら、私に振り返って見る。

坂本

「何……?」

ミーナ

「それは、仮面ライダーや戦隊という噂があるが、赤髪青年の噂は、どこの隊で存在してない。」

美緒は、言う直前に、ハンガーから騒げんでいる。

坂本

「?ハンガーから騒がしい……」

ミーナ

「まさか、私たち以外は、部屋に居ます。でも、なにかしら?」

誰かが執務室の扉のドアをドンドンと叩く。

ミーナ

「入る。」

兵がここに入ると、すぐに敬礼している。

兵

「はっ!敬礼します!」

ミーナ

「ハンガーが騒がしい。なにかあった?」

兵

「はっ!謎の青年らがここに来る!」

美緒と私は、謎の青年という言葉聞いて、戸惑う。

美緒は、私が言うよりも、先に言う。

坂本

「待って。謎の青年の髪は、何色？」

兵

「はっ！青年の髪の色は、蒼です！！」

坂本・ミーナ

「！！！」

驚愕するようで目が開いた。

ミーナ

「まさか……」

坂本

「おい、青年らは、ここに来る事は構わない。」

ミーナ

「美緒っ！！」

坂本

「青年に聞き込みチャンスがする。」

ミーナ

「それはそうだが……」

坂本

「貴女の気持ちは分かってる。兵！青年らをここに連れてこい！！」

兵

「は？」

坂本

「いいから早くここに連れてくる！！」

兵

「はい！！分かった。お邪魔します！！」

と言つと部屋に急いで出る。

ミーナ

「まさか…サーニヤが報告した件とその噂が本当だと
と呟く。

この瞬間に、ここに誰かが現れた。

ミーナ・坂本

「！！！！」

なぜ、青年らは、どうやってここに現れた？

蒼髪の青年は、ざわざわする様に、その仲間と話して、止まった。

桃髪ポニーテールの騎士、狼耳が立つ男性が蒼髪の青年の前に陣取って、護衛するかのよ様な体制になった。

その人の仲間から蒼髪の青年の事をリュムーンと呼ぶ……？

私は、勇気を出して、蒼髪の青年に声をかける。

ミーナ

「あの……リュムーン……」

蒼髪の青年の仲間

『……ッ……!!』

ミーナ

「……え？」

蒼髪の青年の仲間が、驚けた事を戸惑う。

その時。

蒼髪の青年は、いつの間にも日本らしい剣を持ち、どこでも超える速さで、私の喉をギリギリ寸止めように突き付けられた。

ミーナ

「ひっ！」

坂本

「なっ！貴様……ッ……!!」

蒼髪の青年

「……てめえ……!!私の真名を勝手に呼ぶなんて穢す……!!」
怒気の籠もった声で言う。

ミーナ

「えっ？（真名？蒼髪の青年は、私がこんな名前を呼ぶなんてまずい？）」「
と疑問のよじりで戸惑う。

ミーナ side out

孫悟龍 side

俺は、溜息をする。

まさか、坂本は、兵が、俺達をストライクウィッチーズの執務室に来るなんて伝えた。

シグナム

「どうする？畏を張るかもしれない。」
警告するように警戒しながら既にバリアジャケットを纏い、愛剣であるアームドデバイス…レヴァンティンを持つ。

ヴィータも警戒しながらシグナムと同様にバリアジャケットを着て

自分のデバイス、グラーフアイゼンを持つ。

他のヴォルケンリッターもバリアジャケットに着て、シグナムやヴ
イータと同様に警戒した。

なぜなら、ヴォルケンリッターは、軍はリリな世界の管理局の組
織というものと同じぐらいに信頼する事が出来ない。

俺も、ヴォルケンリッターと同じようだが、彼らが人を駒と扱う事
で、正義の行動と合わない事が気に食わない。

孫悟龍

「む？いいえ、多分、罨を張らない。」

シグナム

「それはそうだが……」

孫悟龍

「兵。もし、本当に罨を張る時、ここを敵だと扱い、殺すかもしれ
ない。分かった？」

兵に向けて、殺気をまといながら覇気を抽出して、冷酷で言う。

兵

「ひいいいいい……！！」

と脱兎のごとくに逃げる。

孫悟龍

「あ、しまった。殺気を出せすぎて冷酷で言いすぎた。」

と頭を掻いて言う。ヴォルケンリッターは、俺を呆れるように溜息
をする。

孫悟龍

「気を向き直した。ヴォルケンリッター。俺の肩を掴め。銀牙。俺の脚を掴め。」

ヴォルケンリッター

「?」

銀牙だけは、孫悟龍の言葉の意味を分かって、俺の右脚を掴めた。

孫悟龍

「いいから、掴め。」

ヴォルケンリッターは、顔を合わせた。

ヴォルケンリッターは、分からないばかりに、シグナムとリインフオースが俺の肩を、ザフィーラとシャマルが俺の腰を、ヴィータは、銀牙の隣に俺の左脚を掴めた。

俺は、それを確認したら、主に手の指を額に当てている。

孫悟龍

「!」

とそういうと、俺達は、消えた。

シュン！

俺達は、ここに現れた。

????・坂本

「「！！」」

銀牙を除くヴォルケンリッターもここに居た二人も驚愕した。

シグナム

「主リユムーン！これは…！」

孫悟龍

「（説明は念話で話す。）」

ヴォルケンリッター

「（分かった。）」

孫悟龍

「（この技は、瞬間移動だ。）」

ヴォルケンリッター

「（瞬間移動……？）」

孫悟龍、念話で説明

シャマル

「（なるほど。それは、転移と同じだ。）」

孫悟龍

「（だろう。でも、転移と瞬間移動は違う。瞬間移動は、誰かの気を感じるなら、移動する事が出来る。」

シグナム

「（お前は、魔法と気を感じる事が出来る？）」

孫悟龍

「（大丈夫。俺は、誰かの気配を感じている。はい、終わり。）」

俺の目の前に振り返ってみる。

シグナム、ザフィーラが俺の前に陣取って、護衛するかのような体制になった。

赤毛の少女に振り返って見る。

孫悟龍

「（あれはミーナで間違いない。）」

ミーナ

「あの……リユムーン……」

孫悟龍の仲間

『……………ッ！……！』

ミーナ

「……………え？」

俺の仲間が、驚けた事を戸惑う。

その時。

俺は、いつの間にも剣を持ち、どこでも超える速さで、私の喉をギリギリ寸止めように突き付けられた。

ミーナ

「ひっ！」

坂本

「……な、何……っ！」

孫悟龍

「……てめえ！！私の真名を勝手に呼ぶなんて穢すッ！！」
怒気の籠もったように大きな声で言う。

ミーナ

「え？」

孫悟龍

「お前、いきなり俺の真名を呼ぶなど、どっついつ了見だ！！」
と殺気と怒気の籠もった声で言って、睨んだ。

俺だけじゃなくてヴォルケンリッターも怒気を纏める声と言う。

ヴィータ

「で、訂正してくれ！！」

アイン

「訂正なさい！！」

シグナム

「もし、訂正してくれないと孫悟龍は、お前を斬るかもしれない！」

「！」
怖いようで言う。

孫悟龍

「……………」
と殺気を纏めた目に無言で見た。

ミーナ

「（な、なんだ、こんな人達……。名前一つ呼んだだけで、さっきまでの様子と全然違うじゃない。もしかすると、この人たちは、異世界人じゃない？それは、そういう風習だ？でも、ネウロイと違う雰囲気である。）ッ！分かった…ごめん。訂正するから。その剣を引いてくれ。」

孫悟龍

「……………結構だ。次で勝手に呼むから問答無用に殺せている…ッ！」
と怒気と殺気が籠もった威圧感な声で言う。

坂本とミーナは、俺の怒気や殺気を受けて、額から冷や汗をかく。

坂本

「くつ。（その青年、今までのネウロイより凄い殺気が纏めた雰囲気がある。）」

シャマル

「ふう〜……。いきなり主の真名を呼ぶなんて、びっくりした。」
言いながら頬を手に当てている。

ミーナ

「（それはこっちの台詞だ。）」

孫悟龍

「まあ、私達があなた達と話をするためにここに来た。それにお前達に紹介する前に、お前達の仲間が集めてくれ？」

ミーナ

「えっ？はっ、はい。構わない。この前に、この新人を私達に紹介するなんて構えないでくれる？」

孫悟龍

「無論だ。新人が紹介したら扉の前に居る。ただし、誰かが自分の部屋に帰らないでくれる？」

ミーナ

「え？どうして？」

孫悟龍

「私の予想は、誰かが新人の行動を気に食わない事があるから、帰るかもしれないと思う。」

ミーナ

「本当？」

孫悟龍

「さあ？お前は、自分で私の予想を信じるとか信じないとか事を考えるなんて構わない。」

ミーナは、顎に手で当てて、考える。

ミーナ

「分かった。私達がブリーフィングルーム集まった後、その扉の前に待ってくれる。」

ミーナの言葉に俺達が頷ける。

ミーナ

「ブリーフィングルームの所が分かる？」

孫悟龍

「大丈夫だ。分かる。」

ミーナ

「そうか？分かった。ブリーフィングルームに来る。」

ミーナ

「美緒、みんなと共にブリーフィングルームに待ってる。私は、新人をそれに連れていく。」

坂本

「分かった」

と頷ける。

ミーナと坂本は、その部屋を後にした。

シグナム

「それで良い？主リユムーン。」

孫悟龍

「ん？どうしたの？」

ヴィータ

「あたし達は、この軍らには管理局と同じぐらいに信頼しないなんて当たり前だ。」

孫悟龍

「まあ。あなた達の気持はわかってるが、俺は、ストライクウィッチーズ以外の軍といろいろで会ったが、上層部以外の軍は、自分がやりたい事をやる所がある事を信頼する。」

腕を組んで、ニヤリに不敵に笑いながら言う。

シヤマル

「このウィッチーズも信頼する？」

孫悟龍

「ああ。が、今の力を引き出せないストライクウィッチーズを信頼できないと思うが、ストライクウィッチーズは、自分の力に気付いて、引き出せる事が出来た時、俺は、信頼あげる。」

シグナム

「驚けた。主リユムーンは、その他のウィッチーズだけじゃなくて、ストライクウィッチーズを信頼するなんて珍しい。」

片目を閉じながら言う。

孫悟龍

「フン、勘違いするな。俺は、この小娘達の力を引き出す事を教えてあげると思うが、一つだけヒントを教えてあげるだけをする。」

フンとそっぽをしながら、言う

ヴォルケンリッター（シヤマルとアイン）は、クスクスと笑う。

孫悟龍

「なにを笑う事じゃない！！／＼／＼／＼」
恥ずかしいようで頬を染めながら、言う。

シャマル

「いや、リムムーンは、ヴィータと同じツンデレをする。」
なんでもない言葉を言ってしまった。

ヴォルケンリッター・銀牙

「はっ!?」「(はっ)

シャマルの言葉を聞いて、冷や汗でシャマルに急いで振り返る。

俺とヴィータは、シャマルのそんな言葉を聞いて、頭が切れて、いつの間に自分の武器、グラーファイゼン、天叢雲剣を持つ。

ヴィータ・孫悟龍

「ふん、良い言葉を受けたが、ここで、お前を殺す?」「
黒い気を纏めたオーラな笑顔で言う。

シャマル

「なに?なに?ヴィータ、リムムーン、なぜ武器を持つ!!!って笑顔が怖い!!!」
と言って逃げる。

ヴィータ・孫悟龍

「あたし/俺は、ツンデレじゃない!!!」
追い掛ける。

俺達は、この部屋で逃げ回るシャマルを追い回る。

シグナムとアインとアギトとツヴァイと銀牙は、そんな俺達を見て、呆れるように溜め息をする。

シャマルは、ヴィータと俺が攻撃されて、ボロボロになったら、俺の治癒魔法にさせて、復活させた。

孫悟龍

「むっ。坂本とミーナが、仲間達とブリーフィングルームに集まった。まあ、俺達も行くぞ」
不敵に笑いながら言う。

ヴォルケンリッター

『Einverstanden, Besitzer. (了解、主)』
不敵に笑い返せながら、ドイツ語で応えた。

銀牙

「(了解、兄さん。)」

孫悟龍は、ヴォルケンリッターと銀牙と共にブリーフィングルームの扉の前に転移の魔法をする。

三人視 side

左前の席は、ポニーテール黒髪の眼帯侍少女、坂本美緒が座ったり、右前の席は、栗色のショートヘアっぱいが後ろ髪を束ねている堅物

少女ゲルトルート・バルクホルン、その隣に戦いでは完璧超人、口リ体形の金髪童顔の少女エーリカ・ハルトマンが座ったり、左中の席は、坂本を心酔する金髪ツンデレ眼鏡少女ペリーヌ・クロステルマン、その隣に部隊一のナイスバデー、スピード狂にオレンジ髪の少女、シャーロット・E・イエーガーが座ったり、右中の席は、おっとり・家庭的のドジっ娘、リネット・ビショップ、その隣にサーニヤに溺愛するお茶目占い好き銀髪少女、エイラ・イルタマル・ユーティライネンが座ったり、左後ろの席は、部隊一の最年少の黒髪ツインテール少女、フランチェスカ・ルツキーニが、付ける毛布の長机で身体を横たえたり、右後ろの席は、枕を抱けて目を細やかに開いた夜型人間の銀髪の少女、サーニヤ・V・リトヴァクが座ったりした。

ストライクウィッチーズの隊長、ブラウン色の髪の少女ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケとその新人、未熟な駄目っ子、宮藤芳佳は、左の席と右の席の間に通る。

ペリーヌは、宮藤に気付いて、険しい顔になって睨んだ。

ミーナが、ポンポンと手を叩いた。

この小説は、アニメの原作のストライクウィッチーズに宮藤の紹介するシーンと同じ

ペリーヌ

「なんだなんだ!!」

その部屋に後にする前にミーナが言う。

ミーナ

「待つて、ペリー又中尉」

真剣な雰囲気纏めながら言う。

ペリー又は、止まった。

ミーナ

「客から私に頼んてた。彼らは、まだ私達に用事・紹介する。」

バルクホルン

「なんだと？私は、聞いてない。彼らつて誰か？」

ミーナ

「彼らつて噂の蒼髪青年と仲間です。そして…」

と答えながら、チラツとサーニヤを見た。

ミーナの言葉を聞けて、サーニヤは、蒼髪青年の事を聞けて、眠気を吹っ飛ばれる。

ミーナ

「みんなは、サーニヤの件を知つてたか？サーニヤがこの前、夜で謎のネウロイを倒せた件で噂の蒼髪青年と出会つた。蒼髪青年は、余裕で、サーニヤが苦戦した謎のネウロイを軽めに撃破した。彼らは、ここに来た。」

ミーナと坂本を除くストライクウィッチーズは、それを聞けて、驚愕したりざわざわ話したりする。

ミーナ

「入る。」

キギキギキギキギキギ

扉を開ける。

噂の圧倒的なオーラを纏めながらリーダーみたいな性格とワイルドな性格の鋭い目に肩まで揺らす長い蒼髪青年と彼を護衛する役の腰まで長い桃髪のポニーテール騎士女性と外見は子供と同じぐらいのハンマーを持つ赤毛の少女と彼の傍に腰まで長い銀髪女性とミーナと同じなおっとりな性格の金髪女性と騎士女性と同じ役の筋肉がつけた守護獣の男性と銀色の狼と焰のような赤毛な小悪魔妖精と銀髪女性と同じ髪の妖精が、登場する。

ミーナと坂本を除くストライクウィッチーズは、美しいように彼らを見て、見惚れる。

サーニヤは、蒼髪青年だけを見て、驚愕するように目を開いた。

サーニヤ

「あなたは……。」
と呟いた。

三人視 side out

孫悟龍 side

ミーナ

「入る。」

ブリーフィングルームからミーナの強調な声でしっかり聞ける。

扉を開いた。

ストライクウィッチーズは、俺達のそんな景気を見て、呑ませる。その中に銀髪の少女が驚愕するように目が開いた。

ストライクウィッチーズの主人公、練習だけで未熟な駄目っ子、宮藤芳佳と言う娘の隣に到着して、目の前のみんなに振り返って、みんなを確認していた。

孫悟龍

「ふむ。全員そろった。じゃあ、ミーナ。名乗る前に条件4つがある。

一つは、絶対に俺達の事を軍の上層部に報告くれない事。

二つは、俺達を監視しない事。

三つは、俺達の闘いに巻き込める事は構わないが、危険な戦いに巻き込めない事。

四つは、俺が認めるまでに、質問するのは構わないが、答えられないことは答えない所やログハウスに入る事を禁止する所がある。」
ミーナを視線にしながら、交渉する。

ミーナ

「……二つや四つは、いいでしょうが、一つや三つは、どうした？」

孫悟龍

「一つは、簡単に答える。私達は、上層部を信じない。なぜなら、私の仲間は別の上層部の所為で胃を喰われたが、私の仲間は、上層部への憎悪を抱けてた。もし、報告するなら、軍のくせに私達を駒・操人形と扱われる事と、私たちの居場所を奪われる事をするかもしれないが、私達は、誰かの軍がその事をしたら、お前たちみたいな軍・上層部を全て潰せる。それだけじゃなくて、ネウロイと言うも

当然に全て絶滅した。三つは、お前達がネウロイと戦うなんて当たり前だが……ネウロイや私達より手強いバケモンがいるが、今の前達は、得体知れない私達を信頼できないなんて勝手な行動をする事は、自殺行為なんて当たり前だ。一つだけで、俺達の闘いを見て分かりなさい。ただし、俺達が使ってる物・武器を今のお前達に説明するなんてダメだ。」

内心で悲しげに仲間をチラッと見て、リリな世界の管理局の上層部の事を思い出して、俯きながら齒軋りして、自分専用の武器を強く握った。

ミーナ

「……なるほど。分かった。条件を呑もう。上層部をお前達の事に絶対に報告してない。」

孫悟龍は、ミーナの言葉を聞いて、ミーナの所に振り返る。

孫悟龍

「ふむ。分かってくれる。流石ストライクウィッチーズの隊長だ。」
不敵に笑った。

ミーナ

「さあ。お前達を紹介してくれる？」
笑顔で言う。

孫悟龍

「ふむ、それはそうだが…私達を紹介する。私は、不死鳥の騎士隊のリーダー、夜天・闇の霸王、孫悟龍だ。よろしく。」ペコッ
目の前のみんなに振り返って、紹介しながら、紳士のような挨拶をする。

腕や足には隆起した筋肉が遠目からでも窺える。しかしそこに、無闇に膨れ上がった部分など微塵たりとて有りはしなかった。極限まで無駄な部分を削ぎ落とし、ある一つの目的のためだけに研鑽され鍛えられた体に茶色に近い肌、綺麗に割れた筋肉、細くしなやかでどこか逞しい肢体で、ベジットと同じ服を着る青年。（尻尾を斬つた理由は、ベジータ戦の事を覚えて、自分の判断で、尻尾を斬つた。）

アイン

「同じ隊、祝福のエール リインフォース」

シグナム

「同じく、烈火の将 剣の騎士 シグナム」

真面目で実直、騎士道精神を持つ武人。家族として接する悟龍リュウモンに対しても常に敬語を崩さない（「主悟龍リュウモン」と呼ぶ）が、悟龍リュウモンの優しさに安らぎを得ているのは他の騎士と同様。凛々しい風貌の、外見年齢19歳前後の美人で、ピンク色の髪の毛などの外見は、成長した誰かに似ている。和食、入浴が好き。男勝りな口調とは裏腹に巨乳である。

ヴィータ

「……紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴィータ」

騎士たちの中では外見や精神も幼く（外見は8歳くらい）、常に勝気で自由奔放に振舞うが、芯は強く根は優しい少女。外見年齢が近いこともあってか、悟龍リュウモンは実の妹のように可愛がっており、彼女もまた「優しい悟龍」を強く慕っている。変身後の帽子には悟龍の技術に作ってもらった「のろいうさぎ」がデザインされておて、そのようなぬいぐるみも作った。

シャマル

「風の癒し手 湖の騎士 シャマル」

孫悟龍（鷹宏）の家事手伝い（料理は下手で、当初仲間達に不評だった。リムムーン本人が、シャマルの料理禁止と言ったが、勝手に料理した事をした後、リムムーンが、それを食べて気絶した後、気絶から目覚めたからシャマルに閻魔大王や全ての神を超えた怒りで、説教する）や日常での警護の大部分は彼女の担当となっている。召喚されてからの日常に最も早く馴染んだのも彼女で、買い物はもちろん近所付き合いなどもこなすようになる。

ザフィーラ

「……盾の守護獣 ザフィーラ」

獣人の男性で、人間時は外見年齢はメンバーの中でも年長の20代半ばの筋骨隆々とした青年の容貌、獣時は青い毛皮の大柄な狼の姿。

ツヴァイ

「蒼天に行く祝福の風 リインフォース？」

アギト

「烈火の剣精、アギト」

孫悟龍

「そして、私の最高の相棒、夜で銀の疾風で走る狼、銀牙。」
銀牙を紹介する。

ストライクウィッチーズは、リインフォースツヴァイとアギトを見て、ハトが豆鉄砲食らったような顔になった。

孫悟龍

「うん？リインフォー스ツヴァイとアギトを見て、何が驚けた？」

孫悟龍

「もしかして、お前達は、私の仲間、ツヴァイとアギトの事を虫と扱う所を思うか？」

小さな殺気を出せながら問い詰める。

ストライクウィッチーズが、俺の殺気を受けて、恐怖に身体が震えた。その中に栗色の少女は、恐怖に足が震えながら、耐えた。

坂本

「（冷汗）いや、ツヴァイとアギトは、妖精ですか？」

さっきと同じように身体が震えたのが耐えて、焦った声で言う。

妖精という言葉を受けた俺は、自分の殺気を収まった。

ストライクウィッチーズは、俺の殺気が消えた後、ホツとしたように安堵していた。

孫悟龍

「そう。その通りだが、半分正解し、半分間違う所がある。」

坂本

「それが間違いであるか？教えてくれるか？」

孫悟龍

「断る。」

坂本

「どうして教えてくれるッ!？」

孫悟龍

「それにな、アンタ達は信用してない得体知れない私達の話聞いて…それで納得できるのか？ 信じられるのか？ そうでなくとも、そんな眼を向けてくるヤツに…自分のことをペラペラと喋ると思っ
か？」

孫悟龍

「悪いが、私達は、今のお前達を信頼しない。」

ミーナ

「今のお前達は、ネウロイをやっつけやすいかもしれない。」

ミーナの言葉を聞いて、俺達が、険しい顔になっている。

孫悟龍

「ミーナの気持ちを分かっているが…この隊の整備員らに化けるスパイの誰かが、私たちがやる事を上層部に報告をして、俺達を襲う事と俺が作ったメカ達を奪う事と無理やり仲間をする事をするかもしれない。お前達は、ネウロイと戦えるが、俺達は、ネウロイと戦えない。その理由は、俺達は、ネウロイと戦えたら、俺達は、ネウロイよりイレギュラーがあるかもしれない。」

ミーナが反論をする前に、銀牙の耳が危険するような気配を感じたように立つ。

銀牙が座ったままから身体を上がって、俺に念話をする

銀牙

「（オルグが現れた！！）」

孫悟龍

「（何と！！オルグも！？オルグがどこに出現した！？）」

銀牙

「（どっつてブリタニアに出現した！！）」

孫悟龍

「（ヴォルケンリッター！！今で聞いた！！）」

ヴォルケンリッターに念話をし、ヴォルケンリッターは、俺の念話に頷く。

ミーナ

「え？なにやってる？」

俺達のそんな行動に戸惑いして、俺に質問するが、俺達は、聞こえない。

孫悟龍

「行くぞ！！ヴォルケンリッター！銀牙！不死鳥の騎士隊、出撃！！」

ヴォルケンリッターと銀牙

『はい！！／オウ！！／（了解！！）』

俺達、不死鳥の騎士隊は、襲われるブリタニアの所に走って行く

ストライクウィッチーズは、そんな不死鳥の騎士隊を見て、啞然としていた。

ミーナ

「みんな、何をやってどこへ行く？」

坂本は、早く我に返った。

坂本

「分からないけど、不死鳥の騎士隊を追い掛ける！！」

ストライクウィッチーズ

「はい！！」

孫悟龍 side out

第三視 side

ブリタニア

どこから現れた鬼共が街を襲う。

ブリタニアの人々が、現れた鬼共を見て断末魔のような悲鳴をしながら逃げる。

常に集団で行動する不完全な角しか持たない最下級のオルグ、オルゲットは、ブリタニアの人々を襲う。

ウィッチーズは、人々を救援したが、既にオルグらにやられた。

???オルグ

「ふふはははは！ここは良い所だ！！人々をもつと苦しめる！！」
錨のような剣や帆船の操縦のような楯を持つ帆船のような鬼の怪物、
帆船オルグが言う。

???

「ここは、ガオレンジャーが居ないから、やりやすい！」
それを言うこのオルグは、ひょうきんな性格のピエロのデュークオ
ルグ、ヤバイバ。

???

「ホツホツホ。邪魔なガオレンジャーは、ここに来てない！愚かな
人間共を苦しめやすい！！」
杖を持つヤバイバとともに行動するデュークオルグ、ツエツエ。

帆船オルグ

「ウィッチという軍は、馬鹿だ。我々に程度の軍銃が通じない！！」
ウィッチーズは、オルグらの言葉を聞いて、悔しいのが感じながら、
手を強く握った。

帆船オルグ

「やれ！ここで終わった！！」

その時！

???

「それまで!!」

オルグら

「ん?」

オルグらは、誰かが大きな声をしながら、自分に向かって走る誰かに振り返ってみる。

逃げる人々と擦れ違うように早く走っていた不死鳥の騎士隊が、オルグらの100メートル前に到着していて、構えた。走った途中に銀牙が、人間モードになったが、耳と尻尾は隠れた。

ストライクウィッチーズは、不死鳥の騎士隊の後をもう追い掛けたが、隠れる。

シャマル

「それは、酷い……」

破滅した街や、怪我した人々を見て、悲しげに言った。

孫悟龍

「シャマル、お前は、ここで怪我した人々を治せる。リインフォー
スアイン、ツヴァイ、アギト、お前達は、シャマルの所に怪我した
人々が集まってくる。治せた時に、この人々を連れて、安全な所
に早く避難しろ。」

アイン、ツヴァイ、アギト、シャマル

「了解ノだあ。ノゼ。ノだ。」「」

アイン、ツヴァイ、アギトは、シャマルの所に集まるためにアインは、ブリタニアのウィッチらを抱けて行ったり、ツヴァイとアギトは、人間モードになって、人々を抱けて行ったりする。

シャマルは、アインらが集まった人々とウィッチらを宮藤より凄く治癒の魔法をかけて、一度、人々らを治癒していた。

孫悟龍は、目の前にオルグらを睨んだ。

帆船オルグ

「なんだおまえたち。何しに来た？」

孫悟龍

「お前達は、罪が無い人々を苦しめたいが、俺達は、黙ってない！」

銀牙もヴォルケンリッターも鋭い睨んだ。

帆船オルグ

「俺達を許せない…？」

オルグらは、顔を合わせて腹を抱けて笑っていた。

ヤバイバ

「お前達みたい人間共が、俺達に勝てるなんて無理、無理だ。」

ツエツエ

「バカ共、お前達は、ここに来た事を後悔して苦しめる！」

孫悟龍

「そうか？まさか、お前達は、俺達の力を知らない？俺達を舐めて
いるな。」
挑発するようで不敵に笑う。

孫悟龍

「銀牙、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、これを使いよう！！」
携帯のような物を取り出して、4人に投げ渡せた。

銀牙、シグナム、ヴィータ、ザフィーラは、それを受け取った。

ヴィータ

「これは？」

孫悟龍

「それは携帯電話型通信機で変身アイテム、Gフォン！！」

シグナム

「Gフォン？」

孫悟龍

「いいから俺の動く通りにやれ！！」

ヴィータ

「よく分からねえけどやる!！」

孫悟龍

「よし!行くぞ!！」

4人

『オツス!!/了解!!/はい!!』

5人

『ガオアクセス!!』

孫悟龍が動く通りにボタンを押して叫ぶ

5人

『ハア!!!』

そして耳にそれを当てながら左手を前に突き出す

5人

『Summon Spirit of the Earth!!』

5人はそう掛け声を放つ・・・

黄色の携帯端末が動物を模した形に、そして人型へと変形した

孫悟龍は、赤ライオンの形に、シグナムは、黄鷹の形に、銀牙は、青鯨の形に、ザフィーラは、黒牛の形に、ヴィータは、白虎の形にした。

それぞれの携帯端末のイメージが装着者に重なり、スーツを形成した

最後にそれぞれの動物達のイメージが顔に重なり、マスクを形成した
ブリタリアのウィッチーズもストライクウィッチーズもオルグらも
俺達の変身の変化を見て、驚愕していた。

芳佳

「あつ！あなた達は、さっきの戦隊と似ている！！」

帆船オルグ

「なに！？」

ツエツエ

「嘘！！」

ヤバイバ

「バカな！？」

孫悟龍 ガオレッド

「灼熱の獅子！！ガオレッド！！」

シグナム ガオイエロー

「孤高の荒鷲！！ガオイエロー！！」

銀牙 ガオブルー

「怒涛の鮫！！ガオブルー！！」

ザフィーラ ガオブラック

「鋼の猛牛!!!ガオブラック!!!」

ヴィータ ガオホワイト

「麗しの白虎!!!ガオホワイト!!!」

ガオレッド

「命あるところ・・・正義の雄叫びあり!!!百獣戦隊!!!」

ガオレンジャー

『ガオレンジャー!!!』

ドガアアアアン!!! 恒例の爆発。

ガオレンジャーと名乗る5人、それぞれのマスクは、ライオン、鷲、鯨、牛、虎を模している。

服の色と、スーツの色がかぶっている

彼らは普段から、自分のカラーで呼ばれているらしい・・・

ヤバイバ

「バカな!!!あり得ない!!!その世界だけじゃなくてこの世界も居る!!!」

ガオレッド
孫悟龍は、ヤバイバの言葉を聞いて、戸惑う。

ガオレッド

「(その世界……?もしかして、お前達は本来のガオレンジャーが

居た世界の敵じゃない！それよりまあ、ここで倒す！！」

帆船オルグ

「分からないけどお前達を倒す！やれ！！オルゲット共！！」

オルゲット

『ゲット！！ゲット！！』

オルゲット共は、ガオレンジャーを襲う。

ガオレッド

「よし、行くぞ！！みんな！！」

ガオレンジャー

『はい！/ウオッス！！』

全員がオルグらとオルゲット共に向かって行った。

ガオブルー・ガオホワイト

「うおりゃ〜！/うおお〜！ダダダダダダダッ！！」

ガオブルーとガオホワイトは、オルゲット二人に飛びかかり倒して、ガオブルーとガオホワイトはオルゲット二人を押さえつけて獣の様に走り、オルゲット二人を引きずる

ガオブルー・ガオホワイト

「ハアア！！」

オルゲット二人は投げ飛ばされて、目の前にぶつかった。

まだオルゲット共が残った。

ルツキーニ

「うじゅい！？獣のように人を引き摺るゝ！！」
目を輝けて言う。

シャーリー

「でも、私達は、無理だゝ（汗）」
頬を掻いて言う

ガオブルー

「シャークカッター！！」

ガオブルーが、自分専用の破邪の爪で、サメの背びれの形を模している一対のナイフ、シャークカッターで持つ。

ガオホワイト

「タイガーバトン！！」

ガオホワイトも自分専用の破邪の爪で、両端の飾りが虎の顔を模している棍棒を持つ。

ガオブルー

「サージングチョップアアアツツツーーーーー！！」
刃にエネルギーを充填して外側から内側へと横に斬る。

ガオホワイト

「ベルクライシスウウウウウツツツーーーーー！！」

先端にエネルギーを充填して敵を突く。

オルゲット共

『ゲット~~~~~!!』

オルゲット共がそれらを受けて、爆発した。

ヤバイバ

「おりゃ!!ふっ!!うりゃ!!」

ガオブラック

「うわぁ!ぐが!」

ヤバイバは、自分の剣を振り、ガオブラックをダメージする。

ヤバイバ

「はぁっ!!」

大振りに剣を振り、受けた前にガオブラックが白刃取りで受け止めた。

ヤバイバ

「なに!!」

ガオブラック

「ウオオオオオオオオツツ!!」

ヤバイバ

「ウワワアアアアアア~~~~~ツツ!!」

ガオブラックは、ヤバイバを抱えて走って、周りの戦闘員にぶついている。

「ふん。口先だけみたいなき士は、私に勝てない。」

ガオイエロー

「騎士の力を見なさい！！イーグルソード！！はあああ！！」
自分専用の破邪の爪で、鏢が鷲の形を模している長剣、イーグルソードを右手で持ち、ツエツエに向かっていく。

ツエツエ

「愚者。はあっ！！」
弾を放つ。

地面に着弾をして、ガオイエローの周りに爆発した。

ツエツエ

「なに！！」

ガオイエロー

「ハッ！フッ！ヒュッ！」
と上から、下から、横からイーグルソードで斬り付ける。

ツエツエは、それを受けて、火花を起きて散らす。

ガオイエロー

「はっ！！」
突き付ける。

ツエツエは、それを受けて、吹っ飛ばれて、倒れた。

ガオイエロー

「まだまだ！！」

ガオイエローは、走って、すぐに跳んで、背中から腕を伝って翼を出現させることで、時速300kmのスピードで空を飛べて、左手でツエツエを持ち上げて、ツエツエの後ろで、他のオルゲットも薙ぎ倒していく。

ツエツエ

「くっ！離しやがれ！！」

目の前に帆船オルグらが破壊していたクレーターの建物にガオイエローが捕まるツエツエを叩き付けて、投げ捨てる。

ツエツエ

「きゃあああああ！！！！くっ！！」
地面に倒れた。

ガオイエローは、地面に着陸する。

ペリーヌ

「なっ！黄色の騎士の戦い方は、美しい…！！」

坂本

「ほっ。やるねえ。でも、黄色の騎士は、鷹と同じスピードのよ
うな飛び方を使うなんて珍しい。」

ツエツエ

「くっ。」

とよろよろと立ち上がる。

ガオイエロー

「ノーブルスラッシュユウウツツツッ！！！！」

刀身にエネルギーを充填してX字を描くように斬りつける。

ツエツエ

「きゃあああああああ！！！」

それを受けて、爆発した。

帆船オルグが、ガオレットが獣皇剣を持つままに自分を突撃する所に振り返る。

ガオレット

「うおおおおおおお！！！」

帆船オルグ

「青二才のくせに！！くらえ！！！」

錨のような剣からプラズマを放つ。

俺の周りに地面にそれを着弾すると、爆発する。

帆船オルグは、もう一発放つ。

俺の周りに地面にそれを着弾すると、また爆発する。

帆船オルグ

「なにー！！！」

ガオレット

「はっ！ふっ！は！」

獣皇剣で何度も斬り付ける。

帆船オルグ

「うわぁ！！ぐがあ！！」

それを受けて、火花を散らしながら起こす。

ガオレット

「ふっ！！」

強力に斬り付ける。

帆船オルグは、それを受けて、盾を外させてしまった。

ガオレット

「はぁっ！！」

また強力に斬り付ける。

帆船オルグ

「ぐわぁっ！くっ。」

帆船オルグは、それを受けて、少し後ずさりに後退した。

ガオレット

「ライオンファング！！」

自分専用の破邪の爪で、ライオンの顔を模している手甲、ライオンファングに上下で2つに分離させて両手に装備する。

ガオレット

『オウ！/はい！』

ガオレットを除くガオレンジャーが、自分専用の武器を持って、イグルソード（剣先）、バイソンアックス（剣身）、シャークカッター（鐔）、タイガーバトン（柄）の4つの武器を組み合わせた破邪百獣剣、ガオレットがライオンファングを通じて保持し、他の4人がガオレットの体を支える。

リーネ

「なっ。みんなが、自分の武器を組み合わせた！？」

ガオレンジャー

『邪鬼退散！！』

ガオレンジャー

『破邪百獣剣ツツ！！』

エネルギーを充填して、ガオソウルで形成された巨大な刃でオルグを斬る。

坂本

「なっ！！これは、私の裂風剣以上！！？」

破邪百獣剣を見て、驚愕した。

帆船オルグ

「なっ！グワアアアアアーーーーーツツ！！」

ガオレンジャーは、組み合わせた破邪百獣剣を解除したら、自分専用の武器を持つ。

帆船オルグ

「ああああ……あああ……」

膝ついて倒れて、爆発して消えたが、緑の液体の様になる。

ドカアアアアン！！

ガオレンジャーは、爆発した帆船オルグに背を向けて自分に合った獣のポーズを決める。

このウィッチーズもガオレンジャー（ガオレッド（孫悟龍）やガオブルー（銀牙）を除く）も不死鳥の騎士隊も歓喜していた。

ガオレッド

「いや、まだ終わらない。」

ガオレッドの言葉をする、ヤバイバとツエツエが現れる。

ツエツエ

「己！！ガオレンジャー！！」

悪態したら、杖を見て、すぐに構えた。

ツエツエ

「オルグシードよ、消えゆかんとする邪悪に再び巨大なる力を！鬼は内！福は外！！」

と掛け声と共に杖からオルグシードを出して、緑の液体に着弾したら、オルグを巨大化させる

帆船オルグが、巨大化になった。(G帆船オルグ以下)

ブリタニアのウィッチーズ達は、それを見て、絶望的な顔になった。

ガオレンジャー(知ってたガオレッドやガオブルーを除く)も、後ずさりした。

ガオイエロー

「なっ！怪物が復活して、巨大化になった！！」

G帆船オルグは、ガオレンジャーを踏み込む。

ガオレンジャーは、横へ早く避け込む。

ガオホワイト

「ガオレッド！！どうする！ギガデカイ奴をどうやってやっつける！？」

ガオレッドは、ガオホワイトの言葉を聞いて、呆れるように溜め息をする。

孫悟龍

「あの、戦隊では、ボスをやっつけるだけじゃなくて、巨大ロボ戦もする。」

ガオレンジャー(ガオレッドやガオブルーを除く)は、はっとした。

ガオレッド

「そうだ。俺達も、巨大戦をする事ができる」

ガオブラック

「でも、どうやって巨大戦をする。」

ガオブルー

「大丈夫。パワーアニマルを呼ぶ。」

ガオイエロー

「パワーアニマル？」

きよとんとした

ガオホワイト

「どうやって呼ぶ？」

ガオレッドやガオブルーは、マスクの下に不敵に笑って、自分に合ってる宝珠を取り出す。

ガオレンジャー（ガオレッドやガオブルーを除く）は、ガオレッドやガオブルーが持ってた宝珠を見る。

ガオイエロー

「それは？」

ガオブルー

「それは、僕達が自分に合ってる宝珠があります。」

ガオレッド

「俺達は、それらを使って、パワーアニマルを呼ぶ事が出来る。」

ガオホワイト

「あたし達が自分に合ってる宝珠…」

ガオレンジャー（ガオレッドやガオブルーを除く）は、自分に合ってる宝珠を取り出しながら、眺める。

ガオレッド

「ガオの宝珠を獣皇剣の鏢にはめ込む。」

ガオレッドやガオブルーは、自分の獣皇剣の鏢に自分に合ってる宝珠をはめ込んだ。

ガオレンジャー（ガオレッドやガオブルーを除く）も、ガオレッドの言うとおりに獣皇剣の鏢に宝珠をはめ込んだ。

ガオレッド

「後は、獣皇剣を空に向かって「百獣召喚」と大きな声で叫ぶ。」

ガオレンジャーは、ガオレッドの言うとおりに獣皇剣を空に向かい掲げる。

ガオレンジャー

『百獣召喚！！』

ログハウスで、孫悟龍の部屋の中に孫悟龍以外が、立ち入り禁止の謎の扉にスーパー戦隊や平成仮面ライダー（イレギュラー、サブイレギュラーなど）がいっぱい置いた玩具の中に、スーパー戦隊のガオレンジャーの玩具ロボのパワーアニマル、ガオライオン、ガオイーグル、ガオシャーク、ガオバイソン、ガオタイガーの目が光り、本物のように吠えるなら、本物のように動いて、すぐに走って、異

空間に入っていた。

ガオライオンらは、異空間から出た後、それらが通る道を出たら、本物になっていた。

ガオレッドは、ガオライオンらの気配を感じて、その気配の所に振り返る。

ガオレッド

「来る。」

呟きしていた。

ガオレンジャーは、ガオレッドの呟き声に気付いて、ガオレッドが見ている所に追い付けて、見た。

ガオライオンらが、地上に降りて、すぐに吼える。

G 帆船オルグは、ガオライオンらに振り返って驚愕していた。

G 帆船オルグ

「なに！？」

ガオライオンが、G 帆船オルグに飛び掛かって、何度もひっかかりたり噛み付いた。

後ろへ飛べて、着陸して、吼える。

ガオタイガーが、ガオホワイトに吼える。

ガオホワイト

「なっ！」

ガオタイガーを眺めて、驚愕した。

ガオイーグルが、飛びながらガオイエローに吼える。

ガオイエロー

「ほ、ホントだ……」

ガオイーグルを眺めて、目を開いた。

ガオバイソンが、鼻息しながら、ガオブラックに吼える

ガオブラック

「でも、心をガオバイソンの声に聴ける。」

冷静にガオバイソンを眺める

ガオシャークは、空を泳ぎながら、ガオブルーに吼える。

ガオブルー

「ああ、おまえだけじゃなくて、僕達は、パワーアニマルの声を聴ける。」

ガオブラックの言葉に答えながら、ガオシャークを眺める。

ガオライオンは、ガオレットに吼える。

ガオレット

「ああ！ガオライオンらよ、お前達の力と共にする！！」

ガオライオンを眺めながら、ガオライオンの声分かるようにする。

ガオライオンは、ガオレットの言葉に答えたように吼える。

ガオレット

「よし！みんな！！合体する！！」

ガオレットの言葉にガオレンジャーが頷ける。

俺達の獣皇剣の先に一つにする。

ガオキングが合体完了直前する時に。

ガオレット

「みんな、俺達もガオライオンに乗り込む！！」

ガオレンジャー

『はい！/オウ！』

ガオレンジャーは、飛び、ガオライオンの中に乗り込む。

ガオレット

「百獣合体！」

合図する。

ガオライオンらは、ガオレットの合図に答えたように吠える。

ガオライオン、ガオイーグル、ガオシャーク、ガオバイソン、ガオタイガーが、合体完了した。

ガオレンジャー

『誕生！！精霊王、ガオキング！！』

ガオライオン、ガオイーグル、ガオシャーク、ガオバイソン、ガオタイガーが合体した精霊王が誕生した。

G 帆船オルグ

「なに！」

ストライクウィッチーズとブリタニアのウィッチーズもヤバイバとツエツエも、合体巨大ロボを見て、驚愕していた。

ルツキーニ

「うじゅーいーい！！動物ロボが、合体した！？」

目が輝けながら言う。

ミーナ

「バカナ……！ありえない！誰でもか軍の科学者は、見た事もない合金を作るなんて出来ない！？」

ガオレンジャー

『行くぞー！！』

ガオキングが、構えた後にすぐにG 帆船オルグを襲い掛ける。

ガオキングは、G 帆船オルグをガオシャークで殴ったり、ガオタイガーで突き殴ったりした。

ガオキングは、ガオシャークでG 帆船オルグを強力に突き殴る。

G 帆船オルグは、それを受けて、吹っ飛ばれる。

ガオブルー

「シャークシヨット!!」

ガオシャークは、強力になったら、殴った。

G 帆船オルグ

「うわぁ!!」

G 帆船オルグは、それを受けて、ひるんだ。

ガオホワイト

「タイガーアタック!!」

ガオタイガーも強力になったら、殴りつけた。

G 帆船オルグ

「ぐがあ!!」

G 帆船オルグは、それも受けて、またもひるんだ。

ガオキングは、シャークシヨットとタイガーアタックを何度も繰り返して、殴りつけた。

G 帆船オルグは、それを受けて、怯んだままに後ずさりした。

G 帆船オルグ

「おのれ!! お前達めは、俺様ばかりやられるばかりした!!」
とそう言うと、冷静を欠いて、ガオキングを襲い掛ける。

ガオレッド

「とどめ!!」

ガオレンジャー

『天地合鳴・アニマルハート!!!』

ガオキングから…五体のパワーアニマルの口から彼らのガオソウルを強力な光線として放つ。

G 帆船オルグ

「ぐわあああああ!!おのれ!!!」

G 帆船オルグは、それを受けて、火花を起こしてプラズマを散らしながら崩れ、前へ倒れた。

爆発した。

ヤバイバ

「これはヤバイバ!!!」

ツエツエ

「ここは逃げる!!!」

そう言うと、ヤバイバと共に転移のように消えた。

冷静にするガオレッドとガオイエローとガオブラックを除くガオレンジャー

『よっしゃ!!!』

歓喜した。

ガオレッド

「一件落着。」

と内心で嬉しさをよつで言った。

ブリタニアのウィッチーズもストライクウィッチーズも歓喜したりハイタッチしたり驚愕したりした。

ガオレンジャーの変身を解除した不死鳥の騎士隊五人は、ガオライオンなどのパワーアニマルを眺めていた。

孫悟龍

「ガオライオン達、力を貸してくれることを感謝する。」

ガオライオンは、孫悟龍の言葉を答えたように吼えた。

孫悟龍

「え。またお前達を呼んで俺達に力を貸すことですか？」

ガオライオンは、孫悟龍の言葉を答えたように唸れた。

孫悟龍

「お前達も？」

ガオイーグルとガオシャークとガオバイソンとガオタイガーを見て言った

ガオイーグルらは、嬉しさに孫悟龍の言葉を答えたように吼える。

孫悟龍

「そうか。分かった。もし、オルグが現れて、俺達が倒れたオルグが巨大化になる時、いつか呼ぶ。」

ガオライオンらは、嬉しさに孫悟龍の言葉に賛同するように吼えた。

孫悟龍

「お。いよいよ。パワーアニマルのみんな。またなあ。いつかまた呼ぶ」

とそう言つと異空間が出現していた

ガオライオンらは、孫悟龍の言葉に賛同するようぞで吼えて、異空間へ走つて、消えた。

ヴィータ

「でも、パワーアニマルのみんなは、何処から来た。」

孫悟龍

「え？パワーアニマルらは、俺の部屋の謎の扉の中です。」

シグナム

「え？パワーアニマルは…」

孫悟龍

「ええ、それは、俺の部屋の中に謎の部屋があり、スーパー戦隊のただの玩具がいっぱいある。」

ザフィーラは、ハツとした。

ザフィーラ

「パワーアニマルは、まさか…」

孫悟龍

「そのとおりだ。パワーアニマルも玩具の一員がある。」

シグナム

「へ？」

ヴォルケンリッター

『ええええええー！！！！！つっ！！！！！』

孫悟龍

「はあく。俺は、玩具じゃなくて、大切な宝を持つ。」

銀牙

「でも、兄さんは、玩具の事を道具と扱いたくない。兄さんの凄い謎の能力は、玩具の事を本物と同じになりたいと思いきんで、玩具を使用する時、本物となった事が出来た。」
嬉しさのような笑顔で孫悟龍を見て、言う。

孫悟龍

「むっ／＼／＼／＼／」

腰に手を当てながら背を向けて、困ったように頬で赤を染めながら、指で搔いていた。

ヴォルケンリッターは、そんな孫悟龍を見て、ハトが豆鉄砲食らったような顔になった。

銀牙は、クスクスと悪魔のような笑みでする。

銀牙

「かっこいい兄さんは、可愛いな所がある。」

そう言うと孫悟龍は、銀牙の頭を軽めに拳を下ろしてた。

銀牙

「痛い。」

銀牙は、涙目で頭を抱けて、自分で小さなこぶを撫でている。

孫悟龍

「ふん。銀牙。俺をからかうじゃ駄目。次、言ったら、地獄のお仕置きだ？」

とフンと鼻を鳴き、ドス籠ったオーラを纏めながら目が笑ってないような笑顔で強調みたいな言葉で言う。

ヴォルケンリッター

『（主リユームーンのそんな笑顔は、閻魔大王や神より怖い！！！！！！！！もう二度と主リユームーンに逆らわない！！！！）』

ヴォルケンリッターは、そんな孫悟龍を見て、恐怖していた。

銀牙

「む。分かった。もう二度とからかわない。兄さん。」

平然に無邪気な笑顔で言う。

ヴォルケンリッター

『（え！銀牙は、リユームーンの黒笑顔に平然に答える！！流石主リユームーンの相棒！！）』

銀牙と孫悟龍を何度か見て、啞然して、孫悟龍と銀牙の絆を思いま

孫悟龍

「ん。良い答えだ。」

銀牙を撫でている。

銀牙は、撫でてられて、気持ち良いような目を閉じる。

孫悟龍は、ブリタニアのウィッチーズに視線をする。

孫悟龍

「ブリタニアのウィッチのみんな、私達が今までやった事をあなた達の軍・上層部に秘密してくれ？もし、私達の正体を上層部に報告した時、彼らは、私達を駒と扱うかもしれない。私達の正体に黙ってくれ。」ニコリ

口の前に指に立ちながら、覇気を纏める笑顔で言う。

ブリタニアのウィッチーズは、孫悟龍の覇気を纏める笑顔が眩しいように見惚れて、頬で赤を染めて頷く。

孫悟龍

「ん。よろしい。」

それを確認したら、微笑する。

ザフィーラを除くヴォルケンリッターもポカンとして、そんな孫悟龍を見た。

ザフィーラを除くヴォルケンリッター

(覇気を纏める笑顔の鷹宏、かつこいいだ／よ／ぜ。／／／／／／／／／／／／／／／／)
と思う。

銀牙は、そんなヴォルケンリッター(女性陣)を見て、ニヤニヤした

孫悟龍

「じゃあ、《ヴォルケンリッター、銀牙。先に転移でログハウスに帰って、別荘に入って、特訓する。俺は、ストライクウィッチーズを連れていく。そして、お前達は、俺達と圧倒的な実力差を教えてもらう。》…」

ヴォルケンリッター・銀牙

《む。分かった。／＼。了解》

転移で、ログハウスに帰った。

ストライクウィッチーズを視線にする。

孫悟龍

「ストライクウィッチーズのみんな、私達の闘いは、どうする。」

ミーナ

「あ、はい。まさか鬼のような怪物は、本当にウィッチが敵わない事がわかった。あなた達の闘いは、人間外れの能力しかもれない。」

孫悟龍

「うん。そのとおり。」

ミーナ

「でも、さっきの巨大ロボは、何？」

孫悟龍は、ミーナの言葉を聞いて、険しい顔になった。

孫悟龍

「悪い。それは答えない。」

バルクホルン

「なつ、なんだと！！お前は、私達が頼りないみたいなお事を言うだと……！！」

孫悟龍の襟元を掴んで、言う。

ミーナ

「なつ、落ち着け！！トウルデー！！」

孫悟龍は、冷酷と嫌悪な表情をなりながら、バルクホルンを止まるミーナを手で制した。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍のそんな表情を見て、ゾツと恐怖するよう感じた。

孫悟龍

「堅物少女の言うとおりだ。さっきのウィッチ達は、バケモンに敵わないが、今のお前達もさっきのウィッチと同じで、さっきみたいな怪物を倒すだなんて不可能だ。」

坂本

「なつ！？私達ウィッチに「不可能はないと言っている？使い魔の能力でさっきみたいなお化け物に敵う？」くっ……」

孫悟龍

「そう、当たり前だ。あなた達は、自分の敵だけをやっつける事が出来るのが、さっきみたいなお化け物は、自分の敵と違って、ウィッチより危険なお化け物と戦えて……多分死ぬ。私達は、まだあなた達を今すぐ信頼するなんて無理だ。さっきのバケモンは、さっきの戦隊だけの力を使用してなくも私の本気の力で引き出させないままに倒せる。」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉を聞いて、驚愕した。バルクホルンも驚愕しながら、彼の襟元を掴んだのを離せる

坂本

「お前は、本気で出さない!？」

孫悟龍

「そうか。もし、バケモンを超える力持ちバケモンは、さっきの戦隊も仮面ライダーも敵わないが、私は、自分の力で本気になれば、星を一つ一つ滅ぶかもしれない。」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の危険な言葉を聞いて、ゾクゾクと恐怖と冷汗をかけて、顔が引き攣る。

カールスラントの三人は、仮面ライダーの言葉を聞けてた。

エーリカ

「お前は、仮面ライダーを知っている!？」

孫悟龍

「む。ああ。化け物のおかげで、まさか仮面ライダーの噂に全国的が広がってしまった。まあ、しょうがない。」

冷酷と嫌悪の仮面を外せながら、普通にはあゝと溜息をしながら、頭を掻いて言う

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の行動を見て、気付いて驚愕していた。

「しょうがない。今日だけは、仮面ライダーの事だけを教えてやる。特別に私のログハウスに連れていく。」

ミーナ

「え？いい？」

孫悟龍

「構わない。ただし、今日だけは、入るのがいい。次に俺が認めるまでは、勝手に入ると、バリアを貫くビームの罠を放たれた者は、死ぬ。ツインテール黒髪少女も童顔金髪少女も勝手にこそこそ俺のログハウスに入ること禁止です。それ以上は、気を付ける。」

ストライクウィッチーズは、俺のまた危険な言葉を聞けて、冷や汗をしながら、ゾクゾクと恐怖していた。

シャーリー

「はははは、ジョークジョーク。悟龍さん？」
冷や汗をしながら言う

孫悟龍

「いいえ。本当だ。」
きっぱりと言う。

ルッキーニは、涙目で顔に青染めて、身体を震えて、シャーリーの後ろに隠していた。エーリカは、頭の後ろに手が組みながら引き攣った笑いをして、額から冷や汗をする。

孫悟龍

「分かった？」

ストライクウィッチーズは、激しいようで頷く。

孫悟龍

「そうか…（む？ピンクなオーラ…）」

孫悟龍は、ストライクウィッチーズの中の一人の誰かにピンク色の小さなオーラの気配に気付いていたが、気にしない。

孫悟龍

「まあ、私に黙って、転移の魔法をする。」

ストライクウィッチーズのみんなは、渋々孫悟龍に従って、黙って、俺は、小さな呪文を呟いて俺の足元が、見た事が無い魔法陣を現れたら、俺達は、消えた。

ピンク色の小さなオーラの気配の人って、夜型人間の銀髪の少女、サーニヤ・V・リトヴァクだ。

サーニヤだけは、さっきの闘いで孫悟龍を見惚れていた。サーニヤは思う。孫悟龍の事を最も知りたいと。

ストライクウィッチーズと不死鳥の騎士隊は、出会えたが、サーニヤは、この件以来孫悟龍と再び出会えたが、なぜかしら惚れ始めた。もしかして、サーニヤは、強力なネウロイの件（番外）で孫悟龍を惚れちゃった？

次回予告

孫悟龍

「オッス。俺、鷹宏。」

孫悟龍

「俺は、ストライクウィッチーズをログハウスに連れて行ったが…」

エイラ

「それは、水晶ダ？」

ストライクウィッチーズは、自分の目から孫悟龍達の特訓を見て、
どんな顔になっている。

ルッキーニ

「うじゅ〜い！！みんなは、悟龍兄さんじゃなくてストライカ
ーを使わずに、飛行したり、魂のような弾を放ったりした！！」

孫悟龍

「俺達は、地獄みたいな特訓をしながら、最も強くなる事が出来る
かもしれない。」

ミーナ

「悟龍さん、無茶滅茶な特訓をするなんてダメ！！」

孫悟龍

「俺達の特訓とあなた達の特訓のやり方が違うなんて当たり前だ。俺は、仲間を強制に特訓するじゃなくて、本人達は、自分の意思からやる。無茶滅茶な特訓をしないと、俺達より強い奴と戦われると俺達は、細胞残さずに消滅されて死ぬかもしれない。」

孫悟龍

「銀牙は、久し振りに俺と仮面ライダーの模擬対戦をする!!!」
「デイケイドライバーを手にかける。銀牙もデイエンドライバーを手にかける。」

バルクホルン

「それは……!!!」

孫悟龍・銀牙

「「変身!!!」」

『Kamenrade・Decade!』

『Kamenrade・D・ende!』

12話 「ストライクウィッチーズ、悟龍たちの特訓を見学する。悟龍と銀牙、仮面ライダーの模擬対戦する。」

サーニャファンの人々、それを見て、ふざける所があって、申し訳ありません。

サーニャは、原作と違うキャラになってしまった。

サーニャファンの人々、ごめんなさい!!!

12話 ストライクウィッチーズ、悟龍達の特訓を見学する 仮面ライダーの権

アンチっぽいな所がある。

後半は、戦闘シーンが、短い。

12話 ストライクウィッチーズ、悟龍達の特訓を見学する 仮面ライダーの権

ストライクウィッチーズや俺は、ストライクウィッチーズの基地に
転移した。

ミーナ

「ここは……」

バルクホルン

「わがストライクウィッチーズの基地？」

孫悟龍

「違う。ストライクウィッチーズの基地の近くに林が秘密基地みた
いに私のログハウスがある。」

ルツキーニ

「うじゅいー！あなたも秘密基地みたいだ。」

ペリーヌ

「あら、殿方はルツキーニと同じちいさな秘密基地を作る。」

孫悟龍は、ペリーヌとルツキーニの言葉を無視しながら、林の方に
歩く。

ペリーヌ

「こら！私達の言葉を無視するじゃない！！」

孫悟龍は、林の前に手をかけながら、呪文を一声、二声、呟けてい
る。

孫悟龍

「大丈夫。今日だけは、林から貴方達が出るまで罨を一時取り消す魔法をした。ただし、私に声をかけないままに連れて来る。」

ミーナ

「あ、はい。」

孫悟龍とストライクウィッチーズは、林の奥に入っている。

孫悟龍

「着く」

と呟く。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍が呟くのをしっかりと呟いて、孫悟龍が見ていた所を見て、驚愕していた。

普通と違う孫悟龍が作った特別な木で出来ているログハウスに到着していた。

ストライクウィッチーズは、感嘆の声でする。

リーネ

「豪華みたいな家……」

坂本

「ほーっ、わが扶桑の家と同じようで、違うようで作る所がある。誰が作る？」

孫悟龍に質問する。

孫悟龍

「はあ？何言ってる。私だけが作った。」

ストライクウィッチーズ

『はあっ！？』

坂本

「一人で何日それを作るのが出来たか！？
珍しく焦った顔で、言う。」

孫悟龍

「普通の技術者は、2〜3ヶ月かかるなんて当たり前が、私だけが、特別に普通の技術者より早く一日かかった」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍が言った言葉を聞いて、驚愕していた。

バルクホルン

「木を運ぶのはどうする？」

孫悟龍

「え？どうした。」

バルクホルン

「どうしたじゃない！！普通の一人が、幾らかの重い木を運ぶなんて流石私でも無理だ！？」

孫悟龍

「普通人から重い木を一人で運ぶ事が無理なんて当たり前だが、私

は、厳しい修行し続けた。自分でいくつか重い木を運ぶ事も修行だ。

」

坂本

「なっ……。お前は、修行する!？」

孫悟龍

「ああ。敵に負けなかったために私達も修行と特訓をしていた。」

芳佳

「でも、お前達は、私達よりもう強くした。」

芳佳の言葉にストライクウィッチーズは、賛同したように頷いた。

孫悟龍は、そんなストライクウィッチーズを見て、険しい顔になって、面倒臭いように溜め息をする。

孫悟龍

「はあ、おm……。もういいだ。お前達は、入って、私達の特訓を見学しろ。」

ミーナ

「え?でm」黙れ。今のお前達は、ネウロイと戦うが、殺気をしなのままに俺たちみたいない敵と戦うなんて無意味と思う。私は、今のお前達を見て、既に苛立つ事が自覚していた。「……………」

ミーナが言うのが孫悟龍は、遮れながら言う。

ストライクウィッチーズは、反論する言葉を探す事はなくて、俯く。

ストライクウィッチーズと孫悟龍は、気まずい雰囲気纏めながら、ログハウスに入った。

ストライクウィッチーズは、ログハウスの中に見て、感嘆、驚愕していた。

孫悟龍

「そつだ、今日だけは特別に良い所を見せてあげる。俺に連れてくる。」

孫悟龍は、地下に入った。

ストライクウィッチーズは、地下がある事を驚愕しながら、俺に慌てに地下へ黙って連れて行く。

地下に着いて、殺風景な部屋に初めてカールスラントで作った別荘が入った水晶をパワーアップし、熱帯の森のジャングルが入った水晶と、砂漠が入った水晶と、南極と同じ地が入った水晶とネギまのエヴァンジェリンが生まれた地と同じ水晶が繋がりました。その足元に魔法陣があり続けた

ストライクウィッチーズは、その水晶を見て、また感嘆と驚愕していた。一名は、目を輝けた者は、水晶を見ていた。

エイラ

「凄い！！いろいろな水晶を作った。もしかして、孫悟龍は、それも作った!?!」

水晶を見る目が輝けながら、孫悟龍に振り返って、言う。

ミーナ

「え？水晶もお前が作った?」

孫悟龍

「ん？ああ。科学者の技術者は、見た事もない物を作り上げるなんて無理だが、私は、自分の魔法と科学でどんなものを作り上げた。それにハルトマン、貴女の妹に一度会った。」

エーリカ

「え！？貴方は、私の妹に会ってた！？」

孫悟龍

「ああ。ハルトマンの妹は、私から見た事もない機械の事を話す。その妹は、見た事もない機械の事を興味になる。私とその妹は、機械の事で話し合いする。が、俺だけは、見た事もない材料とその妹と一緒に危険な兵器を作り上げたが、すぐに実験をした。結局は、成功だが、屑上層部は、それを見て、増量を欲望するようにするが、私は出来ない。」

バルクホルン

「え？なぜ増量が出来ない？」

孫悟龍

「ええ。私は、実験をして、それは、ネウロイより危険だと感じた。対巨大ネウロイの一つだけの兵器になったのは、決めたが、上層部は、それを増量するように欲しい事を感じた私が、不味いと気付けた。早くスオムスのウィッチーズが納得する為に説得して、それをハルトマンの妹にあの妹専用兵器をあげて、別れてた。その後、私だけの材料が無いと、それと同じように作り上げたら、実験成功率は、ほぼ0%なんて無理だ。」

バルクホルン

「そうか。」

孫悟龍

「それにみんなは、スオムスの所に怪物が出る噂を知った？」

ミーナは、ハツと気付けた。

ミーナ

「まさかスオムスも…！」

孫悟龍

「ええ。私は、その噂に聞けて、戸惑ったが、自分で、確認して、忍者怪物を出現していた。流石私は、忍者怪物を見て、驚愕させた。スオムスのウィッチーズが、苦戦して、私が忍風戦隊になって、やつつけた。」

その事は、番外編、スオムスいらん子ウィッチーズを見てください。

ミーナ

「まさか…本当に出現していた。私達は、馬鹿馬鹿らしいと思ったが…」

孫悟龍

「お前達は、噂の信憑性を信じるか信じられないかなんて当たり前だ。あなた達は、疑心暗鬼になっているかもしれない。」

ミーナが反論する前にルッキーニが、難しい話を聞けて、痺れを切れるように我慢できなくて、大きな声を出す。

ルッキーニ

「うじゅいーいーいー！！難しい話を聴けない！！」

孫悟龍

「おっと、この前の話を話し過ぎた。さあ、水晶に入ろう。」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉を驚愕していた。

エイラ

「え！？これに入ろうダト！？ムリダナ、ムリダナ！！」

水晶を指せながら、言う、

その時、ストライクウィッチーズの中に勇気を出せる人が居る。

サーニヤ

「……私は、入ろう。」

エイラ

「サーニヤ！？入ろうのをやめろ！？」

孫悟龍は、険しい顔になってサーニヤに振り返って、見る

孫悟龍

「お前は、リトヴァクと言う娘だ。」

サーニヤ

「あ、はい。」

孫悟龍

「得体知れない私の言葉をどうして信じる？」

サーニヤ

「わからないけど、私は、お前の言葉を信じるようになった。」

孫悟龍

「はあく。リトヴァク。お…おっと、私から入ってる。みんな。私
が動いたとおりにする。」
先に折れて言う。

サーニヤは、俺の言葉に頷く。

孫悟龍は、やれやれと肩を竦めて、水晶に触れる時、足元に魔法陣
が出現して、彼が消えた。

ストライクウィッチーズは、消えた孫悟龍を見て、驚愕していた。

ルッキーニ

「うじゅ〜い！悟龍兄さんが消えた！！」

坂本

「ミーナ、彼は、何処だ？」

ミーナ

「駄目。私の魔法は、彼を探して、見つからない。」

坂本

「バカな…」

エーリカ

「あれ？水晶の中に誰かが居る。」

エーリカの言葉に気付けた。

ストライクウィッチーズは、エーリカが見た所を見て、驚愕してい

た。

水晶の中に孫悟龍が、仁王立ちをする。

シャーリー

「珍しい。孫悟龍は、本当に入るのか〜！」

芳佳

「しかし、どうやって入ろう？」

芳佳は、ストライクウィッチーズの名前を知ってる。ブリタニアで怪人出現の時、隊員同士ともに紹介し合いした。

ストライクウィッチーズ達は、考えて、サーニヤの行動に気付けない。

サーニヤは、孫悟龍が言われたとおりにおそるおそる手で水晶に触れる。

その後、サーニヤは、その足元に魔法陣が現れた。

エイラ

「！！サーニヤ！？」

サーニヤに手を伸ばしていくが、もう遅い。

サーニヤは、消えた。

エイラ

「サーニヤーーーーっ！！！」

バルクホルン

「落ち着け！？エイラ中尉！ミーナ、どうする！？」

ミーナ

「分からないけど、孫悟龍が言われたとおり、水晶に触れる。」

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、ミーナの言葉に頷けて、水晶に触れてる。

彼女らの足元に魔法陣が現れたら、消えた。

別荘

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、光を収まった後、おそるおそる目を開いた。

孫悟龍

「遅い。みんな。」

不機嫌で言う。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉に気づけて、孫悟龍の所に振り返ってみる。不機嫌で腕を組んでいた孫悟龍の隣にサーニヤが困ったようにオドオドしながら、こちらを見る。

孫悟龍

「全く相変わらずに得体知れない私の言葉を信じられない。お前達は、リトヴァクという娘より詰まらなそう。」

不機嫌な声で軽く睨んで、やれやれと肩を竦めながら溜め息に言う。

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、孫悟龍に睨まれて、ウツと呻く。

孫悟龍は、サーニヤを除くそんなストライクウィッチーズに背を向ける。

孫悟龍

「まあ、俺に連れて来い。」

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、孫悟龍に渋々従って歩く。

孫悟龍らは、広場に着き、歩くのを止まった。

坂本

「おい。どうして止m(バっ!!)うわぁ!」
と言うのが、衝撃音を受けて、耐えた。

ストライクウィッチーズも坂本と同じそれを受けて、耐えた。ルツキーニは、吹っ飛ばれるのが、シャーリーは、その少女を手に握る。

ストライクウィッチーズは、その音に聞けて、キョロキョロとする。

孫悟龍だけは、既にその音に気付いて、頭を上げて、ニヤリとして、呟き始めた。

孫悟龍

「フン。四人は、やるねえ。」

不敵に笑顔で口先を吊り上げながら、呟く。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の声に気付いて、彼が見た所を見た。

坂本

「バカな……」

バルクホルン

「嘘だ……」

彼女らは、目の前に信じがたい光景を見て、驚愕していた。

左の空に既に舞空術と似ている魔法をしたアギトと融合してピンク髪緑目から赤髪赤眼に変えた火の翼を広げる愛剣を振るうシグナムとリインフォース？と融合して赤髪蒼目から銀髪蒼目に変えた愛槌を振るうヴィータが、ぶつかって、既に激しい武器格闘戦をやり始めた。

そのせいで、衝撃波が出た

右の空に舞空術を使った狼人モード銀牙とそれと同じ魔法をした六つの黒い天使の羽リインフォース？は、拳脚と叩き合って、激しい攻防をして、既に激しい格闘戦をした。
衝撃波を出た。

ストライクウィッチーズは、彼らを見て、啞然としていた。

孫悟龍だけは、そんなストライクウィッチーズを無視しながら、シヤマルの所に歩く。

孫悟龍

「ただいま。シャマル」

シャマル

「あら。お帰り。主リユムーン。」

孫悟龍

「お客様を連れていた。」

シャマル

「あら、さっきの娘達じゃない。」

孫悟龍

「まあ、彼女達は、俺の仲間の特訓を見て、驚愕して固まった。」

シャマル

「あらあら。」

孫悟龍

「そうそう。世界に仮面ライダーの噂が広がってしまった。」

シャマル

「あら、世界にもう仮面ライダーの噂が広がった。」

孫悟龍

「む。まあ、俺と銀牙は、ワームとオルフェイクとドーパント共を仮面ライダーでやつつけた。そのせいで、噂が広がってしまった。」
片目を閉じながら困ったように頭を後ろで掻けて、言う。

シャマル

「まあ、御苦労する。」

孫悟龍

「まあ、それよりザフィーラは、何処か？」

シヤマル

「ザフィーラは、自分の部屋に頑張つて主リユムーンに追い付く自己特訓をする。」

孫悟龍

「フン。ザフィーラらしいだ。」

孫悟龍

「しかし、銀牙は、リインフォース？と本気で戦える。」
戦闘した銀牙に振り返つて、不敵に微笑しながら、言う。

シヤマル

「ええ、私達ヴォルケンリッターは、夜天の王を守る騎士だが、強く過ぎた主に守られるかもしれない。でも、私達は、主らに役に立ちたい事と主らに追い付く力をする事を頑張っていたい。」
苦笑して、拳を作りながら言う。

孫悟龍は、シヤマルの言葉を聞いて、フンと微笑をしながら、満足気に頷く。

孫悟龍とシヤマルは、四人の戦う所に向き、見る。

孫悟龍らが入った時間と同時刻リインフォース？と銀牙が戦えた所

リインフォース？

「ふっ！」
ドゥー！と拳を放つ。

銀牙は、彼女の拳をかわして、膝を蹴り上がる。

リインフォース？は、それを上昇で避けて、銀牙の頭を蹴るために放つ。

銀牙は、身を沈めて、空中で、前回転してからかかと落としを放つ。

リインフォース？は、早く腕で交差してそれを防ぎ、後ずさりする。

リインフォース？

「くっ！刃似て、血に染めよ。」
痛い所を感じて顔が歪みながら、詠唱する。

リインフォース？

「穿て、ブラッディダガー！！」

銀牙

「！？くっ！！」
それを避け続けるが、顔と左腕がかすかに受けた所もある。

銀牙

「くっ！」
かすかに受けた所を左腕だけに片腕で抱けている。

銀牙

「くっ！ふっ！！はっ！！はっ！！」
抱けていた腕を解きながら、リインフォース？から早く距離を遠く

とって、両手から連続に気弾を放つ。

リインフォース？は、それを避け続けるが、銀牙は、チーターと同じぐらいな速さで消えてリインフォース？の前にすぐに現れて、いつの間に銀牙の両手が既に気弾を作った。

銀牙

「はあああああああ！！！！」

リインフォース？の腹に、集まった気弾を放れたら、吹っ飛ぶのが、爆発してから煙が舞い上がった。

リインフォース？

「きゃあああああああ！！」

それを受けて、煙の外へ吹っ飛ばれた。

リインフォースは、吹っ飛ばれたのを止めて、悲痛な顔で受けてた腹を右手で抱きながら、構えた。

銀牙

「止め……」

と冷酷でそう呟くと自分の周りに煙を払うために何かしら風で吹いて、煙牙を雷と同じエネルギーに溜めるように構えた。

リインフォース？は、銀牙が構えたのを見て、危険だと感じながら、詠唱をする。

リインフォース？

「滅びの光を。星よ集え、全てを打ち抜く光となれ。」

上空に周囲に散らばった桃色の魔力を集める。

銀牙

「来駕雷牙!!」バツ!!

溜めたら、手を振るうから狼の形の銀色の電撃を放れた。

リインフォース?

「貫け!閃光!スターライト・ブレイカー!!」バツ!!

桃色の砲撃を放れた。

その銀色の電撃と桃色の砲撃が強くぶつかって、光が爆せて、煙が舞い上がった。

周りが、吹っ飛ばれた。

それを収まる。

煙が晴れていると、銀牙とリインフォース?が、満身創痍した。

銀牙

「はぁッ……………はぁッ……………」

リインフォース?

「はぁッ……………はぁッ……………」

銀牙とリインフォース?が、強い気配に感じて、その気配に振り返って構え直せた。

孫悟龍

「そこまで。六人。」

強調みたいな声で言う。

その気配の人物を見て驚愕していた。

銀牙

「お兄さん!?!」

リインフォース?

「主リユムーン!?!」

空に居た孫悟龍を見て、驚愕した。

あれと同時刻ヴィータとシグナムが戦えた所

ヴィータ

「うおおおおおお!!」

自分のグラーファイゼンを振るう。

シグナム

「ふっ!?!」

自分のレヴァンティンを振るう。

金属音を空で響く。

グラーファイゼンとレヴァンティンがぶつけ合いして、最後に強く

ぶつけて、衝撃波を起こって、二方が、後ずさりした。

ヴィータ・リインフォース？

「フリジュットダガー！！」

ブラッディダガーに酷似した凍結効果を付与した多数の水色の短剣でヴィータの頭上に現れて、アギトと融合したシグナムを襲う。

シグナム・アギト

「ブレネン・クリューガー！！」

襲われたフリジュットダガーを自身の周囲に発生させたそれと同じ多数の火炎が撃ち出す。

フリジュットダガーとブレネン・クリューガーがぶつけ合い、融け合い、雲を舞い上がりした。

シグナムは、目の前に雲のお陰で、敵が見えないが、お前の攻撃が待ってる様子で見るように構えながら、立つ。

グラーファイゼン

『Explosion』

ヴィータ

「うおおおおお！！」

と既にカートリッジをして、その魔力のお陰にロケットのように噴射させ、加速させた上でシグナムに叩きつける。

シグナム

「くっ！！」

剣で防ぐ構えをする。

ヴィータ

「まだまだ!!」

グラーフアイゼンを何度も何度も振り回そう。

シグナム

「くっ!」

それを防ぎ続けながら、後ずさりする。

ヴィータは、グラーフアイゼンを振り上げる。

ヴィータ

「うおおおおおおお!!」

振り上がったグラーフアイゼンを振り下がる。

シグナム

「くそっ!?!」

レヴァンティンを強く振るう。

グラーフアイゼンとレヴァンティンがぶつかり合ったが、身長は、シグナムの方が上だ。

シグナムは、ヴィータを押し勝った。

ヴィータ

「うわあっ!?!」

それを受けて、体を崩せた。

シグナムは、それを見逃せず、剣を振るう。

ヴィータ

「ッ！！」

直感を感じて、早く防ぐ。

ぶつければ、お互いに後ずさりした。

ヴィータ・シグナム

「ッ！！カートリッジ！！」

グラーファイゼン・レヴァンティン

『Explosion』

自身のデバイス、グラーファイゼンの柄とレヴァンティンの刀身の根元の部分から薬莖が排出される。

一気に彼女達の魔力が上がる。

ヴィータ・リインフォース？

「轟・天・爆・砕！！」

グラーファイゼン

『Gigantform！！』

いつの間にグラーファイゼンは、ギガントフォームになったが、その周りの氷が集まった。

シグナム・アギト

「剣閃烈火！！」

シグナムの左手にボツと剣の周りに剣を模した伸縮可能な炎が発生させた。

ヴィータ・リインフォース？

「『フリタードハンマー！！』」

氷が集まった鉄鎚を振るう。

シグナム・アギト

「『火龍一閃！！』」

焰が発生させた剣を振るう。

鉄鎚と剣がぶつかって、光が爆せて、これより凄く煙が舞い上がっていた。

煙が晴れていると、リインフォース？と融合したヴィータとアギトと融合したシグナムが、満身創痍した。

ヴィータ

「はぁッ……………はぁッ……………」

シグナム

「はぁッ……………はぁッ……………」

ヴィータ・リインフォース？とシグナム・アギトが、強い気配に感じて、その気配に振り返って構え直せた。

孫悟龍

「そこまで。六人。」

強調みたいな声で言う。

その気配の人物を見て驚愕していた。

ヴィータ・リインフォース？

「兄貴！？」 『リュムーンだ〜！？』

シグナム・アギト

「主リュムーン！？」 / 『リュムーン！？』

シグナムとヴィータと銀牙とリインフォース？の戦いを中止する前の時間 - -

シャマルと孫悟龍は、四人の闘いを見た。

孫悟龍

「へーえ、やるな。銀牙もリインフォース？もよく戦えた。しかし、まだ俺や本来の力カロットオリジナル（孫悟空）とベジータの本気の力を追いつくなんてまだまだ先の事です。」
腕を組みながら、余裕するような不敵な笑みで言う。

ストライクウィッチーズは、シグナム達の闘いを見て、まだ啞然のままに驚愕していた。

ミーナは、早く我に返った。

ミーナ

「ちょっと！孫悟龍さん。今の彼女らの闘いは、危険だ！！？？」
サーニヤを除くストライクウィッチーズは、ミーナの言葉に同情するように頷く。

孫悟龍は、ミーナの言葉を聞いて、険しい顔になって、その所に振り返った。

孫悟龍

「はあ？何言ってる。あなた達はバカ？」

バルクホルン

「何だと……！」

孫悟龍

「はん。…もし、あなた達は、ネウロイを絶滅し終えるから、平和になった？」

鼻で笑い、挑発する的に言う

ミーナ

「それは……」

孫悟龍

「ふん。それは出来ない。あなた達の上層部は、利益という欲望の為にまた自分の国の同士と戦争するなんて間違いない。」

ストライクウィッチーズ

『なっ！！！？』

芳佳

「そんなことはない！！」

孫悟龍

「ふん。豆犬娘、貴女の父は、ネウロイを滅ぶ為にストライカーという魔力の為に機械を作って、あなた達の軍は、希望を掴めるなんて嬉しいだが、軍の上層部は、ウィッチであるあなた達を見下ろすなんて間違いない。あなた達ウィッチは、最悪な事態を起こす時、

上司が貴女の意味と関係ないように待機などの命令を受けるなら、人を見殺すかもしれない。」

ストライクウィッチーズ

『つつ!!?!?』

孫悟龍

「もし、ネウロイじゃなくてあなたたちみたいな人が現れるとき、貴女は、どうする?」

ミーナ

「それは……」

芳佳

「戦闘を止める為に話をする!!」

孫悟龍

「それは……無理だ……」
と横に頭を振りながら言う。

芳佳

「えっ!どうして!?!」

孫悟龍

「もし、あなたみたいな人は、それを止める為に戦争をする人と話にかけるなら、その人は、彼女のその話を聞いて、怒りで、彼女を敵のスパイと思いきんで、殺せるかもしれない。」

芳佳

「つつ!!?!?」

孫悟龍

「例えば、悪いガキが、あなた達の大切な食材を盗むなら、あなた達は、どうする?」

芳佳

「それは…」

孫悟龍

「悪ガキと話し合いで許す?……それは甘ったれるなんて無意味だ。なぜなら、あなた達みたいなウィッチは、ネウロイが街に滅びる前に倒せたのが、街の中にクレーターの中でいた子供がそのウィッチを助けを乞うが、その事に気付いてないままにそれを倒せた後に、帰ってしまった。その子供が、自分を助けずにそのウィッチが帰った事にシヨックしていた。その後、子供は、ウィッチ達とネウロイ達を憎悪になっている。子供は、腹が減った事に感じて、あなた達の基地みたいな所に忍び、食材を盗むが、ウィッチは、食材を盗む子供を捕まえるが、子供が、ウィッチを憎悪な目で向けていた。ウィッチの説教を聞ける子供は、ウィッチの事をウザいと思って、刃みたいなものを出して、ウィッチを殺す。その後、その仲間のウィッチは、仲間が殺される事を感じて、怒りで、ウィッチを殺した子供を殺した。」

ストライクウィッチーズ

『つつ!』

孫悟龍

「それが正義ですか?あなた達は、もし、本当に私が言ったウィッチがやった事と同じで、どうする?」

ストライクウィッチーズ

「……………」

と反論するな言葉を見つからず、俯く。

孫悟龍

「ふん、あなた達みたいなウィッチーズは、やっぱり詰まらない。ネウロイを倒せたか…?」

坂本

「あ…、当たり前だ!!?? ウィッチには不可能はなしだ!!??」

孫悟龍は、坂本の言葉を聞いて、面倒するように溜息する。

バルクホルンは、孫悟龍がそんなに溜息する声に気付いて、苛立つ。

バルクホルン

「何、面倒みたいに溜息をする!!??」

リーネとルツキーニとサーニヤは、坂本とバルクホルンの怒気みたいな声を聞いて、びくっと吃驚して、震える。

孫悟龍

「…………… やっぱり私達の戦場とあなた達の戦場が違う。」
顔を隠れる為に俯きながら、言う。

坂本

「何…?」

その瞬間に孫悟龍は、俯くから頭を上がり、瞳孔を縦に割れながら冷酷な面を被れて、覇気と殺気をするみたいなオーラを少し溜め出

せる。

ストライクウィッチーズは、そんな孫悟龍を見て、冷汗をかいて、脊髄をゾツとして、後ずさりしたが、エイラ達は、それを受けて、気絶を思うので、耐える事が出来たのに脚だけが恐怖のようになまだ震えた。でも、サーニヤだけは、恐怖するように体が少し震えた。

孫悟龍

「私達の戦場は、あなた達の戦場より、殺し合いをする戦場だ。」

サーニヤを除くストライクウィッチーズ

『なっ！！！！！！！？？？？？？』

孫悟龍の真実な言葉を聞いて、ショックをしたが、サーニヤだけは、違った。

サーニヤ

「（殺し合いをする戦場……？孫悟龍さん達は、どうして私達より危険な戦場をする。孫悟龍さんは、優しさする所も見たが、今は、初めて厳しさと冷酷する所も見たので、私は、そんな孫悟龍を見ては嫌だ。優しげな孫悟龍をもっと見たい。）」

孫悟龍は、スツと瞳孔を元に戻って、そのオーラを解く。

孫悟龍

「……………」
無言で、寡黙する時に、爆発音を聞く。

その音に振り返ってみて、彼らは、満身創痍になった。

孫悟龍

「ふん。終わった…」

つまらなそうに鼻を鳴らしながら、呟くと同時に闘いを止まる感じに行動をする。

シャマル

「今からシグナムらを止まる？」

孫悟龍

「ああ。それ以上にそんな私（俺）の仲間が傷付けない。仲間が死んでは私（俺）が困る」

不敵に笑いをしながら、言う。

シャマルは、孫悟龍の答えに聞けて、笑顔になった。

シャマル

「ええ。やっぱり主リュ…いや、悟龍は、優しいだ。」

孫悟龍

「ふん。まあ、今から止める。」

そっぽをしながら、舞空術を使うとふわりと飛び、上空へ飛び上がった。

左のシグナム達と右の銀牙達の所の間所まで到着した。

孫悟龍

「さあ、今から止める。」

そう言つと少し殺気を湧き出す。

銀牙・ラインフォース？・シグナム・ヴィータ

「「「「!!!???'」」」」

四人は、孫悟龍の殺気に気付いて、その所に振り返る。

孫悟龍

「それまで。六人」

銀牙

「お兄さん!?!」

リインフォース?

「主リユムーン!?!」

ヴィータ・リインフォース?

「兄貴!?!」『リユムーンだ〜!?!』

シグナム・アギト

「主リユムーン!?!」 / 『リユムーン!?!』

六人は、こちらの所に見て、驚愕した

満身創痍になったシグナムとヴィータがアギトとリインフォース?と融合解除した。

そんなシグナムとヴィータとアギトとリインフォース?と銀牙とリインフォース?は、孫悟龍と一緒に広場に降下して、着陸した。

孫悟龍

「シヤマル、手伝う。」

シャマル

「はい。」

孫悟龍とシャマルが、満身創痍になった六人を治癒する。

サーニヤは、孫悟龍の治癒魔法を聞いて、目を開いた。

サーニヤ

「これは…（この時、私を包む温かさ治癒の魔法を受けられた時と同じだ。）」

孫悟龍は、シグナムらが既に治癒した確認をして、大丈夫と感じながら頷く。

シグナムは、孫悟龍に質問をかける。

シグナム

「主タカヒロ。私達は、どうして模擬戦を中止する。」

孫悟龍

「どうしてって、お前達は、仮面ライダーを理解するために模擬戦する。」

ウィータ

「仮面ライダーで模擬戦する？」

孫悟龍

「ええ。でも、お前達ヴォルケンリッターや銀牙は、さっきの模擬戦の疲労が残るが、俺達の闘いを見てるだけでいいだ。」

ヴォルケンリッターは、孫悟龍の言葉を納得していた。

銀牙

「本当に仮面ライダーでやる!?」

見上げたままに輝き目をしながら、狼の尻尾をパタパタと振る幻を
して言う

孫悟龍は、そんな銀牙を見て、苦笑をする。

孫悟龍

「銀牙、これを渡して、使う。ただし、さっきの戦闘の疲労を残る
かもしれない。戦闘をしないが、俺の言うとおりに召喚してくれ？」
銀牙を見下ろし、ディエンドライバーに渡せながら、言う。

銀牙

「うん！分かった！」

無邪気な笑顔で答えた。

孫悟龍は、そんな銀牙を見て、不敵な笑顔をする。

銀牙から背を向けて距離を離れて、銀牙に向き直す。

孫悟龍は、いつものから戦闘モードに変えると、プレッシャーと近
いような威圧感を湧き出す。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍のそんな威圧感を受けて、ゾク
つとした中に耐える事が出来なくて気絶する人が、少ないが、サー
ニャは、この件とさつきをする時、孫悟龍の威圧感なオーラの体験
を覚えて、半分に震えたり半分に耐えたりする。

サーニャ

「（ごう、悟龍さん…その件の時、それと同じで、せ、戦闘モードに入ると、怖い顔になっている。それだけじゃなくて、悟龍の仲間も悟龍と同じ…？）」

孫悟龍は、無言でディケイドドライバーを取り出し、腹部に装着した。

芳佳

「何あれ!？」

得体の知れない物が出てきて疑問に思う。

孫悟龍

「行くぞ…銀牙…」

重い言葉で一枚のカードを取り出す。

銀牙は、孫悟龍の言葉を答えたように頷き、ディエンドドライバーを構えながら、一枚のカードを取り出し、あれをディエンドドライバーに差し込み、上を掲げる。

孫悟龍・銀牙

「変身!…」

孫悟龍は、ディケイドと言う絵柄のカードをディケイドドライバーにセットする。

『Kamen rider Decade!』

『Kamen rider Deno!』

そんな二つの電子音を鳴ると孫悟龍と銀牙の周りにいくつもの影が出現した。それがやがて孫悟龍と、銀牙と一体化する。

一体化し終わると、そこにはマゼンタと黒、白のカラーリングが特徴的な姿の男と、シアンカラーと基調の男が立っていた。

ストライクウィッチーズは、変化していた彼らを見て、驚愕していた。

ミーナ

「……あれは？」

芳佳

「な、何なんですか……あれ……」

バルクホルン

「あれは……」

エーリカ

「それにどこから見た事があるベルトだ。」

坂本

「お前達は、何者だ。」

男達は、答えた。

孫悟龍 デイケイド・銀牙 デイエンド

「俺／僕は、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ。」

デイケイドは、デイエンドに向き直す。

ディケイド

「ガタツクを呼んでくれ。」

ディエンドは、ディケイドの言葉に頷けて、ガタツクと言う絵柄のカードにディエンドライダーを差し込み、銃身を伸ばすようにスライドさせた。

『Kamen rider Gatak』

そしてドライバーをディケイドの方へ向ける。

ストライクウィッチーズは、ディエンド（銀牙）の行動を見て、驚愕していたが、ヴォルケンリッターは、孫悟龍と銀牙の行動を既に理解していた。

芳佳

「やめる!?!」

ディケイドとディエンドは、芳佳の言葉を聞こえない。ディエンドは、ディエンドライダーで引き金を引いた。

ストライクウィッチーズ

『!?!』

撃ちこむのを驚愕して、目を閉じたが、彼女らの予想を外れた

彼女らは、おそろおそろ目が開く。

ディケイドとディエンドの間に光る白い影がいくつも現れ動き回る。

カブトと同じ蒼いクワガタムシのようなライダー、ライダーフォームガタツクが現れた。(Rガタツク以下

ストライクウィッチーズ

『え?』

間抜けな声をする。

Rガタツク

「よろしく。ディケイド。」

ルッキーニ

「うじゅ〜〜いい!!蒼いクワガタムシ!?」
輝きながら言う。

ディケイドらは、遠くから騒ぐ者がいるから、無視する。

ディケイド

「ああ、こちら、よろしくが、お前に合うライダーになってやる。」
不敵に微笑しながら分かったように言う。

ディケイド

「おい、堅物少女。カールスラント襲撃の時に覚えてくれ。」

バルクホルン

「堅物少女じゃない!っつて、え……?今、何と言う。」
突っ込みをした途中に、彼が言葉を言う事に気付いている。

ライトブッカーからカブトと言う絵柄のカードを取り出し、ディケイドライバーに挿入した。

『Kamen Rider Kabuto』

カールスラントの件（第一話）と同じで、カブトへと変身しちゃった（以下Dカブト

芳佳

「なっ！姿が変わった!？」

ルッキーニ

「うじゅ〜い!？今度は赤いカブト虫になった!？」

サーニヤ

「変化する……」

ストライクウィッチーズは、ディケイドが変化していた事を驚愕したが…

カールスラントのウィッチ

「なっ!?!?!あの姿は!?!」

カールスラントのウィッチだけは、目を開けながら、驚愕の反応が違い、カールスラント襲撃の件を覚えた。

Dカブトは、ふっつと肩を竦めながらパンパンと手を払い、ガタツクに向き直す。

Dカブト

「おい、お前は、クロップアップを使用するなんて大丈夫？」

Rガタツク

「えっ、うん。三分で大丈夫だ。」

Dカブト

「そうか…クロップアップのまま決闘する。」

Rガタツクは、Dカブトの言葉を驚愕していた。

Rガタツク

「え！？クロップアップのまま決闘するなんて無理！？」

Dカブト

「何言っていた…：…本来の仮面ライダーカブトに追い付きたい！」

Rガタツク

「それはそうだが…」

Dカブト

「ごそごそ何を言っている。行くぞ！」

そういうと同時にその一枚のカードを取り出し、ディケイドドライバーに挿入して、セットする。

Rガタツク

「待って！？もう！俺は、もう知らない！？クロップアップ！？」
そう言うと同時にベルトの右部分を叩いた

『Attack ride Clock up』
『Clock up』

電子音と共に、DカブトもRガタツクも消えた。

芳佳

「二人が消えた!？」

エイラ

「何処だ……」キョロキョロ

ミーナは、二人が居るのが確認するために使い魔の尻尾と耳が現れて、能力を使うが、目を開いていた。

ミーナ

「嘘……あり得ない……さすが私の能力で、なんとシャーリーの音速を超えた速さを捉える事が出来ない。」

シャーリー

「え!?!二人が私の能力を超えた速さをする!？」

ミーナ

「ええ。シャーリーの……」

ザキイン!ガキイン!

ペリーヌ

「何よこの音!？」

姿が見えない代わりに聞こえるの物が激しくぶつかる金属音。

坂本

「しかし、シグナムらは、私達と違うように見えない速さを捉えた。
「チラッ

シグナムらの所に視線して、ヴォルケンリッターと銀牙は、ダイエントストライクウィッチーズと違って、孫悟龍の厳しい特訓のお陰で、クロックアップの動きをあちこちに捉える事が出来た。

そして

『Clock Over』

電子音が鳴り響く

ストライクウィッチーズは、その電子音を聴けば、その音の所に振り返って言う。

ストライクウィッチーズとヴォルケンリッターから少し離れた場所で、カブトが立っており、その前に、

Rガタツク

「くっ！」

片膝をついたままに満身創痍をして、体のあちこちに火花が起こつて、立ちあがるが、それが出来ない。

Dカブトから解除されたダイケイドは、片膝をついたままにガタツクの所に歩いて行って、目の前に止まった。

今から何があったのかを先程のように超スロー再生してクロックア

ツブ空間見てみよう

クロックアップ空間

ガタツクは、両肩に装備されている一対の曲剣ガタツクダブルカリバーを用いて、両手に装備させた。

Rガタツク

「はっ!!!」

右のガタツクカリバーを振るう。Dカブトを斬り込む。

Dカブトは、それを避け込むが、

Rガタツク

「ふっ!!!」

横から左のガタツクカリバーを振るう。

Dカブト

「うわぁ!」

それを受けて、火花を起こしながら、後ずさりして片膝をついた。

Dカブト

「やるな。剣を使うには、俺も剣を使う!」

不敵にそう言うと同時にライドブックから一枚のカードを取り出し、立ち上がり、それを挿入してセットする。

『Attack rider Kabutkunai gun』

電子音と共にDカブトの手にカブトクナイガンが現れた。

Dカブト

「いくぞー!!」

Dカブトは、Rガタツクに向けて行った。

Dカブト

「ふっ!!」

ガタツクをカブトクナイガンのクナイモードで斬り込む。

ガタツクは、それを避けて、右のガタツクカリバーを振るう。

Dカブトは、カブトクナイガンで早く跳ね返すが、ガタツクは、左のガタツクカリバーを振るう。

Dカブトは、それを横へ早く飛び退けて地面を一回ほど転がって、カブトクナイガンのクナイモードからガンモードに変える。

Dカブト

「はっ!!」

片膝をついたまでに立ち上がり、撃ち込む。

Rガタツク

「わっ!!」

それを受けて、地面を二回ほど転がった。

Rガタツク

「おい!銃を使うのは、卑怯だ!!」
顔を上げながら言う。

Dカブト

「はぁ？何言ってる…戦場では、卑怯などの意味がない。もし、本当に卑怯な手を使われたら、間違いなく死ぬ。」

Rガタツクは、Dカブトの正論の言葉を聞いて、うっとさせた。

Dカブト

「まあ、これで決着だ。」

そう言いつとカブトクナイガンが消えたと同時にカブトの黄金の紋章のカードを取り出す。

対するRガタツクは、急いでに立ち上がり、ガタツクゼクターのボタンを押し始めた。

『One Two Three』

左手で支え、右手でホーンを上げた。

これを挿入してセットする

『Final Attack K , K , Kabut』

電子音と共にベルトから電撃が伝わり、カブトホーンに伝わったのち、

Rガタツク

「ライダーキック！」

ホーンを再度倒した。

『Rider Kick』

ベルトから電撃が伝わり、クワガタホーンに伝わった。

DカブトもRガタツクも電撃はすぐさま、右足に一点に収束し、

Dカブト

「はっ！」

と高く飛びかかる。

Rガタツク

「はあっ!!！」

Dカブトと同様に高く飛びかかる。

Dカブト

「はあああああーっ!!!!??」

Rガタツク

「はあああああーっ!!!!??」

Dカブトもガタツクもライダーキックを行い合いして、ぶつかって爆発したが、Dカブトは、ガタツクに少し大ダメージを与える。

ガタツクは、体全身にDカブトが放った飛び蹴りでの電撃を少し纏ませ、

『Clock Over』

Rガタツク

「くっ！」

少し大ダメージを与えられたガタツクは、片膝がついた

クロックアップからクロックオーバーするまでの間の事は、全て一瞬の出来事であり、ストライクウィッチーズのみんなと流石の坂本やミーナには気付く事は、愚かその姿を見ることがすら出来ないが、ヴォルケンリッターは、最後まで把握したのが出来た。

坂本

「…バカな…：あり得ない…：お前達は…：私たちウィッチ以上…：いや、誰にも超える力を持つ人物達だ…：」

Rガタツク

「くっ…：俺の負け…：」

ディケイド

「…：ふっ、今の攻撃は良い。また自分の世界で本来のカブトと共に本気で頑張つて守るかもしれない。お前は、自身を信じる。」
仮面の下に不敵な笑みをしながら、優しさに言う。

Rガタツク

「…：…：！」

驚きながら、顔が上げている

Rガタツク

「有難う。まさか、お前に頑張ってくれるために慰められる。」
感謝しながら、言う。

ディケイド

「フン。まあ、またいつか会おうと、格闘の練習をする。」

Rガタツク

「はい！俺は、頑張ろう！！」

マスクの下に笑顔を浮かべ、グツと拳を作って、銀のオーロラが現れて、それへ入った。

ディケイド

「フン。口先だけは、一人前だ。」

不敵に微笑しながら、背に向かったガタツクを見てから、呟く。

ディエンドがなにかをするの行動をする

ディケイド

「だが…俺は、誰にも負けない……」

そう強調に言うと同時にディケイドの黄金の紋章と言う絵柄のカードを取り出し、ディエンドライバーに差し込み、銃身を伸ばすようにスライドさせた。

『Final Attack Decade!!』

『Final Attack Decade!!』

ディケイドは、いつの間にライドブッカーが、銃モードになって、ディエンドに向けると、自分の目の前に数枚のカードが現れた。

ディエンドも、ディケイドに向けると、大量のライダーカードで作られたターゲットサイトが出現した。

ディケイド

「ふっ!!??」

ディケイドの必殺技、ディメンションブラストを放れた。

ディエンド

「はっ!!??」

ディエンドの必殺技、ディメンションシュートを放れた。

必殺技をぶつかり合いして、光が爆せて、そのお蔭で、すごい埃と煙を舞い上がった。

芳佳・リーネ・サーニャ・ペリーヌ

「くっくっ!!??」

バルクホルン・坂本・ミーナ

「くっくっ!!??」

シャーリー・ルッキーニ・エイラ・エーリカ

「くっくっ!!??」

ストライクウィッチーズは、爆風を受けて、大地の埃を防ぐために顔を隠せて、吹っ飛ばれて、耐える。

ヴォルケンリッター

「……………」

ヴォルケンリッターは、無言で爆風を受けるが、埃を防ぐために自分のオーラで守りながら、平然で耐える。

煙の中にディケイドとディエンドがご無事ですか？

ストライクウィッチーズは、孫悟龍が作った別荘の能力を知らない。

12話 ストライクウィッチーズ、悟龍達の特訓を見学する 仮面ライダーの模

次回予告

孫悟龍

「オツス。俺、孫悟龍」

孫悟龍

「ヴォルケンリッターの模擬試合や仮面ライダーの模擬試合をやった。汗をかいて、臭くなった。」

シグナム

「流石主鷹宏！！主鷹宏が作った温泉は、豪華より凄い！！??」

孫悟龍

「だが、ストライクウィッチーズは、俺達と一緒に温泉を入れる事を勘違い。（呆）」

サーニヤ

「夜になったら、私は、悟龍さんにこの件以来、蒼髪の青年の正体を言う。」

孫悟龍

「珍しいようにリドヴァクという娘は、その件の時に、蒼髪の青年の正体が分かった。俺は、その娘に興味を持ち始める。」

孫悟龍

「それに、あり得ない…まさか俺が作った別荘にヤミーが出る。」

サーニャ

「悟龍が、デイケイドという仮面ライダーに変身するだけじゃなくて、……三色みたいな仮面ライダーも変身する……」

孫悟龍

「ヤミーの雑魚共をやっつけたが…また怪物が出た。」

サーニャ

「吸血鬼みたいな化け物……」

キバツト

「よっしゃー！キバっていくぜ！」

13話「温泉とメダルと吸血鬼」

番外 孫悟龍、スオムスいらん子ウィッチーズの出会い

シグナム

「主リユムーン」

孫悟龍

「む？」

シグナム

「お前がアフリカだけじゃなくて他のウィッチーズと出会った事がありますか？」

孫悟龍

「ああ。スオムスでウィッチーズと出会った。」

ザフィーラ

「どつやって出会う。」

孫悟龍は、それを聞いて、頭を掻きながら、曇った顔をする

孫悟龍

「あゝ、その話は、ストームウィッチーズとストライクウィッチーズと出会う前、カールスラントに出る前の話です。俺は、修業中に自分の正体を隠す為に自分が作った年齢詐欺の薬を飲んで、大人になってカールスラント人の髪と同じに変装して、買い物をしてから別の人が例の噂を話しているのを見て、聞けてかけて、例の噂では化け物の事を話す。化け物の事を聞き、頭で閃く。仮面ライダーと戦隊の事と思うから、自分の家に帰って、準備して、スオムスへ行く。」

と説明で言いながら、回想する。

3年前のカールスラント 孫悟龍 12歳

孫悟龍は、ネウロイに気付けない為にステルスするような気配を纏めながらウィッチ達が敵わないネウロイや仮面ライダーの敵、バケモンを探すためにスオムスという所へ行く。

孫悟龍

「やれやれ。スオムスから忍と似ている化け物を出現する噂を話す人がいる。」

その話を聞き、確かめにここに来た。」
と溜息をしながら腕を組めて、飛行し、言う。

その時。

ダダダダダダダダダダダ！！

孫悟龍

「うん？銃が撃つ音か？このウィッチーズは、ネウロイと戦い始めた？まあ、目よ、鷹モード。」

と銃撃音を聞き、その所を振り返って見て、呪文みたいな声で呟く。
鷹みたいな目で、ここのウィッチーズが、今まで見た事がない型のネウロイと戦えて、苦戦するのを見た。

孫悟龍は、ネウロイの今まで見た事がない型を見破る。

孫悟龍

「鳥…？（今まで、どの空専戦闘機の形が現れるが、今度は、鳥と動物型？もしかして、俺がいるせいでイレギュラーになったので、見た事がない型のネウロイが現れるかもしれない。）」「戸惑いして、呟いています。」

孫悟龍

「まあ、ウィッチーズが、苦戦していた。しょうがない。少し助けてあげる。」

孫悟龍

「うーん、カラドボルグだけを使いすぎる方が良くない。速い鳥に敵う別の神話の武器がある。」
速い鳥に敵う神話の武器のイメージを探した。

孫悟龍

「それ！！それに決めた！^{トレスオン}投影開始。」
雷を斬る刀をイメージしていた。

手から日本刀と同じで、黒と紫が混ぜたらしいな色の長刀を出現した。

孫悟龍

「まあ。その剣は、俺の桁外れな速さに合わせている。でも、仮面ライダーカブトにならずにクロックアップを使うなんて危険だぜ…」
その剣を肩に担ぎながら顎に左手を当てて、言う。

孫悟龍は、ネウロイの赤いビームに迫れた刀を持つ少女ウィッチを

見て、

孫悟龍

「少女が危ない……！ちっ！しょうがない！今だけは、無茶にやる！！クロックアップ！！」《Clock up》
そう叫ぶと音速を超えるようでも消えてこのウィッチーズをかけた行く。

??? side

私、性格は超がつく生真面目で堅物。責任感が強く、それゆえに視野狭窄におちいりがちである。一方で案外雰囲気は弱く、流されやすい面もある。スオムスいらん中隊ウィッチーズの中で扶桑のエース、穴吹智子。

私達は、ネウロイを撃破するために出撃するが・・・、私達は、苦戦する事になった。

くそ！！見たこともない型のネウロイ！！それと戦えたが、私だけじゃなく他も苦戦していた！！

見たこともない型のネウロイの口が開けた。口の中に赤い所から強力なビームを放れた。

智子

「!?!?……くっ！」

シールドを展開して、防ぎながら後ずさりする。

見た事がない型のネウロイを倒す方法はとうする!?

考える途中に、ネウロイが赤いビームを放れた。

???

「智子少尉! ? 危ない!!??」

智子

「!??」

考えた途端に智子の前に赤いビームが迫られる。

バリアを展開するのが間に合わない。

智子

「(嘘だ……私は、死ぬ? ……イヤ!! 私は、まだ戦える!!)」
目を閉ざしながら、決死の願いを思う。

その時、願いを叶う時が来た。赤いビームが、智子に着弾する前に、蒼い流星が、智子を抱けて、黒と紫を混ぜたような剣を振り上げて、斬り込む。

そのビームを一刀両断した。

ウィッチたち

『!?!?!?!?』

ウィッチ達は、ビームを一刀両断することを驚愕した

智子

「え？」

智子は、閉ざした目が開いて、それを見たので、びっくりした。

智子

「（私を助ける……？それに誰か私を抱けている？）」「
思いながらチラツと顔で影のおかげに隠された青い流星を見る。

青い流星の正体は、ストライカーを履けないように空を飛ぶ青色の戦闘服（服の内は、オレンジ色の胴着）を着る凄い覇気みたいな威圧感を湧き出す蒼色の肩まで長い髪に、黒と紫を混ぜたような剣を持つ青年だ。

その後に、見えない速さで、私の仲間ウィッチの前に現れて、驚愕したままに抱けてた智子を降ろる。

ウィッチ達も私と同じようにする。

驚愕したウィッチ達の一人も早く我に返った。

????

「智子さん、大丈夫だ？」

心配するような表情を浮かべながら、言う。この娘は、天然ボケで、何も無い所ですっ転ぶことができるほどのドジ娘、エルマ・レイヴオネンだ。

智子

「ああ、大丈夫。」

智子は、蒼髪の青年に振り返って、質問をするが、その青年は、消えた。

ウィッチ達は、蒼髪の青年を探す。

ネウロイ

「……………」

ウィッチ

『え？』

ネウロイの掛け声に気付いて、その所に振り返っている。

そついう光景を見て、驚愕していた。

見えない高速な早さで、ネウロイを圧倒する。

右翼、左翼、尾、腰を斬り込む。

ネウロイは、圧倒的でされるのが怒りを溜めて、目立ちやすい色の所を自分から赤いビームをあちこちに放れた。

蒼髪の青年

「……………」

無言で難しい技術をするような避け方で、また見えない高速な速さをする。

????

「すごいね……」

語尾に「〜ね」とついたり「〜ねー」という話し方をするため、喋り方に癖がある能天気なポニーテールの巨乳田舎娘、キャサリン・オヘア

????

「青年め、速さは、智子以上……」

優れた飛行技術と異様なまでの撃墜への執着を見せる強引な射撃から「銀狐」シルバーフォックスと呼ばれたほどの歴戦の勇士でもあり、戦いの腕は確かであるが、ブリタニア空軍きつての問題児として有名なウィッチ、編隊を離れての単機空戦を好み、偏屈で素行が悪く、また人とうち解けない性格の少女、エリザベス・F・ビューリング。

????

「……」ビツクリ

びつくりをしていた。射撃・格闘・航法全部下から数えて一番と言うダメ隊員っぷりで、ダメウィッチであることをのぞけば、お菓子作りが趣味で弓道が特技の一応普通の女の子、迫水ハルカ。

????

「……」パクパク

びつくりして、鯉のような口をして、極めて寡黙で、周囲の状況を一切意に介さず、読書や奇妙な研究に没頭しているウルトラエースの妹、少女、ウルトラ・ハルトマン。

私は、険しい顔のままに謎の青年を見た。

智子

「いや、違う。」

ウィッチーズ

『え!?!』

智子

「その青年は、私達ウィッチと違って、本気を出せてない。」

ビューリング

「なんだと!?!」

キャサリン

「嘘ねー!?!」

ウルトラ

「……バカな」

驚愕するようでパツチリと目を開いた

ハルカ

「……」

と唾然している。

私だけは、青年だけを見る。

智子

「（謎の青年は、本気を出せずになぜエースの私より強い。私たちが見た事がない型のネウロイと戦えて苦戦したのが、謎の青年は、

圧倒的に見た事がないネウロイを押せて勝つ。(くそっ!」ギリッ
謎の青年は、自分より強い事を悔しむようで齒軋りして、刀を強く
握る。

智子 side out

孫悟龍 side

俺は、無言で、気を緩めずに見た事がない型のネウロイを睨む。

ネウロイは、満身創痍になったら、回復の速さを遅くなった

俺は、あのネウロイを見て、いよいよ終わると感じた。

孫悟龍

「いよいよとどめを…」
と呟く

孫悟龍は、速やかに剣の先を上空へ掲げる。

雲を早く集めて、雷雲になった。

雷を集めて、避雷針のように剣の先に放れた。

剣だけの周りに雷が凄く纏めた。

ネウロイへ速く襲いかける。

青年

「一・撃・雷・鳴!!」

その剣を振り上げて、ネウロイへ速く掛けて敢行する。

青年

「真名解放!!^{雷切}豪雷の妖刀————!!」

その剣を斜めに振り下がる。

そのネウロイを斬る中にネウロイの中を雷が通じた。通せ過ぎながら、完全にネウロイを一刀両断して、ネウロイのコアを雷が触れたら、粉碎する。

そのネウロイは、コアを失いながら消滅をしていく。

孫悟龍

「破滅完了……」

雷切という剣を消滅しながら呟く。

孫悟龍

「初めて見た事がない型のネウロイを見たが、俺が倒せたのは、見た事がない型のネウロイだけじゃなくて、あの噂もだ。」
と呟く。

俺が考える。

孫悟龍

「まあ、それよりあの噂の所へ行k「待って、その青年。」む。」

俺の周りに囲まれたウィッチ達が、警戒しながら、俺に向けて銃を突く。

能天気なポニーテールの巨乳田舎娘、キャサリン・オヘアと、偏屈で素行が悪く、また人とうち解けない性格の少女、エリザベス・F・ビューリングと、一応普通の女の子、迫水ハルカと、読書や奇妙な研究に没頭しているウルトラエースの妹、少女、ウルトラ・ハルトマンと、ドジ娘、エルマ・レイヴオネンと、扶桑のエース、穴吹智子が集まれるスオムスいらん中隊ウィッチーズという集団だ。

智子が、一番警戒している。

智子

「何者だ。誰の許せずに勝手にネウロイを倒す。」

孫悟龍

「倒すだと……？ハン」
頬を弛める。

智子

「なにがおかしい……」
侮辱された様な気がした。

孫悟龍

「誰かの許可に倒すなんて無意味だ。」

智子

「なんだと……？」

孫悟龍

「フン。私は、エライ上司などの命令を聞ける事が嫌い。」

孫悟龍

「だが、戦場の意味では、街や人々を巻き込んだから、部下が、人々を助けるが、上司は、その人々よりその目の前を倒せという冷酷な命令をする。あなた達が使っている魔法は、人を守る力が良い？」

ハルカ

「当たり前だ！魔法は、私たちウィッチが人を守る力でした。」

孫悟龍

「それも良いだ」

ハルカ

「じゃあ！」

孫悟龍

「だが、それは、無理だ。魔法では、人を守る力は、良い事だが、それだけじゃなくてネウロイや人を殺す力の道具かもしれない。」

スオムスいらんウィッチーズ

「……………」

歯切れのような表情をする。

孫悟龍

「でも、私は、己や周りの人や大切な人を助ける為に容赦せずに敵を殺す覚悟が出来た。私は、その後、いつも厳しい特訓を続ける。」

自嘲的な笑みを浮かべ出せて、言う。

エルマ

「え？どうする？」

孫悟龍は、彼女の言葉に答える為に口を開ける時、

????

『ゲラツパゲラツパ、マゲマゲ!!』

孫悟龍

「む！その声は…まさか。」

その声を聞けて、嫌な予感を感じる。

エルマ

「この声はなんだ？」

孫悟龍

「くっ！」

その声の所へ速く敢行する。

智子

「待って！私たちの話は終わってない！！…って、行ってしまった。

「

俺を制止して、苛立ちしながら言う。

エルマ

「智子、彼はどうするのか…」

智子の苛立つオーラを感じて、ビクビクになって、オロオロをしながら、言う。

智子

「ああもう、エライ野郎を追う!!」

スオムス

『はい!! / : はい。 / は〜いね。』

智子らは、俺に追いかけて、敢行する。

孫悟龍は、その声の所に到着して、周りのクレーターになった建物などを見回しする。

孫悟龍は、ウィッチ達が見て、誰達と戦えるのを見て、ウィッチ達が苦戦するように押されて、次々と倒れられる。

孫悟龍は、その声の正体を見破る。

その正体は、ハリケンジャーの敵の雑魚兵で、ジャカンジャの戦闘員、下忍マゲラッパになった。

孫悟龍

「ちっ! やはり戦隊の敵まで現れた!!」
舌打ちながら、言う。

孫悟龍

「それよりここで、消える!!」
そう言うと、空から降下していたから走る。

マゲラッパ達と倒れたウィッチ達は、俺に気付いていた。

俺とマゲラッパ達は、お互いに襲いやがる。

ウィッチ達は、俺を制止していたが、俺は、それを聞こえない。

俺は、マゲラップが斬る所を避けて、マゲラップがバランス崩したのを見逃せず、手刀で背中をたたきつけて、マゲラップが倒れた所に追撃する。

マゲラップ達を脚で、蹴ったり、手で、殴ったり、あざで、膝で、突けたり、その体を投げたりする。

ウィッチ達は、俺が次々と自分達が苦戦したマゲラップを倒れた所を驚愕した。

智子達も俺を追いかけたが、雑魚共と苦戦したウィッチ達の所と俺が雑魚共をやつつける光景を見て、ウィッチ達と同様に驚愕していた。

孫悟龍

トレスオン

「創造開始！！ハヤテ丸！！」

ハリレンジャーの武器、ハヤテ丸を現れた。それと同時に本物と同じように乱モードになった。

孫悟龍

「くらえ！超忍法・乱舞三重衝！！」

そう言うと同時に「乱」モードをダウンロードして刀身にエネルギーを込め、マゲラップ共を超高速で連続斬りを繰り返す。

これを鞘にカチツと収まると同時に孫悟龍を中心として、全てマゲラップ共を倒して、爆発する。

孫悟龍

「ふっつ。む！」

肩をすくめて、邪悪なオーラに気付いて、距離をとって、気拔けずに構える。

忍びの怪物は、パチパチと拍手している。

???

「やるね。まさか、お前は、ただの人じゃない。」

孫悟龍

「……っ！おまえは……！」

驚愕している

???

「フフフフ。そうそう。それぞれ。それは良い顔ぞ。」

孫悟龍

「バカな……！ありえない。アバレンジャーとハリケンジャーが倒されたはずのに……！」

??？は、ニヤリとした表情を浮かべ、姿を現れた。

次元を超えてダイノアースにやってきた宇宙忍者に邪命体に取り付き誕生した大きな手裏剣を背負いた邪忍法使い手の宇宙忍者。

孫悟龍

「邪悪イーガ……！」

イーガ

「ククク。」
極悪みたいな笑い声をしながら、鞘から抜く剣を持ち、襲いかかって、姿を消している。

ウィッチ達は、イーガが姿を消せた事に驚愕していた。

俺は、イーガの気を捜して、感じたが、わざと気付けない振りでする。

イーガのマフラーは、俺を突きあげる。

孫悟龍

「！くっ！」

わざと気づけてた振りに苦情のような表情に歪む。

イーガは、現れた。

イーガ

「ククク。やはり、ハリケンジャーとアバレンジャーのように変身する事が出来ない？」

孫悟龍

「そうか。くっ。」

痛い所を感じて、我慢しながら、立ち上がる。

イーガ

「ほお、まだ立ち上がる。」

孫悟龍

「そうか？まあ、人や自然を守りたいと思う人は、テメエみたいな

化け物共がここが地球が苦しむ所を黙るままに観るのは、無意味だが、見殺せずに人や自然を守る為に化け物共を一倒す（殺す）覚悟をするように戦える！！」

ウィッチ達は、俺のその言葉を聞けて、気持ちが目覚めて行く。

ウィッチ達は、利益の為に人を守る所やネウロイを倒す所を覚えたが、人を守るためにネウロイを倒すより利益の為にネウロイを倒す方がバカバカらしさする。

イーガ

「……おまえは、なんだろう！！」
険しそうな顔で言う。

孫悟龍

「俺か？俺は、通りすがりの悪ヒーローだ！！覚えとけ！！」
とそう言うと同時に、俺の手腕に、光が現れた。

イーガとウィッチ達は、光の所為で、眩しいように顔を隠れる。

光を収まる。

手腕にハリケンジャイロとゴウライチェンジャーと少し同じ所と違う所で、ドラゴン型のゴクエンチェンジャーが現れた。

孫悟龍

「これは……！！」

イーガ

「これは！？」

驚愕するように眼を開いた。

孫悟龍は、イーガをキツと睨んだ。

孫悟龍は、ハリケンジャーと同じ変身の構えをする。

孫悟龍

「獄炎・シノビチェンジ!!!」

セットすると同時にシノビメダルを回転する。

そのことで生じた「炎の揺らぎ」の働きにより、どこからシノビス
ーツが転送・装着され、変身が完了する。

ハリケンレッドと同じ色が、面だけが違う。それは、面の目にハリ
ケンイエローと似て、上下の牙を模した事になった。ドラゴエンジ
ヤーという。

ウィッチ達とイーガは、孫悟龍が変身することを驚愕している。

孫悟龍 ドラゴエンジャー

「炎に趨り、焰が怒る!!!炎忍ドラゴエンジャー!!!」

智子

「ムカつく青年は、変身していた!?!」

イーガ

「バカな!?!幻の焰忍が人間に選ばれるなんてありえない!?!」
と動揺しながら言う。

ドラゴエンジャー

「よし！ゴクエン天！！」
背中にあるハヤテ丸に似ている剣、ゴクエン天を手に伸ばす。
剣モードになった。

ドラゴエンジャーは、剣を持つままにイーガに襲いかかった。

イーガ

「…フン。無謀な策をする。」
動揺したから冷静に戻っていた。

ドラゴエンジャー

「ふっ！」

ゴクエン天を振るう。が、イーガに当たる直前にイーガが消えてしまった。

智子

「また消えた！？」

エルマ

「どっつする！？」

だが、ドラゴエンジャーは、二度同じ攻撃を受ける人間じゃない。

ドラゴエンジャー

「……」

冷静で、目を閉じれば、集中にイーガの気を感じる。

近くにイーガの気が早く感じた。

ドラゴエンジャー

「……………！そこ！！」
横で、速くゴクエン天を振るう。

イーガ

「ぐがああああ！！？」

斬撃を受けて、現れるから吹っ飛ばれる。

ウィッチ達は、それを見て、目を開いた。

ドラゴエンジャーは、それを見ながら、ゴクエン天を肩に担ぐ。

イーガ

「バカナ！？なぜ、さっきのは、よく攻撃するはずなのに…！！？」
立ち上がりながら動揺するように言う。

ドラゴエンジャー

「さっきは、感じたが、わざと気付けないふりをした。」

イーガ

「何だと……………！！？」

ドラゴエンジャー

「フン！こちらからいくぞ！」
また襲いかかった。

イーガ

「くっ！」

ドラゴエンジャー

「超忍法・影の舞！！！」

そう叫ぶと同時に手前に障子が出現し、その裏で影となってそれぞ
れが様々な攻撃を繰り返す。

イーガ

「ぐわあああああー!!」
火花が残った煙のままに吹っ飛ばれる。

ドラゴエンジャーは、追撃する為に走るからジャンプする。

イーガは、空中にいるドラゴエンジャーに気付いている。

ドラゴエンジャー

「獄炎流剣技・獄炎斬ーー!!」

「斬」モードのゴクエン天に炎神エネルギーを込め、振りかざして
敵を袈裟斬りにする。

イーガ

「ぐわあああああー!!」

それを受けて、紫のプラズマが起こして爆発する。

ウィッチ達は、ドラゴエンジャーが、イーガを押して勝った事を驚
愕している。

智子

「バカな。ネウロイ以上の化け物を青年が押している!!」

エルマ

「はっ!思い出した!!」

ハルカ

「え？何を？」

ウルトラ

「蒼髪青年が、ネウロイ以上の化け物をやっつけた噂を聞いた事がある。」

智子達とウィッチーズは、ウルトラの言葉を聞いて、目を見開いた。

エリザベス

「何！それって……！！！」

ビューリング

「やはり、蒼髪青年は、誰でもない。一人だけいる。」

このウィッチーズは、目の前に向き直した。

イーガ

「バカな！？私は、最強の宇宙忍者はずのに……！！？」
満身創痍になった。

ドラゴエンジャー

「お前が最強のために人間を犠牲するなんて許せない！！俺…いや俺達は、お前みたいなやつを倒し、自然と人類を守るために力を発揮する！！！」

イーガ

「くそくそ……！！！！？」

ドラゴエンジャー

「終わりだぜ！！イーガ！！！！？」

そう言う。

ドラゴエンジンジャー

「ソニックフレームソード!!」

それと同時に自分専用の武器ゴクエンジンガジェット、鐔が龍の形を模している剣、ソニックフレームソードを持ち、そのままに忍者のようになり、そのイーガに襲いかかった。

ドラゴエンジンジャー

「気炎十字斬りーーー!!」

縦斬りと横斜め斬りをした

イーガ

「ぐがああああ!!」

それを受けて、凄く紫のプラズマが起こった。

ドラゴエンジンジャー

「……」

構えを解けて、イーガを背に向かい、通り過ぎる

イーガ

「バ、バカな……私は、さ、最強の、に、忍者だのに……」
遺言を言った。

火花がそれぞれ起こった。

最後の紫のプラズマが起き、大爆発し、完全に消滅した。

それを同時に背に向ける。

ウィッチ達は、俺が勝った事に、歓喜している。

智子

「その噂は、本当だ……」

エリザベス

「でも、青年は、智子よりカッコいいね。」

ビューリング

「ふむ。剣技も智子と違う。別の形をする。」

ウルトラ

「それに見たことがない物がある。」

珍しい物を見るように言った。

ハルカ

「……」

あんぐりとしている。

それを变身解除したから、孫悟龍は、さっきの雑魚共にやられた傷のウィッチ達の所に行く。

孫悟龍

「…『治癒』」

手が光るから、ウィッチ対に雑魚共にやられた傷を治せる。

ウィッチリーダー

「あ、ありがとう……」

孫悟龍

「俺に礼をする必要はない。俺は、お前達の為じゃなくて、自分がやる事をする。」

ウィッチリーダー

「え？誰がお前を命令する。」

孫悟龍

「はあ？何を言っている。俺に命令できる奴は、俺だ。」

ウィッチリーダー

「仲間は？」

孫悟龍

「まだ探す。その途中に、ここの化け物の噂を聞くから、確認する為に行く。」

ウィッチリーダー

「どうして私達を助ける？」

孫悟龍

「はあ。俺は、お前達がイレギュラーの敵、化け物に挑戦し、ネウロイより苦戦した所を見て、強い奴がいなかつまらないと感じて、ほつとくままだに地球を滅ぶと思うようにしようもなく助けに行く。俺は、ウィッチャイレギュラーの敵、化け物より強い人を仲間にする為に探す。」

智子は、孫悟龍の言葉を聞いて、ピクツと気付けた。

智子

「（お前は、確かに私達ウィッチより強い力を持つ。だが…お前は、

私達と違って、ストライカーを履かずに、どうやって空を飛ぶ？それに見た事がない魔法を持つ？」

孫悟龍

「それより一つの噂の正体が分かった。だけど、まだもう一つがある。」

ウィッチリーダー

「え？あの噂はどれ？」

孫悟龍

「ここで存在しないモンスターは、鏡でいるという噂が聞ける。ここにも確認する。」

ウィッチらは、何の話が分からないという顔になっている。

孫悟龍

「まあ、お前らにとっては、バカバカらしさな話を信じてない事は当たり前だ。お前達は、勝手にする。俺は、お前達と仲間になる為に来るじゃなくて、地球を歪む化物を退治するだけだ。ここで。」「ウィッチ達を背に向かって、冷酷な発言で言いながら手をひらひらと振りながらここを後にした。」

智子

「待って!!！」

孫悟龍

「む？」

智子

「私は、化け物を見た!!」

孫悟龍

「……嘘だ。」

絶対零度な一言で言い、智子達が氷河期のように固まる。

孫悟龍

「お前は、俺がもつともここに居るなら、無理やりに教える事があると思うか？それに普通の人でも空間の能力を持つウィッチでも鏡の化け物を見る確率が低い。」

智子

「うっ!」

凶星を突かれた言葉を受けた。

孫悟龍

「だが、私だけの謎の能力を持つなら、化け物を現れる時に、化け物の場所に気付いてから、その所へ走っているだ。」

智子は、孫悟龍の言葉を聞いて、がっかりしている

孫悟龍

「やれやれ……………む!」

詰まらないため息する時に、何かの気配に気付いている。

ウィッチーズは、孫悟龍のそんな行動を見て、戸惑う。

孫悟龍は、その気配の所へ走って行く。

彼女らは、焦りに孫悟龍の後を追う。

――何処かの基地の中　鏡の所

蟹みたいな化け物は、作業者を次々と捕まえて、鏡を連れて去る。

作業者1

「なんだ!!この化け物は!!」

作業者2

「助けて!!」

それぞれな悲鳴をしながら、化け物から逃げる

???

「捕れてやれ。ボルキャンサー。」

ボルキャンサーという化け物は、???.の命令を受けるようにして、襲いかかる。

ウィッチ

「そうはさせるか!!撃て撃て!!」

残ったウィッチ達は、化け物に向けて、撃ち込むが、化け物は、こんな銃が効かない。

???

「邪魔なものは、死ぬ。」

化け物は、作業者からウィッチを標的にしておる。

俺は、殺すという言葉を聞いて、ピクっと肩が上がる。

孫悟龍

「フッフッフ。誰が俺を殺す？愚かな者。」

シザース

「はん。人間風情が吠えるだと！やれ、ボルキヤンサー！！」

ボルキヤンサーは、咆哮して、俺へ襲いかかって、振りかかる。

ウイツチ

「危な……」

言い終える途端、黒い何かはボルキヤンサーを吹っ飛ばすように当てる。

シザース

「なに！？」

孫悟龍

「サンキュー、ドラグブロッカー」

感謝するように言う。

ドラグブロッカーは、優しいように低く鳴らしている。

シザース

「お前も仮面ライダー！？」

孫悟龍

「そつだ。俺も仮面ライダー。平気で人を苦しめたお前を地獄にし

てやる。」

隆起と似ているが、禍々しい紋章の黒いVバックルを取り出す。

シザース

「くっ！ボルキャンサー！逃げろ！！」

汗かかってボルキャンサーと共にダイブするかのように窓に突っ込み、そのまま呑み込まれるかのようにミラーワールドに逃げる。

ウィッチ達は、それを見て、驚愕している。

孫悟龍

「逃がせない……」

冷酷で言い、鏡の前に立つ。

それを鏡に突き出せて、ベルトを出現して、俺の腰に装着する。

仮面ライダー龍騎のルールと違うようにポーズをしない。

孫悟龍

「変身……」

そう言うと同時にVバックルをベルトに装着する。

龍騎とほぼ同じ姿をしているが、体の色は黒く、目の形はつり上がっており、リュウガへと変身する。

ウィッチ達は、また驚愕していた。

リュウガは、自分の体を確認している。

孫悟龍 リュウガ

「いくぞ…」

ダイブするかのように車の窓に突っ込み、そのまま呑み込まれるかのようにミラーワールドに入ってしまった。

ウィッチ達は、またまたも驚愕していた。

智子達は、孫悟龍の後に追いかけるが…怪我がいる人を運ぶままに疲れる。

智子

「はあはあ、蒼いヤローは!?!」

ウィッチは、智子の怒気みたいな言葉を聞けて、涙目で震えながら鏡を指している。

その鏡の中

シザースは、逃げ続けるように走る。

建物の陰にシザースが立ち尽くす。彼のそばにボルキヤンサーが居る。

シザース

「はあはあ、こんな仮面ライダーがいるなんて聞いたこともない!」

?????

「見つけた。」

シザース

「つつ!!」

声の所に振り返る。声の所は、リュウガだ。

リュウガ

「お前が俺からどう逃げ切れると思いますが、無駄だ。」

シザース

「くそくそ!?!ボルキャンサー!!やれ!!」

焦りが飛びきれ、冷静を捨てるように行動してしまった。

ボルキャンサーが、リュウガを襲いかかる。

リュウガは、それを見て、呆れるようにため息する。

リュウガ

「やれやれ、冷静を捨てたおまえが俺を襲うなんて愚策だ。やれ、

ドラゴブラッカー」

命令を受けるように鳴らしているドラゴブラッカーは、ボルキャンサーを突っ込むように襲う。

リュウガ

「おまえは、俺が相手をする。さあ、地獄で堕ちろ。」

シザース

「おまえこそ、地獄を送ってあげる!!」

リュウガとシザースは、殴りかかり合いしたり防御したり避けたりする。

シザースは、シザースバイザーのはさみでリュウガを殴りかかるが、リュウガは身軽で避けながら、腹をカウンターのように重い攻撃をする。

シザース

「ぐわあ!?!」

受けて、両手で腹を押さえる。

リュウガ

「弱い…!」

冷酷で言い、まだ拳で攻撃して、そして一撃、また一撃と、確実にシザースに大きなダメージを与えていく。

シザースは、彼が逃げた鏡の前に一歩ずつ後退している。

リュウガ

「はっ!」

回り蹴りする。

シザース

「ぐわあ!?!」

吹っ飛ばれて、その鏡に入る。

基地の鏡

鏡から吹っ飛ばれたシザースが出て、滑走路に何度か転ぶ。

ウィッチ達や智子達はそれをギョッと目を開いた。

リュウガは、鏡から出て、巧さに着陸する。

智子達は、見たこともない人を見て、謎の人を見る事を戸惑うような顔になった。

シザース

「くそくそくそ！？なぜおまえぐらいの仮面ライダーは、最強の仮面ライダー、俺様に押される！！一気に殺す！！」
そう言うと同時にカードケースから一枚のカードを取り出し、シザースバイザーのその中にカードを装填する。

FINALVENT！

ファイナルベントのカードをセットする。

シザースの前にボルキャンサーを召喚する。

リュウガ

「ファイナルベントをするか？俺も。おいで。ドラグブロッカー」
冷静にそう言うと同時にカードケースから一枚のカードを取り出し、ブラックドラグバイザーのその中にカードを装填する。

FINALVENT！

リュウガはドラグブロッカーを召喚し、上空へ高くジャンプし、ドラグブロッカーも付いていくように飛翔していく。

ボルキャンサーのアシストでシザースがジャンプし、リュウガに向けて、高速で空中前転しながら体当たりする

シザース

「死ぬーーーーー!!!!」

リュウガがシザースとボルキヤンサーに向かってリュウガがライダ
ーキックの構えをすると、ドラグブラッカーは後ろから黒い火炎弾
を発射し、リュウガのキックを更に勢い付ける。

リュウガ

「はーーーーー!!!!」

必殺技がぶつかり合いするが、リュウガの力が、大きいからシザ
ースの必殺技を圧倒する。

シザース

「何!?ぐがあああーーーーーっ!!!!」

圧倒された事に気付いて、もう遅くて、必殺技を受けて、ボルキヤ
ンサーと共に爆発した。

ボルキヤンサーが、人間から集めた、生命エネルギーを摂取したの
が、撃破されて、摂取した生命エネルギーを出ていた。

リュウガ

「ドラグブラッカー。さあ、ごちそうをする。」
優しそうな声をする。

ドラグブラッカーは、彼の声を聞いて、喜ぶように、あれを食べて、
鏡の中に帰る。

リュウガは、変身解除する。

智子達は、リュウガの正体を見て、驚愕したように眼を開いた。

リュウガ 孫悟龍

「やれやれ。任務の二つも完遂した。」
帰るようにフワツと飛ぶ。

智子

「待つて！！まだ話は終わらない！！」

俺はまた…と思いつながら苛立つ。

孫悟龍

「私に何か用だ…」
静かな怒りのような声をする。

ウィッチ達は、その声を聞いて、ビクツと退く。

孫悟龍

「これ以上、私にそんな質問をしてないでくれ。それに私と関係ない方がよい。テメエらは、ネウロイだけを倒す方がよいのが、きつともう二度とここを化け物が現れない。もし、ネウロイより強い化け物を現れるなら、お前らは、さっきのウィッチ達と同じで、きつと勝てない。」

ウィッチ1

「じゃあ！お前の能力は、上層部に報告する！！しなくたい時はおとなしいでくれ！！」

孫悟龍は、それを聞いて、動揺するじゃなくて、冷酷な顔になった。

孫悟龍

「勝手にしろ。」

ウィッチ達と智子達は驚愕していた。

孫悟龍

「なぜと思われたなら、それを報告したら、俺：俺達は世界の軍隊の道具になってしまふから、俺達は、ネウロイをすべて破壊し終えるから、まだ戦争は終わらない。人同士を殺す戦争が始まるかもしれない。俺達も、それに参加して、上層部も人類：いや、世界も破壊する。」

智子らは、それを聞いて、顔が真っ青になりそう。

孫悟龍

「はん。上層部は、強欲に抱けて、溺れるから、お前たちみたいな少女を無理やりに戦力の道具扱いかもしれない。たとえ、お前達の仲間がピンチに陥れる時に、お前達がどうするなら、お前達が仲間を助ける事より上司の命令を守る。その結局は、仲間を助けずに上司の命令を守る。最低軍人ウィッチになった。」

ウィッチ

『ツツツ！！！！！！！』

孫悟龍

「俺は、完全にどこかの上層部を信頼しない。」

ウィッチは、反論する言葉を見つからなくて、苦虫を噛み潰したよ

うな顔になった。

俺は、それを見て、つまらないな溜息をして、智子達の近くまでに歩いて、他のウィッチ達に聞けないようにボソツと言う。

孫悟龍

「侍魔女達、俺はお前たちが活躍する事を期待するのがいつか待つ。きつとお前達を認める」

彼女達は、それを聞けて、目を開いて、俺の所に急いで振り返ると、孫悟龍が消えた。

エルマ

「行ってしまった…」

キャサリン

「あゝあ、もっと彼と話をしたいね」

頭の後ろを手でやって、プルッと胸が揺らして、無邪気に言う。

ウルトラ

「……私も彼と科学の事で話したい……」
ギユツと本を抱けながら言う。

ビューリング

「……彼は、私と似ている。それに上層部を嫌う奴も初めて見る。」
とタバコをして、煙を吐いて、彼を思い出せて、上層部への憎悪の瞳をする。

ハルカ

「……」

とさっきの彼の上層部を嫌う言葉を思い出せて、それを納得できないように無言をする。

智子

「…」

彼が最後の言葉を思い出せる。

侍魔女達、俺はお前たちが活躍する事を期待するのがいつか待つ。きつとお前達を認める。

智子は、苦笑をして、フンと鼻を鳴らす。

智子

「彼は、私達を期待するなんて初めての奴です。」

智子

「彼め、きつと私達の活躍を見て認めて見るー！ーっ！？」
久しぶりの笑顔をしながら、誓うように空へ叫ぶ。

智子以外のウィッチ達は、そんな智子を見て、驚愕していた。

彼女達は智子が笑顔をする事を見るなんて初めてだ。

俺は、飛行して帰り走った中で、智子の叫びを聞いて、フンと鼻を鳴らしながら、微笑する。

孫悟龍

「お前達の活躍を見て、絶対に認めてあげる…」

回想終わり

孫悟龍

「……という話もある。」

シグナムとザフィーラは、感嘆している。

シグナム

「お前は、彼女達を認めるようにする。」

孫悟龍

「ああ。今まで昔よりきつと強い。」

ザフィーラ

「ふっ。期待している。主リュムーン」

孫悟龍は、ザフィーラの言葉に賛同するように頷けた。

孫悟龍

「さあ、話を終わったからさっきの特訓の続きをする。」

シグナムとザフィーラと孫悟龍は、特訓の続きをする。

15日後、不死鳥の騎士隊は、スオムスいらん子ウィッチーズと再び出会う。そして、ピッコロと似ているナメック星人

やその部下と戦う事が始まる

番外 孫悟龍、スオムスいらん子ウィッチーズの出会い（後書き）

この話もグダグダだ。

第13話 温泉とメダルと吸血鬼

煙を晴れると、ディケイドは、いつの間にディエンドの首にライドブツカー・剣モードで、寸止めした。ディエンドも膝ついたままにディケイドの顔の近くにディエンドライバーを突ける。

ディケイドやディエンドは、構えを解くと同時に、孫悟龍と銀牙へ変身解除をした。

孫悟龍

「おいおい、おまえ。俺は、いつ、お前が戦闘すると言っていない。」「呆れる調子で言う」

銀牙

「えーっ、兄さんだけが楽しみに戦闘した。僕も兄さんと楽しみに戦闘したい〜〜！」
「つまらなそうに咎めて、反論をする。」

孫悟龍は、そんな彼を見て、苦笑が浮き出せた。

孫悟龍

「まあ、今度は、いつか決闘する。」

銀牙

「本当だ！？やった〜！？」

孫悟龍は、そんな銀牙を見て、苦笑して、ヴォルケンリッターに向く。

孫悟龍

「いよいよ夕方になっている。」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉に気付いている。空を見上げて、夕方になっている。

ミーナと坂本らは、焦りと困惑するような顔になっている。

孫悟龍

「む？」

孫悟龍は、ミーナと坂本のそんな表情に気付いている。

孫悟龍

「おい、どうした？」

ミーナ

「私達がない間に、整備員達が心配する。それに、書類を溜め込んで。」
不安ように言っている。

孫悟龍

「おいおい、大丈夫だ。」

呆れたように言う。

坂本

「大丈夫じゃない!!!今すぐここから出る!!!」

孫悟龍

「無理だ。」

きっぱりと言う

坂本とミーナ

「「え？」」

孫悟龍

「この別荘は一日単位でしか利用できないようになってる。お前達も丸一日ここから出れない。」

ミーナ

「そんな。」

絶望が籠った表情になって、ガツカリするように肩を落ちる。

孫悟龍

「だが、安心しろ。外の時間は、一時間だった。」

ミーナと坂本は、孫悟龍の言葉をひっかける。

ミーナと坂本

「「え??」」

驚愕している。

孫悟龍

「私が造った水晶は、特別だ。」

坂本

「どっつする?」

孫悟龍

「日本の昔話に浦島太郎を知っている?」

坂本は、孫悟龍の言葉の意味にハッと気付けた。

坂本

「ここは、浦島太郎の竜宮城と関係する？」

孫悟龍

「正解だ。が、ここはそれの逆だ。」

孫悟龍

「ここで一日過ごしても外では一時間しか経過してない。これを利用して、俺達は、毎日丸一日、たっぷり修行しやすい。」

坂本とミーナらは、孫悟龍の言葉に納得している。

坂本

「私達と違って、凄い魔法使いが、造っている。」

孫悟龍

「当たり前だ。が、お前達は、ここを頼みすぎると無意味だ。ウィッチの弱点を分かっている？」

ミーナと坂本は、言葉の意味に気付いて、歯切れするような表情になっている。

孫悟龍

「やはり…」

と誰に気付けないように呟く

孫悟龍は、ヴォルケンリッターに振り返っている。

孫悟龍

「ヴォルケンリッター、俺たちは、今まで決闘をした後、疲労感を吹っ飛ばすために露天温泉に入る。」

シグナムだけは、温泉という言葉を聞くだけで、ピクツとした

シグナム

「本当だ！！？？」

孫悟龍

「そうか。露天温泉は、どこかの豪華より豪華そうに大きい。」

シグナムは、孫悟龍の言葉を聞いて、輝ける目をしながら、嬉しいように感じる。

ヴォルケンリッターと銀牙は、そんなシグナムを見て、苦笑をした人、呆れた人、楽しみにクスクスと笑った人がいた。

ストライクウィッチーズも、そんなシグナムを見て、唾然していた

孫悟龍

「ククク。シグナム、あなたは、温泉（風呂と同じ）好きな人だ。」
腕を組んで、不敵で楽しみにニヤニヤと笑いながら、言う。

シグナムは、孫悟龍の言葉に聞いて、我に返って、湯気をしながら、顔を赤に染めず。

孫悟龍は、組んできた腕を解きながら、ニヤリしたようにからかい始めた。

孫悟龍

「おやおや、シグナムは、戦闘する時に、真面目と凛々らしい顔になったが…お風呂と温泉の事を聞いて、気が変わったので、可愛いと思います。」
腰に手を当てながら、からかいに言う。

シグナムは、頭まで赤く染まることになった。

シグナム

「なっ……なっ／／／／／／何言っている！！？？／／／／／
／私をからかうなんてやめてくれ！！」
恥ずかしいように頬で赤になって、体の前に手が振りながら言う。

孫悟龍

「ふふふ。無理だ。顔がバレバレ、赤くなる顔は、可愛い。」
と言い、不敵な笑顔を浮かべながら、シグナムの頭を撫でている。

身長の高さは、孫悟龍の方が高い。

シグナムは、撫でてられながら、孫悟龍の言葉を聞いて、ボンツと沸騰して、バタンと気絶する。

ヴォルケンリッターらは、それを見て、ヴィータとザフィーラが、呆れて、シャマルと銀牙が、暖かそうな目で見て、アギトとツヴァイとアインが、羨ましいような目で言う。ストライクウィッチーズが呆然しているが、その一人、サーニャは、孫悟龍に撫でられたいという意思を収まる。

孫悟龍

「はあく、からかいすぎてしまった。まあ、リインフォース達。シグナムを起きる後、先に温泉に入る。後、私達も温泉に入る。」
左目を閉じながら溜め息をして、頭を掻いてリインフォース達に振り返る。

ヴォルケンリッター（シグナムを除く女性陣）

「はい。」

孫悟龍

「おい、シグナム、いい加減に起きる。」

シグナムの顔を優しさに叩く。

ヴォルケンリッター

（誰の所為で、シグナムを気絶した……）

内心で思いながら、孫悟龍をツッコミする。

孫悟龍

「はあく、しょうがない。まさか気絶から起きる方法を使える事が来た。」

孫悟龍

「起きないと、地獄の特訓を増やさ、起きた！！」よし。」
最後まで言い終えるが、シグナムは、孫悟龍の危険な言葉を遮ぎながら、危険を感じて、バツと速やかに起き上がった。

ストライクウィッチーズは、それを見て、啞然している。

ヴォルケンリッターは、孫悟龍の危険な言葉を聞けて、孫悟龍の地獄の特訓をする事を覚えて、凄く震えている。

孫悟龍

「さあ、俺達は、温泉をする。」

ヴォルケンリッターと銀牙は、孫悟龍の言葉に頷く。

孫悟龍

「よし。いくぞ」待ってーーーーー!!」む?どうして?」

ペリーヌ

「む?どうして?じゃない!!??一緒に混浴に入るなんて、ハ、ハレンチする!!!」

異性と一緒に温泉することが妄想する事を頬で赤になりながら言う。

孫悟龍とヴォルケンリッターと銀牙

『は?』

何を言っていると言っているような感じをする。

ペリーヌ

「そんな目をするじゃない!?!」

孫悟龍らは、溜め息をする。

孫悟龍

「お前達は、勘違いする。」

ペリーヌ

「私達は、勘違いする!証拠があるか!?!」

孫悟龍

「証拠がある。黙るから俺に連れて来る。」
それをスルーし、冷静ような声で言う。

ストライクウィッチーズとヴォルケンリッターは、俺の後に連れていく。

温泉の脱衣室に到着する。

ペリーヌ

「え？」

ペリーヌだけは、脱衣室を見て、驚愕するように間抜けみたいな声を出てた。

脱衣室は、男湯と女湯が別れる。

孫悟龍は、ガツカリするように溜め息をする。

孫悟龍

「変態馬鹿メガネ犬は、もしかしてだれよりも妄想する？」

ペリーヌ

「変態馬鹿メガネ犬……！！」

孫悟龍の言葉を聞いて、ショックを受ける。床に四つん這いする。

エイラ

「お。私より酷い言葉を言うダ」

サーニヤ

「言っつては駄目だ。エイラちゃん」

ひどいことをするエイラを制する。

孫悟龍

「フン。馬鹿変態は、ほつとけ。俺達男は、男湯に入る。ヴォルケ
ンリッターとウィッチーズは、女湯に入る。ただし、俺の仲間に変
な事をするなんて禁止だ。もし、する時には・・・」

ストライクウィッチーズ

『（ゴクリ）もし、する時には、…』

孫悟龍

「シグナムとヴィータは、お前達ウィッチーズよりも強くて、怒り
にいつの間に武器で使わずに誰かをボコボコするかもしれない。」

エーリカとシャーリーとルッキーニとエイラは、孫悟龍の女仲間の
胸を調べたいために揉むことをしたが…、孫悟龍の危険な言葉を
聞けて、冷や汗をかいて、顔が青に染めて、孫悟龍の仲間の胸を絶
対に揉みないと誓える。

孫悟龍

「気をつける。」

俺達男陣は、背に向かって、男湯の脱衣室に入る。

その以前に、エイラが、

エイラ

「待って、悟龍さん。」

孫悟龍

「む？なにか用か？」

エイラ

「うわあ。怖いだが、サウナは、あるか？」

孫悟龍の鋭い目にビビって、軽いよつで言う。

孫悟龍

「出入所の近くにあるなんて間違いない。」
と答える。

エイラ

「え！……本当だ！」

孫悟龍

「ええ。俺は、いつか苦勞して一生懸命にどこかの所より豪華なサウナを作る。温泉とサウナだけじゃなくて、豪華な所がいっぱいある。」

右腕を振り回りながら、ゴキゴキという音をして、言う。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉を聞けて、啞然している。

リーネ

「……すごいね……」

坂本

「何でも屋のように完璧超人がいる。」

バルクホルン

「ウルトラエースより凄い……」

孫悟龍

「まあ、その事は、置いておく。それより露天風呂に焦れずに早く入る方が良い。」

ストライクウィッチーズは、我に返って、ヴォルケンリッターが既に居ない事に気付いて、入る。

俺のほかに、もう入った。その後に俺も男湯の脱衣室に入る。服を脱いで、タオルに付けた。箱にそれを入れる。脱衣室を出て、露天風呂に入る。

どこより豪華な露天風呂は、ライオンの顔像の口から、湯を出てる。神話の龍の像が6体立てる事、それぞれの滝湯とぬるま湯などがある。

ザフィーラと銀牙とツヴァイとアギトは、浴湯に居る。彼らの表情は、気持ち良い。が、なぜツヴァイとアギトが、男湯に居る理由は、女湯に居る時、ルッキーニが、虫と勘違いして、捕まえるかもしれない。しょうがなく男湯に入る事が認めるので、自分の体に似合っているタオルを付けるという条件をする。

俺も頭をシャンプーで洗ったり、石鹸の泡に包まれたタオルで身体を洗ったりして、入浴する。

孫悟龍

「ふ〜、気持ちいい。淒く落ち着く。」

ツヴァイ

「癒し〜」。

アギト

「すっごくいい加減な湯加減だ〜」。

銀牙

「本当だ」

孫悟龍

「ザフィーラ、俺が造った温泉はどう?」

ザフィーラ

「ふむ。俺も気持ちいい。傷を凄く癒す。」

孫悟龍

「そうか。良かった。」

不敵な笑顔を浮かべる。

孫悟龍は、シグナムらに念話をする。

孫悟龍

《シグナムとリインフォース?とヴィータとシャマル、どう?》

シャマル

《私の治癒魔法より凄く癒す。》

ヴィータ

《ギガ癒す〜。どこかの温泉よりこの温泉が、ギガ良い!
!》

シグナム

《ふむ。ヴィータの言うとおり。凄くいい加減な湯加減が良い。それに主鷹宏が、それぞれを作った（汗）》

孫悟龍

《ふむ。俺も豪華な所を作りすぎる（汗）》

リインフォース？

《はあく、相変わらずに凄いものを作る。ふふ。しかし、主タカヒ口らしい。》

孫悟龍

《む。俺に馬鹿をする？》

リインフォース？

《いいえ、馬鹿をしたわけじゃない。孫悟龍は自分や私達が欲しい所を作りたい。優しさ所がある》

孫悟龍

《……はあく。何を言っている。俺は、信頼する人に優しいなんて当たり前だ。》

リインフォース？

《……くす。やはりそれこそが私達の主だ。》

孫悟龍

《まあ、いよいよ出る。俺達は、先に出て、俺は、料理の準備をする。》

リインフォース？

《分かった。私もここを出る後に手伝う。》

孫悟龍

《ん……。》

リインフォース？の言葉を聞けて、苦笑から不敵な笑みを浮かべながら念話をしながら、温泉を出る。

脱衣室を後にする。

別荘を夜でする。

孫悟龍は、調理場で、最初に料理した。

孫悟龍は、料理技術の速さをする。

ザフィーラと銀牙は、人間形態（ザフィーラ・銀牙だけに使用する）で、ダイニングルームで、精神鍛錬するために正座した。

アギトとツヴァイは、アウトフレームで150cmくらいになったままに、孫悟龍の手伝いをする。

孫悟龍は、ストライクウィッチーズとシグナムが、温泉を出る気配をした。

十数分後、ストライクウィッチーズとヴォルケンリッターが、湯がぬれて、タオルで拭けて、服を着れるからダイニングルームに行く。

リインフォースアインも孫悟龍に手伝う。

料理スキルが普段や豪華な料理人よりうまい孫悟龍とリインフォー

スアインと銀牙とアギトは、速やかに料理していた。

料理する事ができるストライクウィッチーズ（料理が出来ない事が居る人を除く）は、そんな彼らを見て、啞然していた。

大きな食べ物を運ぶ事が出来る人は、ザフィーラとヴィータだ。

寿司（マグロとトロといかと玉子と大トロと鮭と鯛とヒラメとアジなど握り寿司）と卵サラダやフルーツサラダとローストビーフやステーキと焼きそば e t c を料理する。

芳佳

「わあ、凄い…寿司がいっぱいだ……」

リーネ

「わが料理もある……」

坂本

「なんと凄い豪華な食事になってる……」

孫悟龍

「そうか？私達から見た感じは、普通だ。」

言いながら、自分で自分達の分と似合うために作られた泡が混じるオレンジとブドウジュースなどが入ったコップを運ぶ。

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の言葉を聞けて、驚愕したり顔が引き攣っていたりする人がいる。

そんな彼女らをスルーして、それらを机に置く。

坂本

「む？それはなんだ？オレンジとブドウみたいなジュース」
それを指しながら質問をする。

孫悟龍

「それ？ああ。それは、炭酸ジュース。」
それに答えた。

ストライクウィッチーズ

『炭酸ジュース？』

ときよとんする。

孫悟龍

「坂本、酒には、炭酸があるか？」

坂本

「ふむ。酒には、本当に少し炭酸が入っている。」

孫悟龍

「ええ。でも、それとこれと違う。」

シャーリー

「え？違うのか？」

孫悟龍

「お前達は、酒の中の何かが知っている？」

酒を知っているウィッチーズは、気付けた。知らないウィッチーズは、ハテナ（？）
と思う。

坂本

「なるほど。酒の中に炭酸だけじゃなくて、アルコールが入ってる。」

孫悟龍

「そのとおりだが、ジュースを飲んでみる。酒と違うよ。」

孫悟龍とヴォルケンリッターと銀牙は、そのコップを手にかけて、杯を差し上げたり触れ合わせたりする。

ヴィータ・リインツヴァイ・シャマル・アギト・銀牙

「乾〜杯!!」

破邪氣に言っている。

孫悟龍・ザフィーラ・シグナム・アイン

「乾杯……」

かっこいいするように不敵に笑い、静かに喜びや祝福の気持ちを込め、杯を差し上げたり触れ合わせたりする。

ストライクウィッチーズも、おそろおそろコップを手にかけて、戸惑う事を隠せずに中身をジッと見ている。

孫悟龍達の所をチラッと見て、彼らは、普通に飲んでる。

コップに向き直しながら、まだ戸惑い続ける。

ルッキーニとサーニヤだけが、黒髪の一人が無邪気にゆっくりに飲んで、銀髪の一人が儂げな表情に早く一気に飲んでいる。

ストライクウィッチーズは、それを見て、ギョツと目を開いた。

ストライクウィッチーズ

『ルツキーニ!? サーニャ!?』

ルツキーニ

「!? 悟龍兄さん!」

目を開いて、孫悟龍に呼び掛ける。

孫悟龍

「む?」

ミーナ、坂本、バルクホルン、シャーリー

『(あ、このバカ!)』

ルツキーニ

「そのジュースは、おいし〜い!!」

サーニャ

「……………おいしい…」

ルツキーニとサーニャは、そのジュースのことを舌鼓する。

ストライクウィッチーズ

『(……………へ?)』

孫悟龍

「ふっ。良かった。」

不敵な笑顔を浮き出す。

ルツキーニ・サーニヤ

「……ッ！！！！！！！！」

それを見惚れて、頬を赤に染める。

孫悟龍

「（む？お前達は、また俺の女殺しみたいな笑顔を見て、少女らの頬が赤になった。はあく。また……）」
自覚を感じる事をため息しながら思う。

ヴォルケンリッター（女性陣）は、それを見て、孫悟龍が自分で自覚を感じる事を分かかって、サーニヤとルツキーニの行動を分かっている。

孫悟龍

「それよりご飯を食べるよ。」

ミーナ

「しかし、食事が多すぎる……（汗）」
そうか、孫悟龍達が、頑張ったお蔭で夕食を作りすぎた。

孫悟龍

「む？そうか？私達から見た感じは、多くない。」

ストライクウィッチーズは、孫悟龍の爆弾言葉を聞いて、凍り付けた。

ミーナ

「へっ？」

シャーリー

「おいおい…、冗談だろう?」

孫悟龍

「はあ?何言っているの?何が私達をそんな目で見る…。私達に馬鹿をするなら、拳骨をする……#」
不機嫌なオーラで纏めながら、ゴゴゴゴという音でドス黒いオーラな顔をして、棘のついた言葉をする。

そうか、孫悟龍みたいなサイヤ人は、戦闘する後、普通の人と違うように、多すぎるご飯を食べる事が出来る。

ストライクウィッチーズは、悟龍のそんな笑顔を見て、その言葉を聴けて、冷汗をかいて、顔が蒼くなりながら、一步下がって、横へ振る。

バルクホルン

「なんでもない!!!(バカな!?!般若のミーナより鬼が居る!!!?)」ガクガク

ミーナ

「……バルクホルン?この話は後だ。」ガクガク
孫悟龍の黒いオーラを受けて、脚を震えながら、バルクホルンの思いをとったように、孫悟龍に聴けないように、言った。

孫悟龍

「そうか。それより食べる。」

坂本

「フ……フム、悟龍さんの言うとおりに食べる。(汗)」ガクガク
孫悟龍のそんなオーラを受けた事が残しながら言う。

孫悟龍

「さてと」

ヴォルケンリッターと銀牙と共にパンっと手を合わす。

孫悟龍・ヴォルケンリッター・銀牙

『いただきます。』

孫悟龍らの箸が、おかずにつけるとしよう。だが、孫悟龍だけは、誰かの視線に気づけて、その視線の所へ向かう。

孫悟龍

「む？何見ている？豆犬ガキ」

芳佳

「…豆犬ガキ！！（がーん！！）」

ペリーヌ

「ホホホホ！！豆犬は、あなたが似合う！！」

貴族の女みたいに笑いながら、言う。

芳佳

「豆犬じゃない〜（涙）それよりあなた達は、扶桑の伝統をやつてる。どういふ事？」

孫悟龍

「む。それは、私は、ヨーロッパだけじゃなくて扶桑という国の伝統を覚えるために行く。」

そうそう、孫悟龍は、カールスラントを出る以前に戸籍がないの

を気付いて、困惑して、おろおろしながら考える時に、アルティメット神龍が、「言い忘れた。安心する。私は、既にその世界が孫悟龍の戸籍を送って、認めた。もし、お前が誰かを召喚するならば、家族になる戸籍も認める事が出来ると思います。」と安心するような念話をする。孫悟龍は、それを聴いて、安堵して、あの神龍に感謝するように念話する。

今のところを至るまでに回想した。

芳佳

「え？ヨーロッパでも扶桑でも何処から来た？」

孫悟龍

「それは悪いが、それは、禁則事項だ。」

芳佳

「えっ……！教えろ！黙れ………っ！！??？」

答えと言い終わる途端に、孫悟龍が、重い強調な声で遮る。

孫悟龍

「さっきの条件では、答えられない質問を答えない事が入っている。もし、あなた達が、私達は、自分達の意思に関わらず、勝手にあなた達の仲間になると思い込むかもしれない。その結局は、私達は、あなたが条件を破れば、自分たちの意思を聞けないことをして、あれを苛立つ事になって、あなた達を完全に最悪のように信頼しない事と、あなた達が最強最悪の敵ネウロイと戦えて、ピンチになる所を助けない事をするかもしれない。」

ストライクウィッチーズは、それを聞いて、絶望するような顔になっている。納得できない者も、苦虫を噛み潰したような者も、いる。

芳香

「でも、あなた達は、ネウロイを撃破する力がある!?」

孫悟龍

「それは、出来る。でも、私達に頼るばかりに、あなた達は、特訓を怠って、大切な者を守れない確率が高い。それがいい? 私達がやる事とお前達がやる事が違うが、私達のは、自分たちの力や意志を信じながら、大切な事をあれば、見た事が無い型のネウロイやさつきみたいなのバケモン共を倒すだけだ。あなた達のは、戦力が必要で、ネウロイを倒すだけか? 上層部の命令に従うままに動くか? あなたたちは、自分自身の力を自信にしない事? 私達は偉い誰かの命令にずっと従わない。なぜなら、シグナムらは、昔、偉い人が、王になる事を強欲して、私に逆らう人を殺すと酷い命令にびっくりして、反論するところが、王の命令に反論できない事と罪がない人達を苦しめたり殺したりした事が、後悔したり懺悔したりした。それが、今のお前達は、昔のシグナムらと同じだ。私も自分より上司などの偉い奴が嫌い。」

芳香は、うっと喚く。誰も言い返せない。

ミーナ

「芳香、諦めてくれ。」

孫悟龍は、それを見て、フンと詰まらないように鼻を鳴く。

孫悟龍

「それより飯が冷めて行く前に早く食べなさい。もし、食べない者を地獄に送っている。」

と冷酷に言っている。

ヴィータや銀牙やリイン？とアギトは、幸せに食べている。

孫悟龍とザフィーラとリイン？とシャマルとシグナムは、礼儀正しいように黙々と食べている。

ルッキーニは、無邪気に、サーニヤとエイラは、普通に、その他のストライクウィッチーズは、さっきの言葉に納得せずに、食べている。それを食べた者は、凄く落ち込む者、悔しい者などがある。

夕食後、孫悟龍とアギトとリイン？は、皿洗いや片づけをする。

その後にヴィータとリイン？とアギトと銀牙は、孫悟龍が作ったアイスを幸せに食べる。

え？孫悟龍が、第1ネウロイ大戦で、なぜアイスを作るか？ふふふ。それも禁則事項だ。

ストライクウィッチーズは、客の部屋に寝た。

ヴォルケンリッターと銀牙も自分の部屋に寝た。

ヴィータは、孫悟龍が作ったウサギのぬいぐるみを抱き枕のように寝る。

シグナムとリイン？とシャマルは、礼儀正しいように寝る。

リイン?とアギトは、孫悟龍が作ったリイン?の身体に似合うベツトで寝る。

銀牙とザフィーラは、狼になったままに寝転んだ。

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、アニメの第6話で寝る所と同じだ。

孫悟龍は、ビーチの砂場に無言で見ながら腕を組んで、仁王立ちをする。

彼は、誰かが自分の所に来る気配で気付いて、その気配に振り返って、オドオドした様子で銀髪の少女が現れた。

孫悟龍

「リトヴァクか…あなたは、眠れないか？」

サーニヤ

「あ、は、はい。…私は、朝が苦手で、夜型人間です。」

孫悟龍

「ふん。でも、私達は、お前と違う。」

サーニヤ

「え?どうやっています?」

孫悟龍

「私達は、夜間戦闘より昼夜戦闘をする。」

サーニヤは、孫悟龍の言葉を聞いて、びっくりするように目を開いた。

サーニヤ

「凄い・・・しかし、無茶します…。」

孫悟龍

「でも、私達の中に昼夜で戦闘する事が出来る人が少しいる。それで、私に用事するか？」

サーニヤ

「・・・は、はい。・・・あ、あの（オドオド）、この前に、私を助けてくれてありがとう。」

孫悟龍は、それを聞いて、目を丸くなって、元の表情に戻りながらサーニヤを見る。

孫悟龍

「まさか、お前だけは俺の正体を分かるか？」

サーニヤ

「は、はい…初めからお前は、私達の名前を知ってる。わ、私たちは、初めからからお前に紹介しなかった。…そ、それにお前は、シグナムさん達を私の時と同じに治癒魔法をかけた。間違いない。わ、私がそれを見て、分かったと感じた。この件で私を助けた青年は、そう、孫悟龍だ。」

孫悟龍は、サーニヤの言葉に聞いて、ハトが豆鉄砲食らったような顔になった。

孫悟龍

「フッフフハハハハハハ！」

手に額を当てながら腹を抱けて、笑う。

サーニヤは、孫悟龍の大きな笑い声を聞いて、ビクッと吃驚した。

孫悟龍

「ククククク、まさか、リトヴァクが気付くとは……。俺は自分で墓穴を掘ってしまったようだ。ククククク。」

サーニヤ

「：そう。わ、私は、この件で、蒼髪青年はあなたと似てる事に気付けた。あなたを礼にしたい。」
オドオドしながら、言った。

孫悟龍は、そんなサーニヤを見て、苦笑そうにフンと鼻を鳴らしている

孫悟龍

「フン、まさか俺がこんな小娘にこの知恵で負けた。ククク。だが、この件の時を忘れない。その以来、まさかストライクウィッチーズの基地でまた出会った。ククク。」

覇気が出そうに悪ガキのような笑顔と似ているように不敵に笑いながら、言う。

孫悟龍

「まあ、改めてあいさつと紹介をする。サーニヤ・V・リトヴァク。俺の名前は、夜天兼闇の王、不死鳥の騎士隊、孫悟龍だ。よろしく。悟龍と呼ばれる事も構わない。」ペコッ

ブリーフィングルームの時と同じで、この件を覚えながら、覇気を放出するようで不敵な笑顔で紹介しながら、紳士のような礼をする。

サーニヤは、孫悟龍のそんな笑顔に見惚れて、ドキンとしてたら、頬を赤に染めながら、俯き、もじもじしながら、紹介する。

サーニヤ

「…わ、私の名前は、…サ、サーニヤ・V・リトヴァクだ。サーニヤと呼んでくれ？／／／／／」

サーニヤ

「（でも私は、前のように人知り性格で、この件の時、初めて知らない人と会うなんて怖いはずのに……）」チラッ
と思いながら、チラッと孫悟龍の所を見た。

孫悟龍

「むっ？俺の顔に何か付けてる？」

サーニヤ

「あつ、いえ。なんでもなし／／／／／（悟龍さんは、今までの男性と違う。それに彼は、お父様と重なるだが、性格は違った。）」
自分の父親を思い浮かべる事をして、彼の声を聞いて、我に返って、恥ずかしいように頬で赤になった。

孫悟龍

「そう………。おまえは、まさか俺にもう惚れた？」
と目を閉じて、閉じた片目を開きながら、からかいそつに言う。

サーニヤは、孫悟龍の言葉を聞いて、ギクリと肩が上がる。

サーニヤ

「……ち、違います。／＼／＼／＼……あ、あの……」
頬で赤になりながら焦るように胸の前に手を右左のように激しそうに振るからもしもじする。

孫悟龍

「嘘。」

嘘を通り抜けるような笑顔になった。

サーニヤは、自分の言葉の嘘を孫悟龍が見破ったのをまたビクと肩が上がった。

サーニヤ

「…あのね……」

歯切れするような言葉で言う。

孫悟龍

「まあ、俺の事を好きになる時、勝手にする事などを構わない。ただし、俺の意志を無視するのは、禁止する。」
いつもの顔に戻りながら、肩をすくめて、言う。

サーニヤ

「え？どうする？」

孫悟龍

「さあ？お前は、自分自身で、考える。」

サーニヤは、孫悟龍の言葉を聞いて、考えるように頭を俯く。

彼女は、決意をするように頭が上がる時、孫悟龍の険しそうな顔を

見て、そのただならぬ様子に怪訝そうにして、孫悟龍の視線を追った。

孫悟龍とサーニヤが見た光景は、銀色のオーロラからミイラ男みたいな怪物がたくさん現れた。

サーニヤ

「これはなんだ…？」

その怪物を見て恐怖のように震えてた言葉をして、チラッと孫悟龍を見る。

孫悟龍

「……」

険しい顔で無言をする。

サーニヤ

「？」

孫悟龍のそんな表情を見て、心配と戸惑いが混ざる表情になっている。

サーニヤは、そんな孫悟龍に声をかけるとしようが……

サーニヤ

「ふにゃ！？」

何かがポンツと頭を乗る。

サーニヤが頭を上げていると、孫悟龍の手が自分の頭に乗る。

優しくそうにナデナデと頭を撫でられた

サーニヤ

「……………（孫悟龍の手の大きさは父様と同じ。父様より気持ちいい。）／＼／＼／＼／＼」

サーニヤは、気持ちよさそうで、感じながら、頬で赤を染める

孫悟龍

「サーニヤ、わりいけど、ここから安全な所へ下げてくれ。」

サーニヤ

「え？どうして？」

孫悟龍

「俺は、新しい仮面ライダーを变身するなら、あのミイラたちと戦うが、お前が居たから巻き込んだら困る。」

不敵な笑顔をしながら言う。

サーニヤは、孫悟龍のそんな表情を見て、ドキッとした。

サーニヤ

「うん……分かった。私は、その岩に隠れる。（なんで悟龍さんの笑顔を見て、ドキドキし始めた…／＼／＼／＼／＼／＼）」

納得するように言いながら、孫悟龍の優しさに惹き始めたように頬で赤になった。

近くのある岩に移動して隠れる。

孫悟龍は、それを確認して、真剣な顔になって、さっきに向け直した。

中指が上に掲げると、防音・人払い結界を展開する。

孫悟龍

「まさか、ここまでに銀色のオーロラが現れるなんてありえない。もしかしたら、新たなシヨッカーめが、空間を使っているかもしれない。それを使っても、この世界だけじゃなくて、ほかの世界を征服するかもしれない……！」

険しいように言う。

孫悟龍

「それよりここを倒す……！！」

そう言うと同時に懐からオーズドライバーを取りだし、腹部へと近付けると、自動的にベルトが現れ、腰に装着される。

懐からさらに取り出した3枚のコアメダルをオーカテドラルへと入れ、傾ける。

同時に、右腰部に装着されているオースキャナーを取り、オーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

孫悟龍

「変身」

『タカ、トラ、バツタ。タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ』

直後、孫悟龍の周囲を巨大なメダルのような形をしたものが覆い、仮

面ライダーオーズ（タトバ）へと変身した。

サーニャ

「タカ？トラ？バツタ？」

オーズの頭、胸、脚を見て、呟く。

オーズ（タトバ）

「まあ、敵の様子を調べる。」

そう言う時に、胸部が光ると、オーズのトラアームに付随しているトラクローが展開し、構える。その後、ヤミーどもに襲いかかる。

オーズ（タトバ）

「ふっ！！はっ！！はあっ！！」

トラクローを右横で、左上で、振るう。

屑ヤミー一人一人は、それを受けて、火花を起こす。

屑やミーは、オーズ（タトバ）の攻撃を受けて、倒れない。

屑ヤミーは、オーズ（タトバ）を叩きつけるとする。

オーズ（タトバ）

「おっと。」

屑ヤミーの攻撃をバックスキップのよう、軽く避ける。

着陸すると同時に、脚部が光ると、オーズ（タトバ）のバツタレッグにその跳躍力を最大限に発揮する際には足先がバツタ脚へと変化する。

オーズ（タトバ）

「はっ！！」

勢いをつけて、高くジャンプして蹴り下がる。

オーズ（タトバ）が屑ヤミーの頭をステップにして次の人へ飛び移る。

オーズ（タトバ）

「ふっ！は！おりゃ！……！！」

次々の人へ飛び移り蹴り下がる。

オーズ（タトバ）は、屑ヤミーから離れて、着陸するから、速やかに左手がメダジャリバーを取り出せ、右手がオーメダルネストからセルメダルも3枚を取り出す。メダジャリバーをそれに投入して、オースキャナーを取り、即座にスキャンする。

『Triple! scanning charge!!』

オーズ（タトバ）

「ふっ！！」

オーズ（タトバ）は一気にメダジャリバーを横一線に薙ぎ、空間もろとも敵を一刀両断にする「オーズバツシュ」を発動する。刹那、その場の空間が切断される。

サーニヤは、それを見て、唾然するように吃驚する。

サーニヤ

「…凄い……空間を切り込む事を見たなんて初めて……。」

その切断部には、屑ヤミー共の体も入っていた。

少しずつズレしていく空間だが、少しすると周囲の切断面が時間が逆行するかのようになり、屑ヤミー共だけが斬撃を受け、飛び散った。が、切断面から壊れたメダルがいっぱい溢れ出した。

残った屑ヤミーは、攻撃をする。

オーズ

「よつと！……タトバコンボが良いのが、雑魚ともが多すぎる事ので、俺がスタミナ切れになるまでにあいつらがどんどん出るかもしれない。……でも。」
それを避けながら言う。

孫悟龍

「これに対抗して、速攻する！！」
そう言うと同時にオーカテドラルから3枚を取り出して、オーメダルネストから緑のコアメダル、クワガタや青のコアメダル、ウナギ、黄のコアメダル、チーターを取り出すから、それらを右からクワガタ、ウナギ、チーターをオーカテドラルへと入れ、傾けて、オースキヤナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『クワガタ、ウナギ、チーター、ガタウーター』

顎をクワガタのように装着するクワガタヘッド、両肩には着脱可能な2本の鞭状武器電気ウナギウィップが付随するウナギアーム、チーターのように速く走るチーターレッグに装着するからガタウーターへ変化する。

サーニヤは、それを見て、驚愕する。

サーニャ

「…さつきと違うように変化する」

オーズが変わった所を見て、呟く

オーズ（ガタウーター）

「行くぞ！」

そう叫ぶと同時に、胸部と脚部が光ると、両肩から着脱する鞭状武器ウナギウィップが展開し、最高加速する時はスチームが噴き出す最高加速で、残った屑ヤミー共へと敢行する。

オーズ（ガタウーター）

「ふっ！」

走りながら残った屑ヤミーを電気の鞭に振るう。

屑ヤミーは、それを受けながら、電流を流し込んで追加のダメージを与えられて、少し消滅した。

オーズ（ガタウーター）は、残った屑ヤミーの中心に止まって、立つ。

オーズ（ガタウーター）

「はあ！！」

クワガタホーンから広範囲に緑色の電撃を放つ。

屑ヤミーは、それを受けて、全て消滅した。

オーズ（ガタウーター）は、フッと肩を竦める。

その瞬間に。

怪物の牙を振るう。

オーズ（ガタウーター）

「！！！」

感じて、避けるとするが、もう遅い。

オーズ（ガタウーター）は、それに喰らった。

オーズ（ガタウーター）

「くっ！！！」

それを受けて、火花を起しながら、少し転がれて、倒れる。

サーニヤ

「（悟龍さん！！…！！？）」

オーズを見て、オーズを攻撃した化け物の方を見て、固まった。

オーズ（ガタウーター）は、倒れたから早く起きて立って、攻撃された所を見て、驚愕する。

オーズ（ガタウーター）

「これは！？」

オリジナルのキバの世界で、ライオンのような顔や体にクリスタルみたいな体で、吸血鬼、ライオンファンガイアが居る。

オーズ（ガタウーター）

「ライオンファンガイア！？」

ライオンファンガイア

「…………」フッ
構えて、オーズへと襲いかかった。

ライオンファンガイアは、オーズ（ガタウーター）へ牙を振り続ける。

オーズ（ガタウーター）

「くっ！」

ライオンファンガイアの攻撃を苦戦のように避け続ける

オーズ（ガタウーター）

「くっ！（まずは、テメエを遠くに飛ばしている！）はあああー
ーっっっ！！」

バックステップで距離を早くとって、脚部が光ると、スチームがまた噴き出して、自分の思い通りに走って、ジャンプをして、体を前のように回転して、両足キックの態勢をする。

ライオンファンガイアは、オーズ（ガタウーター）に蹴られて、遠くへ500mで、吹っ飛ばれて、倒れた。

オーズ（ガタウーター）

「・・・早く解除する。」

そう言うと、傾けたオーカテドラルを元に戻っていた。

オーズを変身解除した。

倒れたライオンファンガイアは、立ち上がって、怒りのように咆吼して、孫悟龍へと襲いかかった

孫悟龍

「来た！キバット！」

空から金色の蝙蝠が孫悟龍の所へ飛べて、彼の周りに飛び回った。

キバット

「鷹宏！俺様を使う事が来た！！」

孫悟龍

「ふん。キバット、相変わらずに軽妙な語り口をする。さあ、いくぞ。」

キバット

「よっしゃー！！キバットと行くぜ！！ガブツ！」

孫悟龍の手へ飛び、それを噛み付く。

サーニヤは、それを見て、また驚愕したように目を開いた。

サーニヤ

「金色の蝙蝠は、孫悟龍の手を噛み付く……………」

呟く時と同時に、孫悟龍の中の魔皇力と呼ばれる魔族の潜在能力を引き出す。

サーニヤ

「……………！？魔力が凄く湧き出す！？」

孫悟龍の顔がファンガイアの輪郭を現れて、鎖でできていたベルトの形をして、それを腰に包まれた。

孫悟龍

「変身……」
キバットを手にかけて、ベルトに装着する。

孫悟龍は、ガラスのような吸血鬼をモチーフの外見で覆われるから、バキイインツ！とガラスが割れた音をして、複眼は、黄色に光り、額も、エメラルドみたいな色に光り、仮面ライダーキバになった。基本カラーは赤、複眼にあたる部分は黄色。武器は使わず、素手での格闘を中心とした戦闘スタイルを取る。また吸血鬼をモチーフとしているためか、逆さ吊りになっての奇襲攻撃も得意とする。仮面ライダーキバへ変身する。

その後に、吸血鬼みたいな構えをする。

サーニヤ

「今度は、吸血鬼みたいな仮面ライダーに変身する……」

キバ

「行くぞ……」

無口の人みたいな口調で言って、ライオンファンガイアへ襲いかかる。

ライオンファンガイアは、牙を振るう。

キバ

「ふう！」

左腕でそれを払い、右パンチで腹を殴りかかる。

ライオンファンガイア

「くっ！」

キバ

「ふっ！はっ！はっ！」

左膝で膝蹴りを繰り返すように放つ。

キバ

「ふっ！！」

最後に左で回し蹴りを強そうに放つ。

ライオンファンガイアは、それを受けて、怯みながら、一、二歩下がる。

ライオンファンガイア

「くそ！！」

悪態しながら、勢いよくキバを振るう。

キバは、それを避けるようにライオンファンガイアの後ろに回り込んで、いつものより強そうに蹴る。

ライオンファンガイアは、それを受けて、吹っ飛ばれて倒れた。

ライオンファンガイアは、立ち上がるとしようが・・・バランス悪く膝をついた。

キバは、それを見た瞬間に、それを見逃せない。

ベルトの右サイドから赤のフェッスルを取り出し、キバットの口に装備する。

キバット

『Wake up!!』

音声と同時にキバットは、ベルトから離れて、発動すると周囲は三日月が浮かぶ夜になる。

キバ

「はあああああああああ！……！」

右脚を振り上げて、キバットが、右脚の拘束を解放する。

キバット

「キバット行くぜ……！」

キバットが叫ぶと同時に巨大な西洋風の城、ドラゴンの頭、尾、四肢が伸びたような外見、キャッスルドランは、別荘の中にタワーの中層部に擬態したから出現して、咆吼する。

サーニヤは、咆哮を聞いて、びっくりして、その所を見て、ギョッと目を開く。

サーニヤ

「城のドラゴン……はじめて見る……」

恐怖のようにおびえながら、言う。

ライオンファンガイアがフラフラと立ち上がると同時に、キバは勢いをつけて、上空に三日月の中心に飛び上がり繰り出す。

キバが飛び蹴り、ダークネスムーンブレイクを放つ。

ライオンファンガイアは、それを受けて、後ろで倒れた。それと同時に砂場の地面にキバの紋章が刻まれる。

その化け物は、それを受けた後に、クリスタルのガラスのように砕

かれて、ライフエネルギーが出る。

キバ

「……………」

ベルトからキバットは、自分で離せて、キバを変身解除する。

孫悟龍は、チラッとキャッスルドランの所を見る。キバットは、孫悟龍のとなりを飛べ続ける。

キャッスルドランは、倒れたファンガイアのライフエネルギーを食べる。

キャッスルドランは、咆吼して、翼で飛び帰る。

孫悟龍は、それを見上げる。

キバット

「鷹宏。ファンガイアを現れるから俺様を使ってくれよ。」

孫悟龍

「ふっ。俺は、構わない。自分の力でも誰かの力でも信じる。」「
覇気で強調みたいに言う」

キバットは、それを聞いて、喜ぶようにスキップして、飛び去る。

孫悟龍

「もういいだ。サーニヤ、出てもいい。」

サーニヤは、孫悟龍の言葉に従って、岩陰から出ている。

孫悟龍

「さっきの質問は、答えた？」

サーニヤ

「あ、は、はい。…私は、その件で、お前は、私を助けるから確かに孫悟龍を好きになり始めた。」

孫悟龍は、険しそうな顔になった。

孫悟龍

「サーニヤ、俺は、お前の気持ちが分かるが…ミーナが、異性と接触する事を禁止する事を言うのが分かった？」

サーニヤは、孫悟龍の言葉に聞いて、シユンと落ち込み、コクリと頷いた。

孫悟龍は、それを見て、罪悪感をする。

孫悟龍

「でも、お前だけにお詫びに特別に俺たちの不死鳥の騎士隊について教える。サーニヤ」

孫悟龍

「一度言う。ストライクウィッチーズたちと同じ思うのは残念だ。俺達は、お前達みたいなウィッチや普通の軍隊と違って、ネウロイより危険なイレギュラーを倒すために最強の魔法や気や能力を持つ戦士や騎士の軍隊かもしれない。お前達みたいなウィッチは、さっきのバケモンに挑むなんて危険すぎるかもしれない。」

サーニヤ

「……もし、私達みたいなウィッチ達が戦えたなら……？」

孫悟龍

「ああ。間違いなく、お前達が死ぬ確率が100%高い。」

サーニヤは、それを聞いて、顔が青に染めた。

サーニヤ

「でも、どうして私だけを教えてあげる？」

孫悟龍

「ふつ。それは、初めて正体を見破られた自分でお前を気に入ったから。」

孫悟龍

「でも、我々のルールでは、一つは、殺す覚悟か殺される覚悟が強く生きる覚悟かをする事、二つは、一番大事や大切な所がある事、そして……三つは、自身や仲間の力を信じる事です。このルールの条件が揃えば、俺は、それを揃った者を気に入る。」

孫悟龍

「ただし、俺が凄く気に入らないのは、誰かが、人を守るために大切なことを、自分の命を捨てる所をする事や自分が生きるために味方を駒・楯と扱う所や嘘の目で、覚悟と命乞いをするなどの所がある人です。」

サーニヤ

「……」

孫悟龍

「話は終わった。いよいよ俺が寝る。お前も早く寝る方がよい。」

サーニヤ

「あ、はい。」

サーニヤは、後にしたが…孫悟龍は、大切な事を忘れるように声をかける。

孫悟龍

「そうそう。言い忘れた。俺の真名を教えてあげる。」

サーニヤ

「真名……?」

コテンと頭が傾げる。

孫悟龍

「ああ、俺だけの掟です。真名は、己を表す、名前とは異なる、神聖な名前のことです。自分が心を許した者にしか与えることは許されぬ名だが、自分に認めない者は、勝手に呼ぶと問答無用に殺せている。」

サーニヤ

「あの…、私は、お前の大切な名前を呼んでもいいですか?」

孫悟龍

「ふむ。俺は、サーニヤを信用する。ただし、二人きりで呼ぶのは、構わない。」

言い終わった瞬間に彼の後ろに月の光が美しい光り、覇気を湧き出すように不敵な笑顔が浮き上がる。

サーニヤ

「っ！！／／／／……」

それを見て、頬が赤になりながら、恥ずかしいのように俯く

孫悟龍

「それにお前の仲間に俺達の事を秘密にくれ？」

サーニヤ

「え？」

キヨンと見上げている。

孫悟龍

「もう一度俺達の事は、秘密してくれ？」

サーニヤ

「分かった。でも、どうして秘密をする？」

孫悟龍

「彼女たちは、俺達の事にバレるなんて質問をされて面倒するかもしれない。」

サーニヤは、孫悟龍の言葉の意味を分からずに納得する。

孫悟龍

「では 俺の真名は、リュムーンだ。」

サーニヤ

「リュムーン……」

孫悟龍

「では、サーニャ。」

サーニャは、彼の呼び込みに応えるように頭を上げる。

孫悟龍

「お休み。」

サーニャ

「……お休みなさい、リユ、リユムーン。」

名を呼ばれた事を嬉しいように頬を赤に染めながら、挨拶を返す

サーニャは、自分の部屋に戻って、寝る。

孫悟龍は、自分の部屋の扉に入る前に…

孫悟龍

「フン。まさか俺は……」

初めて、ウィッチの一人、夜型人間、サーニャを認めた。

そう言うと同時に、入って、ベッドに寝る。

不死鳥の騎士隊のリーダー、孫悟龍とストライクウィッチーズ、サーニャの出会いがどう変わっている？

第13話 温泉とメダルと吸血鬼（後書き）

とうとう孫悟龍は、初めてストライクウィッチーズのウィッチを認めちゃった！！！！

サーニヤは、孫悟龍に惹き始めた！（びっくり）ムム…孫悟龍め、やるねえ！

さあ！次回予告する！

次回予告

孫悟龍

「オッス、俺、リュムーン」

孫悟龍

「ブリタニア（イギリス）のおっとりやドジ小娘のやつ。まだ自分のことを過小評価する。それに自分の力を信じない。大事な大切なことに気づけない。」

リーネ

「わたしは、周りから褒めるけど、嬉しいような嬉しくないような事がある。」

孫悟龍

「フン。小娘め。彼女の仲間が彼女の实力を認めるが…お前が、彼女の力を怖いか？大切な人を失うのが怖いか？それにあなたにとっ

ての大切なことは何だか？」

孫悟龍

「彼女は、一番大切な事を忘れる。」

リーネ

「でもお前にとっての大切な事は何だ!？」

孫悟龍

「はん。決まってる!!私:いや、俺の一番大切な事は、家族を守ること!!??？」

第14話 「一人じゃない!!仲間と助け合う事と誰かを守る事は大切!!」

この話もグダグダ…(涙)

第14話 「一人じゃない!!仲間と助け合う事と誰かを守る事は大切!!」

この話もグダグダ…(涙)

第14話 「一人じゃない!!仲間と助け合う事と誰かを守る事は大切!!」

朝

孫悟龍が、いつものに起きた。

彼は、ビーチの砂場へ行く為の外に出て、いつもの朝練をする。

孫悟龍

「ふっ!ふっ!はぁ!」

重力50倍で中国拳法(八卦拳や八極拳など)と空手の訓練をする。

Fateのヘラクレスの斧剣と似ている剣を何度も振る。

その剣を消えた後に、気を溜め込むままに構える。

孫悟龍

「か〜!!め〜!!は〜!!め〜!!」

海の方に向けて見ながら、両掌に集中して、全身の気を増擬縮し、最高限に溜め込み終わる。

孫悟龍

「波〜〜〜!!!!」

ドウッ!!と一気に放出する。

クパアアッ!!という海を切り込む音をする。それを何度も繰り返す。

そんな中に、一つの汗がかく。

孫悟龍

「ふっつ。……む。」

孫悟龍が、それらを終了しようと思つように肩を竦めるが、3つの気配を感じるから、あの所に振り返る。

シグナム

「おはようございます。主孫悟龍。ほれ、タオル」

ザフィーラは、無言で、孫悟龍に挨拶で一礼する。

孫悟龍

「おはよう。タオル、ありがとう。シグナム。おはよう、ザフィーラ、そして……」

右の順からシグナム・ザフィーラ……そして、険しい顔になりながら、坂本美緒を見る。

孫悟龍

「何しに来たか？眼帯ポニーテール少女。」

坂本

「お前は、海を切る技があるか!？」

孫悟龍

「ああ。それがどうした。」

坂本

「それを私に教えて」「断る。」「最後まで聞いてくれ!？」

孫悟龍

「ワリイ。この技は、魔法と違う技だ。お前達みたいなウィッチはこの技を完成するのが30年かかるかもしれない。普通の人でも50年かかる。」
「険しい顔になりながら、さっきの技の説明をする。」

坂本

「30年かかる!!!??」

孫悟龍

「当たり前だ。それにこの技は、魔力じゃなくて、別の力で使う技です。お前達ウィッチの魔力だけで、負担が危険になっているかもしれない。」

坂本は、それを聞いて、息を呑みながら真っ青になる。

孫悟龍は、そんな坂本を見て、つまらなそうに溜め息をしながら、ザフィーラに向けて見る。

孫悟龍

「ザフィーラ、楯の守護獣は防御とサポートだ。そうだ?」

ザフィーラ

「ええ。それがどうした?」

孫悟龍

「さあ、楯は、防御とサポートだけじゃなくて攻撃もできる。」

ザフィーラ

「何……？盾も攻撃する？」

目が鋭くなり、耳が、ピクツと立てた。

孫悟龍

「そう。気で鋭い盾を作つて、ブーラメンのように相手目掛けて投げる技、気円斬と言う技がある。」

シグナム

「気円斬？」

孫悟龍

「シグナムも剣を使う時でも使えるかも知れない。この技を使えば、向こうのデカイ岩を斬る。」

デカイ岩に向けて指しながら、言う

シグナム

「デカイ岩を斬ることができる……？」

孫悟龍

「フン。まあ、それを見ておけ。」

上がった手を天に向けて、半径15mの気を円盤状に練り上げ高速回転させる。

ザフィーラ

「ム……！」

それを見て、ぴくりと耳を立てる・

孫悟龍

「気円斬！！」

そう叫ぶと同時に、デカイ岩を目的にそれを投げる。

それは、デカイ岩を綺麗に切断する。

坂本だけは、それを見て、驚愕するように唾然する。

シグナムとザフィーラは、それを見て、感嘆する。

ザフィーラ

「なるほど…楯は、防御だけじゃなくて、鋭い刃で、攻撃することもできる。」

孫悟龍

「まあ、ザフィーラ。それを集中にコントロールして、攻撃する。それも特訓の一種です。まずは、」

ザフィーラは、その言葉に賛同するように頷いて、大きな岩に向きながら睨んで、体を集中して、気円斬の練習をする。

孫悟龍

「シグナム、俺と模擬戦する。」

シグナム

「む。あなたと模擬戦でやる？」

孫悟龍

「無論だ。ただし、俺は、気を使わないで、魔法だけで使っ。」

シグナムは、孫悟龍と魔法の模擬戦をするのがワクワクする。

シグナム

「主悟龍と模擬戦で早くやりたい!!」
煌めきな目で言う。

孫悟龍

「フツ。シグナムは、本当に俺と同じなバトルマニアな人だ。」
目を閉じながら不敵な笑みを浮かべて、優しさ言葉で言う。

孫悟龍は、閉じた目を開いて、シグナムを見ると、シグナムは、既に騎士甲冑きしかうちゅうを纏った。

彼は、苦笑していた

孫悟龍

「まあ、俺は、今まで凄い技術で、アレを作った。」
黒蒼の結晶の宝石を取り出せる。

シグナムは、アレを見て、驚愕したようにびっくりする。

シグナム

「これは…。お前は、そんな物を作る事ができる?」

孫悟龍

「ああ。俺に不可能という辞書ではない。」
ニヤリと不敵な笑みをする。

孫悟龍は、上にアレを投げ込む。

孫悟龍

「Set up!! death dark raising・no
thingness!!」

デスダークレイシング

『yes master set up!!』

孫悟龍の体が光るから、すぐ収まる。

シグナムは、孫悟龍の服装を見て、ホッと感嘆していた。

シグナム

「お前の服装は、死に神だ……。」

孫悟龍

「ええ。俺が隠された力は、闇を持つ。だから、それは、死に神に
似合っていると思います。」

孫悟龍のバリアジャケットは、死に神のような服装で、ボロボロの
マントを身に纏って、手の中で、魔法戦記リリカルなのはの武器、
デスダークネスレイシングの銃剣型サブソードを持つ。

シグナム

「フツ。死に神はお前らしさに似合う方がよい。」
凜々らしさに言う。

孫悟龍とシグナムは、お互いに険しい顔になりながら、相手から距
離を離れて、空へ500mに飛び上がる。それと同時に、孫悟龍は、
外の時間が止まる結界と防音結界が展開した。

シグナム

「行くぞ！主鷹宏！！」

孫悟龍

「来い！シグナム！！」

そう叫ぶと、お互いに相手への敢行をする。

シグナムは、孫悟龍の肩を目的のようにレヴァンティンを振るう。

ガキンツ！

孫悟龍は、それを受け流れて、彼女の腹に向けて、強くデスダーク
レイシング・ナツシングネスを剣のように振るう。

シグナム

「クツ！」

いつの間に現れる鞘で防ぐ。

ガキンツ！！

孫悟龍とシグナムは、仕切り直しながら、お互いに距離を取るから
再び敢行する。

孫悟龍

「ハツ！！」

ブンツ！！

シグナム

「フツ！！」

ブンツ！！

お互いに武器を振るう。

ガキンツツツツ!!!!!!!!!!!!!!

お互いの攻撃が同タイミングでぶつかった時は、相殺が発生するおかげに、衝撃波が起きる。

孫悟龍

「だりゃあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

ブンブンブンブンツツツツ……………!!!!!!

シグナム

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

ブンブンブンブンツツツツ……………!!!!!!

ガキンガキンガキンガキンガキン……………!!!!!!

何度も何度も手合わせを繰り返し、お互いの攻撃が同タイミングでぶつかった時は、相殺が発生するおかげに、衝撃波がそれぞれ起きる。

孫悟龍

「デスダークレイシング！」

デスダークレイシング

『yes, master!』

孫悟龍の中心に暗黒蒼色の、七芒星、各頂点の間には異なった七つ

の色。更に外側の円周上には七つの惑星を表すシジルが描かれています。配置された色はそれぞれシトリン、ガーネット、サファイア、ブラック・オニキス、レインボー・ムーンストーン、アンバー、ペリドットの魔方陣が展開され、はたから見れば一つの砲身のように見る事だろう。

シグナムは、それを見て、背中に悪寒が走り、危険と感じる。

シグナム

「っ！！レヴァンティン！！」

レヴァンティン

『jawoll! Load Cartridge!!』

その音声と同時にこの剣の柄から薬莖を排出する。

孫悟龍

「デイバイン」

デスダークレイジング

『Divine』

シグナム

「飛龍」

孫悟龍

「バスター！！！！」

デスダークレイジング

『Buster!!!』

シグナム

「一閃!!!!」

ドカンッッッ!!!!!!!!!

お互いに闇の射撃と炎の斬撃が強くぶつかって、一進一退して、衝撃波が起こって、煙が舞い上がる。

お互いに煙から出ているように距離をとる。

孫悟龍

「デスダークレイジング。クロックフォームに変える。」

デスダークレイジング

『Yes・Clock Form・Cast Off』

その電子音と同時に、マントがなくなって、重力感が軽めになっている。

シグナムは、それを見る。

シグナム

「(マントがない?主孫悟龍、お前は、何をやりますか?)」

孫悟龍は、静かに違う構えを構える。

孫悟龍

「行くぞ!」

孫悟龍は、ドカツ！という空気を滑るように蹴る音をして、敢行するが、いつの間にシグナムの前に現れる。

シグナム

「！」

シグナムが、自分の前に現れることに気付いて、驚愕してからすぐに自我に戻って、防ぐのが、もう遅い。

孫悟龍

「フツ！」

腹の所へ斬り込む。

バキンツツ！！

シグナムは、それを受けて、少し後ずさりする。

シグナム

「くっ！」

シグナムは、痛みで顔が歪んで、腹を抑えながら、距離を取る。しかし、血が流せていない。なぜなら、模擬戦では、デバイスは、非殺傷の武器になる。

シグナムは、すぐに顔が上げて、孫悟龍が、すでにいつの間自分の前に現れる。

シグナム

「！？（今の速さは何だった！）」

と思いつつながら、焦る。

孫悟龍は、デスダークレイジングを速く振るう。

シグナム

「くっ！」

死角をギリギリかわして髪の毛を掠って、さらりと流れ込む。

孫悟龍

「ほお。良くも避ける。しかし、俺から逃げ込むなんて無駄。」

シグナム

「ッッ！（危ない！もし、当たられたなら、間違えなく、私はやられたかもしれない。）」

シグナムは、冷汗に孫悟龍から距離を取りながら、思う。

孫悟龍

「あなたは、どうする??？」

挑発みたいな口調で言う。

シグナム

「くっ。」

身動けずに孫悟龍の行動の様子を調べるように見る。

孫悟龍

「どうした。そっちから来ないなら、こっちから行くぞ。」
とそう言うと同時に、消えた。

孫悟龍は、シグナムに接近するが…、

シグナム

「くっ！レヴァンティン！！」

レヴァンティン

『Schlangeform!』

その音声のドイツ語と同時にこの剣の柄から薬莖を排出する。

レヴァンティンは、いくつもの節に分かれた蛇腹剣の形態、シュラ
ンゲフォルムになる。

孫悟龍

「む！（シュランゲフォームになった！）」
と気づけて、止まったが…、もう俺に刃を迫られてる。

孫悟龍

「！」

それに気付けたように避けて、ギリギリ頬を掠められる。

孫悟龍は、これ以上に接近するのは無理だと思い、距離がとる

孫悟龍

「フム。（まさか。俺に傷をつけるのは初めて！やはり面白い！！）
掠められた頬を撫でて、面白いと感じて、ピリピリと鬪牙くわが籠め上
がる。

シグナムは、それを感じて、ゾクツと恐怖を感じて歓喜が込め上が
っている。

シグナム

「（孫悟龍は、少し本気を出した。やはりお前と模擬戦する事が面

白そう！）」

凜々らしい笑顔を浮き出しながら思う。

孫悟龍

「2ndフォーム。」

と呟く。

デスダークネス

『second form』

両銃長剣から右手で、片手剣モードになり、左手で、片手銃モードになった。

シグナム

「！！（片手銃と片手剣になったらどう戦う？）」

孫悟龍は、片手剣を肩に担ぎ、片手銃をシグナムに向かう。

孫悟龍

「さあ、俺は、少し本気を出す。」

そう言うと同時に、片手銃で魔弾を撃ち出す。

シグナム

「！くっ！」

撃ち出される事に気付いて、魔弾を弾く。

シグナムは、ハッと気に付けて孫悟龍がいた所に向き直し、孫悟龍がすでにいない。

彼女は、警戒するように剣を構えて、孫悟龍を探す。

ババババババババババ！！！！

あちこちから暗黒色の魔弾を速く撃ち出す。

シグナム

「！？（今までどんなでも強豪でも魔導者より弾が速いな！？）
くっ！」

彼女は剣と鞘で、魔弾をだんだん速やかに弾き続けるが…、服や身体が少しずつ掠められて弾く事に集中するせいで彼が接近するのが気付けない。

孫悟龍

「吹っ飛ぶ。」

とシグナムの耳元に呟く。

シグナム

「！？」「ゾクッ！」

危険な言葉を聞く事を恐怖にして孫悟龍が接近するのに気付いていた。

彼は、回る蹴りで彼女を吹っ飛ぶように蹴る。

シグナム

「うわっ！」

と500mで吹っ飛ばれた。

シグナムは、苦悶な顔になり、孫悟龍が蹴られた腹を両手で押さえている。

シグナム

「くっ！（なんて速い重い攻撃！？それが本気になった孫悟龍だ！でも、今は、少し本気だ。）」

孫悟龍

「シグナム。決着する。」

苦悩したシグナムは、彼の言葉を聞いて、我に返って、頷けた。

孫悟龍は、それを確認してから、集中しながら、足元に魔方陣が現れる。

シグナム

「レヴァンティン。」

レヴァンティン

『jawohl』

その音声のドイツ語と同時にこの剣の柄から薬莖を排出するから、鞘と剣を連結し弓の形へと姿を変える。

シグナム

「刃、連結刃に続く、もう一つの姿。」

レヴァンティン

『Sturmfaulken』

孫悟龍は、銃の先端に闇のエネルギーを集めるために集中しながら、片手銃をシグナムに向ける。

シグナムも、孫悟龍に向けて、使用の際、レヴァンティンの刀身を

一部流用する魔力の矢を生成時、及び発射時にカートリッジを弓の上部と下部で同時に二発ロードして、その矢を弓に引き絞る。

孫悟龍

「ダークネス……」

最初に片手銃モードで闇の弾を砲撃する。

シグナム

「翔けよ、隼！」

孫悟龍

「克蘭ブル！！」

片手剣モードにして、それを振り抜き闇の刃を飛ばす。

シグナム

「シュツルムファルケン！！」

矢を放し、音速の壁を越えて炎に包まれて、飛翔する。

お互いの必殺技が一進一退にぶつかり合いして、大爆発して、煙が凄く舞上げる。

結界を壊れないように防げる。

シグナムは、舞い上がった煙に巻き込んでしまった。

彼女は、孫悟龍が来るのを待っている。

シグナム

「（主鷹宏、煙の中で私が居る。どうする。）」

考えながら、次の攻撃を準備する。

その時だ。

????

「それまで。チェックメイト」

後ろから言いながら、シグナムの喉をフツと冷たい刃が触れる。

シグナム

「!?!」

孫悟龍の声を聞いて、氷が固まるのように行動が止まる。

煙が晴れてると、孫悟龍は、シグナムの後ろに彼女の喉にギリギリ突っ込む。

シグナム

「なっ、いつの間にどうやって私の後ろに居る…?」

孫悟龍

「それは、煙が凄く舞い上がった瞬間に、気配を殺しながら、クロツクムーゾでシグナムの後ろに回った。」

シグナム

「くっ。私の負け。」

後悔をしながら、レヴァンティンを下りる。

孫悟龍

「いいえ。おまえ、やるね。」

シグナム

「え？」

孫悟龍

「お前は、レヴァンティンで俺の頬を少し掠めた。自分の頬を指しながら言う。」

シグナムは、それを聞いて、蒼褪めた。

シグナム

「申し訳ありません！！主鷹宏。」

孫悟龍

「ははっ。気にしない。でも、模擬戦で俺の本気を銀牙以外で引き出せた奴は初めての人はお前だ。」

シグナム

「え？銀牙も貴方と模擬戦したか？」

孫悟龍

「ええ。俺達は、本気を出し合いして、俺達は、本気を出したおかげで、周りでクレーターがたくさん出たり壊したりすぎた。俺は、修復をするのが疲れる。」

シグナムは、それを聞いて、冷汗でかき、引き攣って、ちょっと一歩で下がる。

シグナム

「凄い…無茶滅茶で超人を超えるみたいなの闘いをするなんて初めて聞く…」

彼は、そんな彼女を見て、苦笑しながら頭を掻く。

飛んでいる彼と彼女は、砂場に着陸するように降下する。

孫悟龍

「もし、俺と銀牙は、本気で地球でやるなら、ここをムシャクシャになるなんて困る……」

彼女達に聞こえないように汗をかけながらボソツと爆発発言で呟く。

彼達は、模擬戦を終わって、結界を解くから別荘のシャワー室へ行って、汗を払うために水で身体を洗う。

ザフィーラも特訓をし終わったから、彼達と一緒にその所へ行く。

む？こんな坂本は、どうするかと聞かれたなら、なぜなら、さっきの俺達の模擬戦を見て、啞然のままに固まった。俺達は、こんなやつを無視した。

彼らは、シャワー室を後にしたら、自分の私服に着替えて、ダイニングルーム& a m p ;調理場へ行く。

ダイニングルーム& a m p ;調理場

シャワーをしていた水が残った孫悟龍は、機嫌良いように鼻歌をしながらベーコンエッグとご飯とみそ汁や焼き魚を簡単に料理する。

シグナムとザフィーラは、孫悟龍と同じようにタオルでシャワーの残った水を払ったから精神修業みたいに正座する。

リンアインとシャマルはしっかり目を覚めて、私服に着替えてから、ダイニングルームへ行く。

アイン

「おはようございます。主鷹宏、ザフィーラ、シグナム」

シャマル

「おはようございます。主鷹宏、ザフィーラ、シグナム」

孫悟龍

「おう。おはよう。だが、わりい。シグナムらは、精神修業をする中に静かにしてくれないか？」

アインとシャマルは、それを聞いて、納得する。

孫悟龍

「暖かい紅茶を机に置いた。お前達が、飲んでくれか？」

シャマル

「はい。飲みます。」

アイン

「はい、飲ませていただきます。」

アインとシャマルは、いすにかけて、礼儀正しいに紅茶を飲む。

孫悟龍

「よし。ベーコンエッグとみそ汁を作り上げて、魚も焼けて、ご飯も炊けていた。」

ベーコンエッグとみそ汁とご飯は、不死鳥の騎士隊とストライクウイッチーズ全員分の皿に乗り上がった。

彼は、それらをテーブルまで運ぶ瞬間に。

シャマル

「私も手伝うか？」

アイン

「私も」

孫悟龍

「お？そう言ってくれると助かる。」

二人がそれを聞けて、笑顔になってそれらをテーブルまで運ぶから、これに置く。

ヴィータとツヴァイとアギトは、パジャマを着るままに目を擦るように目覚めて、私服に着替えていたからダイニングルームへ行く。ツヴァイとアギトは、すでにアウトフレームになった。

ヴィータ

「おはよう。シグナム、アイン、ザフィーラ、シャマル、兄貴。」

ツヴァイ

「おはようございます。姉さん。シグナム、ザフィーラ、シャマル、兄さん。」

アギト

「おはよう。姐さん。アイン、ザフィーラ、シャマル、兄貴。」

孫悟龍

「おう。おはよう。」

アイン & アム・シヤマル

「おはよう。三人。」

シグナムとザフィーラは、銀牙が来る気配に気付けたから閉じた目を開いた。

銀牙

「おはよう、兄さん。」

彼の所に走って飛びかかって、抱けている。

孫悟龍

「おはよう、銀牙。」

挨拶を返しながら優しくさに銀牙を撫でている。

撫でられた銀牙は、んんんと気持ち良さそうに目を閉じる。

ストライクウィッチーズも既に目覚めて、目を擦る人がいたり、すっかり目覚めた人がいたりして、既に我に返った坂本少佐と合流し、ダイニングルームへ行く。

金髪の眼鏡少女は、孫悟龍をキッと睨んで彼の所にズンズンと歩いている。

彼は、こちらに向けて歩いている気配に気付いて、振り返る。

ペリーヌ

「ちょっとおまえ！？お前が坂本少佐の誘いを断るだも！」

孫悟龍

「はあ？何言っている、お前は。」

彼は、腕を組んだから目を閉じたから閉じた片目が開いて、話す。

孫悟龍

「それに今のお前の言葉では、勝手に私がいつの間にお前達の仲間になるうと思ひ込むみたいに言う？ふざけるな……」

重い怒気を籠めるみたいな言葉で言う。

彼女は、それを聞けて、冷汗をしながら、ビクツと後ずさりする。

彼女だけじゃなくて、ルツキーと芳佳とリーネは、顔を青に染まったり、エイラとシャーリーは、冷汗にかけて、流石二人のエースのバルクホルンとエーリカと坂本とミーナは、銃がなく、戦慄するように構えたりするが、サーニヤも前の時より少し平気で慣れる事になった。

アイン

「止せ、主鷹宏。そのままだと少女達が怖がっている。」
宥めるように言う

孫悟龍

「む？それはそうだ。まあ、さっきの条件の中に私がお前達を認めるまでもう二度と私達の事を仲間と思ひ込むように言わないでくれ。もし、言う時に、これを破るから、ストライクウィッチーズの存在を破滅してあげる。」

アインに止められてから、瞳孔を縦に割りながら、一人を除くスト

ライクウィッチーズに向き直して、警告そつに言っている。

バルクホルンとミーナと坂本は、それを見て、うっと呻き声と共に顔を逸らす。

孫悟龍

「じゃあ、朝食を食べる。」

そう言うと同時に、不死鳥の騎士隊はしっかりと、ストライクウィッチーズも、渋々とダイニングテーブルの椅子にかけて座る。

不死鳥の騎士隊

『頂きます。』

ストライクウィッチーズ

『頂きます……。』

この前の夕食と同じようにする。

彼らは、食べ始める時に、彼は、彼女達に言いかける。

孫悟龍

「そうそう。誰かが好き嫌いがある時、わがままにする奴は、朝食はなしになり、無理やりに強制転移で自分の基地に帰る。」
冷酷みたいで言う

サーニヤを除くストライクウィッチーズは、それを聞いているように驚愕して、憎しみで彼を睨みつける。

孫悟龍は、それを見て、肩をすくめる。

孫悟龍

「私が酷い事を言うのは、申し訳ありませんが…」
反省するように言い、続ける。

孫悟龍

「誰でも美味しいために一生懸命に料理する人がいる。例えば、誰かが一生懸命した料理を捨てるから、一生懸命に料理した人は、それを見てショックしたり、苦勞が水の泡になったり絶対に悲しむ。逆に覚悟で我慢するように食べて、おいしいとうれしそうに笑顔で言うから、その人は、それを聞いて、嬉しいようで、人達が美味しい料理にあげて、絶対に笑顔をすると誓える。…と言う私が考える物語だ。」

ストライクウィッチーズは、最後まで聞いているが、料理する事が出来る人は、しっかり最後まで聞こえた。

孫悟龍

「まあ、私が考えた物語を信じたくないのを構わない。」
フツと自嘲な笑いをする。

シグナムらは、進んでいた箸を止めたから、彼に振り返って言いかける。

シグナム

「いいえ、それはお前が語る侍と同じいい話です。でも…」
凜々らしさにフツと微笑する。

シグナム

「私達は、既にあなたを信用する。絶対に私達は、お前を裏切らない。」

誓えるかにも似た響きが含まれるシグナムに、彼女と同じようにヴ

オルケンリッターらが誓えるような笑顔で小刻みに頷いた。

銀牙

「僕も。」

笑顔で言う。

孫悟龍は、目を開くようにそれを聞いて、フツと嬉しそうに目を閉ざしたからその目を開いて、黄昏のように天井を見上げる。

孫悟龍

「お前達が言ってる事は嬉しいけど……」

孫悟龍

「もし、いつか俺が、憎悪と7つの罪と殺戮能力で狂われる闇に堕ちられてしまったせいで暴走するようになると誰かを殺すかもしれない。」

悲しげに自嘲するように言う。

彼女らは、驚愕するようにそれを聞く。

シグナムは、「そんな事はない！」と言う反論をする前に、彼が「だが！」と大きな声で言い、自分の仲間達に振り返って、優しさに言う。

孫悟龍

「お前達が闇の暴走の私を止めたいと思う時に、絶対に止める事が出来ると私は、思うように仲間を絶対に信頼する。」

シグナムらは、驚愕するようでそれを聞いて、フツと微笑をする。

シグナム

「当たり前だ！？お前が闇の暴走に堕ちられた時に、私達は、地獄の果てまで何度も止める事でも支える事でもする！？」
誓えるみたいに陛下の前に跪くように胸の前に手を置く。

ヴォルケンリッターは、シグナムと同じ行動にする。

ストライクウィッチーズは、その光景を見て、息を呑んだように目を開いた。

銀牙は、孫悟龍の所に優しくそくに飛びかけて、抱きつける。

銀牙

「僕も兄さんを守りたい。兄さんが自分を卑下する事を言うなんてダメ？」

優しくそくに慰めるみたいに言い、笑顔で見上げる。

彼は、苦笑するように銀牙を見下ろす。

銀牙が言ったから自分の目が、瞳が鋭くなる。

銀牙

「例え、兄さんと兄さんの仲間を苦しそくに傷つけた誰かを容赦せずに殺せる。もちろん、ストライクウィッチーズでも……」
子供のくせにウィッチと強豪者より凄い魔力と殺気が込める。

ストライクウィッチーズは、頭が真っ白して、ゾクつと悪寒をして、そんな銀牙に抱けて恐怖することが初めて感じる。

ヴォルケンリッターの中にバトルジャッキーが、そんな銀牙の魔力

に興味する。

孫悟龍

「止せ、銀牙。でも俺のために優しい言葉をしてくれて有難う。」
銀牙が殺気を出す事に気付いて、宥めて、微笑しながら優しくそんな礼をする。

その少年は、彼の言葉に、彼を見上げるから、うんと笑顔で頷くから殺気を止める。

ストライクウィッチーズは、それを見て、ほっと安堵するから彼女達の中にへろへろした人がいる。

孫悟龍

「はいはい。その話は終わりだ。早くとっとと食べ終わるから、お前達ストライクウィッチーズは、仕事と特訓があるか？そういうかな」と仕事が溜まってもいいか？」

芳佳を除くストライクウィッチーズは、ハッと我に帰ったから、焦りに平べったままでに食事を食べる。

不死鳥の騎士隊は、それを見て、呆れるように溜め息をするから、食事をさっきからゆっくり食べる。

彼らの食事を既に食べたから、別荘の水晶を出た。そして、別荘の結界を出た孫悟龍だけは、結界の前にストライクウィッチーズを見送りに来た。

ストライクウィッチーズからミーナを現れる。

ミーナ

「ストライクウィッチーズから告げよう。私達を仮面ライダーと噂の真実の事を分かるように説明くれる事と泊めてくれる事を感謝する。」

孫悟龍

「フン、お前達みたいな偽善軍士は感謝することをいらない。前でもう一度言う。次に俺が認めない誰かが俺が張った結界の範囲を勝手に入ると、堅いバリアを貫くビームを放つ罠が起こるかも知れない。勝手に入るから、死ぬかも知れない。」
傲慢と警告で言う。

バルクホルンと坂本は、それを聞いて、見下ろす事を感じて、苛立ちをする。

ミーナ

「これからは気をつける。私達は、これで。」
冷汗をかきながらペコツと礼をして、ストライクウィッチーズと共に、ここを後にした。

彼は、言い忘れる事に気がついた。

孫悟龍

「あつ。そうそう、言い忘れた。隊長、俺達の事を上層部に絶対に報告しなくてくれ。俺達は、完全にお前達の上層部を信頼しない。もし、報告したら、お前達でも誰でもと出会ってから容赦としない。」

隊長とするミーナは、それを聞いて、無言に頷く。今度は、後にし

たから消えた。

孫悟龍

「ふん。やはり、この隊長めは、上層部に報告する気をする。ここはスオムスとアフリカの軍隊と違う。俺達は、ここが気に入くない。」
捨てるように言う。

孫悟龍

「それに、ビショップのは、負オーラを持つ。もしかすると、俺達が居るせいでリーネは、俺達の戦いを見て、凄いと感じて、きつと落ち込むのが間違いない。その少女は、間違はなく、危ない。」

孫悟龍

「……まあ、俺も自分の力を怠らずに訓練をする。」

そう言うと孫悟龍は、結界と自分の別荘に入る。

芳佳は、リーネの基地案内にしてくれて終わったらリーネと共に坂本の厳しい特訓をし終えて、寝込んだようにぐったりと疲れた。

孫悟龍は、修行を既に終えたら、ストライクウィッチーズを監視する気をするから、基地の誰かが気付いてない為に気配を殺して、立つように飛び続け、この彼女らを見下ろして呆れたように溜め息をする。

孫悟龍

「やれやれ。軍隊の特訓は、俺達の特訓より軽い……」

彼の仲間も、彼と共に軍隊より地獄特訓をし終えたから、シャワーをかけて、彼と離れても自己特訓した人がいたり、孫悟龍が作りだしたテレビゲーム（PS3とPS2）を遊べた人がいたり、する。

孫悟龍

「おつ。」

リーネは、自分の使い魔の能力を使って、ボーズMk・I対装甲ライフルで約1km先の標的を狙撃した。

孫悟龍は、それを見て、感心するようにヒュ〜と鼻歌をする。

孫悟龍

「やるねえ。ピシヨップは、遠距離を撃つ事が出来る。でも……」
その少女を褒めるように言い、険しい顔になる。

リーネは、芳佳の褒め言葉を聞けて、逆に落ち込む。

孫悟龍

「フン。やはり、ピシヨップの負オーラは、自分より他人が強くてもうまくてもすることを思い込むように自分の力を信じない。それに彼女の故郷、ブリタニアを守る使命感だけで心から周りの人を見ないから、自分の仲間頼み事を言わないと、大切なことを守れないなんて間違いない。」

つまらなそうに鼻を鳴らし、誰にも聞こえないように言うから自分のへ帰るように転移した。

翌日の夕方、芳佳とリーネは、昨日と同じに訓練を終えたせいで立ちあがっていないようで疲れて、バルクホルン大尉は、軍を知らない芳佳に厳しい事と軍事をきつく言う。芳佳は、それを聞いて、シヨックをする。夜、シヨックした芳佳は、リーネに相談された。

リーネは、優しい言葉をする芳佳に大きな声に酷い言葉で言い返し、自分の部屋に走り去った。

孫悟龍は、銀牙と共に、森林と結界の中でそれを見て、無言をする。

孫悟龍

「なあ、銀牙。ピシヨップは、間違いなく負を持つ。」

銀牙

「ええ、まさか、僕と少し似ている者なんて初めて。自分の昔を思い浮かべる。」

孫悟龍

「まあ、次のネウロイが警告する前に、化け物を現れるから、お前と俺の伝言なら頑固であるピシヨップを説得することが出来ると思う。」

銀牙

「それは、兄さんの勘？」

孫悟龍は、無言で頷く。

銀牙

「分かった。兄さんの勘を信じる。」

銀牙と孫悟龍は、後にした。

リーネの所では、グリードらしき化け物は自分が寝込んだのが待った時に、ニヤリとした不気味な笑いをしながら、セルメダルを持ち、彼女を目に付けたから彼女の額がメダルの投入口を作る。

グリード？

「その欲望、解放しろ。」

そう決めセリフで言うと、そこにセルメダルに投入するから、今までのヤミーと違う色のヤミーを生まれる。

グリード？

「ククク。まさか、大昔に、我々グリードは、オーズと共に封印したが、私は、珍しさに裏切りのアंकめと同じミイラになって悪運を持つように生き残ったが、ここでアंकより目覚めたから、少女を目に付けて、少女の欲望は面白い…のが、欲望の深さは、最悪で、この民やみんなを苦しむ。そして、少女の絶望する顔になる。ククク」

と悪みたいにそう言うから、不気味な笑い声をすると同時にここを後にしたように消えた。

翌日の夜明けに、不死鳥の騎士隊は、いつもの日常と自己特訓（アインとザフィーラは格闘術をし、覚える事、シグナムは剣術をし、覚える、ヴィータは、棒・ハンマー術をし、覚える事、ツヴァイとアギトとアインは攻撃と防御などを持つ魔法・魔導書を読み覚える事、シャマルは全状態へ癒す魔法・サポートを覚える事）をする。

孫悟龍が特訓する所では。

孫悟龍

「ふっ、ふっ、ふっ……」

右手腕に重力腕時計を付けて、重力150Gで体中に震えながら汗をたくさんかけて、腕立てなどをする。

それだけじゃなくて、いろんな筋力トレーニングもする。

銀牙が特訓する所では。

銀牙

「……………」

狼化になるためのイメージをする事をメキツメキツと体への負担を耐えるように精神する。

20分後、

銀牙

「……………くっ！はぁ…、はぁ…、はぁ…。」

限界が来たから額から体中から汗をたくさんかけ、疲れた

孫悟龍は、このトレーニングを終わってから重力腕時計の重力操作をするためにパソコンのように解除する。

孫悟龍

「ふーっ。やはり、このままにスーパーサイヤ人と程遠いにした。

銀牙、そちらはどう？」

タオルで汗かかった体中を払いながら、言うから銀牙に向けて質問

する。

銀牙

「はい。僕は、狼化になる事が出来るのが、もし、失敗すれば、暴走するかもしれない。」

孫悟龍

「そうか…」

その時！

遠くからチャリチャリとなにかが落ちる音がした。

孫悟龍は、ドクンとする心臓音をしながら、孫悟龍の目が、紫色に変える。なぜ彼は、いつ恐竜コンボを体内に入ると聞かれてから、なぜなら、いつか何処から来たかわからないから既に恐竜系のコアメダルは、本作中の映司と違う欲望と渴望などを持つ彼の体内に6枚に入り込んだ。残りもわからない。

銀牙は、彼の眼の豹変に気付けて言う。

銀牙

「お前の目…はっ！まさか、ヤミーが居る。」

孫悟龍

「ああ。でも今までの違うオーラのヤミーがいる。もしかして……！」

銀牙

「ああ。アंकでも他のグリードも存在しないはずなのに…」

銀牙は、孫悟龍と顔を見合わせさせるから思い繋げるようにコクリと頷き合います。

孫悟龍

「おい！ヴォルケンリッター。留守にしてくれ!？」
ヴォルケンリッターは、孫悟龍の思いに気付いて、賛同するように頷く。

孫悟龍

「銀牙、行くぞ！」

皮肉に言う。

銀牙

「はい！」

喜々らしさ声をする。

謎のヤミーを感じた所へ行く。

滑走路の所では

見た事がない謎のヤミーは、整備員達を苦しんだように襲う。

残った整備員達は、悲鳴をしながらここから逃げないようにへたりと座り込む。

謎のヤミーの正体は、オオカミをモチーフにしているヤミーだ。

オオカミのヤミー

「モットモ…！」

謎のヤミーにやられた整備員が苦悶するように呻く。

エイラとサーニヤを除くストライクウィッチーズは、ネウロイ強襲の警告音を聞いたから、ストライカーを履くとするから迎撃に行くのが、整備員は、ストライカーの準備を謎のヤミーが邪魔をするから、出撃することが出来ない。

バルクホルン

「くそ…！なぜこんな時に…！」

悪態しながら言う。

坂本とミーナは、険しそうな顔で強張る。

バルクホルン

「こんな化け物がいなきゃ…！」

そう怒号に言う。

坂本は、怒号に行った彼女に振り返って、彼女の頭と尻の上から使い魔の耳と尻尾を現れるから、まさかと彼女の行動が分かるように顔が蒼褪める。

坂本

「よs・・・」うおおおおおおお！？」もう遅い…！」

彼女を制止するように言う途端にバルクホルンが謎のヤミーを襲いに行った。

バルクホルン

「うわあああああ!?!」

壁まで吹っ飛ばされて、壁にぶつかったから、口から凄く血が出る。

ストライクウィッチーズ

『バルクホルン大尉・さん!?!/トウルデー!?!』

謎のヤミー

「モットモ…!?!」

走っている蒼髪の青年と銀髪の少年は、バルクホルンの前に到着していた。

孫悟龍

「やっぱり確かにヤミーだけじゃなくて、遠くからわざわざネウロイの気配があるが、ネウロイがミサイルのように速くなって、あと2〜4時間にここに来るかもしれない!銀牙!?!ウィッチ達は、ストライカーの準備を迅速にしろ!?!」

坂本・ミーナ

「!?!? (嘘…。彼の気配は、ネウロイの警告音やミーナ《私》の固有能力以上でした。確かに彼は何者……。)」

銀牙

「分かった!?!」

命令を受けるように頷く。

銀牙は、音速の女神、シャーリー以上の速さで、出撃する人のスト

ライカーの準備を開始する。

シャーリーは、それを見て、自分以上の速さを超える人がいる事に啞然するように驚愕していた。

孫悟龍

「珍しい…。俺は、初めて見た事もないヤミーを見ている。それに隠れるグリード、いい加減に現れてくれ…」

グリードが隠れた所を睨んで言うから、オオカミのような耳と鋭い牙とデインゴを思わせる細身で攻撃的なフォルムとキツネの尻尾、犬系のグリードを現れる。

グリード？

「フフフフ。まさか愚かな人間には、私の気配を取らないはずなのに取れる事が出来る人なんて初めて。特別にお前だけに私の名前を教えてやる。私の名前は、犬系のグリード、カ Gum」

メズールと同じ女型のグリードは、名乗る。

孫悟龍

「……！？カ Gum!？」

カ Gum

「フフフフフ。そう。お前の思い通りに私は、アंकと他のグリードと同じだ。が、私は、彼らと違う。」

孫悟龍

「このヤミーは、お前が作り出したか？」

グリード？

「ええ。私が、このヤミーを少女の願望で作り出した。このヤミーは、タイリクオオカミです。」

孫悟龍

「ふん。で、このヤミーは誰かの願望か？」

カグムは、ニタリと不気味な笑いをする。

カグム

「フフフフ。では、少女は、お前だ。」

リーネの方を指す。

指されたリーネ本人は驚愕している。サーニヤとエイラを除くリーネ以外のストライクウィッチーズも驚愕した顔になりながら、本人に振り返ってみる

リーネ

「どうして…私の欲望は違う」
震える声で言う。

カグム

「あら、違う？いいえ、お前が思うから勝手に欲望を作る事になってしまった。そうすると、お前の欲望で作り出したヤミーを生まれてしまった。お前のお陰にセルメダルを稼げる。フフフ」

リーネ本人は、カグムの言葉を受けたようにショックしたからヘタリと座っていた。

銀牙

「準備完了！？出撃する人、どうぞ！？ネウロイを撃破することを頑張つて！でも、シヨックをしたブリタニアの少女をここにいてくれ？そうすれば、僕なら、少女を説得する事も可能」

ミーナ

「彼らの行動が分からないけど……！今だけはお前達に感謝する！みんな、出撃する！？芳佳！！バルクホルンと整備員達は、私と共に救護室に連れて行く！？銀牙という少年、そのリーネをお願い！？」

ルッキーニ・シャーリー・エーリカ

「……はい」「」

ペリーヌ・芳佳

「……はい！？」

坂本

「出撃……！」

彼女らは、ネウロイを撃破するために出撃する。芳佳とミーナは、倒れたバルクホルン大尉とポロポロになった整備員達を救護室に連れて込んだ。銀牙は、リーネを寂しいように見る

孫悟龍

「彼女の欲望では、ブリタニアを守るためにだれよりも強くなっている。」

カグム

「フフフフ。正解だ。頭がいい人間が嫌いじゃない。」

孫悟龍

「あら。お前は、欲望の王、オーズがいる事を知らないか？」

カグムは、険しそうな顔になっている。

孫悟龍

「おつ。やはりお前は裏切りのアंकへの憎悪を覆うオーラを持つ。おまえは、なぜ俺が、オーズとグリードを知っていると聞こえるなら、全ての事を知っていると答える。だが、今のオーズは、昔のオーズと一緒にじゃない。」
そう言うと同時にオーズドライバーを取り出す。

カグムは、それを見て、驚愕している。

カグム

「バカな…！なぜおまえはオーズドライバーを持つてる！？ウヴァ達と共に封印したはずに…！！？」

孫悟龍

「そうか。確かに封印したが、俺は、どんな人以上が難しい技術を持つので、それをお前のメダルを除く全てのメダルとオーズドライバーを難しい錬金術で本物のように作った。」
それを腰に付ける。

懐からさらに取り出した3枚のコアメダルをオーカテドラルへと入れ、傾ける。

同時に、右腰部に装着されているオースキャナーを取り、オーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

孫悟龍

「変身」

『タカ、トラ、バツタ。タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ』

直後、孫悟龍の周囲を巨大なメダルの様な形をしたものが覆い、仮面ライダーオーズ（タトバ）へと変身した。

カグム

「!?!? ほ〜っ、お前がオーズになった。昔のオーズと今のオーズが違うのを見よう。タイリクオオカミヤミー!? オーズを倒してやれ!?!」

タイリクオオカミヤミーに命令しながらバックステップで後退りする。

タイリクオオカミヤミーは、命令を受けるようにオーズを襲い掛かる。

オーズがメダジャリバーを取り出して、集中するように構える。

このヤミーはオーズを殴りそうとするが、オーズは、それを少しかわしてカウンター気味で斬り込む。

タイリクオオカミヤミ

「モットモマモレバ……！！」

オーズは、迎撃するように構える。

銀牙

「少女、僕の独り言を聞いてくれ？聞いてないのが構わない。」

銀牙

「僕は、兄さんに出会う前に、人間めが僕たち一族を残さずに殺すように生き残った僕達が、自分が誰かを守れないのが、凄く悔しい……！僕は、人間共に抱けて、憎悪になった！一人だけで、仲間を頼らずに人間共に挑戦するが、実力差になつて、窮地されたが、止めをする人間共は満身創痍な姿になつた僕を仲間が身代わりに死んでしまった。僕の所為で……！」

後悔と悲しそうな表情になりながら、手を固めたように閉じて、昔物語を言う。

オーズ

「銀牙……」

戦闘しながら、余所見に仮面の下に寂しいと慈悲のように銀牙を見つかる。

銀牙

「でも、兄さんは、夢で、僕と出会って、人間と同じを感じて警戒したが、違う所があるでは、狼神である僕を受け入れる事を嬉しい。兄さんは、彼女達や僕を家族でも仲間でも扱ってくれる。僕は、それを感じて、決意した。一人で戦わなくて、兄さんと家族でも仲間でも共に自分たちが生きる事でも昔の孫悟龍のような人間共を守る事ために戦えると！それが、大切な事だ！？」

オーズ

「その通り!？」

銀牙の言葉に賛同するように言う。

オーズ

「お前は、特訓を頑張ったか分からないので、自信を持たなくてお前の仲間を信頼しないと、大切な物を守るのが駄目なるかもしれない!？お前は、お前自身の力を信じる!？……そして、一人じゃなくて、お前の仲間達も信じる!？そうすれば、お前は、仲間たちと共にお前の大切な物も仲間の大切な物も守る!？」

リーネの目は孫悟龍と銀牙の説得のお陰で、輝ける目が戻った。

リーネ

「私自身の力を信じる……仲間達と共に大切な事を守る……」

オーズ

「ああ!お前は、欲望よりもっとも大切な事と信頼が大切だ!？」

リーネは、決意した顔になって、立ちあがった。

リーネ

「私……私は、私の仲間と一緒にブリタニアを守る事を頑張る!？」
決意するように自信をつけながら言う。

オーズは、仮面の下に皮肉に鼻が笑う。

その時、謎のヤミーは、苦しくなり始める

タイリクオオカミヤミー

「グガアアア……!!?」

「!!」

リーネの決意の所為で彼女の欲望が少ない所為で、苦しんだから狂化になった

カグム

「くっ！まさかここまで彼女の決意で狂化になる所為でセルメダルを稼げる事が出来ない。ここで。フフ、また会う。じゃあ」
そう言つと同時に逃げるようにする。

オーズ

「む！カグムを追いたいと思う所をするが、タイリクオオカミヤミーを倒すのが優先する!？」

狂化したタイリクオオカミヤミー一撃の拳でオーズを飛ばす

オーズ

「うわあ!？」

それを受けて、壁へ吹っ飛ばれたからぶつかった。

リーネ・銀牙

「「悟龍さん!?!お兄さん!?!」」

オーズは、仮面の下に自分の顔が血を出たのを払うから、闘魂心が湧き上がる。

オーズ

「へ〜っ、やるねえ。でも！俺は、既に誰かを守るために戦う覚悟と死ぬ覚悟を持つままに負けない！」
そう言い終ると同時に肉体の中で、紫コアメダルが、光る。

オーズの複眼が、一瞬に紫色になったから消えた。

オーズ

「！？紫コアメダルも俺の意見に初めて賛成するなんて珍しい。変身をしてほしいだと言いたい所があるけど…まだ先がある。わりい、紫のコアメダル。」
そう言うと、紫コアメダルは、彼の強い意思があるような説得されるからしようがなく渋々おさまる。

リーネは孫悟龍の変な行動を頭の上に？と思い浮かべる。銀牙は、彼の行動を分かっているように、現実から逃げたいと思うように明後日の所を見る。

サーニヤを除くミーナらは坂本達が見逃してしまったネウロイを撃破するために行く。

タイリクオオカミヤミーは、狂化するように叫びながら、再び彼に襲い掛かる。

エイラ

「これはなんだ!？」

オーズと謎のヤミーを見て、大きな声をする。

オーズ

「む？とっ。(わりい、紫コアメダル。でも、いつか絶対にお前達の力が必要だ。)」

大きい声を聞けたように余所見をした彼は、その所を見逃せない狂化の敵の怒濤の攻撃をメダジャリバーで力を吸収するように受け流し続けながら紫コアメダルへ通じるように思う。

ミーナ達は、見た事もないオーズと狂化モードのタイリクオオカミヤミーと一歩が引かない闘いの光景を見て、啞然としている。

ミーナ

「はっ！それよりネウロイを倒す事が優先だ！？」

我に返って言う。

銀牙は、ミーナ達の行動を理解して、迅速にストライカーを準備する。

リーネは、覚悟と決意をした顔になりながら、ミーナへ走って行く。

リーネ

「私も行く！？」

ミーナ

「駄目だ。今のお前では、出撃することが出来ない。」

リーネ

「いや！？私は、銀牙さんと孫悟龍さんに説得されたお蔭で、大切な事を忘れた所を戻せた！私も、お前達と一緒にネウロイが征服するブリタニアを助ける為にネウロイ達を撃破する！？私も出撃してください！？」

決意するよつに言う。

リーネとミーナは、睨み合いして、先にミーナは、睨み止めるよう

にフツと諦めたように溜め息したからフツと微笑する。

ミーナ

「分かった。出撃には許可する。」

リーネは、パアツと輝ける子供のよくな顔になった。

ミーナ

「ただし、無茶をせずに無事にする。」

リーネ

「はいっ!」

答える。

銀牙

「準備完了!少女達!」

ミーナ

「所で、銀牙。それは誰だ?」

タイリクオオカミヤミーと戦い続けるオーズを指しながら質問する。

銀牙

「あゝ、それも孫悟龍が変身させた仮面ライダーです。でも、それ以上仮面ライダーの事を質問にしないでくれ。」

ミーナ

「分かった。以上質問でない。私達は、リーネを元気な姿に戻せても嬉しいから、礼にお前達を信頼にあげる。」
笑顔で言う。

銀牙は、それを聞いて、驚愕したから微笑するように行動する

銀牙

「リーダー、兄…いや、孫悟龍に代わり、信頼くれる事を感謝する。

」
頭を下げる。

ミーナは、それを見て、微笑するから、険しそうな顔になった。

ミーナ

「さあ！ネウロイ撃破のために迎撃する。」

芳佳・エイラ・リーネ

「「「はい!?!」」」

ミーナ

「出撃!?!?!」

銀牙

「ここまで大丈夫だ…」

銀牙は、オーズが戦う所に振り返っている。

オーズは、狂化モードのタイリクオオカミヤミーと戦いに力負けしている。

オーズ

「ふっ!」

メダジャリバーで強烈に振るう。

謎のヤミーは、それを弾いたからオーズへと強烈な拳を飛ばす。

オーズ

「くっ!?!」

メダジャリバーじゃなくてヤミーの拳で受け止めて、ズザザッと凄く後退りする。

オーズ

「俺の攻撃は、やはりこのヤミーに効かない。」
「険しそうに言う。」

オーズ

「じゃあ、狂化の力には重力系コンボだ!?!」
そう言うと同時に、オーメダルネストから、白に近い灰色のコアメダル、サイや灰色のコアメダル、ゴリラ、黒に近い灰色のコアメダル、ゾウを取り出すから、それらを受け入れて、右からサイ、ゴリラ、ゾウをオーカテドラルへと入れ、傾けて、オースキヤナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキヤンさせていく。

『サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴゾ!サゴゾ!』

オーズ・サゴゾコンボへと変身した。重力を支配する王が降臨した。

銀牙

「ゾウ?」

脚の所を見て、黒い色のゾウの脚を模したように形成した。

銀牙

「ゴリラ？」

腕の所を見て、灰色のゴリラの腕を模したように形成した。

銀牙

「そして、サイ？」

頭の所を見て、サイの角を模したような額で、複眼の色は赤で、額のオークオーツはルビー色の六角形だ。

オーズ・サゴーズコンボ

「うおおおおおおおおお！！！！」

周囲が震えるような大声で叫ぶ。

そのお蔭で、タイリクオオカミヤミーが体を崩す。

オーズ・サゴーズコンボ

「うおおおおおおおおお！！！！」

拳で胸を叩くようなトリミングをするから、周囲の重力を増大させたり無重力にしたりすることで敵の動きを封じることができる。

タイリクオオカミヤミーが、無重力にされて、サゴーズはトリミングをやめたから、そのヤミーが、重力にやられたように地面を落ちて、ダメージを受けた。

オーズ・サゴーズコンボが、体を崩した敵を見てチャンスと思うように迅速にオースキャナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『Triple! scanning charge!』

そう電子音をすると同時に、両足を揃えることで一本のゾウの脚のような形状となり、その場で跳躍し、着地の衝撃と共に灰色の3つのリングで謎のヤミーを地面に捕縛するから手元に引き寄せて、頭突き・ゴリラアームでのフックパンチを同時に叩き込む。

タイリクオオカミヤミーはそれを受けて、爆発したから、大量のセルメダルに戻るから破壊された地面は修復される。それが終わったら、オーズが変身を強制解除する。

孫悟龍

「ふっつ、銀牙…」

銀牙

「わかった。」

ベルトのようなものを振りかぶり、腰に回すようにすると腰に装着される

そしてポケットの中に乱雑に入れていたセルメダルを出すと指で弾く

銀牙

「変身」

弾かれたセルメダルはクルクルと回りながらベルトについたドライバーの左側にあるスロットにカシャリと入る

それと同時に右にあるレバーをスライドさせるように回すとドライバーに現れた円状の盤に浮かぶ丸いエンブレムが勢いよく半回転するとドライバーにつくガシャポンのような球体が開く

それが開くと銀牙の体を薄緑の透明な球体が包み、体の至るところに同じような小さな球体がくっつくように包んだ

そしてそれが済むと体をアーマーのようなものが装着され、顔にヘルメットのようなものが装着されると三日月型のモノアイが赤く光る。それが仮面ライダーバースだ。

更なるとセルメダルを取り出すと、ドライバーの左側にあるスロットにカシャリと入る。

『Crane Arm』

電子音をすると同時に右にあるレバーをスライドさせるように回すとワイヤーに接続されたシュプリンガーハーケンというフックを射出する腕部と、射出したワイヤーを巻き上げるウインチとなっている肩部から構成されるクレーン型武装、クレーンアームを右腕で装着する。

バース

「よっ。」

横へ振り、大量のセルメダルを回収する。

回収したセルメダルは、孫悟龍の秘密の部屋へ回収するように魔法で転移する。

二人は、変身解除をした。

ほぼ原作通りに、リーネが、今までの緊張を捨てるように決意を忘れない覚悟で、一人でネウロイを撃破した事が出来た。

孫悟龍

「あゝあ、ストライクウィッチーズに酷い事をした俺は、まさか、ストライクウィッチーズの一人に優しそうに彼女の大切な事を戻す為に説得していた。また俺の悪い癖でまたやってしまった。」
詰まらないに溜め息をしながら冷たいみみたいな細目で自分自身への愚痴を言う。

銀牙は、既にバースへの変身解除をしたから溜め息をするようにヤレヤレと肩をすくめながら苦笑する。

孫悟龍

「まあ、今日もカ Gum という犬科のグリードとタイリクオオカミヤミー以外の怪物が出てこない。ここまで帰る。銀牙。」
そう言くと銀牙は頷くから、帰る。

その時。

????

「待つて!?!」

彼達に声をかける。

彼らは、それを聞いて、その声の所に振り返っている。

リーネは、彼らの所へ走っている

リーネは、彼らの所まで到着したから、疲れたように肩が上下して、呼吸を整然する。

孫悟龍

「娘、俺達に何か用だ？」
見下ろしたように言う。

リーネ

「あの、有難うございます!!」

孫悟龍は、それを聞いて、驚愕したようで体の中にくすぐったいように渦巻いた。

孫悟龍

「俺達に感謝するのは止め。」

リーネ

「え？」

孫悟龍

「お前達の物語は、お前達ストライクウィッチーズがいなくじゃ困る。俺達は、お前達を助けるじゃなくて、自分達が生きる為に修行したり信じ合いしたりして、異端の化け物を倒すだけだ。」

銀牙

「そうそう。僕達が要れても要らなくても多分、さっきの化け物達
が、兄さんの説明通りに地球を征服する・自然を破壊するために来た。そのために僕達は、阻止をする為に倒しに来る。」

孫悟龍

「IFを思い浮かべてみる。もし、俺と銀牙がお前を説得できないなら、間違いなく俺は多分ヤミーにやられたかもしれない。お前が

ショックされたままにお前達の仲間もネウロイにやられた。」

リーネは、彼が言われたとおりのIFの現実を浮かべたから、ゾツとする。

孫悟龍

「娘、俺達に感謝するは、不要だ。ここでじゃあね。もし、お前達は、俺達に親しみたいと思いますから、不死鳥の騎士隊のリーダーである俺が出会えたストームウィッチーズとスオムスいらんウィッチーズみたいに認めるから構わない。」

踵を返しながら手がひらひらする。

銀牙

「少女、サヨナラ。」

リーネを別れの言葉を言ったから、彼を追いかける。

リーネは、次の言葉を言いたいと思うので勇気を付けるように言い掛ける

リーネ

「あの！」

彼らは、頭だけが振り返った。

リーネ

「私の事をリーネと呼んでくれる!?!」
今までより凄い笑顔を浮かべながら言う。

孫悟龍

「フツ、気が向いたら…」

と誰にも聞こえないようで呟いたように言ったから後にした。

リーネは、満足したからストライクウィッチーズの基地へ帰るよう
に走って入る。

リーネは、不死鳥の騎士隊を認めたから彼らから私達を認めてくれ
るからもつと仲良い事と彼らの役を立つ事が頑張ると決意するよう
に誓える。

ストライクウィッチーズの一人、サーニヤだけじゃなくて、リーネ
は、不死鳥の騎士隊の優しさを認知した。

ストライクウィッチーズと不死鳥の騎士隊の良さがちよつと
ずつ進む。

使えたコアメダル

タカ×2枚
クジャク×1枚
コンドル×1枚
クワガタ×1枚
カマキリ×1枚
バッタ×2枚
ライオン×1枚
トラ×2枚
チーター×1枚

サイ×1枚
ゴリラ×1枚
ゾウ×1枚
シャチ×1枚
ウナギ×1枚
タコ×1枚
プテラ×2枚
トリケラ×2枚
ティラノ×2枚
コブラ×3
カメ×3
ワニ×3
パンダ×1
カンガルー×1

第14話 「一人じゃない！！仲間と助け合う事と誰かを守る事は大切！！」

次回

ストライクウィッチーズのお仲間は、孫悟龍たちを信頼した事になったが、バルクホルンとペリーヌとエイラだけが完全に信頼しない。

バルクホルン

「フン！私の仲間がお前達を認めたが、私は、お前達を認めない！」

ミーナ

「悟龍さん、バルクホルンは、お前が昔の戦争、知ってた。お前は、この戦争で彼女の妹を守ってくれたが、彼女は、悔しくて何も守れてはいなかったからもっとも自分を強くなりたいと思うかもしれない。」

シグナム

「私も彼女と同じぐらいに思う。私は、今までの主を守ることを頑張ったが、主だけを守ったが、周りは助けてなかった……」

孫悟龍

「力だけで大切な事を守れる？それは無茶苦茶な無意味だ。お前は、みんなを守る事が出来るのが、自分の命を捨てる覚悟をした？ふつ、それが軽い無益な覚悟でした。お前がときめくない。」

シグナム

「私達ヴォルケンリッターは、最悪な過去を背負うままに現状でも未来でも今の主たちと同じに自分が生きるでも家族や大切な事を守

不死鳥の騎士隊
る事が過去の堅い壁を壊すようにみんなと共に突き進む!？」

銀牙

「兄さんが僕達を守るなら僕も兄さん達を守る!？」

第15話 アバレで信頼し合いする!! 銀牙、新たな力!?!?!?!?!
してありがとう

オリジナルグリードの設定

カグム

犬系のグリード。オオカミのような耳と鋭い牙とディンゴを思わせる細身で攻撃的なフォルムを持つ。キツネの尻尾を生えた事も。欲望を持つ人を電王のモモタロス以上に「匂い」を感知する能力に優れる。嵐みたいな牙を飛ばす能力をする。誰かの欲望で生まれたヤミーに命令することが出来る。ただし、誰かの欲望から生まれたヤミーは、誰かが自分の欲望が小さいように消えたように決意したから、苦しめたように狂化する事になった。

当初は6枚の状態でミイラから解放するように復活させた。性格は、メズールと同様に穏やかな物腰で面倒見が良いが、グリードには愛情が希薄なため表面をなぞっているだけに過ぎず、高いプライドから基本的に他者のことは目下の存在として見下している。自分は人間共が気付かないような隠れた所に気付けてた孫悟龍だけを気に入ったのが、彼は、オーズに変身した事を驚愕していたからまだ彼を気に入った。裏切りのアंकへの憎悪と敵意を持つ。グリードでありながら、コアメダルや欲望を満たす事にあまり執着を持たない変わり者のグリードです。

普段は、セーラー服（後に茶を基調とした洋服）を着た女性の姿で行動する。一人称は「私」

カ Gum が体内で持つ茶色のコアメダル

オオカミ × 2 枚 一枚は、意思があるコアメダル ブラウン色

デインゴ × 2 枚 褐色

キツネ × 2 枚 茶色

第15話 アバレで信頼し合いする!! 銀牙、新たな力!?!? ……そして、ありがとう
アニメの第一期の「ありがとう。」

ほぼ原作でした。

第15話 アバレで信頼し合いする!! 銀牙、新たな力!?!...そして、ありが

夜明け

邪悪な生命体・邪命体を生み出したトリノイドとたくさん手下、
バーミア兵達がストライクウィッチーズの基地近くの山を現れる。

トリノイド23号

「いいか!? 現れるネウロイの力を絶対取る。そうすると人類が
苦しくて、地球を侵略しやすい!!」
バーミア兵達は、賛同する声をする。

トリノイド23号

「いくぞ!?!」

銀牙

「それまで!?! トリノイドめ!?!」
阻止するよつに言っ。

トリノイド

「む!?!」

阻止する声の所に素早く振り返っている。

悪の気配を感じた銀牙とシグナムとアインとザフィーラと孫悟龍が現れる。

トリノイド

「ちっ。既に来た。」

孫悟龍

「……今まで見た事がないトリノイドだ。気を付ける。強そうかも
れしない。」
「険しそうので警告に言う。」

銀牙・ヴォルケンリッター

「分かった!!」

孫悟龍

「よし!行くぞ!!」

銀牙・ヴォルケンリッター

「おう!ノはい!!」

左手首にダイノブレスを着けた。

5人

「爆竜チエンジ!!」

発声でダイノブレスのボタンを押すと、ブレスの顔の口の部分からダイノガッツが開放されてダイノファイバー製のアバレ・スーツ（アタック・バンテッド・レジスタンススーツ）が実体化する。シグナムもハーモニカ型の鍵・ダイノハープを差し込んで変身する。

銀牙は、アバレレッドへと、ザフィーラは、アバレブルーへと、シグナムは、アバレイエローへと、アインは、アバレブラックへと、

孫悟龍は、アバレキラーへと、変身させた。

トリノイド23号

「おのれ、お前達めは、毎度毎度我々の邪魔をする！！やれ！！
バーミア兵達！？」

バーミア兵達はアバレンジャーを襲い掛かる。

アバレキラー

「行くぞ…」

アバレンジャー

「はい！！」

アバレレッドは、一撃で大岩を粉碎する棍棒、ティラノロッドを持ち、アバレブルーは、先端に伸縮自在の角を付けた盾、トリケラバ
ンカーを持ち、アバレイエローは、厚さ30cmもの鉄板をも切り
裂く2本の短剣、プテラタガーを持ち、アバレブラックは、サーベ
ル状の武器、ダイノスラスターを持ち、アバレキラーは、羽根ペン
型の剣、ウイングペンタクトを持ったから駆ける。

バーミア兵は、アバレレッドへ斬り込むが、アバレレッドは、ティ
ラノロッドで捌くから、突き返し、次々とバーミア兵達をティラノ
ロッドで突き、最後にバーミア兵を貫くように突き上がる。

アバレレッド

「おりゃあああああ！！！！」
強く投げる。

投げられたバーミア兵は、バーミア兵達を巻き込んだ。

囲まれたアバレブルーは、跳び上がったからバーミア兵二人を連続

に蹴る。

捕まえたバーミア兵をトリケラバンカーで一度一度も殴り、最後に殴り上がって、飛ばした。

アバレイエロー

「はっ！」

前で回るように跳び上がり、プテラタガーでバーミア兵を斬り込める。

アバレイエロー

「ふっ！はっ！」

沢山のバーミア兵を次々とプテラタガーで斬る。

アバレブラックは、ダイノスラスターで次々とバーミア兵を斬り込む。

ダイノスラスターで地面に突き、炎を放つ。

バーミア兵達は、それを受けて、滅した。

アバレキラーは、高速移動で次々とバーミア兵達を斬り込む。

アバレンジャーによってバーミア兵は全て全滅した。

トリノイド23号

「……………！！己！？む！」

誰かが自分を襲う事に気付けたように振り返ってみる。

アバレキラー

「はっ！」

跳び上がり、トリノイド23号を斬る。

トリノイド23号は、それを捌く。

アバレキラーは、何度もまた斬り付ける。

トリノイド23号は、焦りに歪んだままに何度もアバレキラーの攻撃を躲したり避けたりする。

アバレキラー

「ふっ！」

強く斬り付ける。

トリノイド23号

「くっ！」

それを受けたように火花を起こりながら下がる。

アバレキラー

「はっ！！！」

回り蹴りをする。

トリノイド

「ぐわあ！？」

アバレキラーの蹴りを受けたように吹っ飛ばれたから何度も転がれた。

アバレキラー

「フン、俺一人で誰にも負けない……。」

トリノイド23号

「己!? お前ごとき青年は一人で誰にも救えることができない!? お前はなぜ、闇になったままに正義の味方になった!？」

アバレキラー

「なんだと……?」

仮面の下に険しそうな顔になって、無防備な構えになってしまった。

トリノイド23号は、それを見て、チャンスを見逃せないと思うように何かを放つように手をあげる。

アバレブルー

「主!? 危ない!! 邪魔だ!？」

トリノイド23号の行動に気付いて、最後のバーミア兵を斬り込んで、アバレキラーの所に掛けに行く。

トリノイド23号は、アバレキラーへ赤い雷を放つとするが、アバレブルーがトリケラバンカーで防御する。トリケラバンカーで火花を起こって、周りが爆発した。

トリノイド23号

「ちっ! 惜しいことをした!! まあ、ここで退却する!! 次にネウロイが現れた時に、きっと絶対にネウロイの力を得るからお前達を圧倒する!？」

というと同時に去るように消える。

アバレレッド

「まって!?!？」

アバレレッド

「くそ！？逃げやがった！！」

アバレンジャーを变身解除した。

孫悟龍は、無言で考えるように俯く。

シグナム

「孫悟龍？」

孫悟龍

「む？なんでもない。帰る。」

孫悟龍は、一人で背に向けて、歩き去る。

シグナムは険しそうに今の孫悟龍が可笑しい事を戸惑う。

ストライクウィッチーズの所では

眠った少女が夢を見たから呻いた。

バルクホルン

「うう〜。はっ!?!」

IFでネウロイにやられた自分の故郷の所と自分の妹もやられた所の夢を見て呻いたから、バツと起き上がりながら、自分の胸の前に手を伸ばせていた。

バルクホルン

「はあはあ、ふっつ。……………」

体中で汗を流すように息を整えるから苦虫を噛み潰したように無言です。

彼女のベッドの隣の上に写真立てを見えないように倒れる。

ストライクウィッチーズの食事で芳佳とリーネが朝食を作るのが、
リーネだけがいい感じの鼻歌にする。

芳佳

「ん？リーネちゃんは、昨日より嬉しい？」

リーネ

「はい。昨日は良い事があった」

芳佳

「良い事…………？」

ときよんとしている。

リーネ

「うん。私は、分からないけど、良い事をするように楽しい。お前も、いつか良い事が分かるのが来ます。」

芳佳

「うん。」

咎めるように考え事をする。

芳佳は、最初に来たバルクホルンに気付けるように考え事をやめて、あいさつをしようが、彼女がバイキングを皿に入れ終わったか

ら無視するように背を向ける。

芳佳は、そんなバルクホルンを見て、戸惑いをする。リーネも。

エーリカは、のん気にバルクホルンに話しかけたから彼女の行動を鋭いように凶星のような事を言う。バルクホルンは、凶星を突かれたように無言のままにエーリカを睨みつけた。

ルッキーニは、お代わりを要求したから、芳佳が、バルクホルンの食事が残ったのを気付いて、どうして食べないかと質問した。

バルクホルンは、答えずに椅子から立って、去る。

彼女は、エーリカとともに蛇行訓練をするが、バルクホルンだけは、チラツと芳佳を自分の妹と似ているが、目に向けた。

ミーナと坂本は、芳佳と同様にバルクホルンを気にかけた。でもミーナは、同じカールスラント人であるバルクホルンの気持ちを悲しげでわかるように見る。

孫悟龍の所では、彼らは、気まずいな雰囲気流せている。

ツヴァイとシャマルは、オロオロする。

ザフィーラは険しいように腕と脚を組んで椅子に座る。

ヴィータと銀牙（人モード）とアギトは、無言で頭を後ろで組んでいながら座る。

シグナムとアインは、無言で立ち続ける。

孫悟龍は、自分の部屋で慈悲するように窓の方で頼杖をしながら見て、黙そつで座った。

シグナムは、孫悟龍の事を聞けたいと思うように銀牙に話している。

シグナム

「銀牙、主鷹宏はさつき黙っている。どうした。」

銀牙

「シグナム…ネウロイがカールスラントをやられた時に、カールスラントの民は、兄さんとカールスラントのウィッチ共が彼らの命を助けてくれたのが、故郷に奪われた事を悲しんだ。だから、孫悟龍は、こんな彼達を見て、今でも懺悔をしたことを覚えた。そのせいで孫悟龍は、英雄の器でも神の器でも取る事が要らない。」

シグナム

「もしかして…私達の夜天の王の器にもならない…」

銀牙

「そつか…兄さんは、既に夜天の王になったのが…うれしくなかったが、仲間家族が増えていた事を嬉しかっただけ…」

アイン

「では、主鷹宏は、今までの主と違うようで、凄く優しい言葉と行動をする?」

銀牙

「ええ。お前達の今までの主達は、優しい言葉をしたけど、暗記するようにお前達女陣を物と扱う事でも奴隷と扱う事でもして、お前達ヴォルケンリッターは、やさしさを見た目だけで認めたはずなのに昔の主の下心を気付けないように知らなかったりうっかり信頼してしまったりした。」

シグナム

「……そうか……私達ヴォルケンリッターは、今までの主を見た目で認めてしまったからこれらの主は下心の為に私達を暗記したようにやってしまった。私達は、なんて愚かな騎士達になってしまった。悔し気な表情で歯軋りしながら、俯く。」

ヴィータとシャマルは、それを聞いて、シグナムと同じように、俯く。

シグナム

「でも、主鷹宏は、初めて私達と会ったから私達の事を物と扱われただじゃなくて、初めて家族と扱われてくれたから今までの感情がないはずなのに初めて嬉しいと感じた。」

銀牙

「そうか……兄さんは、僕みたいな狼人とお前達みたいな魔法プログラムの造られた人を物と扱っただじゃなくて、人間と扱っようで見た。孫悟龍は、誰よりも優しい人間です……」
言い終ったから、孫悟龍の部屋に向けて、嬉しい半分と心配する半分の顔をする。

シグナムは、銀牙と同じに孫悟龍の部屋がある所に向けて、心配そうな顔で見る。

シグナム

「主鷹宏……」

孫悟龍の部屋では……

孫悟龍は、無言で黙ったように窓の方を見ながら、トリノイド23号が言った事を思い浮かべた。

（トリノイド23号

「己！？お前ごとき青年は誰にも救えることができない！？お前はなぜ、闇になつたままに正義の味方になつた！？」

孫悟龍

「……………（俺は、確かに人と地球を助けた事があつたけど、トリノイド23号が言った通りに闇を持つ俺は英雄という物に似合わない。まあ、俺が今やった行為は、殺す事でも守る事でも間違いで正しいでも構わない。）」
と無言で険しそつに思う。

孫悟龍は黄昏するように眺めながら、ため息をして、息抜きすると思つように立ち上がつて、自分の部屋を出て、どこへ行く気がする。

アイン

「ん？主鷹宏。どこへ行く？」

孫悟龍

「む？俺は、さっきのトリノイド23号が言った所為でなつた迷いを払つたために特訓をする。銀牙とザフィーラ、相手をしろ。」
自分の相手を指すようにザフィーラと銀牙を呼ぶ。

銀牙・ザフィーラ

「はい／＼はっ。」

孫悟龍の行動の意味を理解しながら立つから彼とともに一日間に魔法の別荘へ行く。

ヴォルケンリッター女性陣は、顔を合わせながら分からないように傾げたから、一日間に自分の修行をするが、シグナムだけは、銀牙とザフィーラと同じに理解した。

バルクホルンの所では、彼女は、倒れた写真立てを慈悲で黙りそうに見たから、誰にも手を伸ばすことを出来ない。

バルクホルン

「（また誰にも助けることが出来ない。）
（思うと歯軋りしながら、強そうに握る。）」

リーネは、ティーパーティをするために、お菓子を作る。芳佳も遅くなって、お菓子を作りながら、バルクホルンのことを気にかけるのでリーネと相談する。

ストライクウィッチーズは、ティーパーティを始めた。芳佳は紅茶を飲む音を立ててしまった。

ペリーヌは、そんな芳佳を見て、手でこめかみを押さえながら、呆れたようにため息する。

芳佳とリーネは坂本の厳しい特訓をする。

夜になった。

夕食の後、芳佳とリーネと坂本は、温泉のようなサイズの風呂を入っていたからバルクホルンなどの事を気にかけて、話せている。

ペリー又は勘違いするみたいにストレス発散するように、芳佳と痴話喧嘩したから睨み合いした。

一喝した笑顔を浮かべたミーナの現れに、彼女達は痴話喧嘩を止めた。

ペリー又だけは怖い笑顔を浮かべたミーナを見て、怖いと感じたように震えた。芳佳は、なぜペリー又さんが、笑顔のミーナを見て、震えたと疑問に思った。

ミーナとバルクホルン以外のストライクウィッチーズ連中は、しっかり寝た。

ミーナは、優しそうにバルクホルンに話した。

バルクホルンは、ミーナの言葉を否定したから、無視するように去る。

ミーナは、彼女の心を開く事が出来ないと後悔した事を悲しそうな表情をするままに、心配そうに去ったバルクホルンを見る。

不死鳥の騎士隊では

ヴォルケンリッターは、修行をし終えたならザフィーラも終えた。

ヴォルケンリッターは孫悟龍と銀牙を帰ることが待った。

ザフィーラは、何かの気配が来ると気付けた。

ザフィーラ

「来たか……」

魔方陣が現れたから彼らもそれから出た。

ヴォルケンリッター女陣は、彼らを見て、息を呑んだように驚愕していた。

現れた孫悟龍と銀牙の服だけが、鋭い目で落ち着けるような顔になったままにボロボロになった。

ザフィーラ

「お前の迷いは払ったか？」

孫悟龍

「ええ。お前達と特訓させたおかげに、迷いが消えたことが出来た。ありがとう。」

ザフィーラ

「フツ。気にならない。私たちは、お前を支えることができるなんて当たり前だ。」

という、銀牙は、彼の言葉に賛同するように頷く。

孫悟龍は、苦笑した。

孫悟龍

「初めは、迷いを持った俺は、死ぬ気で無茶苦茶な戦い方になって、お前達に勝てたが、嬉しくないのが感じた。もし、俺は、お前たちに頼りないなら、俺は仲間にも頼りない事でも孤独になる事で壊れるかもしれない。」

銀牙

「確かに危うく僕達は、お前をしつかり支える事が出来ないなら、多分お前が壊れた。僕たちはやられるかもしれない。」
嫌な予感である冷汗で言う。

シグナムは、やっぱりと険しそうに呟く

ヴォルケンリッター女陣は、三人のやり取りの意味を理解して、I Fの事を思い浮かべたように冷汗を流せた。

孫悟龍

「それより夕食の料理をする。アインとアギト。俺はやりたいたいと言いたいところがあるが、今、疲れたから料理をくれる事をお願いする。」

アイン・アギト

「はい!」

シャマル・ツヴァイ

「あの〜、私達は?」

孫悟龍・シグナム・ヴィータ・銀牙・ザフィーラ

「「「「いやいや、お前達は無理だ。」「」「」
とキツパリと言いつつ切れた。」

シャマルとツヴァイは、その言葉を聞けて、ガクーンとショックをされたから壁の隅にガツカリするように座って、私たちでは無理だと何度も繰り返し返すように呟く。

孫悟龍たちは、シャマル達を見て、高らかに笑った。

シグナムと銀牙は、笑ったのを止めて、孫悟龍を見て、いつもの彼に戻った事を安堵するよう顔が緩んだ。

孫悟龍

「（俺の行為は、間違いでも間違えなくても関係ないから、俺は、自分が信頼した家族と仲間を絶対に守り通る！！）」
思うようで決意するように誓う。

次の日、坂本少佐は、バルクホルンと芳佳とリーネを呼び込み、既にストラライカーを履いて、ブルーインパスルス訓練をした。

その途中で、警告音のような花火をした。ブルーインパスルスをしたウィッチは、それに気付いて、中断したから、ネウロイの場所を捉えた看板を見て、ネウロイを捉えた場所へ行く。

不死鳥の騎士隊もトリノイドがいた場所を捉えた。

孫悟龍

「ネウロイが現れたなら、トリノイドも現れるかもしれない。トリノイドは、ネウロイの力を取る前に倒せる！！」

不死鳥の騎士隊

『了解！！』

孫悟龍

「不死鳥の騎士隊、出撃！！」

不死鳥の騎士隊

『了解！！』

トリノイド23号を捉えた場所へ忍者のように跳び走って行く。

ストライクウィッチーズの所では坂本は、魔眼で敵を見つけたよう
で声を張り上げる。

坂本

「敵機発見！！」

ミーナ

「バルクホルン隊突入！！」

バルクホルンのチームがネウロイに先制攻撃をかけるとする時に。

????

「そうはさせない！！」

地上からストライクウィッチーズに届くぐらいに大きな赤い雷を放

っ。

ストライクウィッチーズ

『!?!?』

陸から攻撃するに気付けたから、魔方陣バリアを張る。

坂本

「何者!?!」

魔眼で敵を調べるようにする。森の中でトリノイド23号が居ている。

坂本

「なっ!ネウロイじゃなくて、赤城のような化け物が居ていた!」

ミーナ

「くっ!!最悪な事態が起こった!!」

険しそうな顔で言う。

トリノイド23号

「ウィッチーズ共め、ネウロイを撃破した所為で邪魔された。今度こそ、最後までにネウロイの力を得る!!」

トリノイド23号は、もう一度赤い雷を放つとするが、誰かの気配に気付けて、孫悟龍は、跳び蹴りする。

トリノイド23号

「ぐわあ!!」

それを受けたように吹っ飛ばれた。

孫悟龍

「おい！！ウィッチ達！！こっちは俺達に任せて！！」
彼女たちに届けるように大きな声で言う。

宮藤

「しかし！！お前達は昨日までと違う化け物に勝て、分かりました！！」
「リーネちゃん！？」

リーネ

「彼達は、きっと大丈夫だと感じる！！昨日も厳しい戦いにした！」

坂本

「む…それは確かだ。私も感じた。分かった！！孫悟龍達、そっちはよろしく！！」

孫悟龍は、それをしっかりと聞けたから、頷けた。

ミーナ

「よし！！突入！！」

孫悟龍は、それを確認したから、立ち上がるトリノイド23号に振り返ってから、構える。

トリノイド23号

「己！？惜しい事になっていた！！なぜお前は闇になったままに偽善者になってもいいか！！？」

不死鳥の騎士隊は、揃った。

孫悟龍

「……確かに昔、俺が助けなかった人が居たなら、俺は、罪で後悔

した。もし、俺は一人で、仲間を頼りなくて、迷いを持ったままに突進すぎたなら、周りの仲間には気付けないうちに巻き込んでしまったから自分は命を落としてしまうかもしれない。でも、お前が言ったように自分がここで戦うことを諦める……？愚かだ……俺がいないから、きつと俺の仲間、地球が絶対に悲しむ……！罪を背負う事と人を遣される事を持つままに俺、一人じゃなくて自分が信じた仲間達と共に大切な事でも守る為に歩く……！」

銀牙

「兄さん……」

ストライクウィッチーズも孫悟龍の昔の事を聞いて、驚愕していた。バルクホルンは、一番に驚愕していたから気持ちが揺るんだ。

孫悟龍

「いくぞ……！」

ヴィータとザフィーラとシグナムとアインと銀牙

『はい……！』

銀牙だけは、既に孫悟龍とアインとツヴァイが作られた新しい銀色のダイノマインダーを着けた

孫悟龍達

『アバレチェンジ……！』

シグナムは、アバレレッドへと、ザフィーラは、アバレブルーへと、ヴィータは、アバレイエローへと、アインは、アバレブラックへと、孫悟龍は、アバレキラヘへと、変身させた。銀牙は、ブレスの顔の口の部分からダイノガッツが開放されて緑色の古代龍型のダイノフ

アイバー製のアバレ・スーツ（アタック・バンテッド・レジスタンススーツ）が実体化して、アバレンジャーの新しい戦士、緑色、アバレダイブへと変身させた。

アバレレッド

「元気莫大！アバレレッド！！」

アバレブルー

「本気爆発！アバレブルー！！」

アバレイエロー

「勇気で驍進！アバレイエロー！！」

アバレブラック

「無敵の竜人魂！アバレブラック！！」

アバレキラー

「ときめきの白眉！アバレキラー！！」

アバレダイブ

「闘魂で無限の力！アバレダイブ！！」

アバレレッド

「荒ぶるダイノガッツ！！」

アバレンジャー

『爆竜戦隊アバレンジャー！！』

トリノイド23号

「フン！数が増えようも変わらない！！やれ、バーミア兵！！」

現れたバーミア兵達は、アバレンジャーへ襲い掛かる。

アバレレッド

「いくぞ！」

アバレンジャーは、感情の昂ぶりによってダイノガッツが増幅することで野生化する、強化形態、アバレモードになっている。レッドとブルーとブラックは、腕や脚に付いている模様から大きな角を生やし、イエローは両脇に翼を展開する。

キラーのアバレモードは右腕に長く鋭い爪が装備され、飛行も可能になる。

ダイブのアバレモードは腕や足に着いている模様から大きな角を生やし、両脇に展開する。

それを完了したから、バーミア兵達を襲うように飛び上がって、行く。

アバレンジャーは襲うバーミア兵達を襲い掛ける。

アバレイエロー

「兄貴!!!ここはあたし達に任せて!?!」

アバレキラー

「む?なぜ?」

アバレブルー

「アバレキラーとアバレダイブは、トリノイド23号に敵うなら大丈夫と感ずる。」

アバレレッドとアバレブラックは、アバレブルーの言葉に賛同する

ように頷けた。

アバレキラー

「分かった。ここは任せとけ！！行くぞ！アバレダイブ！！」

アバレダイブ

「はい！！」

トリノイド23号

「フン！俺に挑戦することを後悔する！！」

赤き雷を放つから、アバレキラーとアバレダイブは、それを避けながら、走っている。

アバレキラー

「いくぞ！」

同時にアバレダイブと共に、高速移動になったから二人共が連続攻撃をする。

アバレキラーとアバレダイブは合流したから、高速移動を止めて、顔を合わせながら、意思を通じるように頷けて、飛びあがる。

アバレキラーとアバレダイブは、空中で前のように回転して、牙で斬る。

トリノイド23号は、それを受けたように吹っ飛ばれた。

綺麗に着陸するアバレキラーとアバレダイブは、アバレンジャーから合流した。

トリノイド23号

「なんなんだ！？このパワーは！？」

ダメージを受けすぎたせいでゆっくりヨロヨロと立ち上がって、叫ぶ、

アバレキラー

「ふっ、俺は、迷いもなく、偽善者でも悪でも関係ない俺の仲間達と共に守り抜く！！」

アバレダイブ

「そうだ！例え、お前達は、僕達を苦しめた言葉をかけたなら僕たちは仲間たちと罪でも懺罪でも背負うままに歩いて行く！！」

アバレレッド

「ああ！トドメせよ！！」

ティラノロッドとトリケラバンカーとプテラタガーとダイノスラスタールとウイングペンタクトが合体させた。

アバレダイブ

「アンセントリニューザンバー！！」
龍型の大剣を腕で現れる。

敵を狙いに付ける。

アバレンジャー

『スーペリアダイノボンバー！！』
撃つ。

アバレダイブ

「ダイノスルーヘラデイド!!」
すれ違いざまに強烈な一撃を決める。

トリノイド23号がそれらを受けたから自分の後ろにアバレンジャーの紋章が現れたから爆発して、バラバラに散らした。

この中に実を出て、空へ跳びかけて、雨雲みたいになって、雨のように降ったから、復活したように巨大化になった。(Gトリノイド23号以下

Gトリノイド23号

「己!!お前達の所為で作戦が台無しだ!!」

アバレキラ

「……何度もしつこい。アバレブラック!ブラキオサウルスを呼べ!!」

アバレブラック

「はい!ブラキオサウルス、来い!」

ブラキオサウルス

『はい。』

呼ばれたブラキオサウルスがガオレンジャーの時と同じで銀色のカラーテンから現れた。

ほぼ原作通りにネウロイを撃破したバルクホルンを含むストライクウィッチーズは、その恐竜を見て、息を呑んだように啞然する。

ブラキオサウルスの中からティラノサウルスとトリケラトプスとプ

テラノドンを出た。

ティラノサウルス

『アバレレッド！！暴れるラノ！！』

トリケラトプス

『アバレブルー…ボク達は、お前達と守れるケラ』

プテラノドン

『アバレイエロー！あたし達も負けないプラ！！』

アバレキラー

「トツプゲイラー…来い…」

トツプゲイラー

『…やれやれ、めんどくさい奴が来たケラ…フン、まあいい。リ
ユムーンと一緒に殺せるケラ…』

呼ばれたからめんどくさいように現れながら皮肉のような笑いで
冷徹に言う。

アバレキラー

「ああ。」

トツプゲイラーの言葉に皮肉に答える。

アバレレッド

「よし！いくぞ。」

アバレダイブとアバレブラックを除くアバレンジャーは、自分のパ
ートナーに入る。

アバレブラックとキラーを除くアバレンジャー
『爆竜合体!!』

ティラノサウルスはアバレンオーの頭部・胴体・足・左腕を構成し、トリケラトプスは、アバレンオーの右腕を構成し、プテラノドンは、アバレンオーのヘルメットと胸部を構成し、合体する。

アバレンジャー

『完成!!アバレンオー!!』

アバレキラー

「ふっ。こちらも合体する。」

トップゲイラーは、ステゴスライドンを掴まり、飛び上がる。

アバレキラー

「爆竜合体!!」

トップゲイラーの翼部と脚部は、右腕と左腕と両足を構成し、ステゴスライドンと合体する。その後、トップゲイラーの頭部から胴体部が大型の槍ゲイルスピアを武器とするようになって、掴まった。

アバレキラー

「完成!!キラオー!!」

アバレンオーとキラオーが着陸したから、構える。

トリノイド23号は先に赤き雷を放して、二体を襲う。

それを受けたように周辺が火花を起こしたり煙を舞い上がったりし

て、怯んだが、キラオーは、前に進んだ。

アバレキラー

「ふっ。私に任せとけ……」

キラオーが攻撃を仕掛ける。

高速移動化でトリノイド23号に連続攻撃をする。

アバレレッド

「私たちも……!」

アバレンオーの左腕のドリルでトリノイド23号を切り裂く

アバレンオーの右腕のトリケラヘッドでトリノイド23号を突き上げる。

トリノイド23号は、それを受けたように吹っ飛ばれたからよると立ち上がる。

アバレキラー

「アバレンジャー……!トドメだ……!」

アバレンジャー

「はい……!」

アバレンオーは跳び上がり、左腕のドリルは、上空に向けて、ダイノガッツを集めながら、回れる。

アバレンジャー

『爆竜電撃ドリルスピン……!』

キラードーの前に空中でゲイルスピアを飛ばすように置く。

アバレキラードー

「爆竜必殺デススティンガー！」
それを投げる。

二つの必殺技がトリノイド23号を粉碎するからトリノイド23号は、放電をしながら倒れて、爆発した。

アバレダイブ

「やった！」

アバレブラック

「よし！！！」

ブルーを除くアバレンジャー

『よっしゃ！！／よし！！』

アバレキラードー

「ふっ、ときめく……」

解除した孫悟龍達が、自分達の家へ帰るとするが…バルクホルンは、孫悟龍にその礼を言う。彼女は、軍事の事の所為で今までの大切な事を忘れてしまったのが、孫悟龍のさっきの家族という言葉を聞いて、大切な事を戻す事が出来たから、孫悟龍、不死鳥の騎士隊を仲良くするように信じ始めた。そのバルクホルンを見たように安堵したミーナとそれを聞いたハルトマンは、バルクホルンと同様に礼をしたから、孫悟龍、不死鳥の騎士隊を信じ始めた。彼本人は、「勘違いするな。お前達の為じゃなくて、私は、自分の迷いがなくす為

に仲間を信じ合いするように言葉をする。」と礼を断るように言う。

森の中から何者かが不敵に笑った孫悟龍を気に入ったように見たから言う。

???

「へっつ、お前は、どんな人間より凄く深い闇を持つだけじゃなくて、輝く光の優しさまで持つお前が居るなんて初めてだ。おまえなら、人類と地球…そして、我々悪魔族を救える事が出来る。フッフ。お前と出会うのが期待する。」
「そう女みたいに言うと同時に本物の悪魔みたいな尻尾を振りながら、去る。」

孫悟龍のログハウス

銀牙

「良かった…バルクホルンさん達も僕達の事を認めて…」

孫悟龍

「ああ。でも、まだまだリーダーである俺からストライクウィッチーズの半分を認めない。」

銀牙

「ハハハっ、兄さんは相変わらずに厳しい。」

ヴォルケンリッターは、銀牙と同様に苦笑にしている

孫悟龍

「よし。今夜は、アバレンジャーの新追加戦士の宴会をする。」

不死鳥の騎士隊は、宴という言葉聞いて、心で歓喜するよう感じた。

孫悟龍

「今だけは騒げる!!」

不死鳥の騎士隊は、歓喜のような叫びをする。

孫悟龍と銀牙とヴォルケンリッターの絆はどんどん深くなっている。そして、バルクホルンも、ミーナもハルトマンも不死鳥の騎士隊を信じる事が出来る。

第15話 アバレで信頼し合いする!! 銀牙、新たな力!? ……そして、ありが

次回

ミーナは不死鳥の騎士隊にお願いがある。

孫悟龍

「俺達は、初めて親睦会をする。」

ミーナ

「お前達は、子供たちはお前達が仮面ライダーという事をするから、これを見たい。」

ルッキーニは、子どもと同じに仮面ライダーとスーパー戦隊に興味を持った

ルッキーニ

「うじゅ〜い。子供達も私も仮面ライダーを見たい!!」

イベントの途中に狗のようなヤミーが現れるから、人々を襲い込む。

孫悟龍

「狗ヤミー……おもしろい!!」

ヤミーを倒したからオーズの体の外に謎のコアメダルが浮き上がるように来る。

孫悟龍

「これ……何だ!？」

第16話 親睦会と分身コンボと謎のメダル

第16話 親睦会と分身コンボと謎のメダル

不死鳥の騎士隊は、別荘で、半狼モードの銀牙& amp; シグナム
& amp; ヴィータVS孫悟龍の決闘をし続ける。

銀牙

「はあああああ!!!」
拳を孫悟龍へ飛ばす。

孫悟龍は、それを捌いて、カウンター気味のパンチをする。

銀牙

「くっ」
半狼モードの力でスピードを上げたおかげでギリギリ避け込むから
距離を取る。

シグナム

「ふっ!!!」
愛剣を振るう。

ヴィータ

「でりゃあああああ!!!」
強く振るう。

孫悟龍は、素手で両者の攻撃を受け止める。

銀牙

「腰にガラ空きがある!!」

速く無防備の孫悟龍の腹を殴るとしようが、孫悟龍が陽炎のようにスラリと通り抜ける。

銀牙

「え!!」

シグナム

「なっ!!」

ヴィータ

「嘘!？」

シグナムとヴィータと銀牙は、孫悟龍が消えた事を驚愕しながら、そのせいでバランスを崩してしまった。

孫悟龍

「驚ける場合じゃない…こっちの番…はっ!!」

孫悟龍は、既に溜め込んだ広範囲みたいな青のエネルギー波を放つ。

シグナム・ヴィータ・銀牙

「…えっ? なっ!?! うわあああああ!!」

孫悟龍の声に気付けたように振り返って、それを受けて、大きくドカンと爆発する音を立てているから煙を舞い上がる。

.....

.....

.....

孫悟龍

「はい。ここまで終了する。」
腰で左手を当てながら疲れてないように言う。

銀牙とシグナムとヴィータは、満身創痍で疲れたように息を乱す。

銀牙

「この技は何だー!!」
さっきの技が何だったかをツッコミするみたいに質問する。

孫悟龍

「それは、瞬間移動だ。」
きっぱりと答える。

シグナム

「瞬間移動?」

孫悟龍

「どんな遠隔地であろうと瞬時に移動でき、どんな状況でも敵の攻撃を避ける時にも使用できる。誰がいない場所も可能だ。」

ヴィータ

「それはずるい〜」
頬を膨れながら涙で見上げる。

孫悟龍

「甘えるじゃない。もし、戦場で俺だけじゃなくて敵も瞬間移動を使おうのがあるなら、裏をかく必要がある。かかないならこのままのお前達がやられるかもしれない。」

ヴィータは、ウツと呻くように引き下げる。

孫悟龍

「まあ、我が親友と闘えたから、俺は瞬間移動を知らないままに初めて敗北した。」

ヴィータとシグナムと銀牙は、自らの主が敗北したことを聞いて、驚愕していた。

銀牙

「兄さんに敗北するなんて初めてだ。親友は、誰か？」

孫悟龍

「昔、我が親友は、俺と同じよう自分より強い奴達に負けない力と神を超える究極の努力を持つ、ベジータと同じサイヤ人、カカロットの地球人名は孫悟空と出会う。お互いに本気を出す戦いをするから初めて俺を圧倒すると感じた。俺は、負けたけど、初めて面白いからもつとも戦いたいと感じた。俺とカカロットが戦友になった。」

懐かしいように言う。

銀牙

「孫悟空…兄さんと同じ凄い男だ…。」

孫悟龍

「いいえ、俺は、確かに凄いけど、カカロットにまだ敵わない。世界より…いや、宇宙より広い。」

ギユツと強く握りしめた手を見て、不適で楽しそうな顔をなりながら、言う。

銀牙達は、孫悟龍の凄く楽しそうな表情の光景を見るように息を呑んだ。孫悟龍の今までより凄く楽しそうな顔を見るなんて初めてだ。

銀牙

「僕も兄さんを追い付くように頑張る！！」

ヴィータ

「あたしも頑張る！！」

シグナム

「フ、私も主の役に立つ。」

孫悟龍は、それを聞いて、ハトが豆鉄砲食らったような顔になった。

孫悟龍

「フン。俺は、確かに馬鹿だ。自分の責任をするように一人でやるのは無意味だから俺と自分の仲間では、力を合わせて、出来る…！」

シグナムとヴィータと銀牙は、孫悟龍の言葉を聞いて、嬉しさのような笑顔を浮かべながら強調に頷く。

孫悟龍

「さあ、修行の続きをする。」

銀牙・ヴィータ・シグナム
「……はい！」

……
……
……

彼らは、修行を終わったら、休憩する。

ストライクウィッチーズである隊長、ミーナは、ログハウスの結界の外に立ち待った不死鳥の騎士隊のリーダー、孫悟龍と話す。

孫悟龍

「親睦会？」

ミーナ

「ええ。ルッキーニが名案した通りに親睦会で、隣の村と交流する。」

孫悟龍

「それが良い。俺達には交流やコミュニケーションが必要だ。でも、どうして私達が必要だか？」

ミーナ

「……それは、ルッキーニがさっきの仮面ライダーを興味を持ったから……」

孫悟龍

「……フランチェスカ少尉が？はん、天才の少女はずなのに銀牙と

違うガキらしいな思考だ。」
鼻を笑いながら言う。

ミーナは、それを聞いて、苦笑を浮き出せた。

孫悟龍

「……で、ギブアンドテイクするか？私達がそれをやると、私達に利が与えるか？そうしないと無意味だ。」
凜としたような顔で言う。

ミーナ

「（やはり来る…）そうか、利はなにか？」

孫悟龍

「このリーダーである私は、金でも国でも要らない。もし、多額の金額と果物や野菜や穀物を受け取るなら、85%の金額や果物や野菜や穀物を平民と難民達に渡したいと思う。」

ミーナは、それを聞いて、驚愕していた。

ミーナ

「本当に……？」

孫悟龍

「当たり前だ。例えば、災害が起こったことでも戦争に巻き込まれたことでもある国がいるなら、食べ物がない事が困った人々食べ物を与える。」

ミーナ

「そう……珍しさに孫悟龍は、苦しんだ人を助ける事を聞けるなん

て初めてだ。」

孫悟龍

「いいえ、私は強い奴と戦い好きだけじゃなくて困っていた事でも苦しかった事でも持つ他人を助けるみたいに物好きであるお節介屋だ。」

否定するから、皮肉な笑みを浮かべ出しながら言う。

ミーナは、きよとんしたような顔をしたから、フフと笑い声を出すように笑顔が浮かべる。

ミーナ

「分かった。お前達が手伝うと、私たちが利を与えます。」

孫悟龍は、その言葉を聞いて、皮肉な笑みを浮かべる。

ミーナ

「でも、私達は、食料が必要だ……。食糧に与える事が出来ない事を申し訳ありません。」

困った表情をしながら言う。

孫悟龍

「大丈夫。俺の所では、食料が無限である。その中に珍食料がある。」

ミーナ

「なに？珍食料ってあるか？」

孫悟龍

「フフ。女性が大人気である、髪がつるつるする事でも肌がきれい

する事でもある果物がある。」

ミーナの方がピクリとするのを孫悟龍は、それを見て、見逃せないようににやりとする。

孫悟龍

「まあ、俺からお前達に俺が作った50%の珍食料を託すと、お前から50%の食料を俺たちにあげる。」

ミーナは、賛同するように頷ける。

孫悟龍

「さあ、成立する。」

孫悟龍とミーナが握手する。

ストライクウィッチーズは、自分たちが考えるイベントを作る。

不死鳥の騎士隊は、ミーナから仮面ライダーのイベントを作ること頼む。

その後、親睦会当日が始まった。空中で火花を起こす。

軍用トラックからストライクウィッチーズの面々が降りた。

不死鳥の騎士隊の面々は、孫悟龍の瞬間移動で、だれにも見つからない場所を連れていくから、ストライクウィッチーズの所に行く。行く。

緊張していた芳佳とリーネがいて、ペンギンの気ぐるみを纏ったペリーヌがああ芳佳とリーネを睨んでいた。

孫悟龍は、村民達の中から、男達数名の中に指導要員と話すミーナと会いに行く。

孫悟龍

「いよお。ヴィルケ中佐。あなた達が望んだ通りに、俺達がここに来た。」

ミーナ

「あら。孫悟龍。」

ルッキーニ

「うじゅ〜い!?よく来た。兄さん達!？」
笑顔で破邪気をするように言う。

孫悟龍は、それを見て、フンと鼻で笑いたように鳴らす。

孫悟龍

「フン。勘違いするな。隊長からの依頼と報酬交換を成功するためにする。まあ、戦争を遊びと思う。天才ガキ」

言うから、からかうようにニヤリとしたような皮肉な笑みを浮か出す。

ルッキーニは、子供と言う言葉を聞いて、ムツと咎める表情を浮かべる。

ルッキーニ

「ガキじゃない!?わたしは、ルッキーニだ!？」

孫悟龍

「ハン。子供であるお前は、ネウロイと戦いで、残酷と言う戦場の意味を知らない。」

ルッキーニは、それを聞いたから、その言葉の意味を理解したように口が開けたままに体が固まった。

ミーナ

「孫悟龍!?!」

宥める。

孫悟龍

「おつと、まあ、子供には、残酷な光景が見たくない事が良いと思います。さつきは、戦争の意味には確かに真実だ。ネウロイでも人間でも同じだ。ネウロイの悲鳴は、人間みたいな悲鳴をする。俺達の仕事に戻る。」

皮肉な笑みを浮かべながら、去る。

芳佳とリーネがおいしい食べ物を作ったり坂本の剣舞をしたり、客達を楽しかった。最終的に、ミーナが歌う。町の人々達が、その歌を聴けて、感動するように涙を流す。

ミーナの歌が歌い終わった後に、イベントの舞台を出た孫悟龍が、服の胸ポケットに着けたマイクをする。

孫悟龍

「イベントを来てくれて有難う。あなた子供達が楽しいために仮面ライダーのイベントを俺達は頑張るように作った。じゃあ、開始する!?!」

そう言うと、仮面ライダーディケイドがステージから出現したから、無防備のようなポーズをする。客達は、それを見て、わーーーーっ
と楽しいように騒げた。

孫悟龍達が作ったイベントは、仮面ライダーをする。仮面ライダーのチェンジの変身のムービーを作った事と仮面ライダーの格好と仮面ライダーの敵、謎の化け物を本物のように作った。この時代には存在しない物があると思う。気にしないと思う人は、それを差し置いてください。

化け物は、平気でディケイドを苦しんだ。子供たちは、化け物を見て、不満をする。

最終的に応援された名言をしたディケイドは、ライドブッカー（偽）で、最強の技を放つように化け物を斬り込んだ。化け物は、受けたように、消滅するようにステージから退治した。

子どもたちと子供を連れた大人達が、このイベントを観て、すごい迫力を受けたように感じて、子どもたちだけは、喜んだり、大人達は、感嘆したりする。

銀牙とシグナム達が、こんな子供達を見たから、顔が少し綻ばす。孫悟龍もフンと鼻を鳴らしながら誰にも気付けないように綻ばす。

その時に、ネウロイも現れる警報音をする。

ミーナ

「こんな時に、ネウロイを現れる。」
チラツと孫悟龍を見る。

孫悟龍

「……」

関係がないと思うように目を閉ざして、無言する。

ミーナは、孫悟龍達に手助けすると思うが、この彼を見て、諦めたように溜め息する。もし、強引に無理矢理するなら、彼は、激怒の表情になったら、ネウロイ以上の威力を持って、私たち……いや、世界が危ないかもしれないと思う。

巨大ネウロイ本体を殲滅することには、ミーナとバルクホルン、エーリカ、それに、エイラとサーニヤだ。

もう一つの巨大ネウロイは、真っ直ぐここに向かう。芳佳とリーネと坂本、ペリーヌ、それにシャーリーとルツキーニは、阻止するよ
うに殲滅する。

更とすると、メダルを稼げるみたいな音をする。

孫悟龍と銀牙は、その音を聞いた事に気付けたように険しそうな顔
になった。

成長してしまった狗のモチーフとなったヤミーは、民達を襲う。

ここの民達は、自分たちを襲うそのヤミーを見て、逃げる。

狗ヤミーは、ここの民だけじゃなくて、民を守るように行動するウ
イッチ達を苦しいように襲う。

芳佳

「どうして私達ウィッチばかりを襲う!？」
空から地上を見た。

孫悟龍

「フン。なるほど。この親の欲望は、褒賞をとったウィッチーズへの嫉妬によつてウィッチーズを苦しむ。はん。確かに我々人間は、正義でも悪でもなくて、良い事でも悪い事でもある。」
誰にも気付けないみたいにいつの間にか捕まえたこの親本人を見下ろしたように冷視で言う。

その瞬間に、ヤミーの後ろに、銀のオーロラが現れるから、それからアンデッドとオルフェイクと魔化魍が出ると、民を襲いかかる。

孫悟龍は、さつきより険しそうな顔になった

銀牙

「兄さん……………お前達は、どうする?」

孫悟龍

「……………しょうがない……………巻き込んだ人を助けるだけだ……………ヤミー共は、俺とザフィーラとシグナム、銀牙がやる。ヴィータとアインとツヴァイとアギトとシャマルは、ここに巻き込んだ民を助けるように避難してくれ。」

シグナム達

『はい! / 分かった! ?』

ヴィータ達は、それを聞いて、頷いて、ヤミー共が襲ったのを妨害して、巻き込んだ人々を安全な所へ連れていく

孫悟龍

「化け物退治開始……」
それを確認するように言い、オーズドライバーを取り出せて、腰に巻き込んだ。

シグナムもブレイバックルを取り出せて、銀牙もファイズドライバーを取り出せて腰に巻き込んで、ザフィーラも変身音叉 音角を取り出せて、指に弾けて、変身音波を発生して、額に翳す。

『5・5・5・ENTER』

ファイズフォンが開いて5を3回にENTERで押すと、すぐに閉じるが、天に向かう。

懐からさらに取り出した3枚のコアメダルをオーカテドラルへと入れ、傾ける。

シグナム・銀牙・ザフィーラ・孫悟龍

「……変身……!」

シグナムは、ブレイバックルのターンアップハンドルを引いて、リーダーが回転すし、銀牙は、ファイズドライバーのバックル部にフオンを突き立て左側に倒し、ザフィーラの周りに体色と同じくマジョーラ色の炎が身を包み、孫悟龍は、オーズドライバー右腰部に装着されているオースキャナーを取り、オーカテドラルの上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『Turn Up』

ブレイドアーマーを分解した光のゲート・オリハルコンエレメントを装着者の前面に放出、エレメントがシグナムを通過することで基本カラー、青であるモチーフをヘラクレスカブトにしている仮面ライダー、ブレイドに変身する。

ザフィーラ

「はっ!!!」

その炎を振り払う。マスクの縁取り・腕の色は赤で、体色はマジョーラアンドロメダの鬼、和太鼓の音撃武器で戦う音撃戦士になる。

響鬼

『Complete!!!』

血管のような赤に覆われて、フォトンブラッドに包まれ、仮面ライダーファイズへと変身した。

『タカ、トラ、バッタ！タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ』

直後、孫悟龍の周囲を巨大なメダルのような形をしたものが覆い、仮面ライダーオーズ（タトバ）へと変身した。

ルッキーニ

「うじゅ〜い!? 悟龍兄さんがさっきの仮面になった!?!」
空から見たから、孫悟龍がオーズになることに驚愕していた。

オーズ

「いくぞ!?!」

同時に、オーズは、狗ヤミーに、ブレイドは、ライオンアンデッド

に、響鬼は、バケガニに、ファイズらは、オックスオルフェイクに、襲いかかる。

ブレイド

「ふっ！はっ!?!」

醒剣ブレイラウザーでライオンアンデッドの攻撃を受け流すから、剣技のすごいテクニックで何度も斬り裂く。

剣技のうまさが高い奴は、強い奴でも押し勝つこともある。

ブレイド

「フッ!?!」

強烈に斬りかかる。

ライオンアンデッドは、それを受けたように吹っ飛ばれたから、ブレイドの凄い攻撃のお陰で、弱いようにフラフラと立ち上がった。

ブレイドは、それを見て、チャンスと感じて、トレイを円状に展開してカードを引き抜き、スラッシュ・リーダー にラウズすることとでベスタの効果を発揮することができる

《K I K K U ! M A H ! S A N D A R !》

ブレイド

「はあああああああ!?!」

ブレイラウザーで地面に刺して、気を溜めるように雷を纏める。

ブレイド

「はああああ!はっ!?!」

それを置いて、超高速での助走を加えて空中高くジャンプし、ライトニングブラストを放つ。それでライトニングソニックが決めた。ライオンアンデッドは、それを受けたから吹っ飛ばれたように何度も転ぶから雷のキックを受けたお蔭でしびれて動けない。

ブレイドは、空のカードを投げて、ライオンアンデッドをカードの中に吸収して、封じた。

ファイズの所では

ファイズ

「おりゃあ!？」

スピードと力を身に付けて、手に装着したファイズショットでオックスオルフェイクを強く殴りかかって、脚で、蹴り掛かる。

オックスオルフェイクは、苦戦をしたから、ファイズは、弱い敵が居るときにつまらないなら早く終わると感じるように思う。

ファイズショットにミッションメモリーを挿入し、ファイズフォンの「ENTER」を押す。

《Exceed Charge》

音声が発せられると共に、フォトンストリームを経由してフォトンブラッドが注入される。

ファイズ

「ふっ!？」

オックスオルフェイクを殴り付けながら駆け抜ける。それが、グラインパクトが決めた。オックスオルフェイクは、それを受けたからやられたみたいに死ぬように灰の砂になる。

響鬼のところでは。

響鬼

「ふっ！」

音撃棒 烈火を持ち、バケガニに打撃をする。

装備帯のバックルに携行した音撃鼓が、バケガニの腹に貼り付け、巨大な太鼓として展開する。

響鬼

「音撃打一気火勢の型！！」

上に振り上げた左右の音撃棒で同時に音撃鼓を叩く。

音撃打

響鬼

「はあああああああああ！？」

音撃棒で太鼓のように連打することによって清めの音を叩き込む。バケガニは、それを聞いて、清めを嫌うように苦しそう。

一気火勢の型

響鬼

「はっ!?!」
最後までに強く叩き込む。

バケガニは、それを受けて、爆発した。

狗ヤミーは、チーターと同じ速さぐらいにオーズを襲い掛かる。

オーズ

「ちっ!?!さっきのヤミーと同じだ。速さに対決する広範囲や遠距離だぜ!?!」

苦戦するように避けたり、防御したりしたから苛立ちみたいだに舌打ちをしながら、言うと同時にオーメダルネストから、深緑色のコアメダル、クワガタや黄色のコアメダル、チーターを取り出すから、それらを受け入れて、右からクワガタ、カマキリをオーカテドラルへと入れ、傾けて、オースキャナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『クワガタ!トラ!チーター!ガタラーター!!!』

オーズ(ガタラーター)

「はっ!?!」

クワガタホーンから雷撃を放つ。

緑色の雷が、地面を着弾するように小さな爆発をするから、狗ヤミーが怯んだ。

その隙を見て、胸部と脚部が光ると、トラクローが展開して、最高加速する時はスチームが噴き出す最高加速で、残った屑ヤミー共へと敢行する。

オーズ（ガタラーター）

「はっ！ふっ！おりゃっ！」

トラクローを人間の誰にも出来ないトラのようなテクニクで、連続に振るう。

狗ヤミーは、それを受けるが、このままやられたと本能で感じて、分身した。

今度は、ヤミーを斬り込むが、分身したように消えた。

オーズ（ガタラーター）

「む。今度は、分身する事もできる。こちらにも虫系コンボで分身する！？」

そう言うと同時に、ヤミーの攻撃を次々と避けながら、オーメダルネストから、緑色のコアメダル、カマキリと薄緑色のコアメダル、バッタを取り出すから、それらを受け入れて、トラコアとチーターコアが取り出して、右からクワガタ、カマキリをオーカテドラルへと入れ、傾けて、オースキャナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

「クワガタ！カマキリ！バッタ！ガタガタガタキリッバ！ガタキリバ！」

ガタキリバへ変身した。雷を司る昆虫の王者。

巨大ネウロイを撃破した芳佳達がここに戻っているから、

シャーリー

「バッタ？」

ルッキーニ

「カマキリ？」

腕部の所を見て、両前腕部に着脱可能なブレード状武器・カマキリソードが付随しておる

リーネ

「クワガタ？」

頭部の所を見て、クワガタの顎を模した額の角状外骨格・クワガタホーン。

オーズ（ガタキリバ）

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
大きな叫びで緑の波動を強く放つ。

空中に居たストライクウィッチーズもそれを受けたようにバランス悪くなり、少し悲鳴する。

不死鳥の騎士隊もそれを受けたように顔を守るように隠れている。

オーズ（ガタキリバ）

「うおおおおおおおおおおおおお！！？」

分身した狗ヤミーは、オーズを飛び襲う。

オーズも叫びを止めて、襲うように走ったから50人ぐらいの分身を作成する。

シャーリー

「なっ!?! オーズまで分身した!?!」

分身したオーズが分身した狗ヤミーを蹴ったり、斬ったり、投げたりした。

狗ヤミーは、今度こそこのままやられると本能で感じて、地上で一点に集中し、巨大な狗になる。

分身したオーズは、それを見て、迅速にオースキャナーを取り、その上部から順にスライドさせ、コアメダルをスキャンさせていく。

『Triple! scanning charge!』

『Triple! scanning charge!』

そう電子音をする。

『はああー』

『!』

無数のブレンチシェイドと共に一斉に跳び蹴りを繰り返す。巨大な狗ヤミーにこの技で飛び込み、内部から攻撃するために使用することもある。

それを受けたように爆発したから、いつものより多量のセルメダルに戻っている。オーズは、ヤミーから出て、上手く着陸する。銀牙は、迅速にそれを残さずに手繰り寄せる。

最強コンボの負担を担うままにタトバコンボに戻る。

オーズ(タトバ)

「……よし。雑魚をやっつけた。次は、お前だ！」
コンボの負担が残ったような汗をかくからカグムを標的にするから
トラのような構えにする。

カグム

「フフ。800年ぶりに久し振りに奪え合っ……」
と同時に、さっきまでと違うような雰囲気が変わる。流石超人でも
ウィッチでも恐ろしい雰囲気を纏めながら狼のように構える。

オーズは、その雰囲気を受けて、仮面の下に皮肉な笑みを浮かべる
から虎のように構える。

その瞬間に、何処かに隠れるところに現れている悪魔が、オーズを
見て、チャンスと感じて、何かの呪文を呟いて、何処から穴を現れ
て、この穴から30枚の何かの漆黒なメダルが現れるから孫悟龍の
所へ飛びまわる。

変身解除した銀牙らは、何かが来る事に早く気付いている。

銀牙

「む！？何かが来る！？」

シグナム

「っ！？」

ウィッチーズと不死鳥騎士隊の間に何かが速く通り抜ける。

カグム

「なっ！？なんだこれは！？」

見たこともないメダルを見て、驚愕した。

オーズ

「む。なっ、なんだ……。」

オーズはカグムいきなり見たことも無い漆黒なメダルが自分に向って来たこともあって混乱していた。

オーズの周りに、30枚の何かの漆黒なメダルが回り回る。そして、30枚のメダルはオーズを中心に回転するのをやめ、勢いに乗ってローグラングサークル……否、オーズを媒介として孫悟龍の体内に侵入したのだ。

オーズ

「くっ………!？」

それにより黒い紫電が体中に走るオーズ。

そのまま片膝をついてしまい、変身まで解けてしまう始末。

銀牙

「兄さん!？」

ヴォルケンリッターと一緒に孫悟龍の所へ走っている。その瞬間にドクケン!?!という鼓動が強くなって、孫悟龍の目が光を消えるような漆黒になる。

孫悟龍

「ぐわあああああああああ!!!?!?!?!」

頭を抱けて苦しそうに叫ぶから、禍力らしい雰囲気と現れると同時に遠くを届けるみたいに衝撃波が出る。

銀牙達は、その雰囲気を見て、ゾクツと恐怖を感じて、走ったのを

止まって、その衝撃波を受けたように吹っ飛ばれている。さすがのカグムも恐怖と危険を感じて、後ずさりする。

カグム

「……っ！800年前では、見たこともない恐ろしいコアメダルにはいないはずなのに……！？まあ、ここにいるなら、私は、今のお前に危険にやられるかもしれない……ここは、退散する……！」
と同時にその霧囲気を受けたように冷汗をかけて、狗のように飛び去る。

孫悟龍

「うおおおおおおおおおおおおお！？」

孫悟龍の背中から禍からしい黒い翼を現れると同時に、レヴィアタンの特徴を持った頭部に、胸部にはケルベロスの牙とフリルを備え、両肩にはケルベロスの頭部を備え、腕部と脚部には、焰に覆われて背中から伸びたマント状の翼には吸血鬼と悪魔を備えているグリードが重なる。

ストライクウィッチーズは、ネウロイ以上の大きな霧囲気を初めて受けたようで、感じるように息を呑んだから恐怖を感じたように顔に青を染めて、体が凄く震えた。

孫悟龍

「ぐっ！ぐわあああああ！？」
漆黒な雷を覆われ、グリードが変えるのを無理矢理に我慢するように耐えるが、苦しそうな叫びをする。

孫悟龍は、悪魔らしいグリードになる！？孫悟龍、耐える！？どつ
する！？

カウント・ザ・メダルズ

タカ×2枚

クジャク×1枚

コンドル×1枚

ライオン×1枚

トラ×2枚

チーター×1枚

クワガタ×1枚

カマキリ×1枚

バッタ×2枚

サイ×1枚

ゴリラ×1枚

ゾウ×1枚

シヤチ×1枚

ウナギ×1枚

タコ×1枚

プテラ×2枚

トリケラ×2枚

テイラノ×2枚

コブラ×1枚

カメ×1枚

ワニ×1枚

???×4枚

???×3枚

?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?
x	x	x	x	x	x	x
3	3	4	3	3	4	3
枚	枚	枚	枚	枚	枚	枚

第16話 親睦会と分身コンボと謎のメダル（後書き）

この話もグダグダ（涙）

作者は、やはり文才の才能がない……（凄い落ち込み）

この話を読んでくれてありがとう。

さあ、次回予告をする。

次回

グリードを耐えた事が出来た孫悟龍

孫悟龍

「はあはあ……。」

この状態の孫悟龍がする戦いは、銀牙が阻止する。

銀牙

「やはり駄目だ！！この状態の兄さんがこの戦いに戦ってはいけない！！！」

カ Gum

「速さが好きなお前の欲望を、解放する。」

???

「リユムーン、シェンロンから聞いた。やはり、お前の心の闇は、闇の深さや我々悪魔と似合う。それに神話と幻想などのコアメダルを使えば、人類と我々悪魔…そして、宇宙と世界を守る事ができる。」

」

シャーリー

「そんな……私の欲望の所為で、人を苦しめてしまった!!」

孫悟龍

「ふざけるな……俺は、確かに謎の漆黒なコアメダルのお陰にこの状態のままに戦ってはいけないだが!? 誰かが人の夢を壊れる所をほっとけはいけない!! イエーガーは夢の為に自分で努力を頑張れるなら自分の手で夢を叶える!!」

第17話 音速と実験と灼熱コンボ

外伝 恋姫の世界へ行く。

彼が住んだ自分が作ったログハウスの中に別荘があるみたいな水晶の中に、更に別荘の研究室に彼がいた。

悟空の道着とアンダーシャツの色を反転させた道着に、ベジータの手袋とブーツをはめておる服装を着るベジットの服装を着た青年、孫悟龍は、科学者のように何かを作った。戦闘するだけじゃなくて魔法・魔術で研究する。

孫悟龍

「……完成だ。」

額から少しかけた汗を自分の手が払うから、机の上に虹色の宝石のような剣がきらりと光った。

孫悟龍

「まさか…流石赤い魔術師と剣使い魔術者が、これを作ったのが何年苦労していたと比べて、俺は、早く何日苦労していた。」

孫悟龍は、立ち上がるから、誰がいない場所へ行くように歩く。

孫悟龍

「宝石剣ゼルレッチよ…異世界を通る事を解放する！」
軽く振ると、空間を斬り込むよう空間の穴を開く。

孫悟龍

「やった…！まさか…作ったからすぐに成功する！？」
歓喜を籠め上げるみたいに言う。

その時に、最悪な事が起こる。

その穴が孫悟龍を吸い始める。

孫悟龍

「！そんな！……もしかして、俺の手加減なくに失敗が起こった…

…」

冷静にさっきでやることと言う。

地を離すようにフツと体が浮かべたように、吸われる。

孫悟龍

「……………ブツブツ」

そんな状況に関わらないように冷静に自分の失敗を考えるみたいに
独り言を言いながら、穴に吸われる。

孫悟龍を吸った扉が消えた。

????の世界

孫悟龍は、三国志のような土地に来るように現れるから、独り言を
やめるように、周りを見渡す。

孫悟龍

「ここは…?」

孫悟龍

「さあ。近くの街へ行く。」

数分後

孫悟龍

「おや。」

街を見えた。

孫悟龍

「とつとつ到着する。」

??の街

孫悟龍

「うん?ここは、昔ぐらいの街だ。」

この街を見て、戸惑いながら言う。

騒ぎをする声を獣のように聞ける。

孫悟龍

「……?そこは、騒げる?まあ、気になっている事があるなら、その人に聞けると思う。」

その騒動の所へ歩いて行く。

騒動の所に到着している。

孫悟龍

「うん?」

醜悪のチンピラ男達と子どもたちを守るように腕を広げる桃色の髪

の少女が、いる。

孫悟龍

「（フン、チンピラ男達は、醜悪な笑みを浮き上がって、平気で人を苦しめるなんて最低醜悪な人だ……）」
醜悪なチンピラ達を最低に思うような冷血をする目で見る。

孫悟龍

「（それなのに、桃色の少女を見たら、何処かで見たような顔だ……）」

孫悟龍

「（まあ、俺もお節介屋だ……。桃色の少女を助ける。）」

孫悟龍

「おい、何やっている?」

チンピラC

「ああ!?!なにっ!?!」

チンピラB

「おい、頭。兄さん、良い服を持つ。どこでもいない服を見た事がない。」

チンピラ頭

「へへへ、そうだ。こら、兄さん。その服を置く。」

孫悟龍

「断る。」

チンピラ頭

「おいおい、お前が状況を分かるか？」
醜悪な笑みで言う。

孫悟龍

「分かるだが、無理だ。お前達の強さが分かったが、俺には勝てるなんて無理だ。」

チンピラ頭

「なんだと！？クソを殺してやれ！？」

チンピラ共

『うおおおおおおお！？』

孫悟龍を襲いやがる。

孫悟龍は、呆れたようにため息をする。

孫悟龍

「やれやれ。愚かな達だ。俺の実力を見極めない……。まだまだ力
ス以下だ。」

ふっつと鼻が息をしながら、つまらなそうに言う。

それを言い終わったら、チンピラどもは、孫悟龍を斬ったはずだ…

…。

バキッと何かを折れた音をする。

チンピラ達

「！？馬鹿な！？剣が折れた！！」

そう、自分が使った剣が折れた

孫悟龍

「やれやれ。お前達は、剣で攻撃するなんて蚊以下で、かゆくない。」
呆れたように言う。

チンピラども

「何？」

それを聞いたように戸惑い、孫悟龍の所に振り返って、孫悟龍がいた所に孫悟龍が消えた。

チンピラ共と周りの人々と、桃色の少女

「!？」

それを見たように驚愕していた。

孫悟龍は、チンピラ達の中心の人の前に現れる。

チンピラC

「っ!？ ぐわあ!？」

孫悟龍が自分の前に居たと感じて、悲鳴をしたと同時に殴られた様に吹っ飛ばれた。

チンピラ達と劉備と周りの人々がそれを見て、驚愕していた。

彼らは、驚愕したままに、孫悟龍がいた所に振り返るように見る。

孫悟龍

「ふっ!？」

一瞬に見えないように一撃をする為の拳とキックをする。

チンピラA

「ぐわぁ!?!」

左からハイキックを受けたように自分の体が回りながら吹っ飛ばれたから気絶した。

チンピラB

「があっ!?!」

右から裏拳に喰らったから気絶した。

チンピラD

「……っ!?!」

更に右から肘打ちに腹を喰らったから気絶した。

チンピラE

「……!?!」

顔の頬に殴ったから気絶した。

チンピラ頭

「今、何が起こった!?!がわぁっ!?!」

自分の周りの光景を見て、戸惑いに言うから、星まで吹っ飛ばれるように強く蹴られた。

孫悟龍

「フン。外道共に教えてあげない。ふっ……!」

気絶したチンピラ達の脚を掴みながら回るから、チンピラ頭が星になる所まで追いかけるように強く投げる。

民たちと桃色の女子は、啞然としている。

孫悟龍

「やれやれ。この地は、やっぱり俺の戦い方に戦いやすい…。」
両手が、パンパンと叩いたから腰に当てて、首を右左で傾げるようにポキポキとしながら、言う。

孫悟龍は、周りを見渡す。自分を見ている

孫悟龍

「まあ。俺が目立ちたくないと思うなら、早めにここから去る方が
良いと思う。」
そう言つと、去るように歩くとした。

桃色の女子は、早く我に返す

桃色の女子

「待って！」

孫悟龍は、桃色の女子の声に気付けたから苛立ちに止まってしまつた。

孫悟龍

「俺に何かようだ？」
後ろの桃色の女子に話しかける。

桃色の女子からの礼をすると、孫悟龍は、言う。俺に礼なんていら
ない。…俺は、自己満足と正義が要らない…。と。

桃色の女子は、腹が鳴ると、自分が恥ずかしいように頬を赤に染め
る。孫悟龍は、呆れたようにため息して、長居は無用だと思つなら、
中華料理の店に行く。

孫悟龍が持つ金は、中国の漢時代のお金がたくさんある。む？お前達は、なぜ孫悟龍は、中国の漢時代のお金を持つかと疑問に思うなら、どの世界にも渡す時に、お金が変わってなる。

孫悟龍がいろんな中華料理を頼む。

料理員は、自分たちが居た所を孫悟龍が頼んだ料理を運ぶように準備する。

その前に、孫悟龍が、桃色の女子の名前を聞けないと気付けた。

孫悟龍

「もしかして、俺とお前が名前を紹介することを忘れた。」

桃色の女子

「そつだ！助けられた奴の名前を聞けないから知らない」

孫悟龍

「助けた奴の名前を聞けないだから困る。遠くの国から旅人だ。俺の性が呂、名が倭、字が龍牙だ。龍牙と呼ばれても構わない。」

桃色の女子

「私の性が劉、名が備、字が玄德だ。」

孫悟龍

「（やはり……お前が劉備玄德……）」

ラーメン、チャーハン、エビチリ、麻婆豆腐を机に置く。

桃色の女子は、チャーハン、エビチリだ。

孫悟龍は、チャーハン大盛り、エビチリ、麻婆豆腐大盛り、ラーメン大盛りだ。

劉備

「あの…食べてもいいか？」

孫悟龍

「構わない。(ムグ)それらは、(ムグ)俺のおごりだ。(ムグムグ)」「
食べながら言う。

.....
.....
.....

孫悟龍(龍牙)と劉備は、それを食べ終わったら、店から出る。

孫悟龍

「お前に用がある。人がいない場所に行く。」

劉備

「え？」

孫悟龍

「いい。俺に連れてくる。」
歩き始める。

劉備は、戸惑いに孫悟龍に連れられるように歩く。

人がいない場所に到着した。

孫悟龍

「それで、お前の理想は、何だ？」

劉備に向け直しながら真剣な表情で言う。

劉備

「私の理想は……………」

劉備から戦場がいなくするように平和するという理想の事を説明する。彼は、それを無言で聞き入れる度に少しずつ険しそうな顔になった。

劉備

「……………という。これが私の理想だ。」

孫悟龍

「劉備よ。」

劉備

「はい。」

孫悟龍

「甘えないだ!？」

怒鳴りをする。

劉備

「っ!？」

孫悟龍

「はあ。あなたの理想は素晴らしい。でも、殺す覚悟と罪を背負う覚悟をするのが必要する方が良い。」

劉備

「でも！？犠牲を出せずに良い！？」

孫悟龍

「はあ。お前は、偉い国主になったらどうするか？」

劉備

「もちろん 私は、子供達と民達に優しい事をする」

孫悟龍は、それを聞いて、頭痛が来るみたいな頭を抱けて、呆れたように溜息をする。

孫悟龍

「あの、国主の本来の仕事は、遊びじゃなくて、国民達と街の様子を見回ったり、厳しい仕事をしたり、自分の国に侵入する人から国を守るために殺せたりする。もし、それらをやらないなら、半分の国民からの劉備の評価と信頼がますます悪くなっている。さらに国民達と軍兵達は、劉備に不満に抱ける言葉がいつぱい言う。お前の仲間が厳しかったおかげで強くなった軍兵が敵の攻撃から守るが、犠牲は少し出す。それにお前は、覚悟を持たなくて、罪を背負わないままに寝て、自分の部下が殺した敵から怨まれるばかりの夢を見ない。お前の周りの人々は、自分が生き残るために敵を殺せたから、每晚、この夢ばかりを見て、だんだん恐怖に染める。さらに、死んだどの事に関係ないような敵の家族は、関係ない人が死んだのを聞けて、ショックしたから、敵を殺したお前達の事を聞けて、お前達

へ家族の仇のような憎しみを生みこんでしまった。」

孫悟龍

「さらに、お前と人を殺せたくないと思った民以外の敵を殺せた事がある人は、自分が殺せた敵の怨みを受けた夢を見たように呻けたが、自分が頑張る為に逃げないように敵を殺せた罪と敵の怨みと悲しみと苦しみを受け入れたように乗り越せて、背負い続ける。それも精神修行の一つだ。」

孫悟龍

「それに、劉備のやり方が気に食わない人がたくさん要る。劉備のやり方は、話し合いする事？はっ、それは、どの甘いお菓子より甘すぎる。綺麗事ばかりする。戦場には、話し合いが無用だ。軍議は、敵軍への対策と反省とどの敵の国の事だけをする。戦をやめるように話し合いしたときは、敵の国に使者を出す方が良い。お前だけが自分の理想と自分の事ばかりを口だけで語るなら、絶望の現実から逃げるように理想ばかりを見すぎるみたいに歪んだ。」

鋭い目で睨み上げる。

孫悟龍

「結局は、お前は、歪んだ理想に抱けて溺死する。」

鋭い目で睨んだままに重い言葉をする。

劉備は、それを受けたようにうつと呻いて、それに反論する言葉が見つかられてないように俯ける。

孫悟龍

「でも、お前の理想のままに構わない。」

ふっと普段な顔に戻ってなったから言う。

劉備は、それを聞いて、驚愕していた。

劉備

「でも…お前のさっきの言葉…」

孫悟龍

「ああ。否定もできない真実だ。」
きつぱりと切り捨てる言葉をする。

劉備

「……………そう…私は、自分の理想のままにしてもいいか？」

孫悟龍

「ああ。構わない。ただし、理想を見るばかりにするのは、駄目だ。現実をも見てもよい。それだけじゃなくて、迷惑にかけないように周りを頼りにする。」

劉備

「……………でも…」

納得出来ないような顔になった。

彼は、それを見て、呆れたようにため息をした。

孫悟龍

「俺が怒った意味がわかるか？」

劉備

「えっ。」

孫悟龍

「俺は、お前の将来が心配にする。」

劉備

「えっ。でも、理想を否定するように言った。」

孫悟龍は、それを聞いて、頭痛が来るみたいに感じたように頭を抱ける。

孫悟龍

「あの、お前の理想じゃなくて、お前本人の将来が心配にする。」

劉備

「私の将来……」

孫悟龍

「ええ。今のおまえは、理想を見るばかりすると、逆に将来と現実を見えないから道を脱がすかもしれない。間違いなくお前は、間違いなく理想に堕ちた。もし、理想に堕ちたお前が見たものは、敵軍がお前の大切な者を失ったように殺せたなら、お前自体が、民達より自分の大切な者が死んだことを現実みたいにショックしたように聞けて、憎悪の如くに敵軍とぶつけて、勝ちますだが、民達が喜ぶだけが、逆に悲しんだり苦しんだりする人がいるのが間違いないだ。将来の真実を言うようにする。」

劉備は、その言葉を聞いて、更に驚愕したように息を呑んだ。

孫悟龍

「だから、劉備は、理想ばかりの道を歩くのは駄目だ。劉備はあなた自身の理想と現実の道を歩く方が良い。もし、絶望な現実を見たときに、現実から絶対に逃がせない。」

劉備

「……でも!？」

納得出来なそうに反論する。

孫悟龍

「実は、俺も昔に人を殺せた事が何度もあった。」

劉備

「っ!？」

孫悟龍

「俺は、劉備と同じに、人を殺せたことを覚えたおかげに、現実から恐怖に抱きながら逃げる。寝たときに、俺を苦しそうに自分が殺せた人の怨みの夢を毎日に何度も見た。俺は、目覚めたから、平和に甘い人達より人を殺せた事の覚悟で決めたから、自分と敵の苦しみと辛い現実から逃せず受け入れ続けた。」

昔を思い浮かべるように真剣な顔で言いながら、自分が見せる手をグツと強く握る。

劉備

「……孫悟龍……」

孫悟龍の昔を聞けて、心配みたいな声をする。

孫悟龍

「誰かの正義でも誰かの悪でも必要ないみたいで、自分の相手を恐ろしい存在にしないようにどんな相手と相手の国を真実の目で分かる。それに自分より強い状況でも自分より多い立場でも関わりがないようにどんな壁を壊せる。それが俺の道だ。正義を妄想する誰か

が、俺を様子にするから、悪と決めたなら、俺が嫌い、歪んだ正義を手加減なく潰せる。」

孫悟龍

「そう、戦場の前には、正義でも悪でも必要ない。誰かが自分は、敵が殺す人を救った英雄になったと同様に、逆に自分が殺せた敵みたいな人と、関係ないような人の家族を壊せたから悪魔、反英雄と呼ぶことになってしまった。結果的に、お前の理想通りになることができない。」

最後に重そうな言葉をしながら、顔をフルフルと横で振っていた。

劉備は、孫悟龍の本当の真実みたいな言葉を聞けて、眼を開いたように、ショックしたみたいに顔を蒼白になって、体が崩して、地面を膝と手に付けた。

孫悟龍

「もういいだ。それ以上だ。」

つまらなそうに鼻から溜息をしながら、頭を掻く。

劉備

「えっ。」

と困ったような顔で彼を見上げる。

孫悟龍

「お前が納得できないなら、俺からもう言わない。」

劉備

「え？」

孫悟龍

「ほら、立ち上がる？」
手を掲げる

劉備が彼の手を取ると、彼が優しそうに引っ込むように自分が立ち上がる。

孫悟龍

「だが、劉備。お前は、お前自体が信じる道を進むのが構わない。無論、理想だけじゃなくて現実も見ることがある。俺は、お前の理想の重さがあるなら信頼することが出来ない。」

劉備は、それを聞いて、落ち込みするように俯く。

孫悟龍

「……しかし」
劉備の頭をポンッと優しくそうに手に置く。

自分の頭を彼の手に置かれた劉備は、驚愕していた。

孫悟龍

「俺は、劉備自体の将来を期待にする。」
不敵な笑顔を浮き上げる。

劉備は、彼の笑みを見て、胸の中の気持ちが揺らしている。

劉備

「（悟龍さんの手が大きい……暖かい。母さんより落ち着きやすい手が……。）」

自分の頭の所に孫悟龍の手を見て、落ち着きに思う。

孫悟龍

「お前の将来は、俺が決めるじゃなくて、お前、劉備が決める。」

孫悟龍

「ただし、お前が道を脱するなら、昔の俺と同じ道になる。」

冷静みたいな警告するような言葉の裏に、瞳が、悲しいみたいにする。

劉備は、孫悟龍の瞳を見て、目を開いた。

孫悟龍

「さあ、まだ仕事がある。おまえは、自分の道が進みたいなら、自分や仲間を信じることを頑張る。またいつか何処で会う。自分の仲間がいる限りに自分と仲間を甘えすぎはいけない。もし、お前が、国王になったら、どんなところでも分かる軍師の言葉を最後までに聞けて、自分、国主の考えを纏める方がよい。」

優しい重さな言葉で言い、劉備を背に向かい、去る。

劉備 side

私は、彼の瞳を見て、自分の心が痛いように悲しみに思う。

悟龍産の瞳は誰よりも苦しみと慈悲にひたすらに暗く澄み切っていて、まさしく深淵の闇であったと。

劉備

「（……悟龍さんは、幾度の戦いにより民を殺せた敵を次々と殺せ

た。だから、悟龍は、自分が人を殺せたことには確かに間違えたこととは分かってて、自分が生き残るために殺せた敵と自分の苦しみを感じたような罪を幾度も受け入れ続けた。私は、悟龍さんと違うよ
うで、悟龍さんの苦しみを知らずに、自分の理想を考えるばかりで
語るだけの口をしてしまった。(……………私は、なんて最低な人だ
……………)
地面に座るように膝をつきながら、自分が後悔したことについてまで
に自分の手で目から出した涙を拭う。

15分後

泣き止めたから自分の家に帰るから自分の部屋に入る。

部屋の窓の所へ歩いて、空を見上げる。

劉備

「……………確かに悟龍さんの言うとおりで。私は、やる現実から逃げず
に自分が信じた道を進む。」
孫悟龍の言葉を忘れないように両手が、胸を当ててながら言う。

劉備

「しかし、私一人の力では無理だ。仲間が必要だ……………。悟龍さん、
私も、絶望の現実と私を憎いべきな敵から逃げずに、仲間に加えす
ぎずに、どんなところを受け入れるように自分と仲間の信念を信じ
るままの道に行く!？」
孫悟龍が居ない時にグツと両手を握って、すごい覚悟を決めたよう
に言う。

私は、覚悟をしながら自分の母に旅をすることで相談する。劉備母
は、その覚悟を聞いたように微笑して、それを認める。

劉備母と別れて、仲間を求める事と人々を守る事をするための旅をするように家を出るから空を見上げる。

劉備

「（悟龍さん、どこでいつかきつと会えば、あなたが絶対に認めるように私の覚悟を聞ける。）」

その後に、関羽と張飛との出会いもあつた。……そして、管路が二人の天の御使いを予言する流れ星から二人目の天の御使いが来る日の前に悟龍さんがまたここに来る事を知らない。

劉備 side out

劉備と出会った後、次々の所で、孫堅や凌統、馬騰、最後に曹嵩と会うように行って、いろんな事で話す。

孫悟龍は、誰にもいないところで帰るためにゼルレッチを持つ。

孫悟龍

「宝剣ゼルレッチよ。元の扉を開きよ。」

空間を着るように軽く振ると、空間を斬り込むよう空間の穴を開く。その穴に入る以前に劉備の所の空に振り返るようになると、遠くから劉備の決意を聞けるみたいにふつと微笑を少し浮かべる。

孫悟龍

「きつと期待する。劉備。もし、お前の期待が外れるならどこかの

闘いで手加減なく戦える。」

そう言うと、その穴に入るから、自分のログハウスに戻る。

ヴォルケンリッターと銀牙が、帰った孫悟龍に気付いて、心配する
ように駆ける。

孫悟龍は、責任的に反省する。

美しい夕影のような空を見上げる。

それが、孫悟龍と劉備が奇妙な出会いの話をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7897o/>

サイヤや魔術・魔法や仮面を持つ転生者とストライクウィッチーズ

2011年11月30日15時49分発行